

---

# 転生の旅

matsu

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転生の旅

### 【Nコード】

N9434G

### 【作者名】

m a t t s u

### 【あらすじ】

異世界の転生魔法の失敗で、現代のおやじの精神と魂が転送された。転送先は貴族の美少女。密かに身体を交換する為に魔術学校へ。  
・

## プロローグ

1 万年以上昔に文明があった。

その文明は現在よりも遙かに進んだ魔術を用いて、宇宙にまで進出しようとしていた。

しかし、そんな時代に2つの大きな勢力が戦争を始めた。

1つは現在の人間の祖先であり、もう1つは地下世界に住む魔族の祖先である。

元は同じ人間だが、魔族の祖先は自らの肉体を魔術によって改良し、より高い身体能力と魔力を手に入れようとしていた。

だが、それに対して批判的な保守勢力が、戦争を仕掛けたのである。魔族の祖先の数は少なかったが、その高い魔術水準と自らの肉体を改良した知識を応用し、魔物を作り出した。

その魔物を使役し、強力な魔法で戦いあった。

戦いは膠着状態に陥って180年に及んだ。

業を煮やした両陣営は、ほぼ同時に禁断の魔法を使用した。

その魔法がどんなものなのかは判っていない。

しかし、その結果が現在の人間の文明と魔術水準の低さを見れば、その凄まじさが判る。

その後の人間の文明水準は著しく低下し、最近になってようやく魔術をまともに扱えるようになったのだ。

それは地下に逃げた魔族も同様だった。

世界に存在する12の巨大なダンジョンは、魔族が作った地下シエルターだった。

魔族が地下へ逃げる際にダンジョン内の設備は持ち去られ、最深部

で魔物を生成しダンジョンに配置する装置が作成された。だが、長い年月の間に装置は劣化し地上へも魔物を送るようになり、魔物は制御から離れた。魔族もダンジョン内を安全に歩く事が出来なくなり、魔族と人間の接触はほぼ途絶えた。

地上の人間は送られてくる魔物の脅威に怯える事になり、文明を再発展させる事がさらに困難になった。

魔物に対抗できる魔術が廃れていたからである。

地下の魔族も、魔族同士の戦争が勃発し、魔族自らの手で文明を崩壊させてしまった。

12の地下世界は、その数を大きく減らし、それまで蓄積していた魔術知識の殆どを失ったのだ。

そして、人間も魔族も、1万年と言う長い年月の中で、この歴史の殆どの部分を忘れ去ってしまう。

## 第01話 転生魔法と結果

日が沈んだばかりの浅い夜。

近くの草原では、まだ遊んでいた子供達が急いで帰り始めていた。屋敷の奥の部屋で、鎧戸を締め切り、ランプの明かりだけの薄暗い部屋の中。

そこで、転生の儀式が行われようとしていた。

「師よ、準備は整いました。」

魔法陣らしき図の上に寝ている老人に、近くに立っていた中年の男が言う。

「うむ、では始めよう。」

師と呼ばれた老人が号令を掛けた。

老人の隣には1人の少女が寝ていた。  
この転生の儀式は、老人の魂と精神をこの少女に移す為の儀式である。

この少女も無作為に選ばれた訳ではない。  
魔術の高い素質があることが判った為に、老人の生贄に選ばれたのだ。

不幸な少女である。

儀式が終わりに差し掛かり、老人と少女の魂と精神が肉体から離れた。

そして、入れ替える瞬間、地震がこの地域を襲った。  
立っているのもやっとの大きな地震だった。  
だが、儀式は既に止められる状態ではなく、皆が慌てふためいている間に終わっていた。

儀式が終わると、老人は息絶えていた。  
少女は生きており、老人では無い誰かの精神と魂が乗り移っていた。  
そして、少女の精神と魂もここには居ない誰かの肉体へと移動したようだった。

「この少女はどうします？」

状況を見て取った若い男が先ほど師と話していた中年男性に聞く。

「誰の精神と魂が入ったにせよ、殺すのは忍びない。  
その子の家に帰してやろう。」

と中年男性。

魔法陣の周りに居る者達は皆魔術師だった。  
そして、誰も気付いていなかった。

この地震によって引き起こされた、転生魔法の混乱は二者間の入れ替えではなく、不完全な三者間の入れ替えになっていた事に。

俺は山本健介<sup>やまもとけんすけ</sup>、42歳のサラリーマンだ。

独身で会社とアパートを往復するだけの毎日。  
恋人も居ない、寂しい身の上だ。

今もアパートへの帰り道、コンビニで弁当を買って歩いている所だ。駅から徒歩13分くらいのアパートにたどり着くと、ポケットから鍵を出してドアを開けて入る。誰も居ない部屋の中、いつも通りさっさとスーツを脱ぎ始め、下着姿で弁当を食べる。

それがいつもの習慣だ。

スーツは仕事中は良いが、家では息が詰まりそうな服だ。

食事の後、シャワーを浴びる。

毎日同じ事の繰り返し。

違うのは仕事の内容と、歳を取っていく事だけか。

テレビを見ながらボーっとしていると、不意に目眩がして意識が途切れた。

気が付くと、見知った天井ではなく、天幕を見上げていた。

頭の中がザワザワと色々な情報が駆け巡る。

見知らぬ天幕ではなかった。

健介は知らなかったが、この身体は知っていた。

身体の名前はヴァーシル伯爵の娘シéria、13歳の少女。

金髪碧眼のお嬢様である。

ヴァーシル領はペステン王国の西の辺境に近い場所にある。

シéria（健介）の隣では美人の女性が椅子に座って、シériaが寝ているベッドにうつ伏せに倒れるように寝たい。

この女性はシériaの母ミレーヌだったはず。

健介は起こさないようにベッドに起き上がる。

周囲と自分の身体を見る。

( 一体何が起きている？ )

健介はテレビを見ていたのを思い出したが、その先が思い出せない。

時計らしきものもなく、時間がわからない。

窓を見ると暗かったから夜なのは判る。

そして、この体の少女シリアの記憶も途中で途切れていた。夕食の記憶までが有ったが、このベッドまでの記憶が無い。

( 取り敢えず、寝るか。 )

健介は仕事で疲れていたので、考えるのは寝てからだと決めて再び横になった。

シリアは家族と話をしながら夕食を食べていた。

シリアの自慢の父と母。

父はこの領地の民にも支持が厚く、母も美しいと評判である。

まだ子供扱いされているシリアは、早く大人になって立派な貴族になろうと思っていた。

そんな夕食の団欒の中、シリアは意識を失った。

気が付くと、見知らぬ天井を見ていた。

いやシリアは知らなくても、この身体は知っていた。

身体の名前はフィレイ、14歳の少女。

黒髪、青目の町娘であった。



フィレイ（シリア）はベッドから起き上がると、回りを確認した。  
フィレイの記憶から、そこがフィレイの部屋である事がわかる。  
そしてその身体も。

シリアは冷静だった。  
貴族の令嬢として育てられたシリアは、大抵の事では動揺しない。  
この事態は動揺してもおかしく無い事態だが、取り敢えずは身に危険は無いようだったから冷静でいられた。  
カーテンを開けて、窓の外を見る。  
隣の家の屋根の上の方に、見知った建物の屋根の先端が見えた。  
シリアの屋敷だった。

（この現象、以前聞いた事があるわ。  
確か転生魔法だったかしら・・・）

シリアは自分に起きた事を考えて、推理した。  
何者かが転生魔法を使った事は間違いない。  
だが、シリアは屋敷に居た。  
転生魔法は遠くの者に使うものでは無いから、その何者かは魔法の儀式に失敗したのだろう。  
その副作用が今の状態だと考えるのが妥当だった。  
シリアは魔術の初歩の学習もしており、このような事は魔術師としては一般的な知識であった。

（私の身体はどうしたのかしら・・・  
まさか死んではいないでしょうね？）

魂と精神を失った肉体は直に死んでしまう。

元の身体が生きていれば、いずれは転生魔法で戻る事も可能だ。

シーリアはため息をついてベッドに戻る。

（ここで慌てても仕方ありませんね。

明日、自分の身体の様子を見に行きましょう。）

既に死んでいるか、他人の精神と魂が入っているかのどちらかではない。

シーリアは眠りに付いた。

## 第02話 出会い

シーリア（健介）が目を覚まして起き上がる。

「シーリア！」

母ミレーヌが抱き付いて来た。

良い香りと、豊かな胸の暖かい感触にドギマギして硬直してしまっ。

「気分はどうなの？」

「何だか顔が赤いわ。」

母ミレーヌはシーリアを見てオロオロしている。

「だ、大丈夫よ、お母様。」

「お母様がいきなり抱きつくから恥ずかしくて。」

健介はシーリアの語群からミレーヌを安心させる言い訳をした。

「そうなの？」

「もういつも抱きついてくるのはシーリアの方なのに。」

とミレーヌは優しい笑顔でまた抱き締めてきた。

健介はシーリアの記憶から確かにその通りである事を悟る。

（というか、夢じゃなかったんだな・・・）

健介は今更にこの異常事態を噛み締めていた。

シーリアの記憶のお陰で、言葉も理解出来るし対応も問題は無い。問題があるとすれば、少女の中に健介というオッサンがいることだ。

（俺がこのシーリアの身体に居るって事は、俺の身体はどうなってるんだ？

シーリアって子が入ったのかな？）

健介はミレーヌの対応をしつつ考える。

シーリアの記憶にある魔術の基礎知識で、起きた事が大まかに理解出来ていた。

（はた迷惑な話だが、ちょっと面白いな。

戻り方も判らないし、しばらくは様子見だな。）

健介はシーリアとして過す覚悟を決めた。

朝食の席で父親にも心配されたが、母ミレーヌの様に抱きついたりはして来なかった。

まあ、父親とはそう言うものだろう。

健介としても、男に抱きつかれるのは遠慮したので問題は無かった。

シーリアの毎日は、いわばお稽古の毎日だ。

伯爵令嬢というのも大変である。

シーリアの記憶を持つ健介は、大した労力も無く稽古に付いていく事が出来た。

健介の経験と知識が加わって、更に磨きがかかったと言っても良い。芸術以外だけだが。

稽古の合間に、庭を散歩していると門の所に1人の少女を見つけ

た。

少女はシーリア（健介）を見て手招きしている。  
健介は興味を持って門に駆け寄った。

「何ですか？」

と健介。

しっかりシーリアを演じて令嬢っぽく振舞っている。

門にいた少女はシーリアをじっと見た。

健介は少女に見つめられ、思わず赤面して困ってしまう。

「ええと、何か御用ですか？」

と健介は改めて問いかける。

「私はシーリアです。

貴方は誰ですか？」

と少女は唐突に質問してきた。

少女と健介は無言で見詰め合う。

健介は少し迷った。

面倒事は御免だが、ここで突き放すのは可哀想である。  
目の前の少女の中身は、この身体シーリアの中身らしいのだから。

「ちょっと待ってて。」

健介は返事も訊かずに、屋敷へ駆け戻った。

屋敷のリビングルームらしい場所で、お茶を飲みながら使用人と話をしているミレーヌを見つけた。

「お母様！」

と健介が呼びかける。

「あら、シーリア。」

お稽古はどうしたの？」

とミレーヌ。

「それが大切なお友達が来て、今日はお稽古お休みにしたいの。」

と健介はシーリアの甘える声で言う。

「お友達と遊ぶのはまた今度にしなさい。」

とミレーヌは取り付く島も無い。

「お母様！」

お友達を大切にしなさいってお母様が言ったのよ！

それに1日くらいお稽古休んでも、私なら平気でしょ？」

と健介。

ミレーヌから以前言われていた記憶と、シーリアの出来の良さを褒める評判から、口説き文句を考えた。

「それはそうかもしれないけど。」

とミレーヌは困った顔をした。

(もう一息だ)

「お母様、私、お父様とお母様の言うとおり、今までいい子にしていきましたわ。」

でも、大切なお友達が居なくなったら、いい子ではいられなくなりますわ。」

と健介は脅してみる。

「ええ?!」

「シーリア、我儂言わないで、お母さん困っちゃうわ。」

とミレーヌはオロオロしている。

「シーリアに反抗らしい反抗をされたのは初めてなのだ。」

「お母様、お友達とお稽古、どちらが大切なのですか?」

健介はミレーヌを真っ直ぐ見つめて訊く。

「も、もう、判りましたわ。」

「今日だけですよ。」

ミレーヌが折れて、疲れたようにため息をつく。

「ありがとう、お母様。」

「大好き!」

と健介はシーリアの記憶にある愛情表現を行使する。

ミレーヌにキスして、赤面しつつ門に走って戻った。

照れくさいが、子供がいきなり冷たくなったら親も心配になるだろう。

ミレーヌを泣かせたくなかったと言っるのが、理由である。

門に戻ると、例の少女が待っていた。

「お待たせ、そっちから入って。」

と門の脇にある鉄格子のドアを指す。

「大丈夫、知ってるわ。」

と少女。

(ああ、そりゃ本人だもんな)

健介は納得して屋敷に連れて行く。

取り敢えず、2人きりで話せるようにシーリアの部屋へ移動した。

子供部屋にしては広い部屋に、小さなテーブルと2つの椅子が用意されている。

さすが、伯爵令嬢の部屋だ。

そのテーブルに2人がつく。

直に使用人がやってきて、香りの良い紅茶を置いていった。

少女を良く見ると、結構可愛い。

シーリアの身体よりは、目の前の少女の方が好みであった。



(って、何考えてんだ俺は?)

健介は自分で突っ込みを入れてみると、少女が話しかけてきた。

「あなたは誰なの?」

「・・・言いたく無いわ。」

と健介。

相手のシリアの為にも、言わない方が良いだろう。  
42歳のオヤジがシリアの身体を使っているなどと聞いたら、貴族のお嬢様は卒倒しかねない。

「な?!」

名前くらい名乗りなさいよ。」

と少女シリアが膨れる。

「まあまあ、落ち着いて。」

大切なお友達と言う事になってるのだから。  
会って早々喧嘩などしたら、怪しまれてしまうわ。」

と健介がなだめる。

「そ、そうですね。」

とシリアはお茶のカップを手にとって香りを嗅いで飲む。  
見かけは平民の少女でも、中身はお嬢様だ。

「まあ、呼び名が欲しければ、ミコトと呼んで。」

と健介は偽名を使う。

「ミコトね。

判ったわ。」

とシーリア。

「ところで、あなたの名前は？  
身体の方の。」

と健介が聞く。

彼女をシーリアと呼ぶわけにはいかない。

「え、ああ、そうね。

フィレイよ。」

とシーリア。

「そう、ならこれからフィと呼ぶわね。  
大切な親友だもの。」

と健介。

「そうね、じゃあ私もリアと呼ぶわ。」

とシーリア。

自分の愛称を言うのは気恥ずかしいようだった。

フィことシーリアと色々と話をした。

だが、シリアの知っている事はシリアの使っている身体、フィレイが転生に使われる為に一時誘拐されたことくらい。犯人の目星は判らないし、判ったとしても今の状況が変わる訳ではない。

また、下手に騒ぎ立ててヴァーゼル伯爵家に汚名がつくのは困るとシリアが言う。

「フィ、なら2人で軍属魔術学校に行きましようか？」

と健介。

軍属魔術学校は、その名の通り魔術を中心に勉強する学校である。軍属なのは、優秀な人間を国が欲している為に、魔術学校は全て軍属になっているのだ。

また、魔術学校の近くには必ずダンジョンがあり、その管理をしているのも魔術学校で、直近くに軍の駐屯地もあったりする。

「そこで魔術を勉強して2人で転生を行おうと言う事ね？」

フィも直に察したようだ。

「そう言うこと。」

今の状態の事は2人の秘密。

私はどちらでも良いけど、フィは早く自分の身体に戻りたいですよっ。」

と健介。

フィは真面目な顔で頷く。

「ミコト、あなたは自分の身体に戻りたくないの？」

とフィは不安げに訊く。

健介は首を振る。

「多分、私の身体はもう死んでる。

根拠は無いけどね。」

と健介。

シリアの知識から考えると、異世界の人間である健介の魂と精神がこつちの世界に引つ張り込まれたのは、本当に稀なことだ。

こつちの世界の誰かの魂と精神があつちの世界の身体に入ったとは思えなかった。

例えて言うなら、併走する大きな船でキャッチボールしていたら、向こうの船からこつちの船にボールが上手い事飛んできてキャッチされたと言う事だ。

だが、こつちの船から向うの船に飛んだボールが、同じように上手くキャッチされたとは思えない。

移動距離が遠ければ遠いほど失敗する可能性が高い、異世界なら天文学的な確立になるだろう。

奇跡は2度起きない。

つまり、健介の元の身体は死んだと見て良い。

「そう。」

フィも何となく察した様だ。

「それで、どうする？」

私はこの身体を交換するのは構わないわよ。」

と健介が気を取り直して言う。

（そう、俺にとってはどっちでも良い。）

「そうね。」

でも、この身体の両親はそれ程裕福ではないのよ。」

とフィ。

「そんなの問題にならないわ。」

シーリアの両親はヴァーゼル伯爵家よ。」

私がお父様に頼んでみるわ。」

と健介。

「大丈夫かしら、お父様は厳しい人よ。」

「大丈夫よ。」

シーリアのお父様は厳しいけど、優秀な人だから。」

と健介。

シーリアには厳しい事しか目に付いていないようだが、健介には優秀な人間に見えていた。

人の使い方を知っている者、優秀な人間が得難いと言う事を知っている者。

そう言う人物だと思っている。

「そうなんだ。」

とフィは嬉しそうに笑った。

夕方になるまで、フィと話し合った。

「それじゃ、お父様に話しておくから、あなたもそっこの両親に話をしておいてね。」

健介は魔術学校の件を言う。

「ええ、判ったわ。」

お父様の説得頼みましたわ。」

とフィ。

「まかせて。」

と健介。

(1日、大分少女の思考になれてきたな。  
男としては哀しいが。)

### 第03話 説得

そして、夕食の席。

「お父様、私、軍属魔術学校に入ります。」

と健介は食事の会話の中で切り出した。

シリアの父ヴァージル伯ヘインツと母ミレーヌは、しばし沈黙した。

「突然どうしたんだいシリア。」

魔術学校などお前が入るような場所では無いよ。」

とヘインツは少し引きつった顔で微笑んで言う。

「いえ、私には素質も才能もあります。」

それと、私のお友達の子も一緒に入れて欲しいの。」

その子も才能がある子なの。」

と健介。

いきなり飛ばしすぎなのは承知の上である。

子供が老練な交渉術を使ったらおかしいだろう。

「おいおい、まさか、その子の為にお前も入るって事か？」

とヘインツ。

「違います。」

お父様、言葉が足りませんでしたわ。

私には資質も才能もありますから、自分の意志で軍属魔術学校に入ります。」

ついでに、私のお友達も素質があるので連れて行きたいのです。」

と健介。

ここは子供らしく、シীরリアらしく常にストレートに。

「おまえはヴァージル伯爵家の跡取りだ。」

そんなところに行く必要は無い。」

とヘインツも真剣な表情だ。

「お父様は使用人に言っていたではないですか。才能が有るなら無駄にするなど。」

あれは嘘だったのですか？」

と健介。

シীরリア自身は殆ど忘れていた記憶だが、健介は見つけた。

「いや、あれはだな・・・。」

「言い訳しないで下さい。お父様。」

ヘインツが言い訳しそうになるのを遮って言う。

「ここでのらりくらりと言い訳されては面倒だ。」

「お父様もお母様も、私の事を信用して下さらないのですか？」



健介は一生懸命涙目にして言う。  
涙は女の、そして、子供の武器である。

ミレーヌはいきなり責めの対象にされてオロオロしていた。

「あ、あなたどうしましょう。」

「落ち着け、ミレーヌ。」

さすがにヴァーギル伯は立ち直ったようだ。  
領主をしているだけはある。

「シリア、本気なのだね？」

「はい、本気です。」

と健介は問いにすぐさま答える。  
ヘインツはため息をついて、首を振った。

「判ったよ、私の負けだ。  
軍属魔術学校にいつといで。」

「私のお友達もですよ？」

と健介は上目遣いで訊く。

「ああ、判った。  
好きにきなさい。」

「お父様、大好き。」

健介は席を立ってヘインツの頬にキスした。  
男の顔にキスするのは抵抗があったが、この際は仕方ない。  
そして、口直しに

「お母様も！」

と言いつつ、ミレーヌにもキスする。

「あなた、良いのですか？」

ミレーヌは心配そうに言う。

「まあ、やれるだけやらせてみよう。」

「この子の才能を伸ばすのにも良いのは判っていたいな。」

「画して、軍属魔術学校に入学する事になった。」

## 第04話 魔術学校入学

ファイ（シーリア）とリア（健介）はヤーク領軍属魔術学校の門前に来ていた。

「とうとう来たわね。」

とファイは緊張しているようだ。

「そう緊張しなくても大丈夫よ。」

とリアはファイの肩に手を置く。

ファイは笑顔を見せた。

シーリアの父親を説得しファイレイの両親の承諾を得たあと、シーリアの父親が魔術学校への入学手続きをした。

無論、2人の入学金などはシーリアの父が払ってくれている。

入学時期が募集時期と約2ヶ月遅れていたが、そこはシーリアの父親の権力がものを言った。

あれから12日が経っていた。

魔術学校の入学資格は基本的に年齢だけである。

10歳から20歳まで。

たまに例外もあるが、あとは金だけの問題である。

魔術学校は一般の学校よりも金が掛かる。

と言っても、国の補助金で運営されているので、2倍までは行かないがそれでも高い。

そもそも一般の学校も高いのだから、魔術学校に入学できるのは貴

族の子供が大多数になる。

2人は学校から出てきた校長に迎えられた。

「ようこそ我が魔術学校へ。」

シリアとファイレイだね？」

と校長。

「はい、ファイレイです。」

「シリアです。」

2人で挨拶する。

校長は軍服を着た中年男性で、筋肉質の体格が服の上からでもわかる。

目つきは鋭いが、言動は柔らかい。

校長に案内されて、校内へと入る。

魔術学校は全て全寮制だ。

夏休みの様な長期の休み以外は、原則出る事は出来ない。

校長に案内されながら、校内を一通り見て回る。

中途入学だからと気を利かせてくれた。

そして、宿舎内を案内されて2人の部屋に荷物を置いて、クラスへと向かった。

2人の入った時期の1学年は2人含めて57名。

約20人のクラスが3つとなる。

その中のサファイアクラスが2人のクラスとなった。

ちなみに、他のクラスはエメラルドとルビーである。

2年になると、特に優秀な生徒を集めたダイヤモンドクラスが出来る。

逆に、平凡以下の生徒を集めたクリスタルクラスも出来て、5クラス編成となる。

2人は軽く挨拶をして、早速授業に参加した。

授業内容はどうやら読書きであったようで、2人は出された課題をスラスラとこなしていった。

シーリアは伯爵令嬢である為、読書きくらいは出来るのだ。

読書きの授業があるのは、平民の為である。

魔術学校で行う授業は魔術中心ではあるが、読書きを始めとする一般教養教育も行う。

これは魔術学校の生徒が貴族と平民の双方が含まれていることに起因している。

実力のある魔術師は通常、軍に配属されるが、貴族に仕えたりする事もある。

その為、一般教養教育も必要となる。

その他には、当然軍務に関する教育がある。

格闘術や剣術、隊列の組み方や指揮の仕方などである。

休み時間になると、クラスの皆がワイワイと騒ぎ出す。

当然、新しく来た2人が注目を浴びる訳だが、浴び方が違う。

片方は平民で、片方は伯爵令嬢である。

平民の生徒は他にもいるが、伯爵令嬢が側に居るので話しかけにくいらしい。

しかし、他の貴族の子供達はリアの方へとやって来た。

「こんにちわ。私はクリンよ。」

そっちの平民とはお知り合い？」

とクリンと名乗った女の子は、リアの隣に座っているフィを指さす。

「ええ、彼女は私の親友よ。」

彼女を侮辱したら私が許さないわよ?」

と健介が警告する。

健介が少し険がこもった言い方をしたので、クリンはちょっと引き気味に目を見張る。

「そ、そう。」

別に侮辱するつもりは無いのよ。」

とクリン。

「でも、あなたは彼女を平民と言ったわ。」

それはあなたが自分が貴族であることを誇示して相手を貶めようとしていると言う事でしょ?」

それとも、そんな事にも気付かなかった?」

と健介。

ちよつと苛めすぎかと思っただが、最初が肝心である。

ここは貴族の子供が多い場所。

フィを守る為には、本来の貴族の振る舞いを教えてやらねばならない。

そう、健介にはシーリアの知識があるから、貴族の振る舞いは知っていた。

「え、そ、そんなこと・・・」

クリンは絶句して戸惑った。  
周りの貴族の子達も顔を見合わせている。  
そこへ。

「おいお前、何平民の味方してんだ？」

と男子生徒が割って入ってきた。

「あなたお名前は？」

健介は表情一つ変えずに訊く。  
隣のフィもさすが伯爵令嬢、動揺はしていない。

「な、お、オルンだ。」

オルンは一応貴族としての礼儀を知っているようだ。

「ねえ、オルン。

貴族は誰の味方でも無いのよ。

あなたも勉強不足ね。」

と健介は平坦な声で言う。

「お前失礼だろ?!」

オルンは顔を真っ赤にして怒っている。  
安いプライドが傷ついたようだ。

「私は注意しただけよ？」

何が失礼なのか教えてもらえないかしら？  
そんなに怒るようなことなの？」

と健介。

オルンと真正面から見詰め合っている。  
無論、甘い雰囲気など微塵も無い。

「お前、調子に乗るなよ。」

オルンは拳をプルプル震わせている。  
甘やかされて育った者特有の切れやすさだ。

(元の世界にも居たな)

などと思いつつ。

「調子に乗っているのは私？」

あなたはどのなの？

何の権利があつて、私に調子に乗るななどと言えるのかしら？

あなたはここの先生なの？」

と健介。

オルンは怒りを抑えるような仕草をしているが、健介にはわざとらしい仕草にしか見えない。

「女だからと言って頭に乗るなといってるんだ。」

とオルン。

まるで話になっていない。



「あら、また勘違いしているわよ。  
この学校では男女の差は無いのよ。  
知らないの？」

と健介。

そう、この学校は一応軍属である。  
軍では建前ではあっても、実力でのみ評価される。  
男女の区別はトイレと風呂くらいしかない。

「そうか、なら覚悟は出来てるんだろっな？」

オルンが近寄ってくる。

健介はため息をついて立ち上がる。

「リア？」

フィが心配そうに見てくる。

「大丈夫、ちよつと頭を冷やしてあげないとね。  
廊下に出なさい。」

その人を見下した精神を叩きなおしてあげるわ。」

フィに返事をした後、オルンへと言う。

2人は廊下に出た。

「良い度胸だ。」

「謝るなら今のうちだぜ？」

とオルン。

そう言っているうちにも、周りに生徒が集まってきた。

「言い訳は聞き飽きたわ。」

「逃げたいならそう言いなさい。」

と健介。

オルンの方は周りを気にしている。

他の生徒達が見ている中で、女を殴るのに躊躇しているのだろう。

そんな覚悟も無いのに女に喧嘩を売る愚か者である。

だが、オルンは女を殴れない腰抜けより、女を殴る下衆を選んだようである。

オルンが拳を握って殴りかかってきた。

健介はその拳が届く前に、1歩踏み込んでオルンの腹をカウンタ

ーで蹴り上げた。

一瞬スカートが捲れて下着が見えたが問題は無い。

今は戦闘中である。

オルンは後ろに倒れて、腹を抱えて悶絶している。

もう戦う気力は無いだろう。

「恥知らず、良く聞きなさい。」

己が貴族だというだけで平民を苛め、男だから女を苛める。

そののどこが貴族なの？

それはただの恥知らずの下衆と言っのよ。

覚えて置きなさい。」

倒れているオルンに向かって大きな声で言う。

リアの声は良く通るので、周りで見ている生徒全員に聞こえている

だろう。

健介はオルンを置いて教室に戻った。  
途中でファイが合流する。  
ファイも見ていたようだ。

「あなた強いよね？」

ファイが感心したように言う。

「大した事は無いわ。」

オルンが弱すぎるのよ。」

と健介。

謙遜ではない。

オルンはただの素人の男の子。

少女の身体で体格差は有っても、健介が勝って当たり前だった。

健介は高校の頃、1年だけだが空手をやっていた。

たった1年だがかなり本気で取り組んでいた。

学校の体力測定が、前日の空手の修行のせいでボロボロの全滅状態だったほど。

まるで女子の測定結果のようだった。

そんなになるまでやった1年の成果は、黒帯の実力はあつたはずである。

黒帯、初段の試験を受ける前に止めてしまったが。

シリアの身体も、少女とは言え色々な稽古をしていた為、運動性能も良く意外と力があつた。

「でも、リア。  
下着が見えていたわ。  
もう少し考えてね。」

フィは少しお冠のようである。  
まあ、自分の身体で暴れられて、恥ずかしい姿を見せられては文句も言いたくなるのだろう。

「ははは、まあ、戦闘中は下着くらい見られても・・・  
判りました。  
以後気をつけます。」

笑って戦闘中は仕方ないと誤魔化そうとしたが、フィに睨まれて言い直した。

この事件以後、少なくともサファイアクラスで平民が苛められることは無くなった。

この事件でシーリアの知名度が格段に上がったのは言うまでも無い。オルンはと言うと、健介リアの子分に成り下がっている。健介としてはフィにも言われて断っているのだが、オルンはリアの騎士気取りである。

「参ったわね。」

「全くよね。」

オルンを巻いて木陰に隠れながら2人で話す。  
そして笑った。

## 第05話 学校生活

2人は2ヶ月の遅れも大した影響も無く、直に追いついて定期試験を受けた。

試験は年2回あり、最初の試験である。

2人が1位と2位をとり学年主席になった。

リアは元々頭の良い子だったが、驚きの結果である。

今まで気付かなかったが、凡人として生きてきた健介には面白い事態だ。

フィレイの身体の方も負けない素質があったらしい。

しかし、これでまたリアの知名度が上がってしまった。

同じく、フィの知名度も上がった。

健介としては余り目立ちたくは無いのだが・・・

健介はフィに空手を基本とした格闘技を教えておいた。

フィの方は格闘技の経験は無かったから、そっちの方面では遅れそうだったからだ。

しかし、フィレイの身体も誘拐されるだけあって天才だ。

中身がシーリアと言う事もあるのだろうが、短期間教えただけで授業の格闘術でもある程度余裕を持って対応できた。

何処の世界にも、こういう人間は居るものだ。

羨ましい。

授業が終わった後も、2人で練習した。

肝心の魔術は後期になってから授業が始まった。

後期の授業が始まって2ヶ月経つと、1ヶ月ほどの長期休暇がやってくる。

シーリアの父が寄越した迎えの馬車に2人が乗り、3日掛けて各々の家へ戻った。

シーリアの両親は成績を聞いて、とても喜んでいた。

「シーリア、お前は私の誇りだよ。」

とヘインツが大げさに言う。

「お父様だったら、大げさですわ。」

「ファイレイだって僅差で2位なんですから。」

と健介。

リアとファイの実力は本当に拮抗している。

「ファイレイちゃんも凄いわね。」

さすがシーリアが見込んだだけあるわ。」

とミレーヌ。

(この2人も親バカだな・・・)

健介は苦笑しつつ、シーリアの両親の話に付き合った。

2人共、家に戻っても休むつもりは無かった。

教科書を持ち帰って、復習と予習に余念が無い。

さらに、格闘と剣の練習をシーリアの屋敷の庭で行っていた。

そして、肝心の魔術の練習。

シリアの屋敷で学習と練習をするのには、もう1つ訳がある。やはりファイ（シリア）が両親に会える機会がある方が良くと考えたからだ。時々、ミレーヌとは良く一緒にお茶をしている。ファイも嬉しそうだ。

「魔力の操作って難しー」

とファイ。

「魔力の感じは掴めるんだけどね。」

操作ってなると、上手くないわね。」

と健介。

魔術の初歩の初歩。

魔力を感じてそれを操作する。

操作と言っても身体の中で動かすだけだが、正に雲を掴むような話で上手く出来なかった。

それでも2人は特別だった。

今の時期に魔力を感じることが出来たのは、2人の他には学年で3人しか居ない。

授業では後期の期間を全て使って、魔力を感じて操作をするという基本を学ばせるらしい。

2年になって初めて、応用の魔術を学ぶようになる。

だが、それは順調な生徒のみで、出来の悪い平凡以下のクリスタルクラスでは、基礎をやり続ける事になる。

シリアは伯爵令嬢の面子の為、ファイレイはヴァーギル伯爵に金

を出してもらっている為、2年以降はダイヤモンドクラスで授業を受ける決めていた。

クリスタルクラスに落ちるなど問題外であった。

そもそも2人が目指している転生魔法を使うには、高度な魔術の技術が必要である。

クリスタルクラスに落ちている暇など無いのだ。

あつという間に休暇が終わりに近付き、2人の魔術の錬度も若干上がっていた。

「魔力の操作も何となく判ってきたね。」

と健介。

「うん。」

初歩魔術も直に出来そうな気がする。」

とフィも自信を見せる。

「気が早いよ、フィ。」

基礎をしつかりやらないと、最初は良くても後の応用で困る事になるからね。」

と健介。

「リアと話していると、なんだか先生と話しているみたい。」

とフィ。

シーリアはなかなか鋭い。



健介は笑って誤魔化した。

シーリアの父ヘインツの用意した馬車で、学校へと戻った。学校では生徒達が早くも3分化しつつある。

つまり、優等生グループと普通生グループと落ち零れグループである。

当然、リアとフィは優等生グループだが、オルンは普通生グループである。

(騎士と自任するなら、優等生グループまで上がって来い。)

健介はオルンを見てそう思った。

リアとフィは周囲をグングン引き離していく。

学習内容は同じでも、2人は常に1歩前に進んでいた。

この頃になると、フィに手出しをしようとする者も居なくなっていた。

時々、実力を勘違いした者が影からちよっかいを出す事があった。

それも健介が手助けをするまでも無く、フィが捻じ伏せる事が出来るようになっていた。

無論、そういう事の直後には健介が出張って、次に同じ事をすれば只では済まないと警告している。

後で徒党を組んで来られては厄介だ。

フィとリアの2人であれば8人位までは相手に出来るが、流血沙汰は必死である。

仮にも伯爵令嬢であるシーリアが出張ってくれば、相手も貴族なら徒党を組むような事はしない。

そんな事をすれば恥どころでは済まないからだ。  
抑止力にはオルンも参加してくれていた。

と言っても、彼の場合は煽っているようにしか見えなかったが・・・

そんな訳で、殆どトラブルも無く2人は順調に実力を上げて行った。

そして、2人は難なく後期の試験を主席でパスし、2年のクラスはダイアモンドとなった。

オルンは彼も頑張ったのではあるうが、結局普通クラス行きだった。哀愁漂う背中を見て、合掌したのは言うまでもない。

「2年の後期からは、ダンジョンへの進入が許可されます。

自信のあるものはダンジョンへ挑戦するのも良いでしょう。

ですが、ダンジョンは危険です。

死亡した者、行方不明になった者もいます。

ダンジョンに入った後は、全て自己責任となります。

ダンジョンに入るも入らないも自由ですので、今から考えて置くように。」

1年生最後の日に、先生からダンジョンの説明を受けた。

まだダンジョンに入る資格を得るのは半年以上先の話だが、皆緊張の表情だった。

今から緊張してどうすると、健介は言いたかったが。

ダンジョンは魔界と繋がっているらしい。

この様なダンジョンは、世界中に12箇所見つかっている。

いつ誰が作ったのかは判らないが、ダンジョンは少なくとも千年以上前から有るらしい。

魔界と繋がっているといても、誰も確認したものはいない。

過去に、幾つかのダンジョンから魔族の侵攻を受けた為にそう言わ

れているだけだ。

ダンジョンの深さもまた謎である。リアとファイのいる魔術学校が管理しているダンジョンは、確認されているだけで地下83階である。無論、地下83階で終わりではない。戻ってきた者は更に下の階があるのを確認していた。このダンジョンは過去に魔族の侵攻があったものでは無いが、危険度は同じであるとされている。

魔術学校ではダンジョンに入るかどうかは、生徒の任意である。魔術学校の成績には影響しない。だが、卒業時にダンジョン制覇記録が成績に添付される。

魔術学校の卒業生を面接する軍の関係者などは、このダンジョン制覇記録の方を重要視する。ダンジョン制覇記録には魔物討伐記録も含まれ、どれだけ実戦を積んだかを見ることが出来るからだ。無論、実戦とは無関係な所で働くなら、何の問題も無いのだ。

試験後の短い休みの後、2年の前期が始まる。ダイアモンドクラスは総勢9名。卒業までダイアモンドクラスに居続けられるのは、その半数以下だと言われている。無論、2人ともその中に入るつもりだ。健介の見解では、余程のミスがない限り2人とも残るだろう。

2年に入ってから授業は、一般教養よりも魔術や兵科に関する授業が多くなった。

ファイとリアはどちらも余裕でこなしている。

2人とも努力をしていた為だろう。

「この食事、太っちゃわない？」

クリンが言う。

クリンも一応ダイヤモンドクラスである。

クリンが言う食事とは、学食だ。

肉料理が多く、年頃の少女には心配であろう。

「大丈夫よ。

あれだけ身体を動かしてれば、早々太らないわ。

心配なら、脂身を取り除いて食べれば問題ないわよ。」

と健介がアドバイスをする。

「そうなの？」

お肉は脂身より太りそうな気がするけど。」

とクリン。

「太りやすいのは、砂糖などの糖分とパンなどの炭水化物、次に脂身、最後にお肉よ。」

脂も魚の脂は太り難いんだけど、お肉の脂は太りやすいの。

だから、脂身を取り除いたお肉と少しのパン、後は野菜と言うのがバランスが良いわね。」

と健介。

こっちの世界の食糧事情は、元の世界の食糧事情と余り変わらない。栄養成分を調べた訳ではないが、大体同じだろうと思って話してい

る。

クリンは脂身を取り除いて食べ始めた。

「あなた本当に何者なのよ？」

とファイが小声で話しかけてくる。

太りにくい食べ方や太りやすい食べ物の知識を持っていることで、疑問が再発したのだらう。

「ひ・み・つ」

と健介も小声で答える。

ファイが少し睨んできたが、笑顔で応えた。

今ではクリンも仲良しになって、一緒に勉強していた。

ただ、クリンの素質は2人ほどではなかったため、常にワンランク下の成績だった。

いや、ダイアモンドクラス内では2人が飛び抜けているだけと言った方がよい。

「あなた方2人は、本当に化け物よね。」

とクリンが呆れたように言う。

放課後、3人で剣の練習をしていたのだが、ファイとリアの模擬戦を見てクリンが言ったのだ。

剣の練習とは言え、魔術も使っている。

基本魔術の1つで魔力を身体に作用させて身体能力を向上させる。皮膚表面に魔力の殻を作り防御力を上げる。

練習時にはしないが、剣にも魔力を通して威力を上げる事も出来る。  
その状態でフィとリアが戦っていると、確かに尋常な戦いには見えない。  
ダイヤモンドクラスの他の生徒も、まだ出来ない事だった。

このような戦い方が、こつちの世界の魔術を使える戦士では一般的で主からしい。

魔術だけを使うよりも、この方が手っ取り早く相手を倒せるそうだが、魔術だけの魔術師、剣だけの戦士は栄達出来ない事が殆どである。

「化け物とは失礼ね。」

とフィ。

「そうよ、クリンだって一般人から見れば化け物よ。」

と健介。

「私から見ても化け物なんだから、本当に化け物なのよ。」

とクリンが笑う。

フィとリアがクリンを小突く。

「痛いよ〜」

クリンが頭を両手で押えて涙目になる。

2人がクリンと模擬戦をする時には魔術は使わない。  
クリンが使えないからだ。

それでもクリンは2人に散々扱かれる立場になってしまっ

「あーん、もっと優しくして」

とクリンが座り込む。

「駄目よ、ほら早く立ちなさい。」

フィは意外と容赦が無い。

「リア」

クリンが涙目で健介を見て、助けを求める。  
クリンは最近、健介の弱点を見抜いていた。

健介は中身は男なので、こういうのに弱い。  
ため息をつきつつ。

「フィ、少し休みましょう。」

とやってしまっただった。

「リアは甘いわよ。」

とフィに小声で言われる。

「厳しいだけじゃ、人は付いて来ないわよ。」

と小声で答えた。

ファイが睨んできたが、こういう時は笑顔で応える。

前期の試験を無事に主席で終えた後、2年から始まる魔力測定を受けた。

1年の時はまだ魔力を扱えないから2年からである。

これは気になるところであった。

魔力の扱いが上手くても、魔力の総量が少なければ直に強さは頭打ちになる。

結果はシーリアが1200、ファイレイが2100、クリンが800だった。

普通クラスの平均が300程度である事を考えると、クリンもさすがダイヤモンドクラスと言える。

ちなみにダイヤモンドクラスの平均は650程度である。

魔力の総量はこれからの訓練でも上昇するが、スタート地点からかなり突き放されている。

「いやあ、さすが。」

リアとファイには適わないね。」

とクリンがニヤニヤしている。

「何よその顔は、言いたい事があればはっきり言いなさい。」

とファイと拳を作る。

「別に何も無いよ?。」



とクリンがにっこり微笑む。

ファイがクリンを睨み、健介はその2人を見て微笑む。  
可愛い女の子2人がじゃれ合っている姿を見ていると和む。

それにしてもファイレイが誘拐されたというのは頷ける話だ。

魔力が断突で高い、素質のある人間である事が証明された。

ファイレイは健介が見たところ、あらゆる才能に秀でてるように見える。

それに対抗出来ているシーリアの身体も凄いが。

ファイレイを返してきたのは、転生魔法が失敗して使い道がなくなつたせいだろう。

と言う事は、転生元の人間は恐らく死んだのだろう。

でなければ、あれほどの器、ファイレイを返す訳がない。

何者が転生魔法を行ったのか？

それは全く判らない。

誰にも何も知らせずに子供2人で調べられる事は殆ど無い。

犯人を見つけ出しても、どうにも成らないだろうから気を入れて探していないと言うのが実情だが。

## 第06話 初ダンジョンへの準備

休みに入って、ヘインツの寄越した馬車で、家へと戻った。

両親にはダイヤモンドクラスに入った事と、成績が主席である事を報告し、毎度の事ながら親バカな所を見てしまう。シリアにも見せてやりたいものだ。

(フィの今の両親はどんな感じなんだ？  
今度聞いてみよう。)

健介は親バカ2人を眺めながら考える。

「後期からダンジョンへの進入が許可されるの。  
まだ入るつもりは無いけど、2年生の間に一度は入ってみるつもり。」

と健介。

「まあ、ダンジョン？  
危険なんでしょう？」

ミレーヌが心配そうに見てくる。

「危険らしいけど、勝てない相手と戦うつもりは無いし大丈夫よ、  
お母様。」

と健介が安心させる。

いくら才能ある身体でも、無謀に突っ込んでいくほどバカではない。

「シーリア、お前なら引くべき時を弁えていると信じているよ。」

とヘインツ。

「ええ、大丈夫ですわ。お父様。

勝てない相手から逃げても恥にはなりません。

勝てる算段をしてから、次に勝てば良いのですから。」

と健介。

「それは貴族としては少し情けないな。」

とヘインツが苦笑する。

「魔物や魔族相手に誇りをかざしても意味がありませんわ。お父様。

人の誇りは人にしか判らないものです。」

と健介。

すると、ヘインツは黙り込んでしまった。

ミレーヌも少し驚いたような顔をしている。

「そんなに驚く事ではありませんよ。お父様、お母様。

私も魔術学校に行って色々と教わりました。

同じ人でも、例えば貴族でも、誇りを持たない、誇りを理解できない者は少なくないのですから。」

と健介。

この話はシーリア本人とも話していた。

シリアは箱入り娘だったから、他の人の価値観や違いを受け入れる器が小さかったが、今は大分マシになっている。自分と他人の違いを受け入れる事が出来るようになって、視野が広がってきていた。

「確かに、そうだな。

お前の言うとおりだ。」

とヘインツが頷く。

どこか寂しそうな顔をしていた。

この休みの間もフィを屋敷に招いて訓練を欠かさなかった。

フィとも話し合って、ダンジョンへ降りる事を決めたのだ。

だが、やはり直にはない。

ダンジョンに入ると言う事は、命がけの事だからしっかりと準備が必要だ。

目標はあくまで転生魔法を使えるようになることである。

その為の準備段階で死んでは意味がない。

そこで、町の武器を扱う鍛冶屋へと出向いた。

学校から支給される剣も悪くは無いが、命がけで乗り込むダンジョンである。

もっと手に馴染む、使いやすい武器が欲しい所である。

「へえ、沢山あるね。」

とフィ。

「ええ、一つ一つ手にとってしっかり見定めると、時間が掛かりそうですね。」

と健介。

「リアはどんな剣にするの？」

とフィ。

「さあ、判らないわね。

とにかく、使いやすそうな物を探すわ。

フィも下手に拘らずに、使いやすいと思つものを探しなさい。  
命を預ける武器なのだから。」

と健介。

「そうね。

判ったわ。」

とフィ。

その2人のやり取りを少し離れた所で見ている鍛冶屋の親父。  
少女2人が剣を品定めしているのをじつと見守っていた。  
厳しい表情で何を考えているのか判らない。

2人は気にせず、剣を1本1本丹念に見て回った。  
店に入って2時間ほど、粘りに粘ってフィは1本の剣を持って振り  
回していた。

「その剣が気に入ったの？」

健介が尋ねる。

「ええ、重さもバランスも丁度良い感じ。」

とフィ。

彼女が持っている剣は、片刃の直剣である。

無骨なデザインだが、鋭い刃先は良く切れそうだった。

「私も良いのが見つかったわ。」

と健介が短めの剣を2本両手に構えて見せる。

「双剣？」

とフィが意外そうに見る。

通常の剣よりも短めの剣が、同じデザインで2本。

それは若干湾曲した片刃の剣で、日本刀に近いデザインである。

日本刀に比べると、剣の幅が広く装飾の彫がされている。

「うん。」

これが良い感じなのよ。

慣れるには少し時間が掛かるかもしれないけど、良いと思うわ。」

と健介。

剣の重量バランスもなかなか良い。

シリアの身体能力と魔力なら十分に使いこなせるだろう。

2人で選んだ剣を、鍛冶屋の親父に頼んで屋敷に届けてもらう。

鍛冶屋の親父が最終調整とやらをしてくれるらしい。

剣の扱いについて助言してくれた。

厳しい顔に似合わず、良い親父さんである。

数日後に屋敷に届いた剣は、鍛冶屋の店で見た時とは比べ物にならない程綺麗になっていた。  
どうやら、剣を磨いて研ぎ直してくれたらしい。

「あら、綺麗なものね。」

とミレーヌが剣を見て言う。

「お母様は危ないから触っちゃ駄目よ。」

と健介。

「もう、この子ったら母親を子供扱いするんじゃないの。」

とミレーヌが顔を赤くする。

それを見てフィと健介が笑う。

ミレーヌが一緒だとフィも楽しそうだった

2人はそれぞれの獲物を持って、裏庭の訓練場と化している場所へ移動した。

裏庭は綺麗な草地だったのだが、2人の訓練のせいで今は荒地に近い状態になっている。

それを見て、シーリアの両親は溜息を禁じ得ない様だ。

御愁傷様ではあるが、訓練場としてはちょうど良いので、場所を変えらるつもりはなかった。

いつも通り、そこで訓練を始めた。

新しい剣だから身体に馴染ませるように、それ程本気ではない。

1日1時間の訓練を2回やる。

双剣の扱い方は学校では教えてくれない。それでも普通の剣術が判っていれば、応用で済むものだ。双剣が身体に馴染んでくれば、後は普通の剣術同様、その人の才能の問題である。

10日ほど掛けて、徐々に全力での戦いへと進めていった。フィは大分馴染んだようだが、双剣に切り替えた健介はまだ違和感が残っていた。

それでもフィとの模擬戦に耐えられるのは、シリアの身体の素質のお陰だろう。

シリアの身体の感覚からすると、やはり双剣の方が性に合っているようだった。

本来の精神と魂が戻れば、どうなる事か。

「大分慣れてきたわね。」

とフィが肩で息をしている。

「ええ、さすがにまだ違和感があるけど、大分良くなったわ。」

と健介も肩で息をしている。

魔術を使った高速戦闘でも何とか扱えるようになっていた。

これなら学校に持ち帰って使っても、問題は無い。

魔術学校は個人の武器の持ち込みも許可されている。

魔術の方も、剣と同じくらい真剣に訓練をしていた。

まだ教わっていない魔術の応用、炎や氷の魔法を2人で放っている。



一応、教科書にはやり方が載っていたから2人でそれを試した訳だが、普通の人間には簡単に出来る事ではない。

休みの間に、攻撃魔法の基本4つ、炎、氷、雷、風を大体出来るようになっていた。

まだ攻撃魔法を使うのには時間が掛かりすぎる感じだが、これも慣れの問題だ。

魔術の基礎である魔力操作の錬度を上げれば、より早く魔法を使うことが出来る。

そんな訳で、魔力操作の訓練も毎日欠かしていない。

2年の後期が始まると、授業の内容から一般教養の内容が更に減った。

代わりに魔術に関する授業が増えた。

「魔術付与ね」

フィが呟く。

「興味深いわね。」

と健介も頷く。

魔術付与が新しく教科に加わった。

これは魔法陣を代表とする魔術を行う補助をする為の技術である。武器や鎧に魔術付与して強化する事も可能だ。

魔術付与の基本は魔法陣である。

適切な魔法陣を描いて行使する魔法は、威力や精度が飛躍的に向上する。

魔力の魔法への変換効率が格段に上がるし、細かい制御がやり易いのだ。

しかし、魔法陣は余り戦闘では使われない。書いている暇は無いからだ。

「これはしつかり勉強しないとね。」

とフィが健介に言う。

健介も黙って頷く。

転生魔法を行うには、魔法陣は必要不可欠。

誰にも言えないから、2人だけで魔法の儀式を行う事になる。

高い才能をもつ2人だが、魔法陣を書き損じてしまえば、下手すると2人とも死ぬ。

魔術付与に使われる記号などは目新しいものだったが、魔術付与のその内容自体は健介にはある意味見慣れたものだった。

(プログラムに似ているな。)

健介は微妙な懐かしさに胸がざわつく。

記号の意味と組み合わせの内容が判っていくに連れ、魔術付与がどんな物なのかを理解し始めた。

魔術付与を学習する事2カ月。

「フィ、ダンジョンに入る前に、武器と防具を魔術付与して置きましょう。」

と健介がファイに考えを言う。

「え、でも出来るかな？」

とファイが自身なさげだった。

ファイはまだ魔術付与について理解が進んでいないらしい。この辺りは健介の経験がものを言っていて有利だった。

それから3日掛けて、健介はファイに魔術付与について教え込みつつ、剣と鎧に入れる魔術付与の記号の組み合わせを考えた。

ファイも何とか理解したらしく、健介のしている事を見つめている。健介が説明してやると、うんうんと頷いて可愛い。

「それじゃ、この記号の組み合わせで武器に彫を入れましょう。」

と健介が考えた記号の組み合わせを見せる。

「なんだか綺麗な模様みたい。」

とファイが記号の書かれた紙を見て言う。

記号は必ずしも文字のように別けて書くものではない。

記号と記号の角度と繋がりによって、その作用が変わってくるので、行とか列とかの概念も通じない。

だから、全体を見ると模様のように見えるのだ。

ファイは剣が1本だけだが、健介は双剣だ。

「うう、泣きそう。」

と健介。

「頑張つてね。」

とファイは手助けする気は無いようだ。

こういう所は冷たい。

紙に書いた記号部分を切り抜き、剣の上に乗せて印刷の要領でインクを剣につける。

そして、そのインクの部分に魔力を込めながら鋼のミノで彫っていく。

1日で終わる作業では無いので、訓練中もインクが落ちないように気をつけて、夕方から作業に戻る。

「2人とも最近夕方から見ないと思ったら、何やってるの？」

とクリンが部屋に入ってきた。

クリンにはしばらく夕方からの自主訓練を休むと言ってあった。

「剣に魔術付与してるのよ。」

とファイがミノで剣を彫ながら答える。

「え!？」

魔術付与って、あれでしょ、魔法陣とかの?」

とクリン。

2人が彫り続けている剣をマジマジと見ている。

「そうよ、クリンもしっかり勉強しておきなさい。」

と健介はクリンに振り向きもしない。

「そ、それは何の模様なの？」

とクリンは少し落ち込んだ声で聞く。

健介はそれに気付かず回答する。

「強化と軽量化と電撃。

それと防錆。」

「へ、へえ、すごいね。」

とクリンが泣きそうな声だ。

と言うより、既に涙声だ。

「ど、どうしたの？」

と健介はクリンを見る。

ファイも驚いてクリンを見た。

「だ、だって・・・あうっ」

クリンが泣き出した。

健介とファイはアタフタと慌てる。

「ちょ、ちょっとクリン、どうしたの？」

とファイ。

「だって、私だけ、ヒッ、仲間はずれ、ヒッ、何だもん。」

クリンは泣きながら訴えた。

健介とファイは顔を見合わせて、思わず苦笑する。  
全くこのお嬢様は・・・

「クリン、別に仲間はずれにした訳じゃないのよ？」

とファイが慰める。

「そうよ、クリン。」

魔術付与はまだクリンには出来ないから、一緒に居ても退屈だろうと思ったの。「

と健介も慰める。

「本当？

仲間外れじゃない？」

クリンは涙目で2人を交互に見る。

「本当よ。」

クリンが嫌じゃなければ、ここに居ても良いのよ。「

とファイ。

「クリンも魔術付与教えるわよ。」

と健介。

そんな訳で、クリンに魔術付与を教えながら、剣に彫をする毎日  
を過す。

クリンも頭の良い子で、しっかり教えてやればそれなりについて来  
る。

教官の教え方が判りにくいのだろう。

フィの彫りが終わると、フィがクリンの相手をするようになって、  
健介は彫に集中出来るようになった。

「触っても大丈夫？」

クリンがフィの片刃の剣を見ている。

「大丈夫よ。」

とフィ。

「ビリビリしない？」

クリンは電撃を心配しているようだ。

「電撃は魔力を流し込まないと発生しないわ。」

とフィが説明してやる。

すると、クリンは剣を持って刀身を眺めた。

「軽いのと模様以外は普通の剣と変わらないね。」

とクリン。

「光り輝くとも思っただの？」

とファイが笑う。

「ち、違うもん。」

クリンが膨れた。

図星のようだ。

ファイが剣を取って、剣に魔力を軽く通す。すると、剣の表面からパチパチと静電気のように青い電気の光が見える。

「わあ、凄い。」

とクリン。

「なかなか良い出来ね。」

とファイが満足そうだ。

「私が考えたんだから当然よ。」

と健介が2本目を彫ながら言う。

「この模様、リアが考えたんだ？」

とクリン。



「そうよ、クリンも使って良いけど、ちゃんと理解出来るまではお預けよ。」

と健介。

理解して無い魔法具を使うのは危険があるし、これくらいは理解出来ないと後で困るかもしれない。これもクリンの為だ。

「うん、がんばる。」

とクリン。

少々甘えん坊だが、素直で良い子だ。

クリンはシーリアと同年代のはずだが、ずっと子供っぽい。1年前は貴族の殻を被っていたが、今は普通の女の子の様に振舞っていた。地が出たのだろう。

クリンがその模様を理解出来るようになるまで10日を要した。他のゴールドクラスのメンバーはまだまだ悩みまくっているのに比べれば、随分速い理解振りだ。クリンはリアとファイに実力を引き上げられている。

クリンはその魔術構成模様を修正し、電撃から炎に替えて自分の剣に彫り始めた。クリンの趣味らしい。

健介とファイは時々クリンのところへ行って、様子を見てやった。クリンは寂しがると泣いてしまうから。

「リア達はまだダンジョンに行かないの？」

クリンが剣を彫ながら訊く。

「それは、クリンを置いて行っても良いと言っ事？」

と健介が意地悪く言う。

「だ、駄目。」

クリンが不安そうな目で見つめてくる。

「こら、クリンを苛めないの。」

大丈夫よクリン。

私達もまだ準備があるし、クリンが彫り終わるまで待ってるから。」

「

とファイが睨んで来て、クリンを安心させた。  
母性本能をくすぐられたらしい。

「焦って彫っては駄目よ。」

「1彫り1彫りにしっかり魔力を込めてね。」

と健介がアドバイスをする。

「う、うん。判った。」

クリンがまじめな顔をして彫る作業に戻る。

魔力を込めて彫るのは結構疲れる。

魔力も消費するし、精神的にも疲労する。  
魔力の操作が上手く出来ないものには出来ない事だ。  
そう言う意味では、クリンも優等生なのだ。

「それじゃ、また来るから。  
しっかり彫ってね。」

2人はクリンの部屋を後にする。

クリンが2人の仲間に加わってから、フィとリアは随分和やかに  
なった気がする。

フィの中のシリアも真面目な性格だし、目標がシビアであるから  
どうしても互いに厳しくなってしまう。

だが、クリンが居ると脱力してしまうのだ。  
2人にとっては丁度良いマスコットの存在である。

「そう言えば、ダイヤモンドクラスからはもうダンジョンに入った  
人がいたわね。」

とフィ。

「そうなの？」

まあ、私達には関係ないわ。  
急いで入る理由は無いらしい、生きて帰る為にしっかり準備しないと  
ね。」

と健介。

魔術学校ではダンジョン踏破、魔物討伐に関する戦績表が張り出

されて、定期的に更新されている。

ちなみに、行方不明者は申請された帰還期限までに戻っていないものが発表されるし、ダンジョンに入った生徒が遺体を発見した場合には死亡発表がなされる。

ダイヤモンドクラスではどちらも出ていないが、普通クラスの生徒で行方不明が出ているらしい。

「そうね。

と言っても、私達の準備はクリンだけなんだけど。」

とファイはクスクスと笑う。

「意外な仲間が増えたわよね。

彼女も優秀だから良いけど。」

と健介も笑う。

「2人より3人の方が生き残れそうだしね。」

とファイ。

クリンの実力は2人より1ランク下だが、2人を除けばトップクラスであるのは間違いない。

ファイとリアが強すぎるのだ。

2人は携帯できる保存食や薬品、寝袋やお宝を入れるための袋が数枚、タオルなどの日用品、予備の短剣やナイフ等等。

これらの必要な物は既に用意していた。

それ以外に2人は6本のライトを用意している。

ライトと言っても、それは木の棒に魔術付与で光の魔術構成を刻ん

だものだ。

3人でそれぞれ2本ずつもって行く事にしていた。一応、ランタンも持っていくが、これは念の為である。ダンジョンの奥深くに入ったら、ちよつと買物と言つ訳にはいかないのだ。

魔術付与を使ってさらに便利な魔法の札を用意した。木の薄い板を2百枚近くに、魔法を封じ込んだのだ。爆炎、火炎壁、氷結、突風、静寂、防壁、閃光。数十枚ずつ用意して置いた。強敵が現れた時に、かく乱や逃走の為に使えるだろう。

後はクリンの準備が終わるのを待つだけと言つ暇な時間を過ごしている。  
食堂でお茶をしながら話す。

「そう言えば、オルンはどうしてるかな？」

と健介が思い出す。

「なに？」

気になるの？」

とファイがニヤニヤして訊く。

(てか、お前の身体的事だから・・・  
いいのか?)

と健介は内心思いつつ。

「いや、全然そう言うのじゃないわよ。  
ただ、シーリアの騎士だと言ってたのに、この不甲斐無さはどう  
かと。」

健介が苦笑する。

2年になってからは、殆ど顔も見せない。

「そうね。」

諦めちゃったのかな？」

とフィは首をかしげる。

「どうなんだろうね。」

年頃の少女達にしては、色気がありそうで無い話である。  
場所が場所であり、片方の中身は男のものだから仕方ないと言える  
が。

オルンはそれなりの素質を持つ少年だった。

素質だけならクリンに匹敵している。

だが、クリンのように真面目な性格ではなく、素直でもない。

勿体無い話ではあるが、シーリアも健介もクリンの様に素直に従っ  
てついて来る者でなければ、引つ張り上げる余裕は無い。

特にオルンは対抗意識が変な方向へ向くので、それを矯正してやら  
無ければならない。

今の2人にはそれをやってやる余裕は無かった。

ところで、健介はスツカリ少女で居るのに慣れていた。

しかし、少女の身体の影響か、男性の時のような性欲は感じない。

フィを始め他の女子生徒達と一緒に風呂に入っても、目の保養だとは思っても性的興奮は覚えなかった。  
或は、女性の身体に男性の精神と魂が入ったために、性に関しては不都合が生じているのかもしれない。

（それにしても、これはある意味究極の女装だよな。）

などとちよつとずれた事を考えている。

少女で居るのに慣れたと言っても、やはり男である。

しかし、この状態は丁度良かったと言えなくは無い。

健介の大人としての広い視野と冷静な判断が活かせる状態である。  
若い男の身体であつたらこうは行かなかつたであろうから・・・  
人はそう言つた事に、多かれ少なかれ思考力を奪われるのだ。

## 第07話 初ダンジョン

ファイ、リア、クリンはダンジョンの入り口に立っていた。  
全員、完全武装である。

ただし、鎧に魔術付与はしていなかった。  
今回は『試しに入ってみる』程度の探索で、それほど深く潜るつもりもない。

それでも1週間はダンジョン内に居る予定だった。

ファイを先頭にダンジョンに入っていく。

入り口付近は兵士が警備しており、まだまだ安全な場所である。  
入り口から奥へ入ると、1本道になっていた。  
入り口もそうだったが、その通路も大きかった。  
高さは5メートルはありそうだった。

その通路の途中に、通路を遮るように結界が張ってあった。  
その脇に兵士達がいる。

「魔術学校の生徒達だな？」

気を付けて行って来いよ。」

と兵士。

ファイが頷くと、結界を解いてくれた。  
3人が通ると、再び結界が張られる。  
つまり、ここから先が本当のダンジョンと言う事だ。

3人でそれぞれ地図を描きながら、進んでいく。



誰か1人で描けばよいのだが、まずは全員で描いて経験しておく必要があると、健介が言っておいたのだ。はぐれた時に困る。

地下1階では魔物にも出会わなかったが、とにかく広いことが判った。

小さな町くらいはすっぽり入ってしまうのではないかと思うくらい広い。

地図を描く為に歩いているだけで結構疲れる。

こんな広い所を83階も降りたなら、魔物に出会わなくてもそれなりに賞賛してしまう。

まずは、この階で1泊する事にした。

地下2階へ降りて、直に魔物に遭遇した。

「何でこんなのがここに居るの？」

と健介が苦笑する。

「これもダンジョンの不思議かしら。」

とフイ。

「ああん、無駄話してないで、まじめに戦ってください〜」

とクリン。

クリンが魔物の突進を避けながら泣き言を言っている。

遭遇した魔物は巨大な猪に似たものだった。

魔術学校で一応習ってはいたが、このような魔物が一体どこから迷い込んでくるのか謎であるらしい。  
討伐してもしばらくするとまた魔物が現れる。  
現れる魔物はいつも同じとは限らない。

「しょうがないわね。」

健介が突進してきた魔物を避け、その瞬間にぎっくりと切りつけた。

強化した剣は易々と足の付け根の筋肉を切り裂いた為、その足が上手く動かなくなつて魔物は動きを止めた。

そこにファイが魔物のわき腹に剣を深々と突き刺した。

そして、魔力を剣に流し込む。

魔物は電撃によつてビクビクと痙攣して煙を上げた。

ファイが剣を引き抜くと、魔物は横に倒れて息絶えていた。

「ふう、ダンジョンってのは面白い所ね。」

とファイ。

「同感。」

と健介。

2人は顔を見合わせてにっこり笑う。  
良い度胸である。

3人は戦績となる魔物の殲滅証明部位を切り取つて袋に詰めた。  
資料によると、やはり大した魔物ではなかった。

ダンジョンの上層階では大した魔物は現れない事は判っていた。

中級以上の魔物は調べていたが、小物は調べてなかった。

「クリン、小物に怖気づいてちゃ駄目じゃない。」

と健介。

「だ、だって、初めてだったんだもん。」

とクリンは涙目で見てくる。

(く、ここは負けてはいけない。)

「クリン、怖気づいてたら、勝てる相手にも勝てないわよ。」

一応、ちゃんと動けてたんだから、次はちゃんと頑張るのよ?」

と健介。

「は、は、はい。」

地下2階での魔物の遭遇はそれだけで、地図を作るのに精を出した。

途中、湧き水を見つけて地図に書き加える。

水袋に水を補給して、地下3階へと降りた。

・・・

地下10階まで3日を要したが、何の問題も無かった。

途中、遭遇した魔物は3人にとっては大した敵ではなく、大して疲労も怪我也無い。

時間が掛かっているのは地図を作成しているからだ。

地図を作成している為、帰り道は直に判るし休憩場所に良いところも判る。

ある意味、命綱である。

さらに、地図を作成している最中に彼方此方見て回ったところ、魔物が溜め込んだのか、金目のものが埋めて有ったのを見つけた。他にも水晶の鉱脈があり、小金を稼ぐのに役立ちそうだった。ダンジョンの壁が一部壊れて、天然の水晶鉱脈が突き出ていた。不思議な光景である。

「さて、3日が経ったわけだけど11階まで制覇したら戻ろうか？」

と健介。

「そうね、予定の1週間をオーバーすると面倒だし、そうしましょう。」

とフイ。

「はい、判りました。」

とクリン。

クリンはダンジョン生活に慣れ始めてようやく調子が出てきた所だった。

地下11階はこれまでの階とは若干雰囲気違った。何が違うかと言つと、空気が重い感じである。

「これは、やばそうなのが居るわね。」

と健介が注意を促す。  
何時でも抜けるように剣に手を置いた。

「ええ、何だがピリピリする。」

とフィも剣に手をかけている。

「・・・」

クリンは黙って剣を構えている。

通路をゆつくりと進み、気配を探る。

次第にその気配の主に近付いていく。  
通路を2つほど曲がった所に、そいつは居た。

「あれは・・・ハルカント」

健介は小声で言う。

「ハルカント?!」

とフィも小声で驚く。

「!?!」

クリンは声なき叫びを上げる。

ハルカントは魔物の中でも大物で厄介な相手で有名だ。  
見た目は4本腕の巨人である。

身長は3メートル以上。

4本の豪腕と、それを支えるゴツイ身体。  
知性も高く、魔術を使う。

強さをドラゴンが10とすると、ハルカントは8くらい。

今まで戦ってきた魔物は一番強いので5くらいだ。

はっきり言って格が違う。

今の3人で戦っても恐らく負ける。

「戻りましょう。」

と健介は囁きながら、閃光と防壁の木の札を用意しておく。  
見つかったら使うつもりだ。

3人は気配を消しながらジリジリと後退し、10階まで戻った。

「ふう、やばいのが居たわね。」

とフイ。

「怖かったー」

とクリン。

「でも、あれを何とかしないと、11階は制覇できないわ。」

と健介。

一本道にある大部屋にいるのだ。

しばらく沈黙して。

「今回はダンジョンを出しましょう。」

次までに対策を練って、出直しね。

次ぎ来るまでに誰かに倒されているかもしれないけど。」

と健介。

こんな場所で悩んでも危険が増すだけだ。

3人は帰りに水晶の鉱脈に寄り、剣で掘り出して袋に詰めて持ち帰った。

学校に戻ったのは6日目、1日早く戻ってきた。

持ち帰った戦利品を金に換えて、山分けする。

「今回の探索に使った金と差し引きしても、十分な利益が出たわね。」

とフィ。

「ええ、良い小遣い稼ぎにはなったけど、ほぼ1週間分の授業の遅れがあるからね。」

と健介。

「フィとリアは問題ないでしょう。」

私はちよつと辛いな。」

とクリン。

「クリンだって、今回の探索で腕を上げたじゃない。」

自信持ちなさい。」

と健介。

一番の収穫は、ダンジョン探索で魔物との戦闘経験を得たことだ。次の探索までに色々と対策を練る事ができる。

次のダンジョン探査は3年の前期後の長期休暇中にやる事に決めた。

ハルカントとまともに遣り合える位で無いと、あの先は辛そうだと判断したのだ。

その修行の為に必要な期間である。

鎧の強化の為に魔術付加をする時間も要る。

やはり、ダンジョンの深部へ行くにはまだ修行と準備不足であった。

「この学校の最深記録は31階ですから、先は長いです。」

とクリン。

「あれ？ 83階ってのは？」

と健介。

「それは軍の探索隊の記録よ。」

とフィ。

「なるほど。」

「じゃあ、最低限、学校の記録だけでも更新しましょう。」

と健介。





## 第08話 2回目のダンジョン1

3人は以前にも増して、剣と魔術の訓練に時間を掛けた。探査魔法も可能な限り錬度を上げている。

より遠くの魔物などの位置を可能な限り正確に把握しておく必要がある。

ダンジョンでは壁と言う障害物が多いので遠くの探査が困難だが、探査出来ない事は無いのだ。

3年の前期の中盤、健介はシーリアの父と母に紙を出した。今度の長期休暇は帰らずにダンジョンに潜ると。

ファイとクリンも手紙を出しているはずだ。

剣と魔術の訓練は順調に進んでいる。

クリンも殆ど毎日、ファイとリアの自主訓練に付き合っているので、ダイアモンドクラスの中でも実力が1ランク上になっている。

ファイとリアに実力が引き上げられているのだ。

そして、3年に入ってから様々な魔法が解禁され、これまで以上に魔術の訓練に時間を使っていた。

「クリン、あなた悪趣味な魔法を・・・」

とファイ。

「ええ?!」

悪趣味だなんてそんな!

酷いです。」

とクリンが傷ついたような顔で言う。

クリンが練習している魔法は、ゴーレム生成魔法である。今は学園の敷地の土でゴーレムを作って操作をする練習をしている。そのゴーレムの大きさは30センチくらい。当然、大きければ大きいほど魔力を消費する。クリンの魔力であれば、2メートル近い大きさでも余裕で作れるが、今は操作の練習をしていた。

「まあ、気持ちの良いものでは無いわね。」

と健介もファイに同意する。

土人形が一人で歩いて、運動している姿は確かに気味が悪い。

「今に見てなさい。」

私のゴーレムに感謝する時が必ず来るです！」

クリンの機嫌を損ねてしまったようだ。

ファイと健介は顔を見合わせて苦笑する。

2人は共に2つの魔法を練習している。

1つは増幅魔法で、これは地味で余り人氣が無いものだが、健介はこれが決め手になる気がした。

この増幅魔法は使用する魔法を強化する。

つまり、炎の魔法に使えばその温度が上がって威力が増す。

殆どの魔法に使用できる、優れた補助魔法だ。

もう1つは粒子魔法だ。

この粒子魔法、名前もそうだが内容を読んでもかなり難しい。

生徒がこの魔法を勉強する事は稀である。  
だが、健介には内容を大体把握出来た。  
要するに原子や分子を扱う魔法だ。

こつちの世界では科学の発達は殆ど無いので、原子や分子といった概念は無くして理解されないのだ。

だから、粒子魔法は全くと言って良いほど無視されているのだが、それ故にこのような魔道書がある事が健介には不自然に感じていた。

増幅魔法は比較的簡単だが、増幅率を上げるのが難しい。

増幅魔法は一度使用した後、別の魔法を使うと言う段取りを踏む為、手間が掛かる。

その手間に見合った威力の強化を実現する為に、訓練に勤しんだ。

粒子魔法は初っ端から難しかった。

目に見えない粒子を扱う魔法であるし、そもそも未完成の魔術であった。

粒子魔法で出来る事は、基本2つである。  
分解と結合。

まずは結合の弱い物、木片を分解する訓練をしていた。

「この魔法本当に使い物になるの？」

とファイが疑わしげに訊く。

2人は木片を分解して粉々にするのに苦労していた。

「ええ、私を信じて。

これしかないって位の魔法だから。」

と健介。

木片を分解するのも手間取っているが、これはまだ序の口の未完成の魔法である。

健介は粒子魔法の本来の性能を引き出すべく、その魔術構成を解析して再構築しようとしている。

元の魔道書は未完成であると、その本を書いた魔術師の私信が書かれていた。

健介は粒子魔法の魔術構成の問題点を把握しており、その改良に取り組んでいる。

こんな事が出来るのは、原子や分子といった概念を理解している健介にしか出来ないだろう。

3年前期の定期試験が終わる頃、健介が改良した粒子魔法が完成して、それを健介とファイが使えるようになっていた。

ファイもその威力に満足したようだ。

あの魔道書をよくよく分析してみると、どうやら何かを参考にしていたらしい事が判った。

あの魔道書を書いた魔術師は原始などの概念を理解しておらず、他の魔道書を参考にしていたらしい記述部分があった。

それが何なのか調べてみたが、手掛りも無かったので断念した。

「それにしても、良くこんな事が出来たわね。

まだ正体を言う気にはならないの？」

とファイ。

「世のかなには、知らない事が幸せって事もあるのよ。」

と健介と微笑む。

今は2人で学校の訓練場に来ていた。

もう直クリンも来るはずだ。

ダンジョンに降りる前の、最終調整をするつもりだ。

「2人ともあのへば魔法は会得できました?」

とクリンが来るなり訊いてくる。

木片を分解するのに苦労しているのを見ていたので、侮っているの  
だろう。

だが、それは既に過去の話。

「随分な言われようね?」

とファイは余裕だ。

「まったくね。

クリンと手合わせしてあげたら?」

と健介。

「良いですわよ。

私のゴーレムの真価を見せてあげます。」

とクリンは片手を地面につけてゴーレムを作り出した。  
2メートルの巨体。

クリンもゴーレム操作の腕をかなり上げていた。

「やる気満々ね。

いいわ、お仕置きしてあげる。」

とファイも剣を抜いて向かった。

どちらともなく、模擬戦が開始された。

クリンはゴーレムを操作しながら自らも剣を振り、ファイに肉薄する。クリンとゴーレムのコンビネーションであるが、微妙にずれている。まだまだ訓練が足りないようだ。

だが、普通クラスの生徒なら3・4人は圧倒できるだろう。

ファイはクリンとゴーレムの攻撃をかわしながら、様子を見ていた。ゴーレムに何度か切り付けたが、大した効果が無いみたいだ。さすがはゴーレムと言った所だろう。

ファイは例の魔法を使ってみる事にした。

クリンに当たらないように気をつけなければならない。とても危険な魔法だ。

ファイは魔力を操作しながら魔術を構成していく。

クリンはファイに魔法を使わせまいと必死に攻撃しているが、ゴーレムとの連携が崩れてしまつて逆効果だった。

「これでお終いよ。」

とファイが言つて、ゴーレムに魔法を放つ。

それはファイの指から光がゴーレムの腹部に突き刺さり、指の動きにあわせて下から上へ光が駆け抜けた。

光はゴーレムを貫通して、そのままゴーレムを2つに割つた。それだけならゴーレムはそのまま再生しただろうが、それだけではなかった。

光が当たった部分から分解が始まり、ゴーレムの上半身と腰まで完全

に塵と化した。

足しか残っていないゴーレムはもう役に立たない。

「そんな・・・」

クリンは自慢のゴーレムが1撃で倒されてへナへナと座り込んだ。

「なかなかだったわよ、クリンのゴーレム。

もう少し連携を上手くしたら、私も苦戦したんだけどね。

あと、焦っちゃ駄目よ？

途中から連携出来なかったでしょ？」

とファイが落ち込んでるクリンにアドバイスをしていた。

「あうっ」

クリンは泣きそうだった。

「あーあ、泣かした。」

と健介。

「ええ?!」

わ、私？」

とファイ。

「あなたしか居ないでしょう。」

と健介。



「リアもです！」

とクリン。

「な?!」

私も？」

と健介。

結局2人でクリンを慰める事になった。

訓練の成果は上々だった。

魔力操作も安定して早くなっている分、身体強化の性能も上がり、魔法の発動も早くなり威力も上がっている。

クリンもしっかり実力を上げており、戦力が充実してきているのを実感していた。

長期休暇初日、ダンジョン前に3人が集まった。

「同じ事を考えている人もいるわけね。」

とフィ。

「まあ、当然でしょうね。」

と健介。

「学校を休んでダンジョンに入るのは、余程自信のある人だけですからね。」

とクリン。

ダンジョン前にはファイ達3人の他に、15人くらいの生徒達が集まっていた。

待ち合わせをしているのだから、更に増えるだろう。

皆、この長期休暇中にダンジョンにも潜ろうと言う考えなのだ。

大半の生徒は普通クラスの生徒で、初ダンジョンらしい人も沢山居るようだ。

「どうする？」

とファイ。

「まあ、私達は私達。

しっかり荷物をチェックして出発よ。」

と健介。

クリンも頷く。

3人は荷物の内容をチェックし合い、不足が無いかを調べた。

前回よりも荷物の量は増えている。

大半は食料品である。

1ヶ月もの間、ダンジョンの中で生活するとなれば、当然食料はそれだけ必要となる。

ダンジョン内でも食料は調達出来るようだが、その情報を鵜呑みにする訳にはいかない。

1ヶ月いる為、女の子用品やポーション等も入れている。

前は使わなかったが、魔法を封じた札も前回以上に用意した。

「問題ないわね？」

と健介。

フィとクリンが頷いた。

「よし、出発。」

健介の号令で荷物を背負ってダンジョンへと降りて行った。

3人は足早に地下10階へと降りていた。

他の生徒と一緒にになると足手纏いだからだ。

他の生徒は他の生徒で勝手にやれば良い。

地下11階への階段の近くで、休憩を取る。

降りれば強敵ハルカントとの戦いである。

まだ居ればの話だが。

「それじゃ、降りてハルカントを殺すわよ。」

と健介。

フィとクリンが頷く。

階段を下りて、以前味わった空気の重さを感じる。

まだ居るようだ。

気配を殺してゆっくりと進み、以前と同じ場所にいるハルカントを見つけた。

周囲には生徒らしい遺体が転がって居る。バラバラになっっているから、引き千切られたのだろう。行方不明者の中の誰かに違いない。

荷物を置いて、戦闘準備をする。

クリンは生徒の遺体を見て少し震えていた。

「クリン、臆しては駄目よ？」

気迫で負けたら、実力で勝っても負けるのだから。」

クリンに小声で言う。

クリンは頷いて、剣を握り締めた。

準備が終わると、3人で顔を見合わせて、一気にハルカントへと走り寄った。

ハルカントは巨体に似合わず敏感で素早かった。

振り返り様の拳を3人は難なくかわしたが、奇襲はほぼ失敗だったが。

ハルカントの足元から爆炎が上がる。

クリンが爆炎の木の札を投げつけて置いたのだ。こういう事には気が回る子だ。

ハルカントは直に炎の中から退避したが、3人の魔法が追い討ちを掛ける。

ハルカントは比較的炎に弱い。

よって、炎の魔法を打ち込んでいく。

しかし、ハルカントはそれを魔法のシールドで防いでいた。

「さすがね。」

とフィ。

「手応えあるわね。」

と健介。

3人はハルカントへと走り出す。

魔法のシールドで防がれては、接近戦しかない。

だが、そのまま接近戦を行う訳ではない。

「閃光！」

と健介が合図して、閃光札を投げる。

3人は目を手で被って庇う。

次の瞬間、ハルカントと3人の中で強烈な光が炸裂する。

害は無いが、薄暗いダンジョンの中に居る魔物には数分は目くらましになる。

3人はハルカントの足に剣を突き立て、切り裂く。

身体は狙わない。

まず足を止める。

それが3人の作戦だ。

予定通りの傷を負わせて、直に離脱する。

ハルカントは足の筋肉と腱を切られて倒れた。

まだ目が見えないのか、倒れたまま闇雲に暴れていた。

健介は火炎壁の札を出して、ハルカントへと投げた。

ハルカントは吹き上がる炎の中に身動きとれずに飲み込まれた。ファイとクリンが追い討ちで、炎の魔法を打ち込む。数十秒程は足掻いていたが、動かなくなった。

ハルカントと言えど、機動力を奪ってしまえば大した事は無い。

「ふう、終わったね。」

とクリン。

ハルカントを倒し終えた3人は、その場に転がって居る生徒の遺体を調べた。

4人分の遺体があり、それぞれの学年と名前を確認する。

戻ったら死亡報告してあげないと・・・

一応、それぞれに形見になりそうなものを選んで袋に入れておく。

「そう言えば、クリン。」

と健介。

「ん？ 何？」

とクリンが首をかしげる。

「ゴレムはどうしたの？」

と健介。

しばしの沈黙が流れた。

「忘れてた。」

とクリンはてへつと笑う。

健介とフィはクリンの頭をぺちぺちと手の平で叩いた。

「あ〜ん、ごめんなさい〜」

クリンは頭を抱える。

だが、考えてみればダンジョン内にはゴーレムの材料となるものがなかった。

魔物の死骸も可能ではあるが、焼け爛れたハルカントの死体をゴーレム化するのには、かなり気が引ける。

と言いか気持ち悪すぎる。

「どうしましょう?」

とクリン。

「材料となるものが見つかるまでお預けだね。」

とフィ。

ゴーレムは保留にして、ハルカントの殲滅証明部位の角を取り袋に入れた。

その後、11階を探索して地下12階への階段を見つけた。

「この階はハルカントだけだったね。」

とクリン。

「そうね。」

「次ぎ行きましょう。」

と健介。



## 第09話 2回目のダンジョン2

地下12階へ降りると、メタトロンの群れに襲われた。

「うわ！」

と健介。

「クリン宜しく。」

とファイ。

「ええ?!」

何で私？」

とクリン。

メタトロンとは体長1メートル前後の狼に似た魔物だ。

見た目に反して走れないらしく、足は遅い。

一般人が走る速度と同じくらいで、敏捷性は更に低い。

それでも厄介なモンスターで、強さ的には10段階で3程度だが、ある能力のお陰で6にまで上がっている。

それは強力な再生能力だ。

切っても、殴っても直に傷が治って襲い掛かってくるのだ。

「クリンの剣は炎が出せるでしょ。」

と健介。

メタトロンは炎で焼くのが一番倒し易い。

「あ、そうか！」

とクリンが思い出したようだ。

クリンが1体1体焼き殺している間に、フィと健介は他のメタロンを引き裂き、蹴り飛ばし、殴りつけて押し留めていた。クリンが焼き殺しているメタトロン以外は、直にまた襲い掛かってくる。

クリンが最後の1体を焼き殺した時には、20分ほど経過していた。

メタトロンは全部で18体。

厄介な相手であった。

「ハルカントより疲れたわ。」

と健介。

「本当よ、もう。」

とクリンが少し息切れしていた。

「少し進んでから休憩しましょう。」

とフィ。

この程度の相手に無駄に魔力を使うことは出来ないが、体力的に

は少しきつかった。

初めての相手だけに、魔力の使用分配がいまいちだった様だ。

3人はメタトロンの死体を跨いで通路を進んだ。

地下12階はただっ広い空間に地下水が湧き出たような小さな泉と、苔むした床が広がっていた。

どこか公園のような雰囲気である。

他に通路はなく、端の方に地下13階への階段があった。

「休むには良さそうな所ね。」

とクリン。

「そうね。」

「ここで野営しましょう。」

と健介。

広々とした空間で隠れる所も無いが、それは敵も同じ。

3人にとってはその方が気が楽だった。

泉で水の補給をして、野営の準備をする。

木が無いので焚き火は出来ないが、魔法の火で軽く肉を炙って食べる。

「ここまでは順調ね。」

とフイ。

「うん、ハルカントも上手く倒せたし、それだけでも十分な功績じ

やないかしら。」

とクリン。

「あれ？」

もう怖気ついちゃったの、クリン？」

と健介がニヤニヤして言う。

「ち、違うわよー！」

クリンが可愛い顔で睨んでくる。

「ほらほら、こんな所でクリン苛めちゃだめよ。」

とフィ。

「いやあクリンって、つい苛めたくなっちゃうのよ。」

と健介が笑う。

「その気持ち、凄く判るけど。」

「ここでは駄目よ？」

とフィもにっこり笑う。

「もう！」

2人とも私を何だと思ってるの？」

とクリンが頬を膨らませた。

「もちろん、大切な仲間よね？」

とファイ。

「うん。」

大切な仲間であると同時に、マスコットの存在かな？」

と健介。

「うんうん、それぞれ。」

とファイも頷く。

「もく、2人して私をおもちやにして・・・」

クリンは毛布に包まって横になった。

不貞腐れてしまったようだ。

「まあまあ、これが私達の愛情表現なのよ。」

私達、クリンの事好きよ。

ねえ？」

と健介がクリンを慰める。

「そうよ、クリンは私たちに愛されてるのよ。」

とファイ。

クリンが顔を赤くする。

「な、何よ急にそんな事言って・・・」

クリンが口ごもる。

「ふざけて言ってるんじゃないのよ。」

ダンジョンに一緒に入る人は、私達だって選ぶわ。

クリンはそれに合格したのよ。

仲間としてね。」

と健介。

「そう、そしてマスコットとしてね。」

とファイがクスクス笑う。

ファイはクリンがマスコットと言うのが気に入らなかったらしい。

クリンは複雑そうな顔をしているが。

周囲に簡単な結界を張って寝たが、何事もなく朝(?)を迎えた。

「ダンジョン内だと、朝って気がしないのよね。」

とファイが身体を解しながら言う。

ダンジョン内は当然、日の光は差し込んでこない。

だが、明かりを消しても真の闇にはならない。

何で出来ているのか判らないが、ダンジョンを構成している石が僅かに発光している。

本当に僅かな光だが4方から光が来るので、40センチ以内なら何とか人の顔を判断できる程度には明るい。

ダンジョン内の魔物なら、この程度の光でも十分なのだ。

3人が使っているトーチ代わりに光を発する魔法具は、僅かにだが魔力を消費する。

この3人なら1日中光を出していても、魔力を1割も使用しないが、その僅かな差で命を左右する場合もある。

しかし、トーチやランタンは光が安定しないし、光の届く範囲も狭い。

戦闘中に消える可能性も高い。

そう言う意味で、リスクで言えばトーチやランタンの方が大きいから、魔法具を使っているのだ。

「今日も一日頑張りましょう！」

とクリンが昨夜の事も忘れたのか、或は、覚えているからか、元気に言った。

それから10日間の間に、地下24階まで下りていた。

ダンジョンの1フロアが広い為、ほぼ1日1階くらいしか降りられていない。

遭遇する魔物は11階のハルカント以降、あまり強いものは居なかった。

とにかく順調に降りてきていた。

食料はまだまだ十分にあった。

途中、食料に出来る部類の魔物が居る階があり、そこで肉を手に入れていた。

食べられる苔や草もあり、1年とかの長期間でなければこのままダ

ンジョンに居座ることも可能だった。

だが、荷物は増える一方だった。魔物を倒せば、殲滅証明部位を剥ぎ取って荷物に詰めているが、これが結構重い上にかさ張る。

それに探査魔法で見つけた魔物の隠し財宝なども、結構な重さになっていった。

フロアの探索にこの重い荷物を担いで行うのは、かなりの重労働だった。

「参ったわね。」

これ以上重くなったら、帰るのも大変よ。」

と健介。

「本当に困ったわね。」

一度戻る？」

とフイ。

「戻るには、最短距離で行って3日くらいかな？」

往復7日として、残り10日くらいだね。」

とクリン。

「それだと戻ってきてても進む時間は5日程度しか取れないわね。ちよつと悩む所だわ。」

と健介。



「もう少し先に行つて、戻る時に食料とか要らない物を捨てたら？」  
とファイ。

「それがいいかな。」

出来るだけ先に行つて、限界になったら要らない物を捨てて戻る。  
これでいい？」

と健介。

ファイとクリンは無言で頷いた。

地下25階に下りた3人は、早々に引き返すことになった。

通路を慎重に進んでいくと、先に探査魔法で捉えていた生き物の声  
が聞こえてきた。

それは女性の悲鳴と、微妙に人では無さそうな男の声だった。

慎重に、かつ、足早に通路を進む。

「ははは！」

人間の女は久しぶりだ！

ここで味見していこうぜ。」

人では無い声が言う。

他に同じような声質の数人の声が聞こえた。

「誰か助けて！」

「ミルト！」

こちらは人間の女性の声だ。

「あははは！」

叫んでも助けなど来ないぞ！」

その時点で、その現場を見ることが出来た。

地面に転がる男子生徒2名。

同じく1名の女子生徒に1人の人では無い人型のモノが、女子生徒の胸を押さえ込むように踏んでいた。

その周囲に他に3人の人型のモノ。

それは魔族だった。

魔族を見て健介達は一瞬緊張したが、相手が気付いていないのなら勝機は十分にある。

油断している相手を殺すのはたやすい。

健介は新たに作成しておいた「静寂」の札を取り出して、フィとクリンに見せる。

2人は「静寂」の札の効果は知っていたが、音を無くしてどうするのか一瞬わからなかった。

不思議そうに見詰めてくる2人に説明している暇はなかったので、健介はその札を音がしないように軽く投げて発動させた。

次の瞬間、健介は手で合図をして突撃した。

魔族は泣き叫ぶ少女の服を脱がす事に気を取られているし、健介達の掛ける足音が聞こえない為、気付いていない。

先頭の健介がまず、速度を落とさずに周囲の魔族の間を通過して少女の上に乗って押さえつけている魔族の首を切り落とす。

全速で走った速度の乗った身体、魔力で身体強化した状態で、さらに魔力で強化された剣なら少女でも首を切り落とすくらいは容易なことだ。

魔族はいきなり現れた少女剣士と殺された仲間の首に意識を奪わ

れて、後ろから迫るフィとクリンに気付かない。  
駆ける音がしないのだから気付きようも無いのだが、健介も魔族を牽制して後ろの2人に気付かれないうようにする。  
そして、魔族が身構えた所で2人が魔族の後ろから剣で貫いた。  
貫通した剣が胸から出てくる。

魔族が仲間が貫かれるのを見て、魔族の視線が健介から外れた瞬間、その魔族の胸に双剣の片方が突き刺さっていた。

魔族は身体能力も魔力も基本的に人間を上回る強敵だが、油断している者を殺すのは簡単だった。

そう言うところは人間と変わらない。

「大丈夫？」

健介が女子生徒を、首のを失った魔族の死体の下から助け起こす。その間に、フィとクリンは男子生徒の方を見に行った。

「あ、ありがとう。」

「私は大丈夫。」

と女子生徒は男子生徒の方を気にしていた。

「フィ、クリン、そっちはどう？」

と健介が男子生徒の様子を訊く。

「この人は駄目です。」

とクリンが首を振る。

「こっちはまだ息がある。  
治癒魔法を使うから、他宜しく。」

とフィが淡々という。

「判ったわ。」

クリン、荷物をここに持ってきて。

結界を張るわ。」

と健介はその場所を中心に、周囲に札を置いて回る。

クリンが荷物を持って来た後、結界の防壁を発動させる。

これで小1時間はこの場所は安全である。

そうしている間に、助けた女子生徒が死んだ男子生徒の脇に座っていた。

「4年生ですか？」

と健介は女性に訊く。

見覚えは無いし、下級生には見えない。

「え、ええ。」

女子生徒は放心したように、死んだ男子生徒を見つめている。

女子生徒も怪我をしている。

健介は黙って治癒魔法を彼女に使った。

30分ほどでフィが治療していた男子生徒は意識を取り戻したが、まだ戦える状態ではない。

「もう少し休憩してから、戻りましょう。  
クリン、魔族の荷物を漁って目ぼしい物は荷物に入れて。」

と健介。

ファイも治療魔法で大分魔力を消費していた。  
瀕死状態から生還させたのだから、彼女も疲れているだろう。

ダンジョン内では同じ生徒が出会う事がよくある。  
全滅している場合には遺体を放置して探索を続行する。  
だが、生きている場合には一緒にダンジョンを脱出する事が推奨されている。

健介達も発見した2人の上級生を連れてダンジョンを脱出する事にした。  
出発前まで、殆ど誰も話さなかった。

「この人は置いていくしかないか。」

と健介。

死んだ人間1人を担いでいくのは、普通に大変だしダンジョン内では危険だ。

それに、他の荷物も沢山ある。

「ねえ、私が操ろうか？」

とクリンが躊躇いながら言う。

ファイと健介は顔を見合わせる。

名案では有るが、乗り気はしない。

そもそも、ゴーレム魔法で人の遺体を操るのは道徳的に禁止されて

いたはずだ。

だが、死んだ男子生徒の遺体をダンジョン外へ運び出すには、その方法しかない。

普通ならその場に置き去りにするし、ハルカントに殺された生徒も残してきた。

「判ったわ。

私が命令します。

クリン、この人をゴーレムとして操りなさい。」

と健介。

ここでリーダーとして、嫌な役は引き受けなければならなかった。と言っても、健介がリーダーと言うのは明確に決まっている訳ではないが。

健介は皆の視線を感じた。

何か問題になるとしても、健介にその責任追及が向けられるだろう。クリンは頷いて、死んだ男子生徒に魔法をかけた。

男子生徒の遺体が痙攣した後、むくりと起き上がる。

健介はゾンビ映画を思い出した。

気持ちの良いものではない、目を閉じているのが救いだ。

先輩の女子生徒は顔を背けて見ようとはしなかった。

5人と死人ゴーレムはダンジョンを戻っていった。

## 第10話 ヴァージル領の盜賊団

5日掛けてダンジョンを脱出した。

幸いにも、途中では魔物に出会うことは無かった。

既に他の生徒のチームと戦闘をしていたりしたので、迂回して戻ってこれた。

地上に出たところでゴーレム魔法を解除して男子生徒の遺体を、他の生徒達に運ばせた。

そこで彼女達とは別れた。

終始、重い空気だったので判れた時にはホッとした3人だった。

休みはまだ半分は残っている。

フィもクリンも気落ちしていた。

同じ学校の生徒の死と、ダンジョンの過酷さを目の当たりにしたのだ。

強く才能があるとは言え、まだ16・7の少女達だ、無理もないだろう。

健介は戦利品を金に換えて、2人に山分けした後、馬車の業者を呼んだ。

2人に旅の支度を強引にさせると、馬車に乗せた。

「どっかに行くの？」

とクリンが少し不満げに言う。

「私の家よ。」

と健介。

「え？」

「ど、どうして？」

とクリン。

「いいじゃない。」

「どうせ1人じゃ寂しいでしょ？」

「皆で私の家にいらっしやい。」

と健介。

フィは微笑んでいた。

健介の意図が判ったのだろう。

あのまま学校の宿舎に居ても落ち込むだけだし、1人で実家に帰しても寂しいだろうと。

家に着くと、母ミレーヌが驚いて、喜んだ。

「まあまあ、どうしたの？」

「怪我は無い？」

「戻ってきて良かったわ。」

と言いながら、リア（健介）を抱き締めた。

健介はいつもながら、赤面してしまう。

母ミレーヌはナイスバディで良い匂いがするのだ。



「ちょっと、お母様。

友達の前で、恥ずかしいですわ。」

と言いつつ、訳気味に言う。

きつと、本物のシーリアでも恥ずかしかったらどう。

「あらまあ、ごめんなさい。

シーリアの母ミレーヌです。」

ミレーヌがようやくリアを開放して、クリンに挨拶した。

「は、初めましてヴァージル伯爵夫人。

私はトモセーヤ男爵の娘クリンです。」

とクリンがミレーヌに挨拶した。

「まあ、トモセーヤ男爵の娘さん？

久しぶりね、私の事覚えて無い？」

とミレーヌ。

クリンがミレーヌを見てリアを見て首をかしげる。

「覚えて無い見たいね。

小さかったから仕方ないわね。

トモセーヤ男爵と夫のヘインツはお友達なのよ。

昔、小さな女の子だったクリンを連れてここに遊びに来ていたわ。

「

ミレーヌが少し遠い目をして言った。

「と言う事は、お母様。」

私とクリンはその時会っていたの？」

と健介がフィの視線を感じて言う。

フィの聞きたい事は何となく判った。

「ええ、そうよ。」

クリンとあなたは幼馴染と言うところね。

それでお友達になったのではないの？」

とミレーヌ。

クリンと顔を見合わせて苦笑する。

隣でフィが頭を抱えていた。

「ま、まあね。」

立ち話もなんだから、屋敷に入りましょう。」

健介はその場を流した。

ミレーヌを交えてお茶を飲み、少しするとミレーヌは用事がある  
と言って出かけた。

3人だけになって、3人で笑う。

「リアとは幼馴染だったなんて、驚いたわ。」

とクリン。

「私だって驚いたわ。  
全然覚えて無いもの。」

と健介。

シーリアの身体の記憶で、小さな時のものは曖昧でクリンかどうかなど見分けが付かない。

「世の中、妙な偶然があるものね。」

とファイがため息をつく。

この話題に付いていけない立場が恨めしいらしい。

とにかく、屋敷に来て早々にクリンの気は紛れたようだ。

ファイはそんなに落ち込む性格でも無いし、健介は精神的には大人である。

痛ましい事では有るが、ファイやクリンが死んだ訳では無いから落ち込む事でもない。

ミレーヌが使用人に客室を用意をさせていたようだ。

夕食後、久々の風呂に入った後、3人はそれぞれの部屋で寝た。

翌日、ファイは実家へと帰りクリンと2人で過した。

「クリンと2人きりだなんて、初めてね。」

と健介。

いつもファイと一緒にいたから、他の人と2人きりになる事はなかった。

「そうね。」

リアとフィはいつも一緒にいるから。

フィの家は近くなの?」

とクリン。

ここ数日の落ち込みは、すっかり無くなった様だ。

「ええ、歩いて20分くらいの所よ。」

確か、フィの両親は商人だったと思うけど。」

と健介。

「明日にでも行って見ない?」

とクリンは興味津々な顔だ。

「やめて置きなさい。」

クリンの事だから、どうせ平民の暮らし振りが見たいとかそういう理由でしょう?」

と健介。

「あゝん、どうして判るのよ。」

とクリン。

「あなたは単純だからね。」

と健介は笑う。

2人は軽く訓練で汗を流した後、風呂に入ってから町をぶらついた。

町の様子は、以前とは少し違って見える。

「ねえ、なんだか様子がおかしくない？」

とクリンも気になったようだ。

健介は黙って頷く。

町には余り人が歩いていなかった。

皆怯えたように周囲を気にして、足早に歩いている。

「この町で何か起きているみたいね。

お母様なら知ってるはずだけど。」

2人は少し警戒しながら、町を見て回った。

どこも似たような感じで、以前のような賑わいが無い。

「屋敷に戻りましょう。」

健介はそう言って、クリンと屋敷に戻った。

屋敷に戻ると、母ミレーヌを探した。

「お母様。

お聞きしたい事があります。」

と健介がクリンを伴って、ミレーヌがお茶をしている私室に入っ

た。

「まあ、どうしたの？」

「そんなに怖い顔をして。」

とミレーヌ。

健介はちよつと頬を緩めた。

町の様子を見て、すこし緊張していたようだ。

「町の様子がおかしいのはご存知でしょう？」

「何があつたのですか？」

と健介は訊く。

「やはり判つてしまったのね。」

「あなたも大人になりましたね。」

とミレーヌは健介を嬉しそうに見る。

「今、この町の近くに盗賊団が来ているのよ。」

「どうも、規模の大きい盗賊団らしくて、我が家の兵士だけでは押えきれないの。」

「だから、町にも被害が出てしまつて。」

とミレーヌは哀しげに言う。

「お父様は？」

「討伐に向かっているのですか？」

と健介。

「ええ、時々遣いの者が来て、状況を知らせてくれるのだけど、心配だわ。」

とミレーヌ。

「お母様、安心してください。」

「私はその盗賊団を殲滅します。」

と健介が言う。

ミレーヌは哀しげに首を振った。

「伯爵夫人、心配しないで下さい。」

「私達が！ 盗賊団を殲滅しますから。」

とクリンが言う。

健介がクリンを見るとにっこり笑った。

健介は苦笑で返す。

「お母様、私達は魔術学校の主席で、ダンジョンでハルカントを倒したチームです。」

「お母様もハルカントはご存知でしょうか？」

と健介。

「ハルカントって、あの巨人を倒したの？」

とミレーヌが驚いている。

健介とクリンが頷く。

「ハルカントはドラゴンに次ぐ知名度を持つ強力な魔物なのだ。」

「人間相手だって油断はしません。  
必ず生きて戻ります。」

と健介がミレーヌを軽く抱き締める。  
良い香りがした。

クリンと母の部屋を出て、2人で武装を始めた。  
夕方、ファイが屋敷に戻ってきた。

「あら、お早いお帰りね。」

と健介。

「私を置いて行くの？」

とファイ。

「これから迎えに行く所だったんですよ。」

とクリンがなだめるように言う。

ダンジョンに入る時のように3人とも完全武装をして、日が沈んだ頃、屋敷を出た。

ミレーヌが心配そうな顔で見送ってくれた。

「屋敷は大丈夫なのかな？」

とクリン。



「大丈夫よ。」

屋敷は腕の確かな兵士がいるらしいから。

普段は目立たないように、表には出てこないのよ。」

と健介。

健介は、というよりシリアは1度だけその兵士を見た事があった。

町の中心付近にある広場で、探査魔法をかける。

盗賊団のアジトはまだ見つかっていない。

規模の大きい盗賊団は、幾つかに分散しているらしく、幹部のいるアジトを探している所だ。

3人の計画は、町に侵入した盗賊を適当に痛めつけて逃がし、その後を追う事だ。

そうやって盗賊の集団を1つ1つ潰していけば、いずれ幹部のアジトを見つける事が出来る。

すでに、ヘインツ率いる兵団が同じ事をしているはずだから、それ程手間は掛からないと予想している。

2時間ほど待っていると、町の外から10人ほどの気配が入ってきた。

明らかに拳動が普通とは違う。

「行くわよ。」

と健介が言うと、2人が頷いてくる。

3人は気配のする方へと走る。

カシャカシャと鎧が擦れる音以外はず、速度も時速60キロは出ている。

ダンジョンのような暗い場所ではなく、森や山道の様にデコボコの

場所でなければ、このくらいの速度で走る事が出来る。魔術で強化された人間はある意味、魔物よりも化け物である。

2分後、目当ての集団の前に出る事が出来た。双方、立ち止まって身構えた。

「あなた方が盗賊団ね？」

と健介。

「へえ、女3人で何してんだい？」

とリーダーらしい男がニヤニヤし出す。

他の男たちも下品な笑い声を上げる。

「話し合いは無駄ね。

やるわよ。」

と健介がフィとクリンに言う。

2人は黙って頷く。

話し合いをしに来た訳では無いので、盗賊団の一味だと判れば良い。

「あのリーダーは生かしておいてね。」

と小声で言っ、健介は真正面から突撃する。

後ろで、フィとクリンが左右に広がって付いてきていた。

男達の剣の腕は並みのものだった。

魔術で強化していないため、それだけである。

しかし、魔術で身体強化し、剣と鎧を強化し、一流の剣士である魔

術師の3人に勝てる訳がなかった。  
予定通り、リーダー以外の盗賊達を殺すのに大した時間は掛からなかった。

リーダーは分が悪いと判断したと途端に逃げ出した。  
リーダーだけ残す手間が省けていた。

「それじゃ、追うわよ。」

と健介は言つて、走り出す。

探索魔法の圏内にまだいるので、リーダーは補足している。  
追いつかない程度の速さで、リーダーを負つて森を走る。

リーダーを追つて森を走っていると。

ガキン！

と健介が罨に掛かった。

「何これ？」

舐めた真似してくれるわね。」

と健介。

罨はバネ仕掛けで金属の歯付きの口が閉まる物だ。  
元の世界にもあったが、名前は思い出せない。

「大丈夫？」

とフィ。

「ええ、魔力でシールド張ってたから、全然平気よ。」

と健介は双剣の剣を1本抜いて、バネを破壊した。

「フィとクリンも油断しないようにね。」

と再び走り出す。

しばらく行くと、人の居ない場所でリーダーがウロウロしている。

「ちょっと待って。」

と健介達も立ち止まる。

「奴らの野営地の1つに戻ったらしいわね。」

「ここからどこへ行くのか、少し待ちましょう。」

と健介は座る。

2人も座って待った。

今、リーダーの男と3人の距離は直線で100メートル前後。森の中ではかなりの距離だ。

20分ほどで、リーダーの男は動き出した。

3人も立ち上がって後を追う。

森の奥の方へと入っていく。

10分ほど追っていくと、複数の人の気配が入ってきた。意外と近い場所だ。

「当りよ。」

と健介。

「まだアジトかは判らないわ。」

とフィ。

「いや、私の感ではここがアジトよ。」

と健介。

人が大勢いる事が、探査魔法の感覚で判る。  
こんな森の中で大勢居る理由は、戦時中でなければ盗賊団くらいしかない。

「それで、どうする？」

とクリン。

「もちろん、殲滅するわ。」

と健介。

「クリン、ゴーレム忘れないでね。」

とフィ。

「い、言われなくても判ってるもん。」

とクリン。

クリンは地面に手をつけて、ゴーレムを作り出した。

気配を殺しながら、その場所へと進んでいく。その集団が盗賊かどうかを確認するのをどうするか悩んでいたが、その必要は無かった。近付くに連れ、女の悲鳴と泣き声が聞こえてきていた。それが見えるまで近付くと、男達が2人の女性に暴行を働いている所だった。

「行くよ！」

と健介が全力で走る。殆ど同じ速度でフィも付いてきた。クリンは走る方向を変えていた。

その広場に疾風の如く走り込んだ健介は、女性の一人を取り囲んでいた男と乱暴をしていた男の首を切る。そのままの勢いで奥にいた男2人を切り殺した。双剣による高速の乱舞のようであった。

フィも数人を瞬時に切り殺していた。2人が振り返ると、クリンがゴーレムと共に盗賊に踊りかかっていた。

2人に意識が向いたところで、クリンとゴーレムが乱入して盗賊たちは混乱した。その広場には40人近い盗賊がいたが、5分と立たずに全滅した。魔物に比べれば、大した敵ではなかった。盗賊団に魔術師や魔術戦士が居なかったせいもある。そんな高度な戦いが出来るなら、盗賊団になど入らないだろうが。

「ファイ、クリン、彼女達を介抱して。」

と健介は支持して、広場の真ん中で閃光魔法を空に上げていた。それは信号弾だ。

こっちの世界でも、こういう使い方をする。

定期的に閃光魔法を空に打ち出していると、小1時間ほどでヘインツの兵団がやって来た。

「ええと、あなた方は？」

先に到着した兵士が聞いてきた。

「私はヴァージル伯爵の娘シーリア、あちらの2人は私の友人でフレイとクリン。」

と健介は女性を介抱している2人を指差す。

「は、伯爵様の娘さんですか？」

これは失礼しました。」

と兵士が畏まる。

「ああ、いいんですよ。」

私はただの小娘に過ぎません。

父、ヴァージル伯は？」

と健介。

「はい、直に到着するはずですよ。」

と兵士。

「そう、では到着するまでここで待ちます。」

と健介。

「はい、では私も仕事がありますので。」

と兵士は他の兵士とアジトの警備を始めた。  
それから数分後にヘインツがやってくる。

「シールリア！」

何故こんな所に？」

とヘインツが驚いている。

鎧を着て返り血を浴びているのだから、何故も無いだろうが。

「私も、私の町を守っただけですわ。」

と健介。

下手な言い訳は逆効果だから、この様に言う方が良い。  
ヘインツも言葉に詰まる。

「あの女性たちは私達が屋敷に連れて行きます。  
後の事は、お任せします。

では。」

健介はヘインツに敬礼して、2人の方へ歩いて行く。  
ヘインツは困ったような顔をしていた。



2人の女性をクリンとファイが背負って、森を軽く走っていく。健介はその先頭を走って、目立つ邪魔な枝を切り捨てている。町に入って、屋敷へと辿りつく。

2人の女性を屋敷の風呂に入れて、汚れを洗い流す。

現場で怪我は治しているから、後は心の傷と、妊娠しているかどうかだ。

3人も血で汚れた身体を一緒に洗う。

「あ、あの」

女性の1人の少女が呼びかける。

15・6歳だろうか。

「お家に帰りたい。」

と不安そうに見てくる。

「大丈夫よ。」

まだ盗賊がいるかもしれないから、明日、家に送ってあげる。良い？」

と健介が優しく言う。

「う、うん。」

少女は少し安心したようだ。

「あなたも良いですか？」

と健介はもう1人の女性に言う。

「ええ、それでお願ひします。」

とこちらは20くらいの女性で、落ち着いていた。

風呂から上がると、2人を客室に泊めた。

ファイとクリンは客室から追い出され、リアの部屋で一緒に寝ることになった。

広いベッドだから、少女3人くらいは余裕で寝れる。

「魔術学校はこれで退学かな？」

とクリン。

「そうね。」

でも、後悔は無いわ。」

と健介。

「ええ、力を正しく使ったと信じてる。」

とファイ。

魔術学校の生徒は学校内とダンジョン内以外では、特に許可がなければその力を使ってはならなかった。

魔術学校は軍属であり、その力を行使する範囲は厳格に規定されているのだ。

領主であるヘインツの許可を得ていれば、まだ良かったのだろうが、ヘインツは出撃中で許可を求める事も出来なかった。

この規則を破った生徒は、退学処分が確定している。最悪、魔力を封じられるが、事情が事情だからそこまでは無いだろう。

3人は救出した女性を家に送り届け、見舞金を渡した後、残りの休日をのんびりと過した。

魔術学校に戻って今回の盗賊の事件の事を報告すると、大騒ぎになった。

このような事は滅多に無いらしい。噂が学校中に広がった。

だが、予想に反して3人はなかなか呼び出しを受けなかった。

「何で呼び出されないのかな？」

とクリンが不安げに言う。

彼女は呼び出しを、今か今かと待ち構えて怯えていた。

「何ビクビクしてるのよ。」

どうせ退学は決まってるのだから、それまで勉強できる所まで勉強しましょう。」

と健介。

「そうそう、心配するだけ無駄よ。」

とフィ。

2人は魔術に関する本を読み漁っていた。  
ここで退学になったら、転生魔法を扱っただけの知識が得られないかもしれない。

だから、可能な限り魔術の本を読んで置くつもりだった。

そんなある日、とつとつ呼び出された。

「シーリア、クリン、ファイレイ、以上3名の盗賊討伐に関する処罰を言い渡す。」

と校長が言つて、3人を見る。

健介とファイは真つ直ぐ校長の視線を受け止め、クリンは視線を外した。

「今回は処分無しとする。」

と校長。

「・・・は？」

健介は間の抜けた声を上げてしまった。

「不服かね？」

と校長。

「いえいえ、ありがとうございます。」

健介は頭を下げた。

2人も頭を下げる。

「礼を言うのなら、4年生のタリアとファラールに言いなさい。」

と校長。

「4年生のタリアとファラール？」

健介はフィとクリンを見るが、2人とも首を振る。

「ダンジョンで助けた2人を忘れたのか？」

と校長。

3人は「ああ」と声を上げる。

「あの2人の家から圧力があってね、主にタリアの家の方だが。」

と校長。

「はあ」

と健介。

「タリアはヤーリク公爵の娘さんでね。」

と校長。

「ヤーリク？　って事は。」

とクリン。

「この学校を含めた領地の領主で、スポンサーでもある。」

と校長。

これで3人も合点が入った。

「まあ、今回はラッキーだったな。  
今後は気を付けなさい。」

と校長。

人生、何が起きるか判らないものだと、健介とフィは部屋で笑いあった。

「これで魔術の勉強も今まで通り進められるね。」

とフィ。

「タリアさんにお礼を言わなくちゃね。」

「さつきクリンが4年生に訊いたらしいけど、今は実家で休んでいるらしいわ。」

「そう、じゃあファラールさんに先にお礼を言っておきましょうか。」

「あ、ファラールさんも休んでるって。」

「そう……早く言ってよ。」

と健介が軽くフィを睨む。

「まあまあ」

フィは笑って誤魔化そうとしていた。

## 第11話 ドラゴンとの戦い

3年生の後期も順調に訓練と勉強を続け、主席をキープした。フイレイもそうだが、シーリアの身体も天才と言うに相応しい。

ダンジョンの到達階や戦果などの成果も公表されている為、3人は有名になっていた。

到達階自体は大した事は無いのだが、戦果が並ではなかった。3人の戦力では殆ど逃げる必要なく戦っていたし、ハルカントを倒しているのも、質、量共に圧倒的な戦果である。

魔族4人の功績は含めていない。これはタリア達との共同戦績と言う事になっている。

4年生の前期が始まると、チラホラと見物人がやってくる。殆どは軍人らしいが、いかにも貴族という者や、商人らしい者もいた。彼らはスカウトしに来た者達だった。

軍属の魔法学校だが、必ずしも軍に入らなくても良い。その場合は、補助されていた授業料と違約金を支払わなければならない。

だが、それを払っても欲しい人材は居る。そう言う人材を引き抜こうとやって来ているのだ。

商人はダイアモンドクラスには来ない。競争率が高すぎるからだ。



殆どオークションのようなものである。  
ダイヤモンドクラスに来るのは、軍人と貴族だ。

何故軍人が来るのか？

それはこの国の軍制度に問題がある。

この国の軍は王国軍と、貴族軍に別けられる。

魔術学校の卒業生は、何事もなければ王国軍へと配属される。

そこで訓練を受けた後、各貴族軍へと分配される。

しかし、有力な貴族軍以外に魔法学校の卒業生が配属される事は少ない。

配属されても、余り使えない者を押し付けられるのが落ちである。

それ故に、多少金がかかってもスカウトするのだ。

ヴァージル伯爵の貴族軍も、魔術が使える人間は殆どいない。

その一握りが屋敷の警護をしているのだ。

それは最低限の守りとして必要だが、前線で戦える魔術の使える兵士が欲しいのは当然であろう。

だが、ヴァージル領は比較的安全な領地である。

先の大規模な盗賊団が来なければ、問題は無かった。

そして当然の如く、シリア、フィレイ、クリンの3人はスカウトの標的になっていた。

一応、学校側から生徒の訓練や勉強の邪魔にならないように通達されているようだが、放課後の自主訓練も見物されるとさすがに困る。秘密の切り札の魔法の練習が出来ないからだ。

そんな訳で、今は剣の訓練と普通に知られている魔法の訓練だけ行っている。

「あの人達何とかならないのかな。」

とクリンが困り顔だ。

人の目を一番気にする少女である。

ファイと健介も気持ち良い訳ではないが。

「気にしたら負けよ。クリン。」

と健介。

「そう、どんな状況でも戦えるようにしないとね。」

とファイ。

リアとファイの模擬戦が始まると、見物人から感嘆の声が上がる。

2人はそれを無視して、ギリギリまで切り結ぶ。

どちらの攻撃もまともに当れば、手足どころか胴体でも切断する威力だ。

約2分間の模擬戦。

クリンが停止の合図をすると、2人は分れる。

この短時間でギリギリまで追い込む訓練を、ほぼ毎日行っている。

無論、クリンもだ。

ただ、クリンの場合はゴーレムを使う場合と使わない場合の両方で訓練する。

今ではゴーレムの動きとクリン自身との連携は絶妙になっている。

5・6メートル程度の範囲なら、殆ど分身の様に扱えるらしい。

学校の生徒で、リアとファイ以外でまともに相手が出来る生徒はいないだろう。

「この分身攻撃をしても私が勝てないあなた達は、やっぱり化け物よ。」

とクリンが悔しげに言っていた。

どうやら一番人気はフィレイらしい。

貴族では無いから、身軽であるのが人気の秘密か？

無論、実力も美貌も兼ね備えている。

ついで、クリン。

ちよつと戦力は落ちるがそれは他の2人が強すぎるだけ、クリンは  
ゴーレム使いとして使い勝手が良い。

護衛の囿や楯として使えるし、護衛任務には最適といえる。

最後にシーリアと言う事になる。

シーリアは伯爵家令嬢で、クリンは男爵家令嬢。

クリンに比べると敷居が高いと思われるのも無理は無い。

双剣使いと言う異色の戦力である事も、微妙に引く要素であるよう  
だ。

3人は一応、後期になるまではどこに行くか考えないと言う事  
にした。

4年の最後の長期休暇でダンジョンに入る予定だったから、余計な  
雑念を入れたくなかった。

来るスカウトの人達を、そう言って丁重に引き取ってもらって、再  
びダンジョンに入る準備をしている。

日々の授業と自主訓練の毎日が過ぎていく。

健介達の訓練時間は他の生徒達に比べて長い。

自主訓練を含めての事だが、やはり、実力の差を広げているのはこ  
のせいだろう。

ダイヤモンドクラス内では普通だったクリンも、今では頭1つ抜きん出ているのだから。

前期の試験を何とか主席をキープして終え、最終調整に入る。

前回中途半端に終わった地下25階の探索から始めるが、その前に数日は地下13階前後で留まる事になっていた。切り札の魔法の訓練をするつもりだった。

3人はダンジョンに入って予定通り、1日掛けて地下13階にやって来た。

「ここはいつ来ても何も無いね。」

とクリン。

この階には泉と苔むした地面くらいしかない。

「だからここに来たんでしょ。」

今日は休んで、明日から特訓よ。」

と健介。

翌日、朝から魔術の訓練を始めた。

粒子魔法の改良版である。

粒子魔法にもう1つ魔法を追加した。

以前の分解光線は直に感を取り戻せたが、一番の狙いはもう1つの方だ。

「結合魔法？」

とファイが首をかしげる。

「ええ、上手く行けば分解よりも強力な魔法になるわ。」

と健介。

分解を極限まで突き詰めればその方が強力なのだが、強力すぎてダ  
ンジョン内でそんな魔法は使えない。

結合によって核融合を起こす方が威力としてはちょうど良いだろう。  
核融合エネルギーを使った攻撃が最強の手札となる。

大抵の魔物は分解光線で倒せるはずだが、この核融合は破壊の仕方が異なるから使い勝手が違う武器となる。

健介が広場の隅に苔を置いて、その苔に魔法を掛ける。

苔の中にある水素が核融合を起こし、瞬時に爆発した。

水蒸気爆発だろう。

「うわ、爆発した。」

とクリン。

爆発した周囲は蒸気と煙が漂っている。

「あれだけなの？」

とファイは不満げな顔で見てる。

「あれだけって、あれがどれだけか判ってないでしょ？」

と健介がにんまり笑う。

健介は十分な威力に満足していた。  
もう少し威力を落とさなければならぬ程だ。

「どつという意味？」

とファイ。

その質問には答えずに、先ほどの苔の塊よりも大きな塊を、同じ場所に置いた。

「もっと離れて、シールド全力にして見てなさい。」

健介は苔に核融合の魔法を掛けた。

先程よりも格段に大きい爆発が生じて、爆風が3人を包む。  
ダンジョンの周囲が揺れていた。

「どつ？」

と健介。

ファイとクリンは顔を見合わせ、啞然としていた。

「実はね、今でも威力を落としているのよ。」

と健介。

「あれで？」

とクリン。

「ええ、全力で融合させると、私達が危ないから。」

と健介。

「融合って何なの？」

とフィは不安げだ。

「説明するのはちょっと難しいわね。」

簡単に言うと、この苔や魔物、そして、私達人間も目に見えない、  
凄く小さな粒で出来ているの。

その粒同士を1つの粒にするのが核融合という現象なの。

この核融合が起きると、爆発的にエネルギーが発生するの。

その結果があれ。

でも、あれでも核融合を起す粒はかなり制限しているの。」

と健介が簡単に説明する。

フィとクリンは首をかしげている。

「その内ちゃんと説明してあげる。」

と健介。

その後も融合魔法の訓練をして、ちょうど良い威力と魔力消費量を  
探った。

2日の内で、何度か他のチームが脇を通っていった。

「それじゃ、そろそろ行きますか。」

と健介。

完全ではないが、十分な手応えを得ていた。苔であれだけの威力である。

魔物の身体に使ったら、どれだけの威力を発揮するのか、余り考えたくは無い。

3人は地下25階へと下りて行った。

前回の魔物との遭遇現場は血の後が少し残っているだけだった。魔族の死体は魔物にでも食われたのだろう。

あの時、魔族が居たと言う事は、ダンジョンの奥には魔族が居ると言う事だろう。

一応、そう言う情報は学校側から得ていたが、やはり自分の目で見ると実感するものだ。

探査魔法を使いながら細心の注意を払って探索して、階下へと降りていく。

地下34階に着くまでは、大した障害もなく順調に進んでいた。そこである意味、運命の出会いを果たした。

地下34階は地下13階と似た空間だった。

巨大な空間のフロア。

大きく異なる点が1つ。

ドラゴンが居座っていたことだ。

「ちょっとこれは・・・」

健介が階段の陰に隠れて、巨大なドラゴンを見て呟く。



ドラゴンは全長14・5メートルはある。

人間を丸呑み出来る程の大きな頭と顎、鋭い爪を持った大きな腕と足。

鞭のようにしなやかで、打たれば即死するであろう棘のある太い尻尾。

そして、高い知性と魔術。

さすがに3人は足を止めざる得なかった。

「作戦を立てましょう。」

と健介が言って地下33階へと戻る。

「魔物最強のドラゴンです！」

とクリンが興奮している。

「落ち着きなさい。」

とフィがクリンの頭を撫でる。

「もう、子供じゃないんだから！」

とクリンが膨れる。

「クリン、大人にならないと、仲間はずれにするわよ。」

と健介がニンマリしてみる。

「わ、わかったわよ。」

とクリンが大人しくなった。

「さて、あのドラゴンに対してどう戦うか？  
何か案はある？」

と健介。

「素早く近付いて、魔法でバーンと。」

とクリン。

ダンジョンに慣れてドラゴンを見たせいか、妙にテンションが高い。

「私の案は、こうよ。」

ドラゴンの弱点は……」

「無視した〜」

クリンの意見を無視して説明を始めた健介にクリンがしがみつく。

「クリン、あなたは戦略家には向いていないわね。  
要人警護とかの仕事が良いと思うわ。」

と健介。

クリンは膨れたまま健介から離れた。

「それで、ドラゴンの弱点はあの巨体よ。  
ドラゴンにとっては狭いダンジョン。」

飛ぶことも出来ないから、ハルカントの様に足を潰せば勝機が出るわ。」

と健介。

「でも、今回は近付くのも大変そうよ。」

とファイ。

「それは考えがあるわ。

これを使うの。」

健介は木の札を取り出した。  
防壁の魔法が封じられた札だ。

「それで一時的に動きを止める訳ね。」

ファイも納得したようだ。

「うん。

それとこれ。」

健介は別の札を出す。  
幻影の魔法が封じられた札だ。

「いくら防壁で攻撃を封じても、こちらが攻撃す時には防壁から出ないといけないから。」

この幻影魔法でドラゴンをかく乱させるわ。」

と健介。

「閃光じゃ駄目なの？」

とクリン。

「ドラゴン相手に閃光は止めたほうが良いと思うわ。

ドラゴンが闇雲に暴れ出したら、手が付けられないから、幻影を追ってくれた方が良いのよ。」

と健介。

3人は更に細かい打ち合わせをして、荷物を地下33階に隠してドラゴンのいる地下34階へ降りていった。

戦いは初めから壮絶だった。

札を投げて防壁を展開するとドラゴンが迫ってくるのがほぼ同時だった。

辛うじて防壁が間に合って、ドラゴンが激しく激突し、防壁が一瞬歪んだ。

ドラゴンが衝突の衝撃に怯んでいるうちに、ドラゴンの反対側へと走り防壁を展開する。その間に幻影を放つ。

ドラゴンが攻撃を再開し、幻影に魔法やプレスを放ち、豪腕を振るう。

その合間を縫って、ドラゴンの足元へと走りよって、剣を突き刺す。

「なんて硬いの！」

とファイが離脱して攻撃をかわしながら言う。

健介も高速で突っ込んで、双剣を振るが硬い鱗に阻まれて、深く切れない。

「同じ所に、何度も剣を叩きつけるのよ！」

健介も攻撃をかわしながら、離脱して叫ぶ。

2人が退くとクリンが浅く突撃して札を投げて戻ってくる。  
そして。

ドラゴンの足元で爆発する。

ドラゴンは炎ではダメージを与えられないが、爆破の衝撃でダメージを与える事は出来る。

ドラゴンは攻撃しながら後退した。

「攻撃やめ！」

下がって！」

健介が叫ぶ。

ドラゴンと3人の間に30メートルほどの空間が空く。

その両脇は魔法の防壁があるから、そのまま突撃すればこちらが避けるスペースが無くて不利になる。

ドラゴンはそれを狙ってジワジワ後退したようだ。  
こうなると防壁が邪魔である。

ドラゴンの後ろには回れない。

尻尾があるから、下手に後ろには行けない。

しばらく睨み合いが続いたが、先に動いたのはドラゴンだ。  
ブレスを吐いた。

防壁の間を炎が充満し、3人に熱風を吹きつける。

炎によって一瞬視界が奪われた隙に、ドラゴンが炎を突き破って突進してきた。

さすが知能の高いドラゴン、炎を煙幕代わりにしたのだ。

3人は咄嗟に左右へ回避する。

ファイが左、クリンと健介が右へ。

ドラゴンはクリンと健介に向かって追撃するように突進し、なぎ払う様に豪腕の爪を振るった。

健介は回避行動ついでに、ドラゴンへと向かって足へ切りつけて防壁の裏へと逃げ込む。

クリンは跳躍して爪を回避した。

ファイがドラゴンの後ろから魔法を使おうとしていたが、尻尾で攻撃されて上手く行かない。

ドラゴンと3人は少しの間、激しい格闘戦を繰り広げた。

3人の魔術強化された身体での高速格闘戦はドラゴンにも通用したが、長時間続ける事は出来ない。  
肉体的にも精神的にも大きな負担になる。

「閃光！」

健介は叫んで札を投げる。

ドラゴンの眼前で光が爆発し、一瞬フロア全体が光に包まれた。

「撤退！」

健介はドラゴンが防御姿勢をしている内に叫んで階段へと走った。クリンは階段の近くにいたので先に上がり、ファイが健介の後に続いた。

「やばかったね。」

とクリン。

3人とも息が荒い。

「さすがドラゴンと言った所だわ。  
あれほど硬いとは思わなかった。」

とファイが剣を見ている。

刃こぼれがある訳ではないが、有効なダメージを与えられなかった。

「ドラゴンを少し甘く見ていたわ。

作戦自体は悪くなかったけど、あの硬い鱗。  
厄介だわ。」

と健介。

「せめて魔法が使える隙があればね。」

とクリン。

ドラゴンはその巨体に似合わず、動きが早い。  
それ以上に魔法と同時に豪腕やプレスでの攻撃が繰り出されてくる。  
故に、こちらが魔法を使う余裕がない。  
高速移動しながらでは魔法は使えない。

人間が使う魔法は儀式魔法は別として、身体強化など以外は数秒から数十秒の時間が掛かる。

その間の隙があればドラゴンに殺されてしまう。

「もう閃光は使えないわね。」

次に逃げる時は、閃光を囿に氷結と防壁で動きを止めるわよ。」

と健介。

知能の高いドラゴン相手に同じ手が使えると思ってはいけない。

先に逃げ道を確保しておくのが、健介のやり方だ。

生き延びれば次がある。

「今日は休みましょう。」

へとへとだわ。」

とクリン。

健介とファイは頷いて、荷物を隠した場所へと歩き出した。

命を掛けたドラゴンとの実戦。

訓練以上の実力を、訓練以上の時間発揮していた3人は疲労が激しかった。

魔力にはまだ余裕があるのが救いである。

荷物を掘り出して周囲に強力な多重結界を張り、3人は毛布に包まって眠りに付いた。

3人は目を覚ますと、運動をして身体を解した。

食事をしながら、対策を練る。

「とにかく、相手の動きを止める為に足を潰す必要があるわ。」

動けないドラゴンなら、こちらにも余裕が出来る。」



と健介。

「1撃でドラゴンを倒す事が出来ない以上、それが一番の方法だった。」

「と言う事は、あの硬い鱗をどうにかしないとね。」

とフイ。

「多少強引にでも、魔法を使えるようにしないと駄目かな？」

とクリン。

「2人で完全にドラゴンの注意を引き付ける事が出来る？」

と健介。

「無理ね。」

とフイが即答する。

それが出来ればとづくにやっている。

「なら、剣で足を潰す事になるけど、鱗をどうにかするか、剣の威力を上げるかだね。」

と健介。

「どっちも難しいね。」

鱗はどうにもならないし、剣は既に威力を上げているから。」

とフイ。

「地道に攻撃するのは、耐久力と持久力の差でこちらが不利だよ。」  
とクリン。

「となれば、魔法を使える隙が出来るまで、剣で戦って耐える。  
それしかないかな。」

と健介。

「それしかないわね。」

とファイ。

「頑張りましょう。」

とクリン。

3人ともまだ戦意は衰えていなかった。  
ドラゴンとまともに戦えた事が自信に繋がり、逆に戦意を高めていた。  
それ故、とにかくやってみようと言うノリだった。

3人は荷物を隠して、階段を下りて行った。  
ドラゴンは待ち構えていた。  
3人が戻ってくるのが判っていたのだろう。

3人は防壁を作って逃げ場所を確保し、幻影魔法を掛けてドラゴンとの戦闘を開始した。  
ドラゴンの方も前回の傷は癒したようで、完全な仕切りなおしとな

っている。

相変わらず素早い動きでの豪腕の攻撃と、魔法攻撃、プレス攻撃が同時に2つ繰り出され、3人は回避に忙しい。足だけでなく、攻撃できる場所は攻撃しているが、やはり硬い鱗に阻まれて深い傷を負わせる事が難しい。

3人は防壁をうまく使い、休み休み戦い続けた。ドラゴンは疲れ知らずで戦い続けている。

だがそれでも、ドラゴンの動きを覚えて前回よりは楽に戦っていた。そして、ついに魔法を使えるチャンスがやって来た。

ドラゴン動きを覚えたのが功を奏したのだ。

健介がプレス直後のドラゴンの頭部に剣を突き刺した。ドラゴンは咄嗟に回避してダメージを軽減したが、その時、足元でクリンの投げた爆炎札が爆発してドラゴンは勢い余って転倒した。フィは健介がドラゴンの頭部に向かった時には魔法の準備をしていた。

クリンの動きを見ていたのだ。ドラゴンが転倒して起き上がるほんの数秒の間、それが勝負の分かれ目だった。

フィの指先から分解光線が発射され、ドラゴンの後ろの片足の付け根に当る。

さすがに巨大なドラゴンを貫通しなかったが、ドラゴンの片足の付け根は骨まで分解されて、役に立たなくなっていた。

これでドラゴンは移動が出来なくなり、3人に有利な状況が作れた。魔法を使う隙も生まれやすくなる。

「チャンスよ！」

と健介。

ドラゴンは方膝を付くような体制で3人を迎撃するが、下半身が動けない為に全体として動きが鈍い。

健介は隙を突いて分解光線をドラゴンの頭部へと向けた。それはドラゴンが咄嗟に上げた豪腕に遮られ、豪腕が肘の辺りから塵と化した。

ドラゴンは豪腕を失ってバランスを崩し、後ろへ倒れた。直に起き上がって3人に向き直る。

それを機に3人は魔法を使おうとした。

「待て！」

人間達よ、私の負けだ！」

とドラゴンから声が聞こえた。

ドラゴンは顎を地面につけて降伏の意を表していた。

3人は用心して距離を開けたまま話す。

「負けと言われても、あなたを生かしておく理由があるかしら？」

と健介。

ドラゴンを倒せば、それだけで実力を示し名声を高める事が出来る。逃がしても得は無いし、この戦闘の苦勞が台無しである。

「お前たちを我が主とし、盟約を交わそう。」

とドラゴン。

ドラゴンは魔物最強の種族であるが、盟約の種族とも言われている。

悪魔は契約によって力と代償を交換するが、ドラゴンは盟約によって主従関係を結ぶ。

そんな話があった。

だが、ドラゴンが盟約を結ぶ事は極めて稀であり、英雄譚でしか聞いた事は無い。

「へえ、私達のような小娘と盟約を交わすの？」

とファイ。

「小娘だからだ。

お前達にはまだ未来があり、まだ強くなる。

ここで死ぬのも詰まらんし、お前達の行く末を見て見たい。」

とドラゴン。

「そう、それでどうするの？」

と健介。

「我が名を明かし、盟約の印とする。

我が名はランズーヴェレート、お前たちを主としその命に従おう。」

とドラゴン。

3人は顔を見合わせて苦笑した。

「いいわ、ランズーヴェレート、あなたの主になりましょう。」

と健介が言って、フィとクリンにも促す。

「これで盟約の儀式は終わった。

主よ、私は人に変身する。」

とドラゴンは言って、人間に変身した。

銀髪に銀の瞳、白い肌の長身の美青年だ。

190センチはある。

だが、片腕がなく、片足も付け根からもげそうだ。

「じつとしてなさい、治療してあげる。」

と健介は治癒魔法をドラゴンに掛ける。

「ねえ、この子なんて呼ぼうか？

ランズーヴェレートって他の人に知られちゃ駄目でしょ？

ランでいいかな？」

と健介の後ろでクリンがフィに話している。

「そうね、気取っても仕方ないし、良いんじゃないかな。」

とフィ。

これでドラゴンはランと呼ばれる事になった。

女っぽい呼び名だが、美青年だからそれ程違和感がない。

「クリン、ファイ、無駄口叩いてないで荷物もって来て。」

と健介が治癒魔法を掛け続けながら言う。

治癒魔法はそれ程苦手ではないが、ドラゴンのダメージは大きく、なかなか治癒が終わらない。

ドラゴンのランは興味深そうに健介を見ている。

「主よ、1日あれば自分で回復できる。」

とランが健介に言う。

「良いから黙ってなさい。」

と健介。

どの道、ここで休んでいく事になる。

休んでいる間も、全員が5体満足である方が良い。  
機動力は重要だ。

2時間弱の間に治療が終わり、荷物を持ってきたフィとクリンが野営の準備を終わらせていた。

地下34階のドラゴンのフロアで眠りに付く。

昨日に引き続き、かなり疲労していた3人は結界の中でぐっすりと眠った。

ランはその3人を面白そうに見つめていた。

3人が目覚めて出発の準備をする。

「ところで、ラン。」

その格好で戦えるの?」

と健介。

ランは全裸に腰に毛布を巻きつけただけの姿だ。

「ああ、この姿でもドラゴンだ。

多少の制約はあるが、そうだな、ハルカントくらいの強さに落ちたと思ってくれば良い。」

とラン。

3人は納得して、階下へと下りて行った。

それから15日掛けて、地下53階まで降りていた。

ランが仲間となって戦力が上がった為、探索の速度が上がっていた。ランは言ったとおり、ハルカント以上の実力を示していた。

3人とは、1対1では勝てないほど強い。人の姿をしていてもドラゴンだった。

「そろそろ帰らないといけないわね。」

と健介。

長期休暇の終了までに帰るにはそろそろ引き返す必要がある。

それに、そろそろ風呂が恋しい。

女の子だし。

「上々の記録でしょう。」

荷物も重いし、引き返しましょう。」

とフィ。



「そうです。  
荷物重いです。」

とクリン。

ランに荷物を持たせても、まだ重い荷物に悩まされていた。  
半分は魔物を倒した殲滅証明部位、半分はお宝。

「それじゃ、帰って少しのんびりしましょう。」

4人はダンジョンを上って行った。

## 第12話 スカウト

5日掛けてダンジョンを脱出し、地上に出ると夜だった。

ドラゴンのランのお陰で、雑魚の魔物は寄って来ないから助かった。しかし、ランにも気配を消す事を覚えさせなければなるまい。

ダンジョン入り口を警備している兵士は、ランを見るとびっくりました。

ランの正体は知らないだろうが、魔物である事は眼を見れば判る。兵士達が身構えるのを、健介達が事情を説明して落ち着かせた。

3人は冷めかけた温い湯に浸かって身体を洗う。

ランも男性側の風呂に行かせて、身体を洗わせた。

ちゃんと身体を洗えるか心配した3人だったが、まさか女風呂に入る訳にも行かない。

だが、一応汚れは落ちているようだったので、良しとした。

宿舎の部屋に戻って、さっさと寝ることにする。

ランは健介とフィの部屋に予備の毛布に包ませて寝かせる事にした。ランは人目に付くと攻撃されるかもしれないから、部屋の外と言う訳には行かない。

翌日、荷物の中のお宝を金に替え、殲滅証明部位を提出した。

「ちょっとお聞きしたいのですが。」

ドラゴンを連れ帰ったんですが、これは戦績になるんですか？」

と健介が学校の職員に聞く。

職員は目を見張ってランを見て、慌てて引っ込んだ。

「ちよつとまってる。」

職員はそう言って、バタバタと殲滅証明部位の引渡し所から出て行った。

3人は顔を見合わせて笑った。

ランは何やってるんだと不思議そうな顔をしている。

しばらくして校長と共に帰ってきた。

「ほう、これは珍しい。」

ドラゴンが人に化けた姿か。

このドラゴンを倒したのかね？」

と校長。

「倒したと言うか、もう少しで倒せると言う所まで追い詰めました。」

とフイ。

「そうか、それでドラゴンが君たちを主と認めただけだな？  
ならば、ドラゴンも戦績に入れて良いだろう。」

そのドラゴンは君達の側にいられるよう、通達を出しておこう。」

と校長は言って、戻って行った。

さすが校長、この程度では動じないらしい。

休みが終わって後期が始まると学校中に噂が広まり、ダイヤモンドクラスにいるランを一目見ようと生徒が押し寄せてきた。

一応、ランは必ずシーリア、ファイレイ、クリンの3人の内の誰かの側に居る事が義務付けられていた。

戦績とダンジョンの記録も更新され、断突の1位である3人の記録は目立っていた。

それ以前に、学生がドラゴンを下僕にするというのは、やはり前代未聞であるらしい。

スカウトの人達の中には、慌てて何処かに連絡を取りに行く者もいた。

後期が始まって1ヶ月、スカウトの誘いを保留にしつつ、今後の事をフィと話合った。

「これでヴァージル伯爵家の面目は保たれたわね。」

と健介は少し安心したように言う。

一応言いだしっぺだから、気にはしていた。

「それどころか有名になって、評判が上がってるわよ。」

この前の盗賊団騒ぎでも、盗賊団をほぼ壊滅させたしね。」

とフィ。

「これからだけど、例のモノを手に入れる為には、それなりの立場にならないと駄目よね?」

と健介。

「ええ、この学校にも例のモノはあるみたいだけど、私達には在り処も教えてくれないわ。」

盗もつにも盗めないし、下手すると家名に傷が付くから、窃盗と言ふ手段は取りたくないわね。」

とフイ。

「と言ふ事は、今後はそれなりの立場になれる、将来の展望が望める方向と言ふ事になるわね。」

と健介。

伯爵令嬢と言ふ立場の健介は何処にもいなくても、ある程度の将来の展望はあるのだが・・・

「そうね。」

スカウトは色々あるけど、そう言ふ意味では望み薄だわ。

このまま軍に入る方がマシだともう。」

とフイ。

「ふ〜、難しいわね。」

と健介。

そこに話を聞いていたランが口を挟む。

「一体何の話をしているのだ？」

全く理解出来んのだが。」

健介とファイは顔を見合わせて、健介が頷く。

「ラン、これから言う事は他言無用よ。

クリンにもね。」

とファイはランに確認してから説明する。

ランは頷いた。

「私とリアは転生魔法の魔道書を探しているの。」

とファイ。

「転生魔法？

また何でそんなものを？」

とランは首をかしげる。

ドラゴンの癖に人間らしい仕草だ。

「まあ、それは色々あってね。

悪用するつもりは無いのよ。

それはともかく、転生魔法の魔道書を手に入れるために、これからどうしようかと話し合っていたの。

あれは禁書だから、学校や宮殿の図書館に秘蔵されているのだけど、それを見る為にはどうしたらよいのかとね。」

とファイ。

「そうか。」

その魔道書なら以前見た事がある。  
興味深い内容だったな。」

とラン。

「その魔道書はどこに？」

と健介。

「さあ、ダンジョンの中で見かけたただけだ。  
読んだ後は持ち主に返したからな。」

とラン。

「持ち主って？」

とファイ。

「魔族だよ。」

とラン。

結局は方針が決まらず、時間が過ぎていった。

そんなある日に見慣れない軍服を着たスカウトが来た。

健介とファイが昼休みの間に呼ばれて、勧誘された。

彼らは王国軍の超エリート部隊を育成する、王国軍上級士官学校の  
関係者だった。

通常の士官は普通の人や、魔術を使っても普通クラス程度の者がな  
る。

その配下は少数の魔術戦士と通常の一般兵が配属される。

だが、この王国軍上級士官学校を卒業生は、健介やファイ等のように特別優秀な魔術戦士が士官になり、その配下も魔術戦士が中心となる。

故に、その部隊は王国軍最強の部隊であり、王国軍上級士官学校は超エリートコースと言える。

これまでよりもレベルの高い魔術の知識が得られる可能性が高い。少なくとも、このまま魔術学校を卒業して軍に配属されるよりは、例の魔道書を得るチャンスは高くなるはずだった。

健介とファイは見詰め合って、ファイが頷いた。

「判りました。

ですが、2つ条件があります。

1つは私達のドラゴンには手を出さないこと。」

と健介は条件を出す。

「それは、無論だ。

ドラゴンは君達の手足だと考えている。

手足を切るような愚かな真似はしない。」

と士官学校関係者。

健介とファイは頷く。

「もう1つは、クリンも一緒に入れる事。」

と健介。



「クリン？」

君達のチームの世話係とか、お荷物とか言われている子だろうか？」

と士官学校関係者。

クリンは2人よりも実力が劣る故に、陰でその様に言われている。しかし、その殆どはただの嫉妬から来るものであり、クリンの実力が本物である事は2人が良く知っていた。

「一体誰が言っているのか知りませんが、それは間違いです。

クリンは私達が認めた優秀なパートナーです。

クリンを入れないのなら私達も行きません。」

と健介は士官学校関係者を睨む。

健介はクリンをバカにされて腹が立っていたと言っより、スカウトが噂を信じて軽率な判断をした事が腹立たしかった。

隣からもフィの怒気が感じられるが、こっちは単純にクリンがバカにされた事を怒っているようだ。

「わ、わかった。

それは配慮しておこう。

それでは、うちに来てくれるのだね？」

と士官学校関係者は冷や汗を流している。

少し怯えた様子を見ると、実戦経験が無いのだろうか？

「ええ、先ほどの条件が飲まれれば、ですが。」

と健介が念を押した。

士官学校関係者との会合を終わらせた後、クリンにその事を伝えておいた。

「王国軍上級士官学校って超エリート为学校じゃないですか?!  
そこに私も行くの?」

とクリンは驚いていた。

「まだ決定では無いわ。  
そう言う話があったって事。」

と健介。

「でも、決まったと思って良いと思うわ。」

とフィは自信満々だが、まだ少しいらいらしてた。

「で、でも、私はあなた達2人のおまけだと思われてない?」

とクリンが哀しげに言う。

「まあ、向うはそう思っているかもね。」

と健介は笑う。

「でも、そんな事関係ないでしょ?  
相手がどう思おうが、私達は仲間なんだから。  
クリンは私とリアが認めた仲間なのよ。  
もっと自信を持ちなさい。」

とファイ。

「うん。

ありがとうございます。」

とクリンは照れるように微笑んだ。

それから1週間後に、士官学校関係者が再び現れて3人を呼び出した。

「シーリア、ファイレイ、クリンの3名の王国軍上級士官学校への入学が許可されました。

こちらが入学許可証です。

魔術学校の卒業後、1ヶ月以内に王国軍上級士官学校へ登校して下さい。」

と士官学校関係者がテーブルにそれぞれの許可証をおく。3人はそれを手に取った。

「そして、こちらは支度金となります。

こちらに最低限用意して頂くもののリストがあります。購入して学校へ届けるか、当日持って来てください。」

と士官学校関係者がテーブルに3つの袋を置いた。

中には金貨が10枚入っていた。

金貨は1枚で、平民なら2・3年暮らせる程の価値がある。大金である。

「魔術学校と軍の手続き他は全てこちらで行いますので、ご心配無

用です。」

と士官学校関係者が締めくくった。

士官学校関係者との会合を終わらせると、クリンは喜んでいた。

「お父様に報告しなくちゃ。」

とクリンはにこやかだ。

「ああ、私も報告しておかないと。」

と健介。

「私も手紙出しておこう。」

とフィ。

進路が決定するとスカウトの勧誘もなくなり、静かな日々を送れるようになった。

相変わらず放課後の自主訓練は続いている。

魔術学校よりも、エリートが集う学校と有名な上級士官学校である。どんな猛者がいるのか判らない為、油断は出来ない。

特にクリンは気合が入っていた。

それに付き合っつて、フィと健介も訓練をしている。

「ねえ、新しい鎧でも買わない？」

「この学校の鎧で士官学校に行くのはちょっと嫌でしょ。」

と健介。

「鎧？」

とフィ。

「そうですね。」

「ちょっと胸がきつくなってきましたし。」

とクリン。

「それと剣も新調して、新しい魔術付加を掛けようと思うのよ。」

と健介。

「へえ、どんなの？」

とフィ。

「ランとの戦いで、ドラゴンの鱗の硬さに苦しめられたでしょ？」

と健介はランを見ると、ランがニヤツと笑った。

「それを教訓に、新しい魔術付加の構成模様を考えてたのよ。」

と健介。

「なるほど、じゃあ、今度のはドラゴンの鱗も軽く突き通せるわけ

ね？」

とクリン。

「ええ、若干魔力を食われるけど、今のより威力は格段に上がるわ。」

と健介。

ランは今度は嫌そうな顔をした。

支給された支度金を使わなくても、ダンジョンでの戦利品を売った金が、金貨で43枚ほどあった。ダンジョンでの戦利品で稼ぐ生徒も居るが、ここまで稼いだ生徒も珍しいとの事。

購入予定の武具の相場は

鎧は大体銀貨2000〜1400枚ほど。

剣は大体銀貨1000〜2000枚ほど。

金貨1枚で銀貨1000枚の価値があるから、贅沢を言わなければ余裕で買える。

「それじゃ、試験休みにでも町に出て買しましょう。」

と健介。

休みにならないと、学校の敷地からは出られない。

後期の試験は約2カ月後。

その2週間ほど後に卒業式がある。

卒業式から1ヶ月以内に上級士官学校へに行かなければならない。

魔術学校は卒業式から10日以内に退去しなければならない。試験後から卒業までの間に、剣と鎧を新調して魔術付加する訳だ。遅くても、卒業式から10日以内で終わらせれば良い。

試験までの間も何の問題もなく、淡々と過した。

試験はいつも通りこなし、終わると早速、町へと繰り出した。魔術学校の近くには、それなりに大きい町がある。

ランは帽子を目深に被らせて、伊達眼鏡を掛けさせて目立たないようにさせて連れて来た。

「初めて見るけど、結構賑わっているわね。」

とクリン。

「そうね、いつもは通り過ぎるだけだからね。」

と健介。

ランはものめずらしげに、町をキョロキョロ見ている。

健介は何処の田舎者だと突っ込みたかった。

町の人に聞いて、武器を売っている店を教えてもらった。その店に行くと、露店のように剣が何本も並べられていた。3人で剣を手にとって確かめる。

「ちょっと、私の方は駄目ね。」

良いのがない。」

と健介。

「私もいまいぢかな。」

とフイ。

「私も今の剣と余り変わらない気がします。」

とクリン。

「ねえ、もつと良い剣は無いの？」

と健介は店の主人に聞く。

「ここにある物より良いのといったら、町外れにある鍛冶屋のものしかないな。」

だが、あそこは基本的に受注生産みただからな。」

と主人。

「判ったわ。ありがとう。」

と健介。

とりあえず、その鍛冶屋へと行ってみる事にした。

人ごみの中を歩くこと30分ほど、その鍛冶屋は町外れの寂れた場所にあった。

鍛冶屋の店らしき場所に、いくつかの剣があったのでそれを見てみる。



「あ、これなかなか良いよ。  
クリン、これどう?」

とフィ。

「ああ、重さのバランスが良いですね。  
じっくりきます。」

とクリン。

「その剣は売約済みだ。」

と初老の男性が出てきた。

鍛冶屋の親方らしい。

「あ、すいません。」

とクリンが剣を戻す。

「親方さん、剣が欲しいんですけど。」

と健介。

「今は売れるものは無い。  
欲しいなら新しく剣を打ってやるが。」

と親方。

「剣を1本打つのにどれくらいの日数が掛かります?」

と健介。

「大体2・3日って所だな。」

と親方。

3人分で9日。

厳しい日数だが、卒業後も少し居残れば問題は無い。  
3人で話し合って、新しく剣を打って貰う事にした。

「それじゃ、私達3人の剣をお願いします。」

私は双剣です。」

と健介。

「私は片刃の剣で。」

とフィ。

「あ、え、えと、普通の剣で。」

とクリン。

「それじゃ、お前さんらの剣を見せてもらおうか。」

と親方。

3人は親方に自分の剣を渡して見せる。  
親方は剣を丹念に見ていた。

「うむ、打ち終わったら連絡する。」

どこへ連絡すれば良い？」

と親方。

「魔術学校の学生シーリアへお願いします。」

と健介。

「一応、前金を受取っておきたいんだが？」

と親方。

「ええ、構いません。」

と健介。

「1人銀貨200枚だ。」

と親方。

3人は金袋を見て頭を抱えた。  
金貨を両替していなかったのだ。  
仕方ないので。

「親方、前金はこれで。」

と健介は金貨を1枚渡す。

「どういつつもりだ？」

と親方。

「それで3人分の前金としてください。  
剣が出来たら、足りない分は払います。  
余ったら、何かおまけして下さい。」

と健介がにつこり笑って愛想を振りまく。  
親方は唸った。

「まあ良いだろう。  
連絡したら取りに来な。」

と親方。

3人は鍛冶屋を後にして、両替屋へと向かった。  
3人それぞれが金貨1枚を銀貨に替えてた。  
銀貨500枚が入った袋2つの重たい袋を持って防具屋へと向かった。

この流通通貨は厄介である。

防具屋では、革鎧や鎖鎧、胸当て等が置いてあるが、それは飾り  
だった。

考えてみれば判るが、鎧は身体に合わせて作らなければならない。  
衣服の様にフリーサイズなどないのだ。

3人は店員に身体のサイズを測られる。

「何か恥ずかしい。」

とクリン。

「この程度で恥ずかしがるんじゃないの。」

とフィ。

次に鎧の形状や素材などを質問される。

「うーん、私は鎖鎧を板金で補強した防御力と運動性を確保したものが良いわね。」

素材は鋼でお願い。

表側のデザインは、王国軍でも問題ない落ち着いたものにして。」

と健介。

「私も彼女と同じものにして。」

とフィがにっこり笑う。

「えと、わ、私もそれで。」

とクリン。

「あなた達、他人任せで良いの?」

と健介が苦笑する。

「いいじゃない、お揃いの鎧よ。」

チームなんだから、それで良いのよ。」

とフィ。

「そう、お揃いなよ。」

とクリン。

「ええと、宜しいでしょうか？」

鎧3つを作るのに、大体8日掛かると思います。

料金は1つ銀貨850枚、前金で1つ銀貨300枚です。」

と店員。

3人は前金を支払った。

「出来あがったらお知らせしますので、連絡先を教えてください。」

と店員。

「魔術学校の生徒シーリアです。」

と健介。

3人は防具屋を出た。

健介は他に買い物があると、2人を連れて魔法屋へと向かった。

魔法屋には魔術に用いる様々な道具などが売っている。

売っている道具類は、主に儀式魔法に使うものだ。

健介がそこで買ったのは、魔術付加用の触媒である。

「それは何？」

とクリン。

「魔術付加に使う触媒よ。」

と健介。

「え？」

「また彫るんじゃないの？」

とクリンは金槌を打つ動作をする。

「いいえ、今回は鎧が鎖鎧でしょ？」

鎖の輪の1本1本を彫るの？」

と健介。

「ああ、それは勘弁して欲しいかも。」

とクリン。

「今回は自動書記の魔法と組み合わせで、この触媒を使って魔力と共に刻み込むのよ。」

と健介。

「リアったら、魔術付加で店を開けるんじゃない？」

とクリン。

単純な魔術付加自体はそれ程難しいものではない。だが、付加する魔術が複数で複雑になれば、当然難易度は格段に上

がる。

自動書記と組み合わせることが出来るのは、それなりに腕の立つ魔術師で無ければ出来ない。

しかも、込める魔力の事を考えると、魔術師の魔力は大きい方がいい。

実際、自動書記と魔術付加を組み合わせてる使える魔術師はそれなりにいる。

だが、魔力が少なくて強力な魔法具を作れない場合が多いのだ。その点、シーリアの魔力は十二分に高い。

ちなみに、最後の魔力測定の結果は。

シーリアが2800、ファイレイが3400、クリンが2100だった。

クリンも急速に成長している。

それだけの素質があり、リアとフィに扱かれていた為だろう。

学校へ戻って訓練をしながら待っていると、9日後に鍛冶屋と防具屋から連絡が来た。

3人は町へと急いで向かう。

まずは防具屋へ行く。

「試着してみてください。」

問題があれば、微調整します。」

店員と鍛冶屋らしい男が並んでいる。

3人は試着室に入り、学校支給の鎧を脱いで新しい鎧を身に付けた。

試着室から出て動き回る。



「ちょっと肘の辺りが引つかかっている感じなんだけど。」

と健介。

鍛冶屋が肘の辺りを見て、巨大なペンチのようなもので肘の板金を動かしている。

「これでどう?」

と鍛冶屋。

健介は肘を動かし、腕全体を動かしてみる。

「うん、良いみたい。」

と健介。

3人はそうやって鎧の不具合を調整した。

残りの金を払って、新しい鎧を着たまま防具屋を出た。

古い鎧は、新しい鎧を入れる予定だった袋に入れて、ランに持たせて居る。

クリンは新しい鎧が動きやすくて、少しはしゃいでいる。

以前の鎧よりは少し重いのだが、金を掛けて動きやすい機動力を重視した鎧である。

フィも新しい鎧には満足しているようだ。

その後、剣を受取りに町外れの鍛冶屋へと向かう。

「親方〜!」

鍛冶屋の店の前で、健介が呼ぶ。  
少しして。

「おう、来たな。  
用意できてるぞ。」

と親方は3人の剣を抱えて持ってきた。  
3人は各々の剣を手にとって、出来を確かめる。

「うん、いいね。」

と健介。

今までの双剣も悪くなかったが、新しい双剣はより重量バランスが  
良く腕に馴染む。

刀身の反り具合も以前よりも少なくなり、より刀っぽくなっている。

「こつちも良いわよ。」

とフィ。

フィの新しい片刃の剣は若干反りが入り、直剣と刀の中間な感じだ。

「ああ、ぜんぜん違うよ。」

とクリンは目をキラキラさせて喜んでいる。

クリンの剣は両刃の直剣だ。

剣の幅は普通の剣よりは細めで刀身のバランスが良く、振りに力を  
込めやすい。

刃の角度も柄から剣先に掛けて微妙に変化しており、切り付け易く  
刺し易い。

今まで使っていた学校支給の無骨な剣に比べると、雲泥の差である。

「親方、良い仕事してるね。」

と健介が微笑む。

「満足してくれたなら、残りの代金を払ってもらおうか。」

と親方も笑って言う。

「おいくら？」

と健介。

「残りは、双剣が銀貨340枚。

片刃の剣が250枚。

両刃の剣が260枚。」

と親方。

「随分掛かったのね。」

と健介は銀貨を数える。

「ああ、お前さんらの剣は元々そう悪い物じゃなかったからな。

それよりも良い剣を打つとなると、良い鋼を使わなきゃならん。

良い鋼を鍛えるするには、大量の燃料も必要になる。

無論、俺の腕の値段もある。」

と親方はニヤツと笑う。

ヴァージル領の鍛冶屋で買った剣は、それなりに良い剣だったらし

い。

「そう言う事なら仕方ないわね。」

と健介は数えた銀貨を親方に渡す。

他の2人も銀貨を数えて親方に渡した。

親方が金額を確かめるのを待ってから、鍛冶屋を後にした。

学校に帰って次の日、魔術付加を開始した。

自動書記と魔術付加を組み合わせる場合、魔力を込めると魔力の消費が激しいので、1日に魔術付加する剣は2本が限界だ。

「新しい魔術付加は、今までと同じ強化、軽量化、電撃、防錆の4つ他に、

強化に対して増幅魔法を発動させるようにするの。」

と健介が説明した。

魔術付加した双剣に試しに魔力を込めて電撃を刀身に溜め、更に剣の握りの根元にある印を触ると剣がかすかに光った。

「この印を触って魔力を流すと、剣の強化魔法が増幅魔法でさらに強化される。

一応、一度魔力を流すと、5分間増幅されるようになってる。

余り長時間設定すると、魔力の消費が大きくなるからね。」

と健介。

2人はそれを見て頷く。

「これで良い？」

と健介。

「うん、それでいい。」

とフィ。

クリンもコクコク頷く。

次の日に、フィとクリンの剣に魔術付加を行った。

1年前よりも魔力を増したリアの魔術付加は、普通の強化だけでも威力は増している。

その強化の上に更に増幅を行ったら、ドラゴンの鱗も易々と貫くだろう。

更に次の日。

鎧への魔術付加を行う。

鎧は構成物質が多いので、1日1つ魔術付加するのがやっとだ。

「鎧への魔術付加も改良してるよ。」

強化、軽量化、防錆の他に、防音と保温を追加した。」

と健介。

「防音と保温？」

とクリン。

「そう。」

防音は鎧が出すガチャガチャ言う音を出さないこと。

保温は外気が20度±40度前後まで、温度変化を防ぐ事が出来る。」

と健介。

「何か地味ね。」

とクリン。

「まあ、そう言わない。」

この追加の魔術付与の有り難さは、直に判るから。」

と健介。

卒業式の日、全ての魔術付加を終える事が出来た。卒業式では、主席の挨拶としてシーリアが挨拶をした。卒業式が終わると、8割方の生徒がその日の内に魔術学校を去って行った。

「ちょっと寂しくなったね。」

とクリン。

「そうね。」

でも、直に新入生が来て騒がしくなるわよ。」

とフィ。

「その前に、私達も出発するけどね。」

と健介。

残っている生徒は迎えを待っている者が、移動前に時間を潰している者だ。

3人も後者である。

「剣と鎧の準備も出来たし、明日には出発しようか？」

と健介。

2人が頷く。

「クリン、次ぎ会うときは士官学校だね。」

と健介。

「うん。」

遅れちゃ駄目よ?」

とクリン。

「それはあなたでしょう？」

クリン。」

とファイが笑って言う。

「私、遅刻はしないもん。」

とクリンが膨れた。

「私達は最終日の2・3日前には近くの町に行くから、一緒に士官学校へ行く?」

と健介。

「うん。」

「一緒に行く。」

とクリン。

「リア、クリンを甘やかさないの。」

とファイが苦笑する。

「まあ良いじゃないの。  
今回だけよ。」

と健介。



### 第13話 黒い石の荒野

結局、クリンと近くの町で待ち合わせした。

ドラゴンのランはクリンと一緒に往かせる事にした。

心配は無いと思うが、クリンのボディガードとして。

クリンは何処か抜けている所があるから、心配なのだ。

翌日、馬車を呼んでクリンと分れ、ヴァーゼル領へと向かった。

ヴァーゼル領の町に着くと町の中でフィと分れた。

屋敷に帰ると、父ヘインツと母ミレーヌが待っていた。

「お帰り、卒業おめでとう。」

とミレーヌが抱き締めてくる。

相変わらずのナイスボディに赤面してしまう。

なかなか慣れないものだ。

「お母様。

恥ずかしいです。」

と健介。

少女の身体に入ってから、女性の裸を見ても何とも思わなくなっていた。

だが、ミレーヌに抱き締められると、その柔らかい体とその暖かさが、やたらと恥ずかしかった。

（そつえば、この身体も随分成長したな。）

シーリアの身体はこの4年で随分女らしくなってきた。戦闘訓練のせいで筋肉質の身体ではあるが、それでも出る所は出てきている。

母ミレーヌもまだまだ体形は崩れていない。

屋敷に入って両親と話をした。

ダンジョン探索の話。

ドラゴンとの戦い、そして、盟約。

それから、手紙で伝えておいた上級士官学校の事。

両親は楽しそうに、時に心配そうに聞いていた。

「ドラゴンと戦うなど、危険な真似をしたものだな。」

とヘインツは首を振る。

「でも、無事だったんですから。」

とミレーヌが庇ってくれる。

「お父様、そんな事より、もう盗賊の被害はありませんの？」

と健介。

「そんな事って、お前……」

とヘインツは口ごもる。

男親とは悲しいものだ。

「もう大丈夫よ。」

小さな盗賊集団もいなくなったみたいだから。皆、あなたとお友達を恐れているのよ。」

とミレー又は少し複雑な顔をしている。

娘が盗賊団に恐れられるような娘になってしまったのだから。これが息子ならまた話は違うのだろうが。

「良かった。」

じゃあ、もう何も問題は無いのね。」

と健介は事も無げに振舞う。

ミレー又はの心配は薄々判るのだが、今はまだそれどころでは無いのだ。

「まあね。」

とミレー又は少し口ごもる様に言う。

「何かあったの?」

と健介。

今度は別の心配事らしい。

「シリアが気にする事では無いよ。」

とヘインツ。

「お父様、私だけ除け者は嫌ですわ。」

私はもう子供ではありません。」

家に居る時ぐらい、もう少し私を頼ってください。」

と健介。

「そう、そうね。」

あなた、シリアにも教えてあげて。」

とミレーヌ。

「むづ、ミレーヌが言うなら仕方ないな。」

お前も知っていると思うが、荒地を畑にする作業が難航しているのだ。」

とヘインツは唸りつつ説明する。

荒地と言うと、シリアの記憶にはこの町の西にある黒い地層のある荒地の事だった。

(ん？ 黒い地層・・・あれはあれか？)

シリアの記憶を検分して引っかかるものを感じた。

元の世界で見覚えがある。

「お父様、その荒地とは黒い石が沢山ある場所ですか？」

と健介は確認する。

「ああ、そこだ。」

どうもその黒い石が原因らしいのだが、掘っても掘っても黒い石が出てきてな。

どうにも出来なくて困っているのだ。」

とヘインツ。

「それでね。」

仕方ないから、あの土地は他の領地に売ろうかという話が出てくるの。」

とミレーヌ。

「それは駄目です！」

と健介は思わず反射的に言った。

「駄目って、売ってはいけないのか？」

殆ど不毛の土地だぞ？」

とヘインツ。

「売る話は私がその土地を確認するまで待つてください。多分、売らない方が良いです。」

詳しい話は、確認してからしますね。」

と健介。

ヘインツとミレーヌは顔を見合わせた。

「まあ、作業は中断したままだし、好きにきなさい。」

とヘインツ。

翌朝、ファイを誘って早速その荒地へと向かった。

普通に歩くと半日は掛かるが、訓練も兼ねた身体強化で走ったので、30分と掛からなかった。

この場所は、シーリアがまだ小さな子供の頃、父ヘインツが視察に来た時に一緒に来た場所だった。

その当初から、不毛の荒地とされていたはずだ。

ヘインツの事だから、色々試したのだろう。

「ここね。」

と健介は周りを見渡す。

「ええ。」

とファイも見回している。

地面は掘り返されて、黒い地層が剥き出しになっている。

表層の地面は厚くて20センチくらい、その下から黒い地層が覗いていた。

健介はその黒い地層から黒い石を取り出し、普通の地面の上に置いた。

その石は朝露のせい少し湿った感じがあつたが、魔法の火炎を浴びせると燃え始めた。

「やっぱりそうだった。」

と健介は呟く。

「これは何なの？」

とファイは燃える石を不思議そうに眺める。

「これは石炭と言うものよ。」

この黒い塊は、判りやすく言えば炭が圧縮された塊なの。」

と簡単に説明する。

ファイは炭と言われて納得したようだ。

健介は大分昔、中学生の時に親戚の家の近くにある閉鎖された炭鉱で遊んでいて、石炭の現物を見た事があった。

ここにある石炭とはちよつと質感が異なるが、石炭は石炭。これだけ大量あつて露天掘りが出来るとなれば、安価な燃料としてこの領地の新たな産業となるだろう。

石炭も砕いて畑にまけば肥料になると聞いた事があった。しかし、これだけ石炭が詰まっていたら、それは不毛の荒野にもなるな・・・

「でも、畑には出来ないわね。」

とファイが残念そうに言う。

土地の価値は作物が出来るかどうかで判断しているらしい。ヴァージル領内の産業は主に農業だから、そう言う発想になるのは仕方ないか。

「畑にする必要は無いわ。」

この石炭は貴重な燃料なのよ。

石炭を掘り出して、木の代わりに燃やせばいいの。

石炭が無くなった土地は、埋め戻して畑にすれば良いわ。」

と健介。

蒸気機関が無くても、石炭と言う燃料は重宝するはずだ。

ここなら露天掘りで簡単に石炭を掘り出せるのだから、採掘自体に大した金もかからない。

木を伐採するのは大変だし、その後も木材をバラバラに切り分けて運ばなければならぬ。

チェーンソーが有る訳無いので、かなりの重労働であり、時間と金がかかるのだ。

石炭を使えば木を伐採しなくても、ちょっと掘り起こすだけで大量に燃料が得られる。

これは非情に有利な商品と言える。

その事をフィに説明すると、感心しつつ納得してくれた。

調査を終えて、フィと共に屋敷に帰った。

ヘインツに調査結果を報告し、石炭の使い道を説明する。

その際、袋に入れて持ち帰った石炭を、暖炉に入れて燃やして見せる。

「例えば、隣の領は鉄が取れてたはずですが。」

と健介。

「ああ、今でも取れている。

我が領でもその鉄を買っているからな。」



とヘインツ。

「お父様。

鉄を精練するには、大量の燃料が必要なんです。」

と健介が念を押すように言う。

「・・・それはつまり、石炭を隣の領に買わせると言う事か？」

とヘインツ。

ヘインツは商人の才覚は余り無さそうだ。

「はい。

きつと、隣の領は木を伐採して森や山を裸にしているでしょう。

鉄を売らないと財政が危くなるけど、鉄を作るために燃料として木を切る必要がある。

さらに木を切って運ぶ為に人足の金も掛かります。

もしかしたら、木材を他の領から買っているかもしれない。

しかし、我が領から石炭を購入させた方が安上がりで、森や山もこれ以上裸にされなくなります。

双方にとって有益な取引になるでしょう。

もちろん、我が領内でも薪代わりに石炭を使えば、木を切る必要も少なくなります。

我が領内の森林伐採の状況はどうなんですか？

お父様。」

と健介。

「う、うむ、確かに、町の周囲の森は少しずつだが木が減ってきているな。」

とヘインツが考え込むように言う。

「木が減れば森の恵みも減ります。

森の恵みには水も含まれると言います。

水が減れば畑も維持できないでしょう。

ですから、燃料を石炭に替えていく必要があります。」

と健介。

「・・・シリア、賢くなったな。」

とヘインツが嬉しそうな顔をしている。

「え、ええ、学校で色々教わりましたから。」

と健介は誤魔化した。

(こっちの世界の知識にそぐわなかったかも知れん。)

フィは健介の言った事にヘインツ同様に驚いていたが、顔には出さなかった。

シリアの身体に入っている精神と魂の人物は、いつもながら博識だ。

それに、冷静で頼りになる。

既に自分よりは大人の人物だとは気付いているが、一体どんな人物なのかまるで見当がつかなかった。

4年一緒にいたが、貴族と言う訳では無さそうだった。

学者でも無いように見えたが、学者は大抵貴族だから、自信は無い。

平民では決して無いとは思うが、時々見せる生の言動は平民としか言い様がない。

しかし、平民がこれほど博識で、冷静な者が居るだろうか？  
身近に居て、興味深くも謎の人物である。

ヘインツは娘たちの助言に従って、石炭の露出している荒地を炭鉱として開発する事に決めた。  
畑を開拓する予定だった人を、炭鉱堀へと替える。

町の住人に石炭の使用を推奨し、薪よりも安価に石炭を提供する事にした。

森林の伐採を最小限に抑えるように規制した。

石炭の販売によって被害を被る薪の販売業者に石炭を売るようにさせる事で円満に解決する。

どの道、石炭の販売ルートを確保しなければならぬのだから渡りに船だ。

今まで伐採した場所に、苗木を植える事もさせる予定である。

このような事をフィも協力するようにさせて、健介はヘインツと石炭事業の展開に協力した。

石炭の採掘が始まって販売の準備が整うと、周辺の領へ売り込みを始めた。

直接領主へ売り込むのと同時に、主に町にいる商人に協力を仰いで薪に代わる安い燃料として販売網を広げさせる。

そして、上級士官学校入学の日が近付いてきた。

「お父様。」

「私達はそろそろ出発しなければなりません。」

と健介。

「ああ、お前達の助言に従って、事業を進めるから心配するな。」

とヘインツ。

健介はファイにも助言の内容を話して、ファイからも助言させるようにしていた。

身体を入れ替えた際に、その方が色々都合がいい。

「ええ、後はお父様にお任せしますわ。」

と健介。

採掘作業は順調だ。

健介は地質学者では無いから良く判らないが、荒地の広さと石炭の地層の厚さ、これからの需要を考慮して計算した結果、少なくとも見積もっても20年は持ちそうだ。

単純計算だから自信は無い。

一応、石炭以外の産業も推し進めるようにヘインツへ言っている。

石炭が無くなったら、はいそれまででは、後世に怠慢の誹りを受ける事になる。

ありがちな話だから、それは避けて欲しいものだ。

翌日、両親と別れファイと合流して、予め用意して置いた業者の馬車に乗って、士官学校の近くの町へと向かった。

## 第14話 クリンの婚姻騒動

クリンは自分の家の屋敷へ帰る途中、何度も騒ぎに巻き込まれた。原因はドラゴンのランである。

一見すると美青年のランであるが、瞳が銀色である為、人間でない事が直にばれてしまう。

町に宿を取れば、宿の客や主人が騒ぎ出し、町中を歩けば通りすがりの人々が騒ぎ出す。

魔術学校の近くの町に行った時のような変装をさせておくのだったと、後悔していた。

途中で気付いたのだが時既に遅し、帽子も伊達眼鏡もリア達が持つて行ったし、途中の町では買い物できる状態ではなかった。

その都度、わたたと説明してまわるクリンは、屋敷にたどり着いてもまた騒がれて心底疲れていた。

「な、なんだそれは！

クリン？」

とクリンの父トモセーヤ男爵アルマンがランを見て驚く。

クリンはまたかと、うな垂れてた。

「お父様。

後で説明しますから、落ち着いて下さい。」

とクリンは疲れたように言って、ランを連れて屋敷に入って自室へと向かった。

アルマンは何か言おうとしたが、クリンの背中を寂しそうに見送った。

クリンは自室で一休みした。

ランはクリンの部屋を興味深げに見ている。

「あなたの部屋も用意しないといけませんわね。」

とクリン。

「私はどこでも構わん。

ベッドは不要だ。」

とラン。

ドラゴンのランには木の床でも気持ち良いのだ。

「でも、一人になりたいでしょ？」

私も久しぶりに1人で眠りたいわ。」

とクリンは言って、部屋を出た。

メイドを見つけて部屋を用意するように頼もうとするが、ランを見て怯えていた。

初めて銀色の瞳で見詰められたら、確かに怖いだろう。

「心配しないで、この子はラン。」

私のドラゴンだから、害はないの。

ランの部屋を用意してくれる？」

また直に家を出るから、客室で良いわ。」

とクリン。

「は、はい、承知しました。」

とメイドはランを避けるようにして走り去った。

「人間とは面白いな。」

とラン。

人間が小動物を見ているような目で、逃げ去るメイドを見ている。

「面白がってないで、怖がらせないように努力なさい。」

とクリンはちょっと呆れている。

夕食の席で、クリンは父アルマンにランを紹介した。

事前に手紙でドラゴンが下僕になったことを知らせてはいたが、屋敷に来るとは思っていなかったらしい。

「ランの分の食事もお願いね。」

とクリンがメイドに指示する。

食卓のテーブルにはランの食事が無かった。

クリンにとっては既に家族も同然のランだったが、父アルマンにとってはただの魔物である。

アルマンは苦い顔をしていた。

「怖がらないで、お父様。」

ランは無闇に人を襲ったりしません。

化け物と言うなら、ヴァージル領を襲った盗賊団の方が余程化け

物ですわ。」

とクリン。

「お前がそう言うのなら、そうなんだろうが。」

とアルマンはいまいち納得していない様子。

ランの食事も運ばれてきた。

クリンの隣の席で、一緒に食べ始める。

アルマンとクリンの食べ方を見て、ぎこちないがナイフとフォークを使って食べている。

さすがドラゴン、学習能力がある。

ドラゴンはダメージさえなければ、食事なしでも生きられるそう  
だ。

一体どんな身体の構造をしているのかと、リアはとても興味深そう  
にしていた。

だが、さすがに試してみようとは言い出さなかった。

クリンは父アルマンに魔術学校でのことを話し、ダンジョンでの  
ランとの遭遇と戦いについて話した。

その他、色々話して一息ついた。

「ところでお父様。

こちらでは何か変わった事がありましたか？」

とクリン。

ヴァージル領で盗賊団が現れた事件以降、トモセーヤ領も心配にな



った。

トモセーヤ領はヴァージル領よりも小さく、当然兵も少ない。今まで特に連絡は無かったが、聞かすにはいられない。

「ふむ・・・あるにはあるが、お前には話さないで置こう。」

とアルマン。

嘘が付けない性格なのか、思わせぶりな事を言ってしまう。

「どうしてですか？」

とクリンは不満そうな顔をする。

「クリンは知らない方が良いことだ。」

とアルマンは困ったような笑みを浮かべている。

クリンはアルマンをじっと見て、表情を探った。

嘘と言う訳では無さそうだが、その物言いから自分に関係がありそうだとクリンは感じた。

「お父様、私はもう子供じゃありません。

嘘はつかないで下さい。」

とクリンは強い口調で言う。

「クリン、私は嘘なんて・・・」

「お父様！」

アルマンの言葉をクリンが遮る。

アルマンは驚いたような顔でクリンを見る。  
これまでクリンは父に対してこの様に強く出た事は無かった。

「私はこれでもトモセーヤの次期党首です。

トモセーヤ領に何かあれば、それは私にも関係のある事ですわ。」

とクリン。

アルマンはクリンを見てため息をついた。

「クリン、お前は強くなつたな。」

とアルマンはクリンとランを見る。

「お父様、はぐらかさないで話してください。」

とクリンは催促する。

「判ったから、そうせつつくな。

・・・実はな・・・」

とアルマンが事情を説明し始めた。

その内容はこうである。

隣の領のロンバル伯爵からクリンへ婚姻の申し出があつたのだ。

その申し出をアルマンが断つた。クリンが上級士官学校へ行くという理由で。

伯爵側は婚約だけでもと申し出をしてきたが、アルマンはこれも断つていた。

クリンの将来の選択肢を狭める事はしなくなつたと言うのが理由だ。

上級士官学校といえば、エリート達の集まる場所と有名だ。実力のある結婚相手を見つける事も出来よう。

卒業してからも、上級指揮官として軍に身を置く事になり、同じように良い男にめぐり合う機会が多くなる。

ロンバル伯爵の子息との婚約をしまえば、その機会の尽くを失うのだ。

それは父アルマンとして娘を思うと受け容れられない事だった。

その後、嫌がらせが始まったと言う。

「その嫌がらせって、どんな？」

とクリンは複雑な顔をしている。

クリンにとっても、やはり結婚とは特別なことである。

「うむ、それがな。」

ロンバル領の境界に近い村々が盗賊に襲われるのだよ。」

とアルマン。

「まさか・・・それはロンバル伯爵がやらせていると？」

とクリン。

「私の兵士の報告だと、盗賊では無いと言っていた。」

ロンバルの兵士が、盗賊の真似事をしているのだろう。」

とアルマンが苦りきった顔だ。

隣のロンバル伯爵は名門とは言えないが、アルマン男爵よりも広い領土を持ち勢力も強い。まともに反抗して戦争になれば、大きな被害を被るのはトモセーヤ側である。

「なんて汚い真似を！」

とクリンが拳を握る。

「主よ、落ち着きなさい。

シーリアにも言われたであろう？」

とランがクリンを注意する。

「ええ、そうだったわ。

ありがとう。」

とクリンは深呼吸した。

戦いにおいては常に冷静である事。

リアはそう言っ、彼女はいつも冷静で合理的に見えた。

クリンは思い出す。

リアは戦う前に可能な限りの準備を怠るなどといった。その準備には装備などだけでなく、相手を知ること重要だと言っていた。

相手に合わせて、戦い方を変える事。

魔術学校での授業で教官が言っていたことよりも、リアの言う事を思い出す。

同じ事を言っているのに、リアの言う事の方が判りやすかった。

「お父様、ロンバルの戦力は調査していますか？」

とクリンは立ち直り、冷静になっていた。

「ああ、一応はしてあるが。」

とアルマン。

アルマンの少ない情報網で調べた結果、ロンバルの兵力はトモセーヤの約3倍。

クリンの知りたかった魔術戦士の数と質については、判らなかつた。魔術戦士の数と質次第で、戦局は大きく変わる。

ランがいれば大抵の事は何とかなるが、場合によってはリアとファイに助けを求めるか、ロンバルへ嫁ぐしかない。

「情報が足りませんわね。」

お父様、誰かをロンバルへ行かせて魔術戦士のことを調べさせてください。

「噂程度の事でも構いませんから。」

とクリン。

「ああ、判った。」

とアルマンは素直に従う。

成長したのだなど、内心で感心していた。

「明日、私も村の警備に参加しに出発します。」

「情報は村の方に届けてください。」

とクリン。

「クリン、大丈夫なのか？」

とアルマン。

さすがに現場へ向かわせるのは心配だ。

「ええ、お父様、任せてください。」

とクリンが微笑んだ。

そこに居るのはアルマンの知る甘えん坊の小さな少女ではなく、凛々しい騎士だった。

翌日、クリンは最も最近被害を受けた村へと馬を走らせて向かった。

ランは自力で走らせている。

2日掛けてたどり着くと、村の家の半数は焼け焦げていた。

「酷いわね。」

とクリンは呟く。

村に駐留している兵士の話では、被害は徐々に大きくなっているとの事だった。

最初は1〜2軒の家を燃やされる程度だったのが、今は人的被害も出ている。

エスカレートして本当の盗賊に成り果てようとしているらしい。

それがロンバル伯爵の指示なのかは判らないが、クリンは同じ貴族

として許せなかった。

村は兵士に任せて森へ向かった。  
ロンバルの兵士達が潜伏しているとしたら、クリンの向かっている  
森しかない。  
手馴れた探査魔法を使って警戒しながら相手を探す。

「居ないわね。」

別の場所に移ったのかしら。」

とクリン。

彼方此方に踏み荒らされた後はあるが気配は無い。

「微かに男達の臭いが残っている。  
移動したのはここ1日だろう。」

とラン。

ドラゴンは鼻が利くらしい。

「そう、どっちに行つたか判る？」

とクリンは期待の眼差しを向ける。

「いや、そこまでは判らない。」

とランが首を振る。

踏み荒らされた後だらけで、足跡を辿るのは困難だ。  
クリンは仕方なく、感を頼りに近く別の村の方へと進んだ。

今回、クリンはロンバルの兵士を闇討ちして殲滅することにして  
いた。

ロンバルの魔術戦士の情報が届いたら、その情報に応じて戦い方を  
変えるつもりだ。

どう変えるかは、その時の情報次第。

今のうちは自分の実力を信じて、盗賊に扮している兵士達や魔術  
戦士を殲滅する。

闇討ちはトモセーヤ領内で行うし、クリンの存在を知らせる事も無  
いから、こちららも盗賊のせいだと惚ける事が出来る。

無論、これはクリンが負けれないと言う前提での話である。

クリンが負けて捕縛されたら元も子もないのだが、そこはランの存  
在が大きくものを言う。

ロンバルの兵士達は、まさかドラゴンが居るとは思っていないだろ  
う。

ランが居れば、戦いに勝てなくても逃げる事は容易である。

夜もふけてきた頃、盗賊らしい集団を見つけた。クリンの感が当  
ったようだ。

同時に向うもクリン達を見つけたらしい。

数人がクリンとランのほうへ向かってくる。

「ラン、私が良いと言うまで、殺しちゃ駄目よ。」

とクリンが戦闘準備をする。

ランは無言で頷いた。

やって来た者達は聞いた通り、揃いの鎧を来た兵士達であった。



トモセーヤの兵士ではない。  
なら、答えは出ている。

クリンはやって来た5人の兵士を殆ど瞬時に殺していた。  
魔術の使えない一般兵の彼らは、いつ致命傷を負ったのか気付かないうちに死んで行った。

それを察知したのか、探査魔法で捕捉していた集団が向かってくるのが判る。

「ラン、この鎧の兵士は殺してもいいわよ。」

とクリンは地面に手を付けてゴーレムを作った。

敵兵の集団はクリン達を包囲するようにして襲ってきた。  
クリンは大体の判断で15人前後と判断した。

しかし、集団内に明らかに魔術戦士がいる。  
相手も探査魔法を使っていたのは明白であった。

クリンはゴーレムと連携して兵士達を次々に倒していく。  
クリンの正確で速い剣の突きとゴーレムの堅い腕が、敵兵の頭部を貫き、顔面や喉を潰していく。

ランも淡々と兵士達を素手で倒していた。  
その手刀はまるで金属で出来た槍のように、敵兵の首を裂き、鎧ごと胸を貫いた。

敵兵の剣はクリンとランの身体にも届いているが、傷を与えるには至っていない。

彼ら一般兵の剣では、身体強化されて魔力防壁に包まれた身体を傷付ける事は極めて困難だ。

クリンは1人の敵兵が逃げ出すのを察知した。移動速度からして、魔術戦士に違いなかった。

「ラン！」

「ここはお願い！」

とクリンが叫び、その魔術戦士を追いかけた。

途中に居た兵士達をなぎ払って、包囲を抜けたところでゴーレムを捨てた。

ゴーレムを操作しているとそれだけで魔力が削られるし、クリンの全速力に付いて来れない。

全力で走ることしばし、敵の魔術戦士に追いついた。

クリンは追いついてそのまま攻撃に転じる。

敵の男は息を切らしていたが、クリンの初撃を何とか剣で受けた。が、男は力負けして押し倒された。

勢い余って地面をゴロゴロと転がり、木にぶつかって起き上がろうとした。

クリンは男に反撃の機会を与えず、男の胸に剣を突き立てた。

男を生かして捕らえるなど考えていなかった。

クリンが今まで経験してきた戦闘経験が、それを拒んでいる。ダンジョンで女子生徒をいたぶっていた魔族を殺した戦い。

ヴァージル領で大規模な盗賊団を殲滅した戦い。

どちらも、相手が油断している隙を突いて仕留めていた。

どんなに強くても、油断すれば簡単に殺される。

そんな強迫観念とも言えるものがクリンの中にあって、とても生かして捕らえるなどと言う発想は出来ないのだ。

心にいつもの余裕が無い。

そばにリアやファイが居れば話は違うのだが・・・

男の死を確認して、所持品を調べた。

唯一の魔術戦士なら隊長だろう。

ロンバル軍の命令書があり、内容は村の襲撃を指示していた。

これは明白な証拠である。

クリンはそれを大切に懐へ入れ、ランの所へと戻った。

既にラン以外に動いている者はいないのは探査魔法で判っていた。

その場合は、既にうめき声すら聞こえない。

クリンとランと敵兵の死体だけだった。

「村に戻るわ。」

とクリンは少し青い顔でランに言って、軽く走り出す。

リアとファイが居ない今、大勢の人の死体がある現場に長居したくなかった。

それから10日ほどは村々を移動しながら、同じ事を繰り返した。

例のロンバル軍の命令書は、兵士数人に託して父の元へ届けさせてあった。

あの様な明白な証拠があれば、王都へ出向いて王の裁定を得る事が出来る。

村を襲撃していた部隊は3つ殲滅していた。その中には魔術戦士は居なかったし、隊長らしき人物は命令書などを持っていなかった。

あの魔術戦士の隊長は怠慢から証拠隠滅の手間を惜しんだのだろう。

自分は殺されなくても思ったのかもしれない。クリン達には幸いしたが、ロンバル伯爵には痛恨事に違いない。

そろそろロンバル軍の方も、クリンのやっている事に気付いている頃だろう。

昼間、村で休んでいるとトモセーヤ領の兵士がやって来た。

「クリン様、トモセーヤ男爵閣下からのお手紙です。」

「ありがとうございます。ご苦勞様。」

クリンは手紙を受取って読んだ。

内容は父としての普通の手紙と、ロンバルの魔術戦士の調査結果。そして、ロンバル軍の命令書についてだった。

ロンバルの魔術戦士は判明しただけで4名。

内1人はクリンが既に始末していた。

以外に少ない人数だ。

判明していない魔術戦士も居るかもしれないが、クリン以上の魔術戦士は居ないだろう。

それだけの魔術戦士なら、名はともかく存在を知られている。

(これなら一気に攻められない限り、私とランで対処できるわ。  
まあ、ロンバル側は密かにやるうとしているから、それは無いで  
しょうけど。)

ロンバルとの戦力差を考えて、一安心する。

まだ傭兵を雇うという事も考えられるが、クリンはそこまでは考  
えが至っていない。

ロンバル側も傭兵を雇えば、例え傭兵がロンバル伯爵に雇われたと  
証言しても、知らぬ存ぜぬで通す事が出来たのだ。

それだけの金が無かったのか、傭兵を使う頭が無かったのか？  
それを追求する者には居ない。

ロンバル軍の命令書は王都へと運ばれ、この件の王の仲裁を待っ  
ていると言う事だった。

処分の内容は、

- ・この様な暴挙に出たロンバル伯爵は爵位を剥奪。
- ・トモセーヤ男爵領の損害を埋める為、ロンバル伯爵の領地の一部  
がトモセーヤ男爵家の領地として割り振られる。
- ・婚姻の話は当然無かった事になる。

と言う感じで、貴族間の調整が進んでいるらしい。

王の裁定と言っても、貴族間の根回しが必要と言う事だ。

それでも、もう少し頑張ればロンバル軍は撤退すると言う事だ。

それから5日、ロンバル軍は見かけなかった。

村は平穏で復旧が進んでいる。

ロンバルの方は王都での審議にそれどころではないのかもしれない。  
い。

そして、また父から手紙が来た。

内容は、王の裁定が下ったから戻って来るようにと言うものだ。  
クリンは早速屋敷に戻った。

クリンが風呂に入って一休みした後、アルマンと話しをした。

「ご苦労だったね。クリン。」

この前送った手紙の内容で、裁定が下ったよ。」

とアルマンが上機嫌で言う。

「そうですか。」

ではもう大丈夫ですね。」

とクリンは安心して微笑んだ。

「ああ、クリンのお陰だよ。」

とアルマンも微笑んだ。

「それじゃ、お父様。」

私は明日、上級士官学校へ向かいます。」

とクリン。

忘れていたが、そろそろ出発の時期だった。

「そうか、気を付けるんだぞ。

無理はするな?」

とアルマンは心配そうだ。

クリンもエリートとして選ばれたとは言え、やはり親としては心配なのだ。

「もう、お父様。

子供じゃないんですから。」

とクリンは笑った。

## 第15話 エンドーラ

王都に近い湖の中央付近にある人工島。

その島は湖の地下に続くダンジョンへの入り口でもあった。人が作った島ではない。

何者が作ったのか判らないと言う点では、ダンジョンと同じである。この島のダンジョンは、昔に魔族の侵攻があったダンジョンである。

人工島には幾つかの建物があり、それが上級士官学校であった。

人工島は王国軍と上級士官学校の管轄下に置かれている。

学校があるので判らないが、この島全体がダンジョンに対する要塞の様になっているのだ。

魔族の侵攻対策であるが、ここ数百年使われたことは無く、老朽化している。

湖の辺に幾つかの町があり、一番島に近い町にシーリア、フィレイ、クリンが集まった。

島にはその町から船で半日かかる。

「久しぶりね。クリン。」

と健介。

「久しぶり、クリン。」

とフィ。



「お久しぶり。リア、ファイ。」

とクリンが嬉しげに微笑む。

「何だか上機嫌ね？」

とファイ。

「だって、久しぶりに会えたんだもん。」

とクリン。

「久しぶりとは言ったけど、まだ1ヶ月経ってないのよ？」

と健介が呆れたように言う。

「リアは嬉しくないの？」

とクリンが不満げに見つめてくる。

「う、嬉しいわよ？」

ねえ、ファイ？」

と健介は思わず台詞を噛みつつ、笑う。

健介も少女生活が長い為、普段は忘れていたがクリンは美少女である。

油断していたところに、不満そうな中に寂しさが滲んだような表情で見詰められると、さすがに健介もグツとしてしまう。

「もちろん嬉しいわ。」

とフィは何気なく笑って応えた。  
クリンも機嫌を直してルンルン気分に戻った。  
女って奴は・・・

3人は期限3日前に会ったので、1日宿に泊まる事にした。  
そこで、この1ヶ月間の事を話し合った。  
健介とフィはクリンが積極的に討伐に参加したことに驚いた。  
いつもは消極的で自信なさげなクリンなのに。

「少しは成長したのね。」

と健介。

「そのようね。」

とフィ。

「何？」

何が成長したの？」

とクリンは首をかしげる。

たまに天然が入るクリン、自分が成長したと言われた事に気付かなかっただらしい。

「色々よ。」

と健介は笑う。

「何よ、また秘密なの？」

とクリン。

「違うのよ、クリン。」

「あなたが成長したって言ったのよ。」

とフィ。

「もう、ばらしたら駄目じゃない、フィ。」

と健介。

「クリンで遊んじゃ駄目よ。」

「可哀相でしょ。」

とフィ。

「もう、また私をからかったの？」

とクリンが膨れた。

「そう言うクリンが可愛いから、苛めなくなっちゃっのよ。」

「悪気は無いのよ？」

と健介がクリンの頭を撫でる。

クリンは少し顔を赤くして顔を背けた。

翌日、船に乗って人工島へ向かった。

同じ船に乗っていた人の大半は、3人と同じ目的だろう。大半が若い人だった。そして、ランを怪しげに見ていた。

人工島に着くと、警備の兵士が身分証を確認していた。

他の人が入学許可証を見せて入っていくのを見て、3人も入学許可証を見せて入った。

警備の兵士はランを見て目を丸くしたが、何も言ってこなかった。ドラゴンの人型が来るのが知らされていたのだろう。そうでなければ大騒ぎになる。

係員らしき人が「入学者受付」と地図の書かれた看板を持って立っていた。

3人は地図を見て指定の建物へと歩いて行く。歩いていると、恐らく先輩であろう生徒達が訓練をしているのが見えた。

目的の建物は島の周囲にある建物の1つで、講堂のようだった。そこに入学者が集まっているらしい。

建物内の席は名前の札が置かれており、3人の名前の札もあった。ご丁寧に「ドラゴン」と書かれた札もある。

3人と1匹は席に座って待った。

そう言えば、集合時間とかの案内が無かったから、いつ係りの人が来るのか判らない。

他の人も待っているし、3人で話しながらしばらく待つことにした。

1時間くらいして、講堂に軍服を着た人が入ってきた。

「私はこの上級士官学校の教官をしているグオールだ。」

素質ある者たちよ、ようこそ上級士官学校へ。

まず始めに言っておくが、この学校は非常に厳しい。

素質が開花しない、或は、諦めた者は即座に退学になると思ってくれ。

だが、この学校を卒業した暁には、王国軍での重要な地位が約束される。」

とグオール教官が説明を始めた。

この上級士官学校では学年と言う概念は無い。

数ある科目の中で、基本科目2科目+選択科目2科目の4科目の試験に合格すれば卒業できる。

その試験はそれなりに高度なものとなる。

また、4科目の試験に合格したからといって、必ずしも卒業しなくても良い。

ただし、最大6年で強制的に退学、或は、卒業させられる。

退学者は通常の兵役を、卒業者は特務部隊の高級士官として兵役に就くことになる。

また、基本科目ではチームで訓練を行う為、3人以上6人以下のチームを組むこととされた。

基本科目は戦術戦闘と魔術。

選択科目は用兵、医術、薬品研究、兵器工作、魔術研究

一通りの説明を終えたグオール教官は、講堂の生徒を先導して宿舎へと案内した。

宿舎は全部が4人部屋で、健介達3人と1匹は1つの部屋に纏められた。

「良かったね、一緒の部屋で。」

とクリン。

「そうだね。

ちよつと安心した。」

と健介。

部屋には予定表と地図があり、今日の予定は無いようだ。予定表では、2日後に先ほどの講堂に集まる事になっていた。

「2日間はのんびり出来そうね。

後で散歩がてら、見て回らない？」

とフイ。

「そうね。

どこに何があるのか知っておいた方がいいわ。」

と健介。

荷物の整理が終わった後、3人と1匹は宿舎を出て学校内を見て回った。

講堂は先程のも含めて4つあり、土囊で囲まれた50メートル四方程度の訓練場が4面あった。

他に図書館のような建物と、研究施設のような建物が3つあった。

さらに、町工場と鍛冶屋を足したような場所。

そして、人工島の中心にダンジョンの入り口を覆うように、ずんぐりした大きい建物があった。

あれが要塞なのだろう。

長い年月、風雨に晒されて表面はボロボロだ。

宿舎に戻る途中、食堂で食事をした。  
エリート空腹を満たす食堂だけあって、メニューも豊富で美味かった。

宿舎へ歩いていると、午前中と同じ光景が同じ講堂で繰り広げられていた。  
やはり定期的にやっているらしい。  
部屋に戻ると、選択科目について話し合った。

「私は用兵と魔術研究にするわ。」  
と健介。

「私は医術と魔術研究ね。」  
とフイ。  
魔術研究だけは外せない。

「えっと、私は医術と薬品研究かな。」  
とクリン。

次の日も、数人が島へやって来たようだった。

そして、予定表初日、宿舎の生徒の中で新入生が講堂に集まった。  
そこで選択科目を報告し、その科目の教科書などを貰って解散した。

さらに3日後、授業日程が発表され、同時に授業が行われる講堂や訓練場なども発表された。次の日から、授業が開始された。

4科目だけとは言え、その内容は魔術学校に比べても濃いものだった。

どうやら授業内容は魔術学校卒業組みと、新規組みで分かれている様である。

才能ありと認められた者を、この学校の関係者が見つけて引っぱり込んだのだろう。

そう言う生徒が数人居て、今から魔力の操作を学んでいる。彼らにとっては、この学校は魔術学校よりも高いハードルになるだろう。

3人は他の者達に比べて、比較的順調に訓練をこなしていた。自主訓練の成果である。

教官のしごきにクリンも耐えられた。

「さあ、クリン。

自主訓練よ。」

と健介。

「ええ、もう勘弁して〜」

とクリンが泣言を言う。

教官の扱きに耐えられはしたが、限界のようだ。

「だらしないわね。」



とファイ。

「だから、あなた達2人が化け物なのよ」

とクリンが毎度同じ事を言う。

健介とファイは笑ってクリンの頭をわしゃわしゃと撫でる。

健介とファイが模擬戦を始め、それをクリンが見守っていた。

そんな風に1ヶ月ほどを過した。

そして、予想していた事だが、予想を超える事件が起きた。

それは、こんな言葉から始まった。

「あなた、あの2人の腰巾着なんでしょ？」

ドラゴンを下僕に出来てラッキーだったわね。」

と金髪縦ロールの少女がクリンに嫌味を言っていた。

クリンは悔しそうに俯いている。

それは授業が終わった講堂前、クリンが先に食堂へ席を取りに行こうとして捕まったようだ。

クリンの両隣には金髪縦ロール少女の仲間が困っている。

クリンをおまけとか、腰巾着だと思われる事は承知の上だったが、まさかここまで明らかな行動に出るとは予想外だった。

このエンドーラと言う少女、色々な意味で只者では無い。

「何の話かしら？」

と健介は金髪縦ロール少女を睨みながら言う。  
話し声が少し聞こえていたから、大体判っているが。  
ファイも健介の隣に居る。

(確かこの子も結構な実力者だったはず。)

健介は他人の成績など気にしなかったが、ファイと2人以外での実力者と言われているのは目立つので少し覚えていた。

「あなた方も大変ね。」

出来の悪い仲間が居ると、足を引つ張られるでしょう?。」

と金髪縦ロール少女。

「いいえ、足を引つ張られた事は無いわ。」

それより、あなた名前は?。」

とファイ。

ファイも彼女の事は気にして無かったらしい。

「あなた達、私を知りませんか?。」

エンドーラですわよ。エンドーラ。」

とエンドーラは名前を強調した。

名前が知られていなかったのがショックだったようだ。

「エンドーラさんとやら、誤解している様だけど、クリンはあなたと同じ実力者ですよ。」

私とファイが居るから自立たないだけ。」

そもそも、ただの腰巾着じゃドラゴンとは戦えないわよ？  
あなた、ドラゴンと戦ったことある？」

と健介。

「な、無いわ。」

とエンドーラ。

「じゃあ、一度戦ってみる？」

エンドーラのチームと私達のドラゴン、ランと戦わせて上げるわ  
「よっ」

とフイ。

「上等ですわ。」

その挑戦、受けて立ちますわ。」

とエンドーラ。

「じゃあ、1日時間をあげるわ。」

私達もドラゴンと戦った時には時間を掛けて戦略を練ったから。  
明日の昼休み、第1訓練場で良いわね？」

と健介。

「ええ、いいわ。」

ドラゴンを殺してしまったらご免なさいね。」

とエンドーラ。

「そちらこそ、死なないようにしてね。」

死ななければ、私達3人が治癒魔法で治してあげるから。

ドラゴンは巨体だから手加減出来ないのよ。」

と健介はにっこり笑う。

エンドーラの周りに居た仲間が健介の言葉に顔を引きつらせる。

エンドーラ自身は、さすがに不敵な笑みを浮かべていた。

それでエンドーラ達と別れて、食堂へ行った。

「主よ。私は手加減しなくて良いのか？」

とランが訊いてくる。

「手加減はいらないわ。」

私達と戦った時と同じくらい本気でやりなさい。

ただし、私達が止めと言ったら、攻撃を止めて距離を取りなさい。」

と健介。

「それじゃ危ないんじゃないかな？」

とクリンは心配そうだ。

「それが見極められない人は、どの道生きて行けない所よ。」

と健介。

死者を出すのは本意ではないが、手加減させてはドラゴンと戦って生き残った者達を愚弄する者に、事実を悟らせる事は出来まい。彼ら自身にも、その悔りが死を招く可能性がある事を知ってもらう必要があるだろう。

健介はリアとクリンに、明日は負傷者治療の為に待機して置くように打ち合わせておいた。

翌日の昼。

どこから漏れたのか噂が広がり、第一訓練場は戦いを見に来た生徒達で混雑していた。

「なんだかねえ」

と健介は呆れたように呟く。

「ひょっとして、あのエンドーラが噂を流したんじゃない？」

とフィ。

「え、そうなのかな？」

とクリン。

「まあ、考えられなくも無いけど。

ラン、調子はどう？」

と健介はどうでもいいので無視した。

皆が見てるのなら、それはそれで都合が良い。

ドラゴンは甘くないことを知れば、今日以降、クリンが侮られる事は無いだろう。

「問題ない。」

とラン。

「それじゃ、行きますか。  
どいて！ どいて！」

と健介が歩き出し、集まってきた生徒達を押し退ける。

健介を先頭に、第一訓練場の中へ入る。  
既にエンドーラ達が待っていた。

「ようやくお出まし？  
逃げたかと思っただわ。」

とエンドーラは自信満々だ。  
何処からその自信が来るのか聞いてみたい健介であった。

健介はエンドーラを無視してランを残し、訓練場の外へと避難する。

ランはエンドーラから離れてから、徐にドラゴンの姿へと戻った。  
観衆がどよめく。

エンドーラ達もうるたえていた。  
ドラゴンを侮っていたのが見え見えである。

全長15メートルほどの巨体。  
自分達の身長より長く太い豪腕と、その先にある鋭く太い爪。

しなやかで太い尻尾には鋭い棘が幾つもあり、その一撃の恐ろしさを窺わせる。

最強の魔物だけあって、研究されているから魔物の書物には絵も載っているし、その特徴もかなり詳細に記述されている。しかし、書物で見ると現物を見るのとは、雲泥の差がある。

「始め！」

と健介が叫ぶ。

戦闘が開始された。

ランはエンドーラ達へと突進し、豪腕の爪を振るう。まずは挨拶代わりと言うところだろう。本気では無さそうだ。

だが、エンドーラの仲間の1人が爪に引っかかり、吹っ飛んだ。訓練場の観客の生徒から悲鳴が出る。負傷を負った彼は、もう瀕死だった。鎧は大きく歪んでおり、胸が裂けて血を吐いていた。

健介は訓練場に入ってその彼を担いだ。そばに魔術負荷された札が落ちている。

（これを使おうとしてよそ見たのか？）

健介は彼の迂闊さに苦笑しつつ、訓練場を出て鎧を脱がせた。そして、クリンに治癒を任せた。

健介は戦いを止めさせるタイミングを見ていなければならぬ。

その間にも戦いは続いていた。  
エンドーラは大口叩いただけあって強いが、かなり苦しそうだ。  
もう1人の仲間も必死に逃げ回っていて、既に限界だった。  
ランの連続攻撃をかわし切れず、魔法の直撃を受けた。  
爆風に吹き飛ばされて訓練場の外へと落ちていった。

「ファイ、お願い。」

と健介が言うと、ファイは頷いて落ちた場所へ走って行く。

ランと1対1の戦いになって、完全に劣勢に追い込まれたエンドーラはランに遊ばれていた。

健介は首を振ってため息をつく。勝負は付いた。  
訓練場に入って叫ぶ。

「止め！」

と健介が叫ぶと、ランは攻撃を止めて素早くエンドーラから離れ、健介の側に来た。

エンドーラは肩で息をして、立っているのがやっとの有様だった。  
振り返ると、ランはいつの間にか人間に変身していた。

「どうだった？」

と健介はランにたずねる。

「駄目だね。」

主達3人に比べれば、チームの連携もなっていないし、あの女以外は弱すぎる。」



とランは酷評した。

ランは掠り傷も負っていない。

健介は黙って頷いたが、少し引つかかった。

エンドーラ以外の2人は弱すぎる。

(この学校はエリート揃いではなかったのか?)

そう思いはしたものの、貴族社会のこの国ではそう言う突っ込みは意味が無いと思直した。

怪我人の様子を見に行った。

最初の負傷者は大分回復してもう問題は無い。

ファイの方へと行くと、大火傷と打撲を負っている生徒は治癒魔法を掛け続ければ命に別状は無さそうだった。

「怪我はどうなの?」

と後ろからエンドーラが訊いてきた。

健介は振り返った。

「大丈夫よ。」

2人とも今日中には自力で歩けるようになるわ。」

と健介。

エンドーラは安心したようだ。

周りを見ると、見物人は大方解散していた。

「ドラゴンとの戦いはどうだった?」

と健介が感想を聞く。

「強いわね。」

とエンドーラはボソリと言う。  
大分ショックを受けているようだ。

「腰巾着程度の者がドラゴンとの戦いに一緒に参加できると、今でも思う？」

と健介。

エンドーラは黙って首を横に振った。

「判ってもらえて嬉しいわ。」

と健介。

交代で負傷者を治癒しながら、食事を取って昼休み中に様態を安定させた。

その後、彼らの部屋のベッドに寝かせる。

「それじゃ、後の治療は宜しくね。」

と健介はエンドーラに治療を任せた。

3人は午後の授業に出る為に宿舍を足早に出た。

エンドーラ達は午後からの授業には出られないだろう。

この騒動は教官達も見学していたらしいが、お咎めは無かった。  
生徒達の刺激になると言う事なのだろう。

## 第16話 新しいチームメイト

エンドーラチーム対ドラゴンの騒動から数日後。  
3人と1匹が食堂で食事していると、エンドーラ達が隣の席に座った。

「クリンさん。」

この前は、その、「ごめんなさいね。」

とエンドーラが明後日の方を見て言う。

顔が赤い。

クリンは自分を見てない人が謝っているの、ちょっと困っている。健介とフィはその妙な現場を見て、口を手で押えて笑いを堪えている。

折角、謝っているのに笑っては駄目だ。

「あ、いえ、その、判って貰えばいいです。」

とクリンは噛みつつ応える。

エンドーラはクリンの言葉を聞いてホツとしたようだ。

少しの間食事を続けていると。

「ねえ、シーリア。」

とエンドーラが呼んで来る。

「ん？ なに？」

と健介。

「あなた達はどうやってドラゴンと戦ったんですの？」

とエンドーラ。

「ん〜秘密。」

と健介は少し考えて応えた。

「どうしてですよ？」

教えてくれたって良いじゃないですか。」

とエンドーラは不満顔である。

「いや、だって、ランが嫌がってるし。」

と健介がランを指差す。

ランがウンウンと頷いている。

「ちょ、下僕なんかに気を使ってますの？」

とエンドーラが啞然としている。

「エンドーラ、あなたはまた何か勘違いしているようね。」

ランは確かに私達の下僕だけど、仲間となった以上、蔑む理由は無いでしょう？」

それにランはドラゴンなのよ。

我々人間よりも強力な種族なの。

そのドラゴンが理由はどうあれ仲間になったのなら、それなりの敬意を払うのが礼儀ではなくて？」

と健介。

こっちの世界の人達は、魔物は全て同じ扱いだから、ドラゴンだろうと知能の無い小物だろうと関係ないところがある。もう少し柔軟に考えてほしいものである。

「まあ、そうかもしれないけど。」

とエンドーラが口ごもる。

「どうしても知りたいなら、教えてあげても良いけど。」

ランが居ない所でね。

例えば、魔族が人間を殺す算段をしているのを聞いたら、あなただって嫌でしょう？」

と健介。

「そうね。」

確かにそうですね。

後で時間が出来たら教えてね。」

とエンドーラは素直に頷いた。

健介はエンドーラと少し居心地悪そうにしているエンドーラのチームメイトを見くらべる。

「話は変わるけど、エンドーラ。」

あなたのその仲間は、ひょっとして腰巾着？」

と健介。

向かい側でフィがお茶を噴出した。

「汚いわね、フィ。」

と健介がわざと平然と言う。

フィは咽て涙目で睨んできた。

健介は微笑みで返す。

「腰巾着って、失礼ではなくて？」

私が先に言った事ではありますけど。」

とエンドーラはあまり強く出れない。

「いや、ごめんね。」

ちよっとからかっただけ。

でも、その2人はあなたに比べて実力が劣りすぎると思うわ。

ランも同じ意見だし。」

と健介。

ランはまたしてもウンウンと頷いている。

「そ、それは、そうかもしれないんですけど。」

とエンドーラがまた口ごもる。

さつきから痛いところを突かれてばかりだ。

「誤解しないでね。」

別に責めてる訳じゃないの。

ただ、今のままだと実力に差がありすぎて危険よ？

先に2人があつという間にやられて、あなたはサポートも受けられずにやられる。

実際に昨日はそうだったし、これからもそうなる可能性があるわ。ドラゴンとの戦い方よりも、まずはそつちをどうにかした方が良いと思うわ。」

と健介。

「・・・確かに、シーリアの言う通りですわね。」

とエンドーラは呟くように言って、考えに沈んだ。

その後、エンドーラを見かけはしたが、特に接触しては来なかった。

運の良い事があった。

魔術研究の方で、転生魔法の魔道書を見る機会が出来そうだった。

魔術研究は主に2つの方法で研究する。

1つ目は既存の魔法の魔術構成を解読して、そこから新たな魔法を作り出すこと。

これには効率を良くした魔法なども含む。

2つ目は全くの新規に魔術構成を作り出し、新たな魔法を作ること。

健介とフィは1つ目の方法で、転生魔法の共同研究を申請していた。

この上級士官学校にも転生魔法の禁書が保管されている事が判明していた。

上手くすれば、シリアはもうすぐ元の身体に戻れるだろう。

そして恐らく、元の身体に戻ったシリアは、実力を1ランク上昇させるはずだ。

本来の肉体、精神、魂が揃うのだから。

健介は異世界の、しかも男の精神と魂では適合率は低くならざる得ないはずだから、それだけ実力が劣っていると考えられる。

申請した研究目的には、転生魔法から転移魔法を開発する事を謳っている。

つまり、テレポートをする為の魔法を作ろうというのだ。

調べた限りでは、テレポートが出来る魔法は無い。

軍としても、転移魔法が作れるなら研究しておきたいはずだ。

戦略的に大きなアドバンテージになる。

フィと健介の成績は中の上程度、186人中72位だ。さすがにトップを取る事は出来ない。上には上がいるものだ。

中の上という成績は他の理由もある。

この学校は学年と言うものが無いからだ。

つまり、成績は先輩である生徒達とも同列で比較される。

そう言う意味での、中の上である。

先輩の生徒に十数人、フィやリアのような天才が居るし、訓練期間の差もある。

リア達の年齢で1〜3年と言う訓練期間の差は非情に大きいのだ。



クリンもなんとか中の中辺り、118位に食い込んでいる。彼女も意地を見せていた。しかし、クリンやエンドーラ並の実力者も30人前後はいるようだった。

超エリートが集まる上級士官学校と言うのは伊達では無いらしい。

健介とファイは別段対抗意識は燃やしていない為、その先輩達や他の実力者の事は全く無視していた。

2人にとって大切な最優先事項は、転生魔法の魔道書を入手し、それを使ってシーリアを元の身体に戻す事だ。

それさえ出来れば、後はなるようになれば良い。

そうこうしている内に、転生魔法の研究の許可が下りた。

セキュリティの厳しい研究室で、転生魔法の魔道書を見ることが出来た。

「これが転生魔法の魔道書。」

と健介が手にとって中身を開く。

古びた革表紙の魔道書は、予想通り中身は難解であった。

ただし、中身を理解していなくても、その魔道書の指示通りに儀式を行えば、転生魔法を使うことは可能だ。

「ど、どうする?」

とファイが緊張した様子だ。

念願の魔道書が目の前にあって閲覧できるのだし、一番それを欲しているのはファイレイの中に居るシーリアなのだ。

これの為に今まで努力してきたのである。  
緊張もするだろう。

「落ち着きなさい。」

どの道、持ち出しは出来ないし、ここでは使えないわ。  
準備には時間が掛かるわよ。」

と健介。

フィは深呼吸して落ち着きを取り戻した。

「そうね。」

準備が必要よね。」

とフィ。

「持ち出せないから、内容を転写して魔道書をもつ1冊作るしかないわね。」

と健介。

魔道書には魔術構成が書かれているが、複雑すぎて覚えきれぬものではない。

転写するにも、記号の模様の様なものであり困難だ。  
だが、やってやれない事はない。

「でも、この人工島から出る時には、持ち物検査とかされるんじゃない？」

とフィ。

禁書の流出を避けるため、人工島から出る時には持ち物検査がある。

「それについては秘策があるわ。  
だけど、その秘策もまずは写本を作らないと出来ないから、地道に少しずつ写していきましょう。」

と健介。

2人は解読作業と同時に、魔術構成の記号を少しずつ紙切れに写し、それを部屋に持ち帰って写本用の本に写した。  
この研究室では、自動書記の魔法は使えない。  
写本の作成を防ぐ為だ。

1日に数行を写し、全部で600行弱を写さなければならぬ。  
この行と言うのは、より正確には模様と言った方が良さだろう。  
通常の文章とは異なり、魔術構成に使われる文字は模様のように並べられる為、1ページ1模様の魔術構成が書かれる。

故に、1日数行写すだけでも困難であり、半年前後の長期戦が予想される。

さらに、解読と研究もしなければならぬし、島の外に出られる休みは半年以上先になる。

この士官学校は定期的な休み以外は、基本的に長期休暇は無い。  
入学した日から8カ月後に、有給のようなものが40日与えられ、その休暇を自分で申請する方式だ。  
今は確実に、正確に写す事だけを考えれば良い。

健介が選択した用兵は、健介から見ると少々原始的に見えたが、健介も特別用兵に詳しい訳では無いのでまずは素直にそれを受け入

れた。

魔術戦士の存在のせい、「多勢を持って小勢を制する」という基本が無かった。

確かに優秀な魔術戦士1人いれば、普通の兵士を10人単位で相手にする事は可能だ。

恐らくその為に、少数で敵を撃つという思考から離れられないのだろう。

だが、それとは裏腹に、魔術戦士の確保が戦略上の最優先事項となっている。

結局は多数で無ければならないと判っているのだが、それを用兵の考え方に還元出来ていないと言う所か。

さらに、魔術戦士の運用に関しては、イマイチ納得できないものがあった。

単独、または少数での捨て駒のような扱いが見られるのである。

健介はこの国の用兵の根本をある程度把握すると、随所にある問題点を指摘し始めていた。

用兵の教官からは嫌な顔をされていた。

フィとクリンから聞きかじった医術は、意外と普通であった。

傷の洗浄と縫合術、包帯の巻き方などは魔術学校の方で教わっている。

その先の知識として、人体の身体の構造を色々教わっているらしい。今後は死人の解剖をと言う事だ。

クリンの選択した薬品研究は、薬草から薬品を作る、或は、その薬品から別の薬品を作るのが主な研究だ。

魔術と組み合わせた魔法薬なども研究する。

問題は薬品を作る方ではなく、効能を調べる方にあると言う事だ。

これは現代の医薬品開発でも同じ事であるから、不思議は無かった。

現代の技術なら何万種と言う薬品を簡単に作る事は出来るが、その効能と言う事になると容易に調べることは出来ない。

これは細胞実験や動物実験など、様々な条件で繰り返して地道に調べるしかないのである。

その状況はこつちの世界でも同様で、実験用のねずみの様な小動物が飼われているらしい。

場合によっては、死刑囚で実験する事もあるとか。

そんな訳でこの薬品研究はハードルが高く、途中で別の学科へ切り替える生徒が多いとか。

小さな問題は色々あったが、それなりに楽しく半年を過していた。転生魔法の写本作成も順調で、後1ヶ月も掛からないと思われる。

今、気になっているのは、フィの事でもクリンの事でもランの事でもなかった。

あのエンドーラの事である。

エンドーラのチームは全体としては平凡な成績であった。

エンドーラと他の2人の成績を平均するとそうなってしまうらしい。エンドーラは間違いなく優秀なのだが、他2人がどうしても足を引っ張ってしまうようだ。

一応、この上級士官学校に入学したのだから、その2人も素質は

あるはずだ。

だが、その実力差は開くばかりである。

他のチームでも似たような事があり、チームの解散と新しいチームの結成などが行われている。

そして時々、落伍者が出る。

いつの間にか、生徒数は180人を切って、176人になってた。

そこで、健介はフィとクリンに了解を取って、夕食後、エンドーラを呼び出した。

「まあ入って、エンドーラ。」

と健介が部屋に招く。

「お邪魔しますわ。」

とエンドーラが部屋に入った。

「このベッドに座って。」

と健介がベッドを指差す。

健介は向かい側のベッドに座る。

エンドーラはベッドに腰掛け、健介を見た。

フィとクリンは健介の据わっているベッドの上段のベッドに座ってエンドーラを見ている。

全てのベッドが2段ベッドだ。

ランはそのベッドの脇に立っている。

「回りくどい事は言わないわ。  
エンドーラ、チームを解散してうちに来なさい。」

と健介。

エンドーラは少し驚いた様だが、直に落ち着いた。  
予想はしていたのだろう。

「でも、私は・・・」

とエンドーラは躊躇いながら口ごもる。

「エンドーラ、細かい事をウジウジ悩まない。

あなたらしくないわ。

あなたの実力を活かして伸ばすには、うちのチームは最適よ。

逆に、あの2人もあなたと一緒にいては、落ち込ませるだけだわ。  
返事は明日まで待つてあげる。

話はそれだけよ。

明日、また着てね。」

と健介は強引に勧誘すると、さっさとエンドーラを部屋から追い出した。

エンドーラはその強引な交渉にも何も言わず、黙ったまま出て行った。

「リア、もうちょっと優しくしてあげなよ。」

とクリンはどこか悲しげに言う。

「いいのよ、あれで。」

彼女はあれで結構悩んだのでしょうから。

これ以上、ウジウジ悩んでも意味が無いわ。  
最善の方法は何か？  
それだけ考えさせればいいのよ。」

と健介。

フィは複雑そうな顔で見ているだけで何も言わなかった。

翌日、昼休みの時間にエンドーラとチームメイト2人を見かけた。  
2人のチームメイトは落ち込んだ様子である。  
その3人は教官のいる建物へと入って行った。

「チーム解散するのかな？」

とクリン。

「そうですね。」

とフィ。

「夜になれば判るわ。」

と健介。

夕食後、エンドーラが部屋にやって来た。

「それで、返事は？」

と健介。



訊くまでも無かった。

エンドーラは昼間、チームを解散していたのを知っていた。それでも聞くのは儀式のようなものだ。

「ええ、あなたのチームに入れて頂きますわ。」

とエンドーラ。

健介はそれを訊いて頷き、クリンに合図した。

クリンとファイがビンとグラスを持ってきて、グラスを配りビンの中身を注ぐ。

人口島内で唯一売られている果実酒だ。

「それじゃ、エンドーラがチームの一員になったのを祝って。

乾杯。」

と健介が音頭を取る。

「乾杯。」

と他の者達。

「か、乾杯。」

とエンドーラが恥ずかしげに小声で言う。

「エンドーラ、放課後は自主訓練があるから、訓練場に集合よ。」

と健介。

「あなたの腕前見せてもらうつからね。」

とファイ。

「宜しくお願いします。」

とクリン。

「ええ、頑張りますわ。」

とエンドーラは微笑んだ。

エンドーラを含めた自主訓練で、彼女の實力を実際に確かめる事が出来た。

通常授業の訓練では、エンドーラのチームとは別々のスケジュールになっていたからだ。

だが、今後は同じチームとして訓練をすることになる。

結果、クリンより少し上の實力と判った。

「あ、あなた方、化け物ですわ。」

とエンドーラが息を切らして言う。

ファイと健介が順に訓練の相手をし、その2人の訓練を見ていた。それを訊いたクリンが噴出して笑う。

「何がおかしいの？」

とエンドーラが憤慨してクリンを睨む。

「ああ、ごめんなさい。

ただ、私もファイとリアにはいつも化け物って言うてるから、ついでね。」

とクリンは微笑む。

「まあ、いいですわ。

確かにこのチームなら強く成れそうですもの。今に見てなさい。

あの2人を追い抜いてやりますから。」

とエンドーラは燃えていた。

昨日までの落ち込みから抜けたようだ。

健介とファイの魔術研究は順調にだった。

写本の方ではなく、本来の研究の方である。

健介がファイに指導しながら魔術構成を解読し終えて、それを改造しつつ再構成していた。

魔術構成はコンピュータのプログラムに似ており、健介はプログラミングには慣れていた。

その為、こっちの世界の人に比べれば簡単に理解できた。

ファイの方は、さながら新米プログラマといった所だ。

転生から転移への修正は、ほぼ終了していた。

実を言えば、転移に比べれば転生の魔術構成の方が余程複雑なのだ。

簡単に言えば転移は「物体を丸ごと」ある場所からある場所へ移動させれば良い、大雑把な魔法である。

対して、転生は生物の「精神と魂」を引っこ抜き、それを別の生物に突っ込む、結構繊細な魔法なのだ。

健介がやった事を大雑把に説明すれば、転生魔法の魔術構成から不要な部分をこっそり削る。

不要な部分と言うのは、精神だの魂だのと言うものを扱う部分である。

そして「精神と魂」を転送している部分を「物体丸ごと」に代えただけである。

今は小規模の実験を繰り返し、魔術構成の問題点を調整している段階である。

「それにしても、毎度思うんだけど、あなた何者？」

とフイ。

「答えはいつも同じよ。

秘密。」

と健介。

「もしかして、魔女？」

とフイ。

健介は笑う。

「もし魔女だったら、転生魔法くらい使えるでしょう？  
だったら、ここには来てないでしょうね。」

と健介。

魔女とはいつの時代にも2・3人は存在する、不思議な女性たちだと言われている。

彼女達は誰かに教えられるまでも無く、その世界に存在する魔法を使うことが出来るらしい。

魔力は人間の域を超えており、寿命は200〜300年と言われている。

ただし、それ以外は普通の人と同じであり、魔女は普通の人として潜んで暮らしている事が多い。

大きな戦や魔族の侵攻があった時に、魔女が戦を止めさせ、魔族を退ける力の一端となった。

その為、「世界の調停者」とも言われている伝説的な存在。

健介としては魔女は存在しないと思っていた。

そんな強力な存在が人として生きているなど、ちよつと考えられない。

ドラゴンと言う基準で考えても、そんな桁外れな存在が居ると思えなかった。

こつちの世界の御伽噺だ。

「まあ確かにそうね。」

とフィ。

健介はフィに魔術構成について色々指導をしていた。

魔術学校の時からしていたが、そう頻繁に使うものでもないから、なかなか慣れないらしい。  
慣れさえすれば健介のレベルにまですぐ到達できる才能があるはずなのだが。

「いい？」

私達がダンジョンで使った魔術付加した札、覚えてる？」

健介が聞くとフィは頷く。

フィはあまり使っていないかったが、クリンは良く使っていた。

「この魔道書を見て、この1ページ1ページが、あの札の1枚1枚と同じなの。」

健介が改めて説明する。

魔術構成とは、魔力の流れを制御し、魔力を魔法に変換し、発動させるもの。

転生魔法の魔道書にある約600ページに及ぶ魔術構成は、約600もの大小様々な魔法が段階的に発動し、その複合的な作用によって達成される。

それが最終的に転生魔法になるのだと。

それ以外にも魔法陣による魔法の補正がある。

転生魔法の儀式とは、魔法陣と魔道書の魔術構成を、魔力で結合する為の行為である。

それによって魔術の微細な制御を行うのだ。

転生魔法とは、繊細で複雑な魔法なのだ。

「だから、あの札は最小の魔道書と言えるわね。」

健介によって改めて語られる説明に、ウンウンと頷いているフィ。そして、武器や鎧に刻み込んだ魔術構成も同様と言う事で補足説明し、転移魔法の魔術構成の説明に入っていく。

しばらくして

「こんなに必死にやらなくても、転生したらミコトのこの知識は、私のモノになるんでしょう？」

フィが限界に達したのか、頭を抱えて珍しく泣言を言う。

まあ、単純になったとは言え、転移魔法の魔術構成も一度で理解出来る代物では無い。

「確かにそうだけど共同研究なんだから、フィとして、しっかりと勉強しないとね。」

教官にフィが質問されて応えられないとなったら、私だけ卒業かもよ？」

と健介。

フィはそう言われて、しびしび転移魔法の魔術構成の勉強に戻った。

用兵の授業では、健介は完全に教官に目を付けられていた。と言っても、良い意味ではない。

成績自体は悪くないのだが、それは模擬戦略戦での成績が優秀だからだ。

ペーパーテストでは健介独自の用兵理論を展開し、良い点は取れて

いない。  
それらが気に食わないらしい。

模擬戦略戦とは、簡単に言えばストラテジーゲームを卓上でやっているようなものだ。

2人以上が対戦し、順番に駒を置いていく。

駒は兵士だけでなく城壁や要塞、食糧生産や資源採掘などもあり、単純な戦術戦を競うものではない。

一度始まると、ほぼ丸1日を費やして戦略ゲームが行われる。

他の授業の日程もそれを考慮して変更される。

これまで1回の総当たり戦で、総合優勝をしている。

負けたのは最初の方で、やり方をイマイチ把握しきれていなかったせいだ。

やり方を把握しておけば、後は殆ど楽勝だった。

大抵の場合、相手の戦力を削りつつ補給を断つだけで、相手の戦力を孤立化、弱体化して包囲殲滅することが出来た。

どうも体力バカの猪突猛進タイプが多いらしい。

(これはお国柄なのか?)

と首をかしげる健介だった。

基本に忠実に、しかし応用を考えて実行に移せば、楽勝な相手達であった。

「シーリア君、卒業試験を試してみる気はあるかね?」

と教官。



「は？ 卒業試験ですか？」

と健介は戸惑う。

まだ半年程度しか経っていないのに。

「卒業試験と言っても、この用兵学科の卒業と言っただけだよ。」  
と教官。

「はあ、それで何をするんですか？」

と健介。

「簡単だよ。」

私と模擬戦略戦をして、一定以上の戦果を挙げれば良い。  
勝つのが最上だけだね。」

と教官は挑発の感じを滲ませて言う。  
健介は頷いた。

（その挑戦受けて立つ！

いや、俺が挑戦者か？）

などと思いつつ

「判りました。  
卒業試験を受けます。」

と健介。

教官は受けて立つと言いたげに笑った。

健介は教官がどういう意図を持って卒業試験などと言い出したのか判らないが、教官と戦えるのは面白そうだった。

卒業試験の対戦の為に、休みを返上して対戦室へと向かった。

対戦室には見届け人として、他の教官が2人いた。

対戦が始まると、さすがに教官だけあって猪突猛進はして来なかった。

（されては興ざめだが。）

と思いつつ、必要な食料を蓄積して、兵力で防備を固めていく。

先に動いたのは健介だった。

少数精鋭の部隊を敵陣に向けて移動させる。

補給は最小限で、移動を重視していた。

駒の強さは表面上、相手には判らないようになっていく。

強さを測るには、駒をぶつけなければならぬ。

教官がそれを迎え撃つように兵を出してくる。

健介の部隊を包囲するように動かしていた。

健介はその包囲ギリギリの線で撤退を開始する。

その先に、別の兵を配置しながら。

教官もそれを見て兵の再編をしながら更に兵を出してきた。

ここから総力戦に出るつもりらしい。

健介の狙い通りだ。

教官は健介が勇み足をしたのだと思ったに違いない。  
健介が戦列を立て直す前に叩くつもりだろう。

健介は、教官が自分を侮っていると見ていたので、それを逆手に取って誘い出す事になっていた。

健介の少数精鋭部隊は、用意した別の兵団の先端に組み込まれた。その兵団は幾つかの塊が斜めに配置されていた。例えて言うなら、右肩上がりの棒グラフのような布陣だ。その一番高い天辺に少数精鋭部隊が居る。

教官はその配置を見ても何も警戒していなかった。稚拙な布陣とでも思ったのかもしれない。小数部隊を追っていた兵を方陣にして突っ込ませてきた。

健介の少数精鋭部隊を取り込んだ兵団は、もっとも強い兵の駒の集団であった。

教官の兵団はあっという間に削られていく。教官はそれならばと、その兵団の側面を狙いに後続の兵団を回り込ませる。

だが、その教官の兵団は、健介の別の兵団に側面を突かれてしまう。

その兵団は棒グラフの一段低い方に居たもので、教官の包囲の動きと同時に動かしていた。

健介が用意していた別の兵団は、あまり強くない兵の集団だったが、側面を突いた為に十分な戦果を上げていた。

教官は健介の斜めに布陣した兵団がいつの間にか自分の兵団を半包囲しているのに気が付いた。

良く見れば、更に外側から包囲されつつある。

教官は慌てて自分の兵団を撤退しに掛かる。

「見事だ。」

見物していた教官が呟く。

もう1人も頷く。

教官の判断が早く、健介は結局包囲しきれ無かったが、教官の兵団を追撃して、包囲殲滅した分と合わせて5割方を潰した。これで勝敗は決した。

この戦略戦は敵兵を自陣に入れたら負けである。教官の兵力はもう、健介の兵力を押し留める力を残していない。

「勝負あり。」

勝者、シリア。」

と見届け人の教官が宣言した。

これだけの戦いで、5時間弱掛かっていた。全て手作業で行うので、かなり疲れる。

後片付けをしていると、教官が話しかけてきた。

「シリア君、用兵学科、卒業おめでとう。」

と教官。

「あ、教官。」

ありがとうございます。」

と健介。

(こんなんで卒業でよいのか?)

などと内心で問うてしまう。

「ところでシーリア君。

あの戦い方はなんだい？」

と教官。

負けたせいか、態度が違う。

「あれはまあ、思い付きです。

斜めに布陣した先端を攻撃したくなりますよね？

包囲し易そうですし。

ですから、その先端の兵団を強力なものにしておきます。

すると、教官がしたように包囲しようとするはずなんです。

あとは、お分かり頂いていると思います。」

と健介。

思い付きではなく、どっかの武将がやっていた戦法だと記憶していた。

いつ誰に教わったのかも忘れてしまったくらい昔に聞いた、記憶も曖昧な戦法だ。

教官と他の教官も話を聞いていた。

しきりに頷いて、熱心に話し合っていた。

「それでは、失礼します。」

健介は対戦室を後にした。  
卒業出来たのなら、もう用は無かった。

後日、用兵学科の教官から正式に卒業証明書が手渡された。  
半年ほどで、卒業してしまった。  
まあ、用兵などは、基本以外は才能の問題である。  
実際の戦いでは様々な要因が絡み合うのだし、1人の才能に頼ることとは無いはずだ。  
だから、この程度でも良いのだろう。

健介は用兵学科を卒業してしまったので、他の学科を追加する事にした。

兵器工作を選択した。  
兵器工作といっても、大した物ではない。

こつちの世界では魔法が主体であるから。  
作られるのは弓や石弓、攻城用のバリスタや投石機程度で、その改良を行うという意味合いしかないらしい。  
しかも、弓や攻城兵器よりも魔法を重視している人が圧倒的に多い。  
そんな訳で、兵器工作を選んだ人は健介だけだった。

「君も物好きだね。」

と汚れた白衣を着たキスリン教官が暢気に言う。

「暇そうな所ですね。」

と健介は見回す。

2人がいるのは初日に見た、町工場と鍛冶屋を足したような場所だった。

2人だけでは広すぎる工場。

「ははは、まあ否定はしないけどね。

君は天才と言われているようだから、適当にやっていいよ。何かあつたら呼んでくれ。」

とキスリン教官は、奥の部屋に引っ込んだ。

「適当にと言われても……」

と健介は途方にくれた。

健介は考え込んだ。

(やっぱ、大砲とかは作っちゃ駄目だよなあ……)

構造が単純な大砲なら、簡単に作れる。

だが、そんな物をこっちの世界に持ち込むのは気が引ける。

今は平和なのだから、少なくとも大砲は平和な時期に作るような物ではない。

(ならばもつと平和的なもので、軍が欲しがるもの？

何かある?)

暫しの黙考のあと、健介はぼんと手を叩く。

「あつた！」

望遠鏡が良い。」

こつちの世界には無かつた。

船乗りも肉眼で周りを見ていた。

探査魔法は魔術師しか使えないし、並みの魔術師では数十メートル程度しか把握できない。

望遠鏡は森の中では使えないが、平野や海の上であれば、肉眼では見えない何十キロ先でも見える。

何より簡単に作れて、軍が欲しがる平和的な兵器と言えば、これしかないだろう。

望遠鏡が兵器？　と思われるかもしれないが、それは素人の考え方である。

兵の運用を効率良く行う為の物が兵器である。

索敵を効率良く行える望遠鏡は、立派な兵器である。

また、この望遠鏡をうまく使えば、遠方との連絡も光信号で可能である。

昼間なら手旗信号でも良い。

情報戦もばつちりだ。

さつそく、クリスタルを調達するようにキスリン教官に依頼した。

「クリスタル？」

そんな物何に使うの？」

とキスリン教官が不思議そうに聞く。

「秘密……じゃ駄目ですか？」



絶対後悔させません。  
驚かせて上げますよ。」

と健介はにっこり笑う。

「ふふふ、いいだろう。」

退屈していた所だし、驚かせて満足させてくれたら、そのまま卒業させてあげよう。」

とキスリン教官は楽しげに言う。

余程暇なのだろう。

「ありがとうございます。」

楽しみに待っていて下さい。」

クリスタルが届くまで、兵器工作は中断である。

ある日の昼休み、フィとクリンが食欲なさげにしていた。

「どうしたのフィ、クリン？」

と健介。

「ええ、まあ。」

とクリンは言いたくそうにしている。

「医術の授業がね。」

とファイも良いにくそうだ。

医術と聞いて健介はピンと来た。

「ああ、死体を解剖したのね？」

と健介。

ファイ、クリン、エンドーラの食事の手が止まる。

3人に抗議の視線を送られる健介。

そう言えば、エンドーラも医術を選択していたっけ。

以外にも選択科目はクリンと同じだったはず。

「あははは、こ、これ位で食欲を無くしてたら駄目よ？」

と健介は誤魔化す。

エンドーラはどうか知らないが、ファイとクリンは盗賊を殺して、内臓が飛び出ている所は見ているはずだ。

ダンジョンではバラバラに食い散らかされた遺体も見ている。

今回はそういう損傷した死体ではないはずだし、そんなに精神的なダメージを受けるとも思えないのだが。

（俺がおかしいのか？）

健介はちよつと不安になる。

3人はため息をついて、食事を続けた。

健介はちよつと居心地が悪いので、話題を変える。

「エンドーラ、私達のチームに入ってどう？  
満足してる？」

と健介。

「ええ、満足していますわ。  
卒業までに必ずリアとフィを越えて見せますから、そのつもりで。」

とエンドーラはにっこりと笑う。

エンドーラの後ろが揺らめいて見えるのは錯覚だろうか？

エンドーラは殆ど毎日の自主訓練でフィとリアに負け続け、かなり来ていた。

クリンにとってはちょうど良い訓練相手となっている。

クリンよりちょっと強い程度のエンドーラなら、お互いに全力で戦える良いライバルとなる。

フィとリアのように。

だが、エンドーラの視線はクリンではなく、フィとリアに向かっている。

「クリン、エンドーラを見習いなさい。

あなたも頑張って、私たちに追いつきなさいな。」

とフィ。

「あう。」

とクリンは困った顔をする。

「駄目よフィ、クリンは私たちで引つ張り上げないと。クリンはエンドーラと違って自分で駆け上ってくるタイプじゃないから。」

と健介。

「酷い言われようね。クリン。」

とエンドーラがクリンの肩に手を置く。

「いえ、本当の事ですから。」

フィとリアが私を鍛えれくれなかったら、今頃は普通の魔術戦士として軍に配属されていたはずです。」

とクリンは微笑んだ。

「そうよ。」

逆に言えば、クリンはそれだけの素質があると言つ事なんだから、これからもビシビシやるわよ。」

と健介。

「あつまつ優しくして〜」

とクリンは涙目で訴えた。

## 第17話 転生とドラゴン(前書き)

ここから人物の名称表現が若干入れ替わります。  
御注意下さい。

## 第17話 転生とドラゴン

士官学校に入学してから8ヶ月が経過し、40日の休暇を与えられていた。

いつ休暇を取るかは生徒次第である。

兵器工作の方はクリスタルが届き、その加工に手間取っていた。

綺麗なレンズを作るのは、何気に難易度が高かった。

この手の作業をやった事が無いので、色々工夫した。

教官にアドバイスを求めても良かったが、秘密裏に作ると思った手前、聞けなかった。

取り合えず、簡単なコンパスを作って円を描き、その弧の部分を切り取った。

それを型紙にして、まず木を削ってレンズの形にした。

その木型を石膏で模りし、溶かしたクリスタルを流し込む。

すると、ほぼレンズが出来る。

後は磨くだけだ。

そんな感じで大小2つのレンズを作り、日々磨いて形を整えている。

転生魔法の転写作业は終わっていた。

転生魔法の魔道書の写本が出来上がり、内容のチェックをしていた。一応、2人それぞれで同じ内容を書き写して、チェックしてきたが、間違えれば命取りである。

念には念を入れなければならない。

「問題ないわね？」

健介が確認する。

「ええ、無いわ。」

でも、どうやって持ち出すの?」

フィはそれが心配で仕方が無いらしい。

「それじゃ、秘策をお目に掛けましょう。」

健介がもつたいぶつて言う。

健介は予備の鎧として持っていた、以前着ていた鎧を見せる。

「それ鎧よね?」

フィは眉をひそめる。

何でそんなものを、と言いたいのを堪えているかのようだ。

「判らないかな。」

じゃあ、これでどう?」

健介は自動書記用の触媒を見せた。

「あ! そうか。」

「やっと判ったようね。」

健介はニヤリと笑う。

「盲点だったわ。」

その鎧に転生魔法を転写するのね？」

「良く出来ました。」

自動書記は何も紙だけが対象では無い。

鎧だろうと身体だろうと、書ける物なら何でも良い。

それに文字の大きさなどは、自在に変更できる。  
読めない程小さな文字でも構わない。

「それじゃ、休暇を取りましょう。」

フィは早く元の身体に戻りたくてうずうずしている。

「そうね。」

クリンとエンドーラも誘わないとね。

エンドーラはともかく、クリンは拗ねるから。」

健介は笑う。

「ええ、誘いましょう。」

それにしても、いよいよね。」

フィは緊張と期待感のこもった声で言った。

ようやく元の身体に戻れるのだから無理も無い。

約5年、シーリアはフィレイの身体にいて、フィレイとして過してきた。

シーリアの身体にいる健介と身体を交換して、シーリアは真のシーリアに戻る。



4人は休暇届を出して2週間後、人工島を離れた。予備の鎧は売りに行くと言って誤魔化したか、全く見向きもされなかった。

鎧に禁書の内容が転写されているなどとは思っても寄らないのだろう。

4人が取った休暇は10日。

その間にシーリアと健介は入れ替わる。儀式自体は1日あれば余裕で終わる。

エンドーラは4日目以降は、実家に帰るらしいから5日目以降に実行に移す。

クリンには詳しい事情は話していないが、極秘の大事な用を手伝うようにお願いしていた。

3日間、久しぶりの町中で4人と1匹は買い物や露店の食べ歩きなどをして楽しんだ。

軍人の卵とは思えない、女の子の子した3日間である。

ランも帽子と色付き眼鏡を掛けさせて、銀色の目を目立たなくさせたから、騒ぎにはならなかった。

逆に、ランのその姿が護衛と言いか用心棒のような感じになっていて、周りの若い男達が4人に声を掛けることが出来なかったのである。

ランは時々気配を消すのを止めて、威圧感を与えていた。

すると、集まってくる若い男達は、怯えたように逃げ去るのだった。それが面白いらしい。

4人はそんなランを見ても何も言わなかった。

限られた休日を邪魔されないのだから、それで良しと言っ事だ。

4日目の朝。

「それじゃ、また学校で会いましょう。」

エンドーラは馬車で行ってしまった。

「さて、そろそろ計画を始めますか。」

「ええ」

健介とファイは行動を開始した。

その横でクリンは何？ という顔をして首をかしげている。

この日の為に偽名で取った宿の大きな部屋。

結構いい部屋だ。

儀式で使う魔法陣に必要な空間を確保する為、ちよつとした金を使っている。

使用人用の小部屋もあるところから、貴族が使う部屋なのだろう。

一応、健介とクリンも貴族ではあるが・・・

部屋の一番広いスペースにあるテーブルをどかして、用意しておいた厚手の布を敷いた。

この布はキャンバス布をさらに滑らかにしたような布で、丈夫で滲みにくく、魔法陣を描くには最適だ。

その布をピンで木の床に止める。

そして、その布に魔法陣を注意深く描いていく。

「ねえ、何をするの？」

クリンが魔法陣を見て不安そうに聞いてくる。

「もう少し待って、後でちゃんと説明するから。」

ファイが布の上に顔を近付けて、専用の器具を使いながら文様を描きながら応える。

健介も別の場所に文様を描いている。

魔法陣を描き終わり、それが乾くのを待っている間にクリンに事情を説明した。

クリンは最初冗談だと思っていたようだが、細心の注意を払った目の前の魔法陣を見て、冗談では無いと納得したようだ。冗談で書くような代物ではない。クリンにはその魔法陣の精密さが判る。

「ファイの中身がリアで、リアの中身は別人？」

「じゃ、ファイの中身の人は？」

クリンの問いにファイと健介は首を横に振る。

「私達も詳しい事情は判らないのよ。」

「ただ、気が付いたらこんな状態だったの。」

健介はまた首を振る。

「クリンも協力してくれるでしょう？」

「え、ええ、もちろんよ。」

フィに頼まれて、クリンは戸惑いながらも了承した。まあ、戸惑わない方がおかしいだろう。

事前に説明して置けば良かったのだ。

しかし、クリンは嘘がつけなさそうな性格なので、健介とフィは積極的に説明する事はしなかった。そんな感じである。

魔法陣が乾くと、儀式を始めた。

2時間近くの間、フィと健介は魔力を使って魔法陣と魔道書を結合していき準備を整える。

そして、フィと健介が魔法陣の上に寝そべる。

最後にクリンが魔法陣の外から、転生魔法を発動した。

転生魔法の発動は、拍子抜けする程に地味だった。

魔法陣が光り輝く訳でなく、そういう何か劇的な自体は何も無かった。

ただ、ぼんやりと魔法陣と魔道書が光っただけである。

しかし、それが魔道書によって魔法が次々に発動している証拠であった。

転生魔法が発動した後、数分。

クリンが見守る中、シーリアが目覚めた。

「ああ、私の身体。」

シーリアは自身の身体を両手で抱き締める。

少し涙目になっている。

余程嬉しいのだろう。

シーリアが涙ぐむなど、滅多に見られるものではない。

「リア？」

ええと、ファイだった人？」

クリンが呼び名に迷う。

それを聞いてシーリアは小さく笑う。

「ええ、ファイの中にいた本当のシーリアよ。」

リアは立ち上って、ファイレイを見る。

ファイレイの方はまだ目覚めていない。

「ファイレイも起しましょう。」

「止めた方が良く。主よ。」

クリンが前に出てファイレイを起そうとしたが、ランが止めた。

「ファイレイの身体と主の精神と魂が定着すれば自然に目覚める。

それまでは放っておくべきだ。」

「そ、そうなの。

判ったわ。」

ランの説明にクリンはちょっと怯えたように後退る。

その意見にリアも頷く。

それから2人と1匹で、ファイレイが目覚めるのを待った。

他人の身体だからなのか、なかなか目覚めなかった。

40分ほどして2人が不安になりだした頃、ようやくフィレイが目覚めて起き上がった。

「あ、シーリア。

って事は、私はフィレイね。

成功したようね。」

フィレイの健介は2人を見上げ、自分の身体を確かめる。

「良かった。

なかなか目覚めないから心配したわ。」

リアは安心して微笑む。

「そうなの？

他人の身体だからじゃない？」

健介の方はサバサバしている。

「えっと、リアだった人ですよね？」

クリンは少し混乱しているようだった。

そんなクリンを見て、健介は小さく笑った。

「ええ、そうよ。

今からフィと呼んでね。」

とは言え、以前からフィレイの身体はフィと呼ばれていたのだから、余計に混乱するかもしれない。

案の定、クリンは首をかしげてブツブツ言っている。

健介はフィレイの身体を確かめるように運動した。それを見て、シーリアも運動し始める。

「やはり、ちょっと違和感があるわね。」

健介は表現しようの無い違和感を覚えていた。最初にシーリアの身体に転生させられた時は気付かなかった違和感。あの時はそれが普通だと思っていたが、今回ははっきりと違和感を感じていた。

「私は何も感じないわ。  
以前よりも調子良いみたい。」

リアはちょっとはしゃぎ気味だ。  
楽しそうで何よりだが。

「リアは自分の身体だからよ。  
これからはリアとフィの力関係が崩れるわね。」

「そうなの？」

健介の予想にクリンが首をかしげる。

「そうかもしれないわ。」

リアも自分の身体に戻って、自身の力を感じているようだ。

「クリン、リアはリアの身体に戻って、本来の力を発揮できるのよ。私は今まで通り、他人の身体。今まで力が拮抗していたのなら、リアが有利になるのは当然の事よ。」

「そっか。」

「じゃ、フィは弱くなるの？」

健介の説明に納得したクリンは、若干期待の目で健介を見ている。健介は笑った。

「クリン、何期待しているの？」

確かに、慣れるまでは少し弱くなるかもしれないけど、それだけよ。」

「えへへ、そっか。」

「なかなか面白い魔法だ。興味深い。」

先程から黙って事の成り行きを見ていたランが徐に会話に入ってきた。

「ドラゴンでもそう思う？」

リアは珍しく個人的な感想染みた事を言う欄に聞いてみた。

「ああ、他者と身体を交換するなど、思いも寄らないことだ。」

ランは少し興奮気味に応える。



余程興味を惹かれたらしい。

「まあ、それはそうと、さっさと片付けましょう。  
誰かに見られたら不味いわ。」

健介はやはり物を片付けたかった。

この魔法陣をぱっと見て禁書の魔法陣だと判る者はそう居ないだろうが、部屋の中に大きな魔法陣を描いていれば、興味を引かれるのは必至。

後ではれる可能性もあるし、やはり物はさっさと始末するに限る。

「待ってくれ主よ。」

ランは何か悩みが有るような顔で作業を止めた。

「フィレイの中の主よ、頼みがある。」

「頼み？」

健介は珍しいランの頼みに、何事かと興味を引かれた。

「私と身体を交換してもらえまいか？」

部屋が静寂に包まれた。

リアとクリンが目を丸くしている。  
いち早く健介が気を取り直す。

「あゝ、理由を聞いても良いかな？」

健介は理由が気になった。

「私は人間に興味があったのだ。  
あのダンジョンで負けたあの日から、人間を観察してきた。  
今では人間になりたいとも思っている。」

「でも、人間の姿になっているでしょ？」

リアが指摘する。

「だが、人間ではない。」

あくまでドラゴンの姿が人間になっているだけだ。」

とラン。

「ラン、人間の姿になっても、ランはランなのよ？  
そう変わらないと思うけど。」

と健介。

「ならば、身体を交換してはもらえまいか？」

ランは再度言い募る。

健介はランを見つめて考える。

(ドラゴンになるのもちょっと面白いかな?)

元々この世界の人間ではない健介。

人生？最後は面白そうな方へと進みたい。

「判ったわ。」

健介はランの頼みを受け入れた。

「ええ!？」

「ちょっと正気なの？」

リアはちょっと慌てている。

「転生魔法のせいでおかしくなったとか？」

クリンが失礼な事を口走った。

「何を人聞きの悪い。」

私は正気よ。

別に死に別れる訳ではないのよ？

そんなに驚かないで。」

健介がピシヤリと言いつける。

「でも、盟約は？」

クリンがランに尋ねる。

「盟約は魂の契約。」

入れ物である身体は関係ない。」

「そう言う事よ。」

手伝ってね。」

健介が言うとリアとクリンは渋々頷いた。

休憩を挟んでから再び儀式を始めた。

5時間後、健介はドラゴンの身体に入っていた。

今回は異種族の転生の為か、目覚めに更に時間が掛かった。

「うむ、これが人間の身体か。」

フィレイの身体に入ったランがぎこちなく身体を動かす。

「うーん、違和感が強いな。」

さすがに種族が違っていると、慣れるのに時間が掛かりそうだ。」

ランの身体の健介も、まるで病み上がりの身体を動かすようにしている。

「大丈夫なの？」

リアが心配そうに聞く。

「問題ないわ。」

「じゃ無くて、問題ない。」

健介は女言葉が抜けない。

リアはそれを聞いて小さく笑う。

「休みの残りは、身体に馴染むように軽く訓練しよう。」

健介が提案する。

このまま学校に戻るのは不味い。  
まだ休みは残っているし、早く馴染ませなければ。

「そうね。」

私も自分の身体とは言え、やはり軽く訓練しておきたいわ。」

リアも賛成した。

「ファイ、ファイ、ラン。」

健介がランを呼ぶ。

ランは自分がファイレイになった事に自覚が無い様だ。  
と言うか、人間になった事に夢中らしい。

「ああ、何だ主よ。」

ランはいつも通りの口調だ。

「お前は今からファイレイなんだ。」

ファイと呼ばれたらちゃんと反応しろ。

それから、言葉遣いもファイレイの記憶の通りに話せ。」

健介が叱る。

「ああ、わか、判りましたわ。」

ランは相当戸惑っているようだ。

ファイレイの記憶があっても、女性として振舞うのは難しいらしい。  
ドラゴンは男女の概念すらないのだから、仕方ないのかもしれない

が。

「それから、フィも訓練に参加するんだぞ？  
聞いてたか？」

健介が確認する。

「そうか、そうだった。」

「言葉遣い。」

「そ、そうね。」

「そうだったわ。」

ランが言いなおす。

健介とランとやり取りを聞いて、リアとクリンは横で笑っていた。  
言葉はともかく、フィ（ラン）の困った仕草が面白い。

翌日、転生魔法の転写を消した鎧を売った。

鎧から作成した写本は、嚴重に封印してヴァーゼル領のシーリアの  
屋敷へ送った。

ドラゴンに入った健介がまた使うかもしれないから、シーリアが  
気を利かせたのだ。

学校に隠してある写本は、帰ったら処分しなくてはならないだろう。

町を出発し、湖の辺を歩いて町の無い方へと歩いて行く。

町から1日ほど歩いて行くと、ちょっとした草原が広がる場所に出  
た。

「ここは良さそうね。」

リアが草原を見渡して言う。

「そうだな。」

「ここならドラゴンに戻っても人目に付かない。」

健介も草原を見て同意する。

草原の周囲は木立があつて、目隠しになっているから丁度良い。

「そ、そうね。」

ファイ（ラン）も積極的に会話に入ろうとしているようだが、不自然だった。

ファイの中に居るランは、まだ人間である事に戸惑っているようだ。不満は無いようだが、身体性能はドラゴンに比べれば格段に落ちるし、ドラゴンには無い様々な生理現象もある。これから色々大変だろう。

「それじゃ、俺はあつちで一人で訓練するから。後でな。」

健介は草原を歩いて3人と離れる。

健介のドラゴンの身体は、1晩寝たら少しは慣れてきていた。人間の姿のまま、まずは軽く格闘の練習をし、魔術の練習へと切り替える。

人間の身体よりも格段に性能が高い身体。膨大な魔力。

それを制御するのは難しかった。

それでも、元々人間だった健介は細かい魔力操作を会得していたのが良かった。

ドラゴンの魔力は膨大で扱いにくいのが、それでもランよりはずっと高度な扱いが出来た。

遠くで剣戟の音が聞こえる。

見るとリアとクリンが剣を交えていた。

リアの動きは、以前健介だった頃に比べて鋭いように見える。

クリンは苦しそうだ。

リアとクリンから少し離れた場所で、フィは一人で剣を振っている。

型に添って剣を振っているようだ。

今はそれだけでもぎこちない動きが目立つ。

健介は今度はドラゴンへと姿を変えた。

全長15メートル程の巨体であるが、重いとは感じない。

空に向かってブレスを吐いて見る。

炎が空に向かって吹き荒れる。

そのまま魔術を使って身体強化しつつ、広い草原を巨体で走り回る。

ドドドドドという軽い地響きと共に、草原の土が草ごと舞い上がっている。

(きつと傍から見ると間抜けなんだろうな)

とドラゴンが四足で走り回る姿を想像してしまっ。



止まって、今度は飛ぶ事にした。  
姿を見られると厄介だが、飛べるようにしないといざと言ったときに  
困る。

士官学校ではリア達の下僕と言った事は判っているはずだから、最悪  
大きな問題にはならないだろう。

翼を広げて飛び立った。

ドラゴンの翼はある意味飾りだった。

飾りと言っても、無意味なのでは無い。

翼自体が魔法の道具のような物で、その魔法で飛ぶのであって、翼  
で揚力を得て飛ぶのでは無いという意味だ。

草原の上を何度か旋回し着地する。

やはりドラゴンの身体は性能が高い。

さすが、最強の種族。

人間の姿に変身して、3人の元に戻った。

何だかんだと1時間近く経っていた。

「どう?」

ドラゴンの身体は?」

「ああ、問題ない。

大分馴染んできた。」

何故かニヤニヤしているリアの問いに、健介が応えた。

「空を飛んでる所は壮観でしたよ。」

クリンは少し感動したようだ。

「走り回っているのは、ちょっと間抜けだったけどね。」

リアがニヤつく。

それがニヤニヤの原因か。

「そう言われると思ったよ。」

健介は苦笑する。

いつも自分の顔としてみていた顔が、自分でなくなったのに微妙な寂寥感を感じる健介だった。

「フィはどうだ？」

健介がフィを見て様子を伺う。

「ええ、大分馴染んで来たわ。」

フィは昨日より大分マシになっているようだった。健介もそうだが、昨日はどちらもフラフラだった。リアとクリンがしきりに心配していたくらいだ。

「でも、まだぎこちないのよね。」

リアの方は絶好調のようだったが。

「そうですね。」

「まだ私に勝てないし。」

クリンはそれが少し嬉しそうだ。

こんな状態でも、いつも負けている相手に勝てるのは嬉しいらしい。

「まだ時間はある、焦る事は無い。

身体を馴染ませる為の訓練だからな。

後5日、じっくりやれば良い。」

健介は自分とフィに言い聞かせた。

夕方まで訓練して、野営をする。

「うーん、剣でも買おうかな。」

「どうして？」

ドラゴンには不要でしょ？」

健介の呟きにリアが問う。

「いや、そうでも無いよ。

ドラゴン自身はその強さから、人間の使う剣など使わないと思うけど。」

人型の時は剣を持てば、ドラゴンの力に剣の力が加わる訳だよ。」

「なんか、それは怖いわね。」

「心配しなくても、リア達と殺し合うことは無い。

俺が3人を守ってやる。」

「えへへ、たのもし〜」

クリンが嬉しそうにしていた。

ランの身体に健介が入った事で、クリンのランの身体に対する忌避感の様なものが無くなった様だ。

それはリアも同じなのだろうが、リア自身の態度からは判らない。クリンは判り易い性格でバロメーターの役目を果たしてくれて助かる。

翌日、健介は一人で町に戻り、剣を調達してきた。

さすがに上級士官学校の近くと言う事もあり、良い剣が何本があった。

リア達と模擬戦をするなら、少なくとも強化魔術が付加された物で無ければならなかったが、強化と軽量化が付加された物があった。双剣の中古品らしいが、状態は良い。

剣自体の質もそこそこ良質だったので、渡りに船とばかりに購入した。

双剣はあまり売れないらしく、安売りしていたのも良かった。

購入後、改めて確かめて見ると、魔術付加の添付魔力も十分強力で、魔力が十分高い者が処置したものらしい。

全く持って良い買い物だった。

（双剣はそんなに売れないのか？）

健介は改めて、町行く人たちの腰周りを見て見る。確かに、ざっと見回しても双剣をぶら下げている者はいない。

そこで気が付いた。

リアだった時と同じ感覚で、そのまま双剣を購入してしまった。だが、ドラゴンの身体感覚では双剣よりも一刀の方が良いかもしれない。

(・・・まあいいや)

ドラゴンの身体でそこまでギリギリに切り結ぶ事は無いだろう。そんな相手は、同じドラゴンくらいである。健介は草原へと向かった。

ドラゴンの身体で身体強化を長時間維持するのは骨が折れた。町までの往復4時間を、身体強化して走って慣れて来てはいたが、それだけで疲れ果てた。慣れの問題もあるが、膨大な魔力を制御するのは疲れる。

「あら、今日はお終い？」

リアがからかうように言う。

「ああ、ドラゴンの魔力操作は疲れる。今日はもう駄目だ。」

肉体的には大して疲れていないが、魔力操作で精神的に疲れていった。

「そう、剣を持ったドラゴンと訓練しようかと思ったのに。」

リアが残念そうだ。

「まだ3日ある。」

そう急ぐな。

それに、学校に帰ってからも訓練は出来るだろ？」

「まあね。」

「フィの様子はどうだ？」

フィは今、クリンと訓練をしていた。

なかなか良い勝負の様だが、それでは駄目だ。

「昨日よりは大分良くなっているわ。」

帰る頃にはクリンには勝てるようになってると思うけど。」

リアがフィの状態を説明する。

「うむ、それならいいか。」

学校で聞かれたら、調子が悪いと答えさせれば、誤魔化せるだろ  
う。」

リアが微妙な雰囲気纏って健介を見た。

「あなた、男だったのね？」

リアが声を落として話を変えて来た。

「ははは、やはりばれたか？

心配するな。」

シーリアの身体はまだ無垢なままだ。」

健介がからかうように言う。

「そ、そんな事判ってるわ。」

リアが赤面する。

身体に残っている記憶は共有される。

健介が何かしていれば、リアにも判る。

「そうやって顔を赤くして恥らっていると可愛いな。」

「もう、からかわないで。」

そろそろ何者なのか教えてくれないんじゃない？」

「そうだな。」

そろそろ良いか。」

健介は空を見上げる。

見ているのは空ではない。

「俺はこの世界の生まれではない。」

別の世界で生きていた初老に差し掛かった男だ。」

「別の世界？」

リアが眉をひそめる。  
疑っているようだ。

「その顔は疑ってるね？」

まあ、仕方ないかな。

だが、俺のような人間を見た事があるか？

博識だが学者でも貴族でもない者。

俺の国では、こっちの学者よりも遥かに様々事を15歳までに義務として教えられる。

後は人によつて様々だが、更に学問をする人が大半だ。

俺もその中の一人だったから、学者ように博識に見えるのさ。」

健介は自分の事を博識と評するのにちよつと抵抗があつたが、こつちの世界では十分博識である。

このまま学者として生きる事だつて出来るだろう。

「そうなんだ。

確かに、あなたみたいな人は見たことが無いわ。

信じられないけど。」

リアの気持ちは最後の一言に集約されていた。

健介としては、自分が別の世界の住人である事を信じてもらう必要性を感じていないので、どうでも良かったが。

ただ、疑いの気持ちを持たれるのはちよつと寂しかった。

「まあいい。

元の世界でも魔術師みたいな事をしていたしな。

それに信じようと信じまいと、俺たちの関係は変わらない。

いや、ドラゴンになつてしまったから、少しは変わらざるえないか。」



IT技術者やプログラマなどは、ある意味情報に限った魔術師みたいなものだろう。

「ふふふ、そうね。」

少しは変わるかもね。」

リアはいつもと少し様子が変わって妖しげに笑う。

「何かその笑い、怖いな。」

「ドラゴンの癖に怖がりなのね。」

リアは少し潤んだ目で見つめてくる。

「中身は人間だからな。」

女の怖さを知っているのさ。」

健介はニヤツと笑う。

リアも微笑む。

なんとも微妙なやり取りである。

リアの健介に対する態度は、少し変わってきていた。

相手が男と判ったら嫌われる事を懸念していた健介だが、逆に懐かれたようだ。

（懸念材料が1つ減って良かった。）

最大の懸案事項であったシーリアへの身体の返還も無事終わり、後はそれに関する小さな問題を片付けていくだけ。

その内の1つは解決した。

クリンとファイが訓練から戻ってきた。

「お疲れさん。」

「ファイ、調子はどうだ？」

健介は何事も無かったかのように、ファイに訊ねる。

「ええ、順調だと思うわ。」

ファイ（ラン）は息を切らしている。

やはり異種での肉体交換は慣れるのに時間が掛かっているようだ。いつものファイならクリン相手にそこまで息切れはしない。

翌日。

リアの所望に答えて、健介は剣で戦った。

「双剣同士で戦うのは初めてね。」

「そうだな。」

「良い経験だ。」

健介はリアの身体で双剣を覚えたから、双剣が一番使いやすい。と言うより、通常の剣術の経験はリアの時の最初の短い期間だけだから、事実上、双剣しか扱えない。

ファイレイの身体に入った時間も短く、その辺りの経験も吸収できて

いない。

健介とリア、2人の剣筋はほぼ同じ。体格の違いがあるだけで、同じ記憶による経験が双剣の技量をほぼ互角にしている。

シーリアは自分の身体でより強くなっているが、健介もドラゴンの身体でより強くなっている。だが、健介はその力を出し切れない。ドラゴンの身体による戦闘力向上率の方が圧倒的に高いはずだが。

「まだ本気じゃないでしょ？」

リアは少し息切れしながら言う。

「まあね。」

今は身体を慣らす為にやってるから。」

健介はまだ余裕だ。体力だけなら努力とは関係なく、ドラゴンが圧倒的に有利だ。

リアとの訓練の後、再びドラゴンの姿へと戻り、身体を動かしてみ

る。「大分良くなったな。」

人型での訓練でも、本来のドラゴンの姿に戻っても馴染んでいるようだ。」

「へえ、じゃあずっと人の姿のままでも良いんじゃない？」

「そうだな。」

だが、折角のドラゴンの身体だ。  
存分に楽しまなければな。」

「あなたって、不思議な人ね。」

リアは少し呆れ気味に言う。

「そうなのか？」

「ええ、あなたといると飽きないわ。」

「それは褒めているのか？」

「さあ、どう思う？」

「褒められたと思っておこう。」

翌日の昼。

何故かエンドーラが現れた。

「あなた達！」

私に隠れて訓練だなんて、どういっつもりですか？」

エンドーラはお冠だ。

矛先は当然、リーダーのリアである。

「ち、違つのよ？」

隠れて訓練と言う訳じゃないの。」

リアが取り繕つとする。

「じゃあ何をしてますの？」

エンドーラが詰め寄る。

「えと、く、訓練？」

リアは困つたような上目遣いでエンドーラを見る。

クリンと健介はガツクリと脱力した。

まさかリアがこんな落ちを出してくるとは・・・

シリアはこういう時の対応にまだ慣れて居ない。

今までは健介がやっていたから。

「ですわよね？」

こんな所で訓練してたら、隠れて訓練してると言うのではありませんの？」

エンドーラが仁王立ちで睨んでいる。

こういう所が無ければ、エンドーラも結構な美少女なのだが。

「そ、そうかも。ははは」

リアは笑って誤魔化そうとする。

そして、リアは健介を見て助けを求めるような視線を送っている。

しかし、ランの立場では助けてはやれないので、目を逸らす。

「ご愁傷様。

「そんなにしてまで私との差を開いておきたいの？」

エンドーラは冷たい視線をリアにねじ込む様に向けた。

「違うの。本当に違うのよ？」

その、そう、偶々訓練しようと言う事になったの。  
エンドーラに秘密とか、そう言うことじゃないの。」

リアは面白いほど必死だ。

「・・・本当に？」

エンドーラはまだ疑わしげな眼差しを向けている。

「もちろんよ。」

ほら、エンドーラも一緒にやりましょう？」

リアは笑って誘う。

とにかく一緒に訓練をさせて有耶無耶にしようと言う作戦に出たら  
しい。

「ふん、まあ良いですわ。」

訓練に参加してあげますわ。」

エンドーラはいまいち納得してないようだが、一緒に訓練する事  
に異論は無いらしい。

リアを含め他の者はホッとしていた。

エンドーラを含めて訓練を再開した。

「ところで、どうしてランが剣を差してますの？」

エンドーラはランの腰にある剣を指差す。  
なかなか目敏い。

「え、ああ、それはランが使いたいって言うから。」

とリア。

「へえ、ランがねえ。」

エンドーラは興味無さそうに呟く。  
彼女は目敏いが興味ないものは切り捨てる。  
難しい女だ。

エンドーラはいつものようにクリンと訓練を始めた。  
リアは疲れたように健介を見る。  
健介はニヤツと笑う。

「少しは手伝ってくれてもいいじゃない。」

リアが小声で抗議してきた。

「それは出来ないね。  
今の俺はランだから。」

健介がすまして言うと、リアはため息をついて首を振った。

「この程度でため息をついてたら、学校に戻った時に大変だぞ？  
これからもリアがリーダーなんだから。」

「ああ、そっか、そうだよね。  
上手くやっけていけるかしら。」

リアが不安そうな顔をする。

「リアなら大丈夫だろう。  
俺の心配は、フィの方だよ。」

健介が顎で示す。

フィは1人で剣を振っていた。  
剣技のシャドーボクシングの様な事をしている。

「実力の方は大分戻ったでしょう？」

リアもフィを見る。

「実力の方は心配してないよ。  
問題は魔力量だな。」

健介が予想を言う。

学校での模擬戦などでは魔力量が問題になるほどの戦いはやらないから、実力に影響は出ない。

普通は人の魔力量が落ちるのは老化か、病気になったときくらいだ。



だが、今のフィは魔物の精神と魂が入ったせいで、魔力量は落ちて  
いると予想される。  
まだまだ少女と言えるフィが、魔力量を落とすというのは不自然  
すぎる。

「そんな、どうしよう。  
ばれないかしら？」

リアがオロオロする。  
その姿がミレーヌに似ていて、健介はクスクスと笑う。  
やはり親子だ。

「な、何がおかしいのよ。」

リアが膨れた。

「いや、何でもない。  
確か、魔力測定をするのは1年目の終わりだ。  
後4ヶ月はある。  
それまでに最低限、前回の魔力量まで引き上げさせれば良いから、  
何とか成ると思う。」

「そっか、それなら何とかなりそうね。」

リアが考え込む。

フィにやらせる訓練メニューでも考えているのかもしれない。

「さあ、フィと訓練してきな。  
エンドーラに怪しまれるよ。」

健介が促す。

リアは素直にフィの方へと行って、フィと模擬戦を始めた。

その後、少ししてエンドーラとクリンが戻ってきた。

エンドーラがリアとフィの模擬戦を見ている。

「クリン、フィの動きですけど、少しおかしいですわね？」

さすがエンドーラ、直に見抜いた。

「そ、そうですね。」

「・・・調子が悪い見たいです。」

クリンは必死に考えて言った。

クリンも父アルマン同様、嘘が苦手なようだ。

「そう、調子悪くてもあれだけやれば十分ですけどね。」

悔しいのが先にたって、クリンの不自然さに気付かないようだった。

フィの實力は既にエンドーラ以上に回復している。

リアの方は實力が上がっているが、フィの相手をしている為とエンドーラが見ている為、その實力は見せてない。

「クリン、少し休んだら、またやりますわよ。」

エンドーラが拳を握る。

クリンは諦めたように頷いた。

クリンもエンドーラの相手をするようになって、更に実力が伸びている。

やはり良いライバルのようだ。

「エンドーラ、どうしてここに私達がいるのが判ったの？」

クリンが訊ねた。

確かに教えていもないのに現れたのは不思議である。

「そんな事、簡単ですわ。」

町ではこの周辺に現れたドラゴンの噂が飛び交っていますもの。ここいらに居るドラゴンと言ったら、ランしかいませんからね。」

エンドーラが人差し指をランに向けながら説明する。

健介がドラゴンの姿に戻って、空を飛んだ時にでも見られたのだろう。

「そうだったんですか。」

クリンが納得した。

健介も納得した。

「士官学校からの通知があつて、ドラゴンは使役されているから無害だから手を出すなど、衛兵が布告していましたわ。」

学校に戻ったら、叱られますわよ。」

エンドーラが警告する。

「ええ?!」

「そんな」

クリンが健介に訴えるような視線を投げる。

健介は顔を背け、リアとフィの戦いを見る振りをした。クリンは口を尖らせた。

「どうしましたの?」

「い、いえ何でもないです。

そろそろやりましょうか?」

クリンは誤魔化して誘った。

エンドーラが頷いて離れていった。

「やれやれ」

健介は呟いた。

とりあえず、叱られるのは健介以外のリア、フィ、クリンの3人だろつ。

ドラゴンである健介は黙ってみて居れば良い。

## 第18話 達成の後で・・・

学校へ戻ると、リア、ファイ、クリン、エンドーラの4人は校長から厳重注意を受けた。

それだけで罰が無かったのは、この士官学校に「ドラゴンを使役する者まで居る」と言う示威の宣伝効果があった為だ。良くも悪くも、目立つチームである。

なぜか巻き込まれて厳重注意を受けたエンドーラはしきりに悔しがつっていた。

数日後、健介、リア、ファイ、クリンは密かに魔力測定器のある場所に集まっていた。

エンドーラにも内緒である。

士官学校に入学の際には、魔術学校最後の測定結果が添付されているので、測定していない。

その当時の測定結果はシーリアが2800、ファイレイが3400、クリンが2100だった。

今回、シーリアとファイレイの中身が入れ替わった為、当然魔力量も変動しているはずだった。

その為、魔力測定をしておこうと言う事になったのだ。

今回の魔力測定の結果はシーリアが3800、ファイレイが2900、クリンが2400である。

ちなみに、健介ドラゴンの魔力は測定不能であった。

全員閉口である。

「リアすじ〜い」

とクリンが小声ではしゃいでいる。

「リアの結果は予想通りで問題ないが、フィレイの結果が不味いな。」

と健介が呟く。

「そうね。」

次の学校の魔力測定は4ヶ月ほど先だけど・・・」

とリアがフィを見る。

フィ（ラン）は何が心配なのかいまいち理解出来ていないようだ。

「フィ、人間は若い内は成長する生き物なんだ。

だから、魔力が減るなんて事は無いんだよ。」

と健介がフィに説明する。

健介はリアとクリンを含めて相談し、フィレイに魔力を底上げする為の訓練を追加するようにした。

次の魔力測定までに、入学時の値以上にしておかなければならない。例え上昇率が僅かであっても、上回ってさえいればよい。

後は何とか誤魔化せる。

下回っていると、誤魔化すのは容易ではない。

病気でもないのに、そんなことになったら、不正入学の嫌疑を掛けられる恐れもある。

そうだったら厄介である。

「フィ、とにかく魔力を上げる訓練を中心にやれ。」

と健介はランに念を押しした。

健介は予想に反して、あまり余裕のある時間を過せなかった。

ある時はリアに、ある時はフィにと状況を聞いて助言をしなければならなかった。

リアもフィも、以前の記憶が身体に残っているからと言って、そのままでは上手く事が運べない。

それではれる事は無いが、下手に目立つような事は避けたい時期だった。

健介が途中まで作成していた望遠鏡を、リアに仕上げさせた。

そして、リアに望遠鏡について、出来るだけ詳しく説明した。

単に遠くを見ると言う説明では足りない。

星の観察するのに役に立つし、光信号で連絡を取り合う事が出来るなどである。

注意事項として、絶対に太陽を見ない事と言い渡した。

下手すると失明しかねない。

まあ、この世界の治癒魔法は再生も出来るから、この手の失明も治せるが、そんな事は避けるに越したことは無い。

リアは望遠鏡を覗いて喜び、健介の説明に興味深げに頷いていた。

喜んでいるリアは、普通の女の子の様で可愛い。

普段は可愛いと言うより凜々しい感じだし、ほんの数日前までは自

分の身体だったから、何とも妙な感じなのだ。

リアは望遠鏡とその作成方法と使用方法の報告書を持って、キスリン教官へ見せに行った。

「その筒の様な物が、君が作った兵器？」

キスリン教官が興味深げに見る。

何か楽しそうな表情だ。

期待に目を輝かせている。

望遠鏡はレンズがクリスタル製、筒の部分は革を使用している。

木や金属を使う製造技術はリアには無いし、簡易に望遠鏡を作るなら黒く塗った革で十分だ。

それでも望遠鏡の倍率は凡そ4倍くらい。

明るくはつきり見えるし、十分使い物になるだろう。

初めて作った望遠鏡としては上出来だった。

「はい。」

これは望遠鏡と言って、遠くを見る為の物です。

この様にして使います。」

リアは望遠鏡を覗いてみせる。

「どうぞ、使って見て下さい。」

ただし、望遠鏡で太陽は絶対に見ないで下さい。

失明します。」



リアは望遠鏡をキスリン教官へ渡しながら説明する。  
キスリン教官は望遠鏡を受取り、望遠鏡を遠くの建物に向けて覗いた。

「おお、良く見える！  
凄いいじゃないか！」

キスリン教官が望遠鏡を彼方此方に向ける。

「その望遠鏡の作成方法と使用方法はこれになります。」

リアは報告書を出す。

「ああ、その辺置いといて。」

とキスリン教官は望遠鏡に夢中だった。  
しばらくして望遠鏡から目を離れたキスリン教官は、リアに見詰められているのに気付いた。

「ええつと、報告書は・・・これだね。」

ふんふん、良いんじゃないかな。

素晴らしい！

合格だよ！」

キスリン教官は取り繕うように褒めた。

約束どおり、リアはこれで兵器工作学科は卒業と言う事になった。

1年足らずでリアは2つの学科をクリアしてしまい、またもや注目を集める事になった。

クリアした学科の1つが、兵器工作だった事も原因の1つである。

魔法が存在して機械兵器が軽視される世の中で、兵器工作で卒業資格を取るのは至難と考えられていた。

しかも、軍上層部だけでなく、望遠鏡の噂を聞きつけた王族にも評判が良いらしいと噂が流れれば、注目されない方がおかしい。

リアが数ヶ月かけた望遠鏡の製作を、職人達は十数日で製造したらしく、それを持ってキスリン教官が軍上層部に売り込みを掛けたのが原因だった。

ガラス職人が製造したレンズは、リアが丹念に研磨したレンズに比べると歪みは大きかったが、見れない事は無かったらしい。

閑職である兵器工作の教官のキスリンとしては出世の大チャンスだろうから、この機会を逃す手は無かった。

少なくともこれで予算は増えるだろう・・・

それから数日後の昼休みの食事の席

「全く、リアの頭の中を覗きたいですわね。

どうしたらそんな簡単に2つの学科をクリアできますの?」

エンドーラが悔しげに言っていた。

「あはは、覗かないでね?」

リアが頭を両手で押える。

「比喩ですわよ。比喩!」

エンドーラが突っ込む。

エンドーラを選択した医術と薬品研究で、医術は既に合格レベルまで達しているようだ。  
クリンもそれに続いている。  
医術は何かの成果を挙げるのではなく、一定の知識を得て実習を済ませれば卒業出来るらしい。

「でも薬品研究の方は先が見えないですわ。」

エンドーラがため息をつく。

クリンも頷いている。

やはり薬品は難しい様だ。

「なら他の学科も選択してみれば？」

リアが提案する。

健介は先ほどから発言していないフィ（ラン）を見る。

フィはニコニコしていた。

会話を聞いているだけで楽しいらしい。

変な元ドラゴンである。

「いえ、薬品研究の方にもう少し時間を割きたいですから、しばらくは他のものは選択しませんわ。」

エンドーラは退くとか、諦めるとか、そう言う言葉が似合わない女だ。

「そう言えばフィはどうなの？」

とクリン。

「え？」

えっと、医術をクリアした、わ」

不意の質問に、ランは女言葉を忘れそうになった。

「え？ もうクリアしてたの？」

「そんな・・・」

エンドーラががつくりとうな垂れた。

リアだけでなく、ファイにも対抗意識を燃やしている彼女は、ファイよりも先にクリアしたかったのだらう。

そして、同日夕方、またしてもエンドーラの対抗意識を直撃する出来事があった。

リアとファイの共同研究である、転生魔法の解読と転移魔法の構築が終了し、魔術研究もクリアしたのだ。

その夜、エンドーラは枕を濡らして眠ったという。

休暇から帰ってから1か月半程経った頃、校長からリアチームが呼ばれ、訓練場へと向かった。

そこには校長の他に教官が2人と、見かけないデザインの鎧を来た4人の兵士と貴族らしい男がいた。

「校長、お呼びですか？」

とリア。

「ああ、来たね。

実は折入って頼みがあるのだよ。」

校長は貴族と話していた。

リアは校長と兵士達と貴族を見た。

そして、校長へと視線を戻す。

「君達のドラゴンを、そこにいる兵士と戦わせて欲しいのだ。」

「ランと戦わせる?」

「ここだけの話し、その大貴族が自分の兵士の腕試しをさせたいらしいのだ。」

校長はリアに小声で話す。

「そんな事にランを付き合せないといけないんですか?」

リアが校長に小声で返す。

「すまんな。

この士官学校に多大な寄付をしてくれている方なのだ。」

校長が説明する。

「・・・判りました。

でも、殺さないで下さいよ?」

リアが校長を責めるように言う。

「もちろんだ。」

君達のドラゴンを失うのは、大きな損失だ。

そんな事はさせない。

それは向うも了解している。」

校長もすまなそうにしていた。

リアはため息をついて、健介に話しかける。

「ええと、聞こえてたかもしれないけど、あの兵士達と戦って欲しいの。」

リアは健介を見る。

「ああ、構わないよ。」

でも、ドラゴンの姿になると手加減出来ないけどいいかな？」

健介は何でもないと言うように微笑んだ。

このような事態は予想済みだ。

恐らく、今後もこういう連中に付き合わされる事になるだろう。

「ええ、構わないわ。」

「ああ、もう一つ、俺は人間の戦い方を知っているから、他のドラゴンとは違う事を知っておいて貰った方が良い。」

俺は他のドラゴンより強いから。」

健介が忠告した。

後で詐欺だと言われては適わない。

健介の精神と魂が入ったドラゴンは、日々鍛錬を行っているし、戦闘経験も豊富で、人間の戦い方と心理を知っている。その辺にいるドラゴンに比べれば、強いのが道理だ。

リアはその事を校長に話し、校長が貴族に話した。

貴族はその事には興味が無いらしく、ドラゴンなら構わないと聞こえてきた。

健介はリアに頷く。

訓練場に入って、健介はドラゴンの姿に戻る。

4人の兵士はそれを見て、感嘆の声を上げた。

(ん?)

あれは・・・オルンか?)

4人の兵士の内1人は、よく見るとあのオルンだった。

こんな所で再会するとは。

顔が少し隠れるヘルメットを被っている為、リア達も気付いていないが、オルンはリア達に気付いている。

オルンと出会ったのは魔術学校に入学した当初から。

あの時は健介もリアの身体に居て、フィ(リア)と出会ってからそれほど間もなかった。

確か、オルンはリアの騎士とか言っていたな・・・懐かしい。

教官の合図で戦闘が始まった。

健介はまず、包囲されない様に地面を蹴って素早く接近してブレスと魔法で攻撃した。

攻撃の着弾地点は考えてあった。ブレスをわざとずらして放ち、兵士が避け易い方向に魔法を放つ。

2人の兵士が爆炎の魔法に巻き込まれて吹き飛んだ。

2人とも地面に転がって、大火傷を負い気絶した。

（大した事無いな。

さて、オルンは？）

健介はそれで動きを止めず、素早く後退した。

オルンを含めた2人の兵士は健介のわき腹に攻撃しようと寄って来ていたが、後退されて攻撃は出来なかった。

兵士の動きは、いまいち鈍い。

今度は斜めに突撃し、2人の兵士の横へと進んだ。

2人の兵士はそれを見ながら身構えた。

健介は魔法とブレスで攻撃して、2人が逃げる方へ突進した。

2人が体勢を整える前に、豪腕の爪で薙ぎ払う様に攻撃し、魔法で追撃する。

そして、攻撃後は一旦後退して攻撃をまともに受けないようにする。

こっちの2人の兵士の動きはまだマシと言えた。

しかし、鍛錬が足りない。

2人の兵士は直に息を荒くして、動きがさらに鈍ってきた。

あまり高速戦闘に慣れていないのだろう。

高速戦闘に耐えられなくなって、連続攻撃を避ける事が出来なく



なった。

オロンともう1人の兵士は、魔法の爆発に巻き込まれたのだった。

4人の兵士が地面に転がっていた。

健介は人の姿になった。

戦いを見ていた貴族の男は啞然としていた。

自慢の魔術戦士だったのかもしれないし、確かにそれなりの実力はあったが、多分、普通のドラゴンにも勝てないだろう。

普通のドラゴンになら多少の傷を与えたかもしれないが、それは健介が始めてドラゴンと戦った時のような展開になるに違いない。決定打を与えられずに、ギリ貧になって撤退を余儀なくされる。

「もう戻っても良いぞ。」

校長がリアに言っていた。

兵士達の治療は教官がやっていた。

リアチームの面々はその場を後にした。

本日の授業が免除、と言うより延期になっているので、食堂へ行って時間を潰す。

「あっけなく終わったわね。」

リアが健介を見る。

「そこそこの実力のある兵士だったが、クリン程の実力は無い者達

だったな。」

健介が感想を述べた。  
クリンが少し照れた。

「この前と戦い方が全然違うじゃない？」

エンドーラが指摘する。

相手の動きを読んだフェイント攻撃に気付いたようだ。

「エンドーラ、ドラゴンを舐めすぎだぞ。

我々ドラゴンは強すぎて、それ以上強くなるうとは思わないのが普通だ。

だが、私は違う。

3人の人間に負け、人間の戦い方を観察してきたのだ。  
ドラゴンとて成長するのだよ。」

健介は相手も成長するのだと言う事が言いたかった。

大抵の魔物は強さがほぼ一定だが、そう思い込むのは危険だ。

「まあ、言われてみればそうですね。」

エンドーラが渋々認める。

「今、私達とランが戦ったら、どっちが勝つかしら？」

リアが挑戦的な目を向けてきた。

「多分、俺だな。」

健介が控えめに応えた。

「あら、どうしてですか？

以前は負けたのに。」

エンドーラも挑戦的な目を向けてきた。

「理由は簡単だ。

私は強くなり、お前達の手の内も知っている。

先ほどの戦いも、全力では無い。

相手が弱い事が判って、時間を掛けて殺さないようにした。

以前の最初に戦った時と同様、お前たちは決定打を与える事が出来ず、劣勢へと追い込まれて終わるだろう。」

健介が予想を言う。

ドラゴンの性能を完全に引き出せていない今でも、恐らく健介が勝つ。

ドラゴンの強力な身体性能と、健介の人間として戦ってきた経験と知識。

この2つがあるのだから。

リア達の才能と実力は侮れないが、多分勝てるはずだ。

「そう、それは厄介ですわね。」

エンドーラは困ったように頷く。

エンドーラはドラゴンのランにも対抗意識を持っていた。この前負けたのが、余程悔しかったのだろう。

リアは何か楽しみに健介を見ていた。

「気にするな。」

ドラゴンと人間、肉体の性能がそもそも違うのだから。」

男女間でも体格の差から、女性が不利と言われるが、ドラゴンと人間はその差を遥かに凌駕する。

正に桁違いの差だ。

そもそも、ドラゴンの討伐には魔術戦士が10人単位で派遣されるのが普通だ。

才能あるエリート魔術戦士だったとは言え、リア、フィ、クリンの3人で勝てたのは、ダンジョン内と言う狭くて有利な場所だった為である。

そこで魔法で防壁を作って更にドラゴンの動きを制限し、付加魔術の札を使った攻撃でドラゴンの不意を突けた。

それでドラゴンが転倒したのが勝因であり、運が良かっただけとも言える。

秘密裏に改良した粒子魔法が強力だった事もあるが・・・

もし、ドラゴンが転倒しなかったら、隙を突けずに疲労して撤退を余儀なくされていたはずだ。

もし、ドラゴンが空を飛んで攻撃を開始したら、3人には余り打つ手が無くて、同じように撤退していただろう。

「そんな事より、さっきの貴族は何だったのかな？」

クリンが話題を変えた。

確かに少し気になる。

「さあ、私はそう言うの興味ないから。」

リアは伯爵令嬢にあるまじき発言をした。  
この辺は健介に影響されたのかもしれない。

「あの貴族は、ミュレンジ侯爵じゃないかと思えますわ。  
前に一度だけ見た事がありますの。」

エンドーラが説明してくれた。  
やはりエンドーラが一番貴族っぽい。

「へえ、ミュレンジ侯爵ね。  
どっかで聞いた事がある気がするけど。」

リアが首をかしげている。

「ミュレンジ侯爵は門閥貴族ではありませんが、先代のミュレンジ  
卿が戦功を上げて侯爵になりましたの。」

その後も先代のミュレンジ卿の手腕でミュレンジ領は繁栄、現在  
のミュレンジ卿に受け継がれた訳ですの。」

現在のミュレンジ卿は普通の人と聞いてますわ。  
ちよっと子供っぽい所はあるようですが。」

エンドーラは仕方ないと言う顔で、しっかり説明してくれた。

「そう、するとあの兵士とランとの模擬戦は、単なる自分の兵士の  
腕試しって所かしら。」

リアがエンドーラに聞く。

「多分そうだと思いますわ。  
迷惑な話ですが。」

エンドーラも同意見だ。

「まあいいわ。」

どうせ暇だし、自主訓練でもして汗を流しましょう。」

リアが立ち上がって歩き出した。

健介は悩んでいた。

（オルンの事は話すべきか？）

オルンがミュレンジ侯爵お抱えの魔術戦士になっていたのはまあ良い。

しかし、訓練場でのあのオルンの表情を思い出すと、同じ男として同情を禁じえない。

シリアは気付いていなかったとは言え、シリアの前で無様な負けを晒してしまったのだから。

確かに、あの頃よりは格段に腕を上げていたように見えたが・・・単純に努力が、訓練が足りない。

（オルンは素質はあると思うんだがなあ・・・今回は口を閉じて置こう。）

（ 武士の情けじゃ。）

健介はそう判断し、オルンの事は忘れる事にした。

その後、フィの人柄が変わりつつあった事は、成績と強さの方が目立っていたから周りに気付かれる事はなかった。  
エンドーラも元々深い付き合いがあった訳では無いから、地が出てきたのだと思っっているのだ。

そのフィ（ラン）は、入れ替え当初こそ女性という立場に困惑気味だったが、慣れてくると逆に女性らしくなってきた。  
女と言う存在に興味を示していたのが原因だろう。

ドラゴンに性と言う概念は無い。

性別がないからだが、そのドラゴンのランは人間の女性の身体に影響を受けているようだった。  
とにかく、ランが人間生活を楽しんでいるようで何よりだった。

逆に健介の方は、女性の身体から性別なしのドラゴンに入った訳だが、表立っての影響は無かった。  
元々、男性の健介が女性の身体に入っていて、次にドラゴンに入ったのだ。

性別の差による弊害は少なくなっているはずだった。  
ただ、性欲を感じる身体では無くなっただけである。

フィ（ラン）の魔力増幅の為の訓練は毎日深夜まで行われ、さすがにお疲れのようだ。

だが、あまり休んでいる訳にもいかない。

この問題を解決しない限り、安らかな眠りは訪れないのだ。

来月で1年目を終えようと言う日、つまり来月に魔力測定が迫っている日に、また密かに魔力測定を行った。今回の魔力測定の結果はシーリアが3900、フィレイが3300、クリンが2500である。

「後1ヶ月、ギリギリね。」

とリア。

これまでのペースで魔力量が上がれば、何とか乗り越えられる。

「フィ、もう少しの辛抱だ。」

健介は励ました。

フィは疲れたような顔をしていたが、先が見えた事で気分も立ち直ったらしい。

表情に力が出てきた。

フィは選択科目を休止状態にしていたが、必須科目の戦術戦闘と魔術の授業はしっかり出ている。

必須科目は魔力量アップに繋がる授業でもあるからだ。

一応、リア、フィ、クリン、エンドーラは必須科目のクリア条件は満たしている。

正確には、何時でも満たせる状態である。

戦術戦闘と魔術は4人の錬度であれば、入学当初から卒業レベルに近かった。

あれから1年の間に、卒業レベルを超えたと言う事だ。

ただし、これは一定の基準であり、それ以上を目指すのが普通だ。



今、学校を卒業できるのはリアだけだ。  
他の3人はまだ選択科目をクリアしていない。

エンドーラはリア、フィ、クリンが何か自分に隠してやっている事は知っていたが、それを問い質そうとはしなかった。  
一応、フィが何か問題を抱えている事は判っていたし、自分に協力できる事があれば言うてくるだろうと思っていたのだ。  
協力が要請されれば、応じる覚悟はあった。  
だから、それまでの間は自分の事に集中していた。

エンドーラの最大のライバル、立ちはだかる厚い壁。  
そう、シーリアを越える為に日々鍛錬をしていたのだ。

忌々しい事に、ここ数ヶ月でリアは格段に実力を上げていた。  
更に引き離されてしまったのだ。

(これでは追いつけませんわ！)

挫けそうになるが、負けん気の強さで弱気を跳ね返した。  
挫けている暇は無いのだ。

エンドーラのすぐ後ろにクリンがピッタリ付いてきているのだから。

(あの小動物的なクリンに負けるなど許せませんわ！)

そう思って自分を奮い立たせるのだった。  
難儀な性格である。

1年目の終わりの前日、締め魔力測定が行われた。フィのこれまでの努力が報われるか否かが決まる日であった。

「やれる事はやった。  
自信を持っていけ。」

と健介はまるで試合前の選手に声を掛けるトレーナーの様な事を言った。

魔力測定をするだけなのだが・・・

魔力測定の結果はシーリアが3900、フィレイが3500、クリンが2500である。

ちなみに、エンドーラは3000だった。

シーリアとクリンは先月からの差が出ず、フィレイはラストスパイトが効いたようだ。

胸をなでおろす3人と1匹。

魔力の増加量が少ないのは適当に誤魔化せる。

影でサボっていたとか何とか。

成績は良いから退学にはならないだろう。

フィレイの魔力量は他の生徒に比べても最上級なのだし。

教官からの説教は喰らうだろうが・・・

ともかく、危機は去った。

シーリアとフィレイの身体の交換も済んだ。

ついでにフィレイとランの身体の交換もしてしまった。

その後のフォローもほぼ終了だ。

シーリアと健介のこの約6年に渡る努力は、成功裏に終了したと言えるだろう。

後はこの学校を卒業し、適当に軍役を果たして帰るだけだ。  
健介はそんな風に考えていたが、

（そう言えば、俺に帰る所は無いな。

しかもドラゴンだし・・・）

健介は失笑した。

我ながら虚ろな笑いだった。

軍役の事もあるし、まだ数年はリア達と一緒に居る事になるだろう。

その後は、この世界を見て回るのも面白そうだ。

ドラゴンの身体なら、盗賊などに襲われても問題にならない。

猛獣や雑魚の魔物なら近付きもしないだろう。

細かい事を気にせず旅が出来る。

健介は不意に襲ってきた、帰る所の無い寂寥感を、冒険への期待感で塗り潰した。

## 第19話 久しぶりのダンジョン

上級士官学校2年目。

1年前と同じ光景が、例の講堂で繰り返されている。この1年で卒業した生徒と退学した生徒が計56人いる。そして、今年の入学者は40人前後と噂されていた。

どれだけの天才が来ているのか、健介にも少し興味はあったが、それで何かできる訳でも無い。

この1年余りで感じた事は、チームの人間以外とはあまり交流が無いのが、この学校の特徴だろう。

交流が無いというよりは、交流を持つ余裕が無いのだが。

リアチームのように余裕のあるものは特別なので、参考にならない。

交流と言える交流は、エンドーラの時のように昼休みに多少あるくらい。

他は戦術戦闘と魔術の授業と一緒に訓練を受ける場合もあるが、魔術学校よりも厳しい授業内容である。

授業中にのんびりおしゃべりと言う訳には行かない。

その上、選択科目の方で研究やら何やらをやる事になる。

エリートの中の普通の人は、チーム以外の人と親しくなる機会はあまり無いのだ。

それに魔術学校でもそうだったが、この学校も体育祭や文化祭の

ような学校行事が無い。

この国自体にそう言う文化や風習が無いのだ。

転生魔法で入れ替わると言うこの数年の大目標が達成されたせいで、色々気付かなかった些細な事柄が見えて来た健介だった。

リアも似たような感じを味わっているようで、リアと健介は改めて思う。

やはり精神的に余裕が無かったのだな、と。

健介のやる事はあまり無くなって来た。

リアもリーダーである事に慣れてきたし、フィ（ラン）も人間の女性であること不自然さが無い。

魔物の健介としては、平和だが退屈な日々を送っていた。

退屈を紛らわす時間と言えば、放課後の自主訓練の模擬戦くらいだろう。

リアは既に実力を隠さなくなっており、フィとの実力差もフィとエンドーラほどに出来てしまった。

（フィとエンドーラの実力差は縮まっているが。）

エンドーラが嘆いているのは言うまでも無い。

その為、リアの模擬戦相手をさせられる羽目になっていた。

確かに、今のリアが実力を出し切れる相手は、この学校では先輩の数人しかいないだろう。

その先輩の数人も、噂を聞きつけて健介と模擬戦をしたがった。

ドラゴン化した健介ではなく、人型であれば模擬戦をしたいと言う。

そんな訳で、放課後の2時間ほどは結構忙しい。

2年目も半年を過ぎようとしている頃、リア、フィ、エンドーラ、クリンの4人とも多少時間に余裕が出来るようになっていた。リアとフィは言わずもがな、既に卒業基準はクリアしている。エンドーラとクリンは薬品研究を残すだけだ。

そんな訳でエンドーラがダンジョンに潜ろうと言い出した。この学校では魔術学校卒業生は、特にダンジョンに潜る必要は無かった。

既に魔術学校で潜っているのだから。無論、潜りたければ潜っても構わない。

リアと健介は既に本来の目的を果たしているので、ダンジョンに潜ると言う危険をあえて冒す理由は無いのだが。

エンドーラをチームに入れてしまった以上、これは必須かと諦めた。

ダンジョンの地下52階で、8人の魔族が屯していた。

「おい、いい加減その悪趣味止めろ」

リーダーのズークが2人の仲間と言う。

その2人は、1人の人間を拷問して遊んでいた。人間は地上にある学校の生徒だった。

この魔族達は常に8人で行動しており、時折地下40階付近までは上がってくる。それ以上は上がらない。

地上には対魔族用の要塞がある事が判っているので、用心の為、地

下40階以上には上がらない事にしていた。

地上から来るその学校の生徒は、大抵3〜5人程度の人数でやってくる。

魔族が8人いれば余裕で勝てた。

この魔族達は、降りてくる生徒達を捕まえては奴隷として売る為に、地下都市へと連れ去った。

だが、手癖の悪い仲間がいて、目を離すと折角捕まえた人間に拷問を始めて殺してしまう。

今拷問を受けている人間も、もう長くは持たないだろう。腕を両方切断され、内臓を引き出されているのだから・・・

ズークには拷問の何が楽しいのか理解できなかった。売れば金になるのに、余計な事をしてくれる。

「おまえら、分け前減らすからな。」

ズークは宣告しておいた。

「それにしても、何でこんなひ弱な人間を恐れるのかねえ。とつとと侵略しちまえばいいのに。」

拷問をしていたゾンムが言う。

一緒に拷問をしていたバダールもニタニタしながら頷いている。魔族に比べれば人間は確かにひ弱である。

「だからお前らはバカなんだよ」

ズークが何の遠慮も無く言う。

ズークは何度目かの説明をしてやった。

過去、いくつかある魔族の地下都市から、地上へと侵攻をした歴史がある。

しかし、その尽くを人間に阻止されているのだ。

人間よりも魔族の方が魔法技術は上である。

種族的にも人間より、強靱な身体と高い魔力を誇っている。にも拘らず、過去の侵略は失敗しているのだ。

だからズークも常に8人という人間側の小集団より確実に多い人数で行動していた。

この十数年の間、確かに人間のエリートと呼ばれる学生達と戦っていたが、その結果だけで言えば恐れる事は無いと感じていた。しかし、歴史は嘘をつかない。

「それは昔の指揮官がバカだったんじゃないか？」

拷問を見ていたデリルが言う。

彼も人間を侮っている。

ゾンムとデリルとバダールは時々3人で勝手に行動し、人間達にちよっかいを出す。

それで危険な目にあつた事があるくせに良く言うものだった。

そして彼ら3人はズークが人間を恐れていると思っっているのだ。

(確かに、そう言えなくも無いのだが・・・)

ズークにはひ弱な人間が地上を支配しているという、その矛盾が恐ろしいと感じている。



理解出来ないものへの恐怖と言うものだ。  
ズークには魔族が未だに地下に閉じ籠っていると言う事実を無視することは出来なかった。

リア達4人と1匹は、完全武装でダンジョンの地下43階まで来ていた。

このメンバーでは大抵の魔物は楽に勝てる為、地図を描く作業で時間を使うくらいで、どんどん先に進めた。

しかし、ダンジョンに入る際、教官に注意を受けていた。

ここ13年ほどの間、生徒の行方不明が多発しており、その原因が魔族の一部集団である事が判明していた。  
捕まりそうになって逃げ帰った生徒の証言で判明した事である。

学校側は、相手が魔族の軍団では無いので、特に対処する事は無かった。

その程度は学生側で何とかしろと言う事だ。  
仮にもエリートの学校なのだから、そんな事で軍を動かす事は憚られたのだ。

リア、フィ、クリン、ラン（健介）は魔族には遭遇した事がある。  
あの時は不意打ちでほぼ瞬殺していた為、魔族の強さがどの程度か判らない。

「エンドーラは魔族と遭遇した事はあるの？」

リアが地図を描きながら聞く。

「無いですわ。」

魔族とまともに戦闘経験がある者がいない。  
ちよつと不安な一行であつた。

地下48階に下りて通路を進む一行は、和やかムードで話をしていた。

「このメンバーだと楽でいいね。」

クリンが一番嬉しそうだ。  
頼もしいメンバーが揃っているから、すっかり気が抜けていた。

「クリン、油断していると死ぬわよ。」

リアが注意する。

「あうっ。」

クリンがビクツと怯えたように震えた。  
例の強迫観念が抜けてないのだろう。  
だが、ダンジョン内ではその方が良い。  
適当に押えられる限り、恐怖は友だ。

健介は殿を勤めて歩いている。

全員が探査魔法を常に使っていた。

全員が周囲の魔物の動きを把握している為、行動も連携しやすい。

リア達の魔術の錬度は魔術学校の時に比べても格段に上がっている。

当然、探査魔法の精度も上がっていた。

特にリアは、元の身体に戻ったこともあり、他の3人と1匹よりも精度を高く感知出来る。

石の壁に阻まれているダンジョン内では、クリンも森で戦った時のようにはいかない。

しばらく歩いていると、全員が立ち止まった。

「いるね？」

「いる」

クリンの質問にリアが答える。

まだ地図を作っていない方向に、リアは8つの反応を察知していた。他の者はぼんやりと数個の集団がいるという程度しか判らない。

集団で行動しており、こちらが気付いた時に向うも気付いたように止まった。

「気付かれたわね。」

魔族かもしれない。」

リアが警告する。

8つの個体が集団で行動し、探査魔法を使う存在というところ、魔物

には該当しそうな奴はいない。  
魔族か人間だ。

だが、この辺りで8人という集団で行動している人間はいないはずだ。  
消去法で魔族の可能性大だ。

「動いた。」

クリンが呟く。

その集団が移動を始めた。  
速い。

リアは少し引き返す事にした。

相手がどう出るか判らないし、遭遇するにしても地図のある範囲で遭遇したい。

リアはメンバーにそう伝えて、来た道を引き返す。

しばらく様子を見ていたが、その集団はリア達を追って来ているようだった。

地図のある範囲に入ると、それが明確に判った。

「ここで戦いましょう。」

リアは決断した。

それを聞いて皆、武器を手取る。

魔族とダンジョン内で追いかけてこして勝てるとは思えないし、同時に魔物にも襲われる可能性もある。  
そうなったら厄介極まりない。

周囲の状況が明確な場所で、確実に相手を仕留める事をリアは選んだ。

それが、この長い通路だ。

ダンジョンの中で時々見掛ける長い通路。

前と後ろだけ注意していれば良い。

健介がドラゴン化出来ない事だけが問題だが、それが出来るフロアは遠すぎる。

短い時間で、簡単な作戦を話し合う。

相手の数は8、不利な状況で作戦なしに戦うのは無謀である。

綿密な作戦とはいかないが、防壁の札を使って敵を分断し、速やかに各個撃破する。

それを基本方針に、クリンが後方でサポート役、リア、ファイ、エンローラが前衛として壁となる。

「そして、ラン、あなたは一旦敵を突破して後方から攻撃して。」

リアが健介に指示を出す。

健介は黙って頷いた。

ドラゴンの身体なら、ちょっとくらい突かれても切られても死ぬことは無い。

人間や魔族の耐久力とは比べ物にならないのだから、この任務は健介が適任である。

相手はこちらが動かない事を知ると、ゆっくり近付いてきた。

通路の先から姿を現す。

やはり魔族だった。

人数もリアが感知したとおり8人いる。

「おうおう、女ばかり4人もいるぜ。

大漁だな！」

魔族の1人が仲間と言う。

エンドーラがその意味に気付いて顔をしかめる。

「さて、行くか。」

健介が双剣を構えて、前に出た。

魔族との戦闘経験の無いチームである為、相手の力量が予測出来ない。

対して、この魔族達は人間相手の戦闘経験は豊富だと態度で判る。

この不利を少しでも埋める為に、健介が相手の実力を測る試金石となる意味も込めて戦う事にした。

膨大なドラゴンの魔力を活かして突撃する。

ドラゴン化していなくても、生半可な攻撃は受け付けない。

魔族達は一瞬驚いたが、すぐに立ち直って反撃に出てきた。

同時にリア達も注意深く前に出てくる。

健介は魔族4人と剣を交えていた。

そして、魔族の誘導によって、いつの間にか他の4人と隔離されてしまった。

「徹底防御！」

リアの声が聞こえる。

事態を察知したリアが作戦失敗を知り、即座に命令を出したのだ。

魔族達を挟んで、健介とリア達4人が分断された。

（しまった！）

健介の予想を上回る手練た魔族達。

これでは前後からの挟撃どころか、こちらが各個撃破されてしまう。

健介に割り振られた魔族は3人だった。

リア達は5人の魔族と4人で戦っていた。

防壁の札を使うタイミングを逸したようだ。

（不味い・・・）

健介が戦っている魔族は巧みに防戦に入り、先にリア達を仕留める事を優先しているのが判った。

リア達は魔族相手に4対5ではいかにも分が悪い。

徹底防御を指示したのは良い判断だった。

魔族達は余裕の笑みを浮かべていた。

リア達には1つの幸運があった。

この通路の広さである。いや、狭さと言つべきか。

リア達は女性であり、それほど大きな身体ではないが、魔族側は180センチ以上のマッチョ達だ。

この体格差のお陰で、通路での戦闘が有利になっていた。

通路を塞ぐようにほぼ一列になって戦うリア達の前に、当然同じように並んでいる魔族達。

だが、体格差のせいで魔族達の方が動きにくいのだ。リア達はそれを巧みに利用した。

リアは雨の様に降り注ぐ魔族の剣の斬撃の尽くを双剣と体捌きでかわしていた。

目の前には2人の魔族が居た。隣ではファイ、エンドーラ、クリンが魔族と1対1で戦っている。

リアが2人の魔族を引き受けている為、他の3人も何とか持ち堪えていた。

リアが相手をしている魔族は驚いているようだが、リアも驚いている。

魔族2人相手だ。

徹底して防戦しているとは言え、攻撃を完全にかわしている。地形が有利に働き、ランとの訓練も功を奏しているのだろう。

しかし、それも長くは持たない。

(ミコト早く来て！)

この状態を逆転するには、健介の加勢が必要だった。

健介に対峙している魔族は、巧みに健介を足止めしていた。

1人の魔族に攻撃を集中しようとしても、他の2人が邪魔をする。結果、3人の魔族と満遍なく剣を交える格好となり、決定的なダメ



ージを与えられない。

健介はドラゴンが剣を使う際の裏技を、2つほど考え付いていた。実際には技と言うほどのものでもないのだが、意表を突く事は間違いない。

その1つを早くも使うことになった。

健介は時間を稼ごうと狙う魔族に、これまで以上の速度で攻撃を開始し、そして、その動きに慣れさせた。

その攻撃の中に、届きそうに届かない、首筋への突きが含まれていた。数回も繰り返すと、魔族達はまた余裕の表情で笑いかけてくる。

それを待っていた健介は、もう一度攻撃を繰り返し、首筋への突きを放つ。

魔族は余裕の表情で、ギリギリのところまで後退して突きをやり過ぎそうとする。

手錬なだけあって同じ動きだったが、お陰で動きが読みやすい。

健介は剣で突く速度を落とさぬうちに、剣から手を離れた。

ドラゴンの身体で突き出される剣は、普通にナイフを投げるのと大差ない速度だ。

ギリギリで後退を止めた魔族の首筋をざっくりと切り裂いた剣は、そのまま飛んで壁に激突して跳ね返った。

魔族の魔力防壁のせいで、首に突き刺さらずに逸れてしまったが、致命傷は与えた。

首を切られた魔族は、首から血を噴出して転げまわり、動かなくなつた。

他の魔族2人はその光景を見て啞然とし、思わず一旦距離を取って

しまった。

急所は人間と同じだ。

その間に、健介は剣を回収できた。

剣を手放した瞬間に2人に攻め込まれたら面倒だったのだが、それも杞憂に終わった。

「さて、さっさと死んでもらおうか」

健介はニヤリと笑って、先ず1人に集中して攻撃をかけた。

3人ではなく2人なら、片方を牽制しつつもう片方にだけ攻撃を集中する事は可能だ。

健介の攻撃の圧力は、ドラゴンの身体能力と魔力が乗っている。

普段、リア達と模擬戦をする時には使わない、本気のドラゴンの力を出している。

魔族としてその攻撃に晒されれば、そう何度も受けられるものではない。

集中攻撃を受けた魔族は、恐怖に顔を引きつらせた。

攻撃を開始してから数秒もしないうちに、健介の剣がその魔族の胸に生えていた。

こうなれば、ほぼ一方的である。

次の瞬間、攻撃の矛先を切り替えて、事態の推移についていけない3人目の魔族に剣を突き立てた。

その魔族は、恐怖よりも驚きで呆気を取られているような表情だった。

この3人の魔族は、ドラゴンの人型を明らかに侮っていた。

魔族のリーダーは予想外の出来事の連続で半分パニックになっていた。

見つけた人間達の中にドラゴンの人型が居たのはまだ良い。そこまでは対処可能だった。

だが、そこから先が予想外だらけだった。

ドラゴンの人型を3人で抑えて置きながら、この4人の人間の小娘達を倒して捕獲する。

その後、ドラゴンの人型を5〜6人で倒す。それで終了のはずだった。

人間の小娘達はズーク達の攻撃に対して、正に鉄壁の防御を誇っていた。

一体何者達なのか？

地上の学生ではないのか？

しかも、小娘の1人は我々魔族を2人相手に守りきっている。

他の小娘たちも、1対1で完全に守りを固めていた。

人間はこんなに強かったか？

今まで自分が戦ってきた人間達は何なのだ？

それにあのドラゴンの人型だ。

ドラゴンは単調な戦い方しか知らないはずなのに、双剣を使っていた。

そこで気付くべきだった。

只のドラゴンでは無いと。

小娘と戦っていて見る事は出来なかったが、我々魔族3人を2分

もしない内に倒したようだった。  
一体どんな戦いだっただのか？

「くそ！ 死ね！ 死ね！」

隣ではデリルが剥きになって小娘に斬撃を放っているが冷静さを欠いた攻撃に、相手の小娘は余裕を取り戻していた。  
金髪縦ロールの相手の小娘は不適に笑っている。

ズークの相手の小娘も状況が変わったと知って、剣の動きが良くなった。  
なっていた。

そして、後ろからドラゴンの人型がこちらに向かってくる。  
恐ろしくて叫び出しそうだった。

もはや目の前の小娘などどうでも良かった。  
しかし、これほどの手練の小娘達に下手に背中は見せられない。

この場を如何するべきか判断しなければならなかった。  
しかし、今まで余裕のある戦いしかして来なかった魔族に、この危機的状況を打開する判断を下す事は出来なかった。

リアの視線の端に、ランが走ってくるのが見えた。

「反撃！」

リアが号令を掛ける。

リアの号令で、一斉に防御から攻撃に転じて、ラストスパートをか

けた。

相手の防戦の動きに慣れた魔族はその動きに対処できず、一旦後ろに下がった。

そこに待っていたのは、健介が振る双剣だった。

魔族は突然の攻勢に気を取られ、後ろから健介が駆けて来るのに対応出来なかった。

後ろから2人の魔族は胴体を切断されていた。

双剣の一刀ずつで2人を切断すると言う、ドラゴンならではの強引で強力な斬撃だった。

その時点で、残り3人の魔族は死を覚悟した。

そして、前後から挟撃され、魔族は容易く殺されたのだった。

「危なかったわね。」

リアが肩で息をして苦しそうに言う。

多少は無理をしたのだろう。

顔色が少し悪い。

「死ぬかと思つた。」

クリンも荒い息をして座り込んでいた。

フィとエンドーラも呼吸を整えながら剣に寄り掛かるようにして立ち、黙って頷いていた。

今回は本当に危なかったと、全員が思っていた。  
ギリギリの戦いだった。

リアの作戦も実行できず、健介も魔族の予想を上回る手練た手腕に翻弄されてしまった。

今回勝てたのは、またしても魔族の油断によるものだ。

魔族がラン（健介）を侮っていないなかったら、あんな簡単に見破れそうな手段で殺す事は出来なかった可能性が高い。

そして時間稼ぎが成功し、リア達は倒されていただろう。

そうなれば、この狭い通路でドラゴン化できずに、魔族にタコ殴りにされて健介は死んでいた。

課題の残る戦いだった。

その場から少し離れた場所で1日休み、ダンジョンを出る事にした。

魔族8人を仕留めたのを連絡する必要もあるし、良い区切りだった。

それにしても8人分の魔族の首は重かった。

学校では件の魔族を倒した事で、表彰されてしまった。

長い間放置されていたが、ようやく退治されて学校関係者も胸を撫で下ろした事だろう。

生徒側で何とかさせるといふ方針は判るが、実際戦ってきたリア達にしてみれば、「難易度高過ぎ!」と言うしかない。

魔族8人は通常の生徒のチームでは対処不可能と忠告しておいた。

その後はダンジョンに行く事は無かった。  
やはりダンジョンに入ると、それだけ学校の授業を休む事になるし、女性4人のチームである。  
風呂に入れないのは地味に問題だった。

エンドーラも1回ダンジョンに潜って問題の魔族集団を退治で来て満足していた。  
日ごろの鬱憤を晴らせたと言う所だろう。  
今後は薬品研究に集中すると言う事だ。

クリンとエンドーラの薬品研究にリアとファイと健介も協力し、静かな時が過ぎた。  
ほぼ1年ほど、クリンとエンドーラの薬品資料を作る為の実験素材の加工や実験の手伝いをしていた。

しかしながらリア達の手伝い虚しく、薬品はあれど使い道が判明せず、と言う状態のままであった。  
こればかりは健介の知識でもどうにもならない。

そんな中でリアと健介が協力し、兵器工作のキスリン教官の協力を取り付けて、クリン用の持ち運び出来るゴーレムを作成した。  
それは一見すると人の骸骨の様にも見えるが、鋼鉄製の骨組みに専用の保護鎧を着けたものである。  
身長164センチ、重さは57キロだが、折り畳めるようになってるし、車輪を取り付け可能で移動に便利にしてある。

先のダンジョンでの魔族との戦いで、クリンがゴーレムを使えた

ら状況はもつと良くなっていたと考えた。  
以前から、クリンがダンジョンでゴーレムを使えないのは残念な事  
だとも思っていた。

そんな訳で、今回持ち運び出来る戦闘用ゴーレムを作ってみたのだ。  
リアと健介が暇だったからと言つのもある。

放課後の自主訓練の際、クリンにお披露目した。

「わ〜！ ありがとう〜！」

クリンは飛び跳ねて喜んだ。

子犬の様で微笑ましい。

クリンはそのゴーレムに触れて、ゴーレム魔法を使う。

クリンの操作でゴーレムが動き出し、立ち上がった。

ただの鋼鉄の人形だった時は感じなかったが、ゴーレムとして動  
き出したソレはかなり怖かった。

鋼鉄と言う素材は、土より遥かに威圧感がある。  
耐久力、攻撃力も格段に高いだろう。

クリンは特性を探るようにゴーレムを操作する練習を始めた。

歩かせるだけなら練習するまでもないのだが、戦闘に使つとなれば  
土ゴーレムとはまるで違った操作感になるらしい。

土のゴーレムと鋼鉄のゴーレムでは操作感は全く異なる。

土のゴーレムは間接と言うものがなく、その辺りは曖昧に曲げて行  
けば良かった。

鋼鉄のゴーレムは間接でしか曲げる事が出来ない。



操作感の一番の違いはそこにあった。

土のゴーレムと鋼鉄のゴーレムは重量的にはそれほど差が無い。土は意外に重いし、鋼鉄のゴーレムは骨格と補強用の鎧しかない。鋼鉄のゴーレムの方が若干重いか、場合によっては軽いだろう。重さ的にはなんら問題はなかった。

十数日してクリンが鋼鉄のゴーレムに慣れた様なので、リアと模擬戦をする事になった。

「手加減はいらないわよ？」

リアがクリンに言う。

挑発するように上から目線だ。

「今回は自信あるんだから！」

クリンはゴーレムを立ち上がらせて、リアに向き合った。

ゴーレムの動きは以前見た土のゴーレムよりも速い。

クリンの魔術の錬度が上昇している事もあるだろうが、鋼鉄のゴーレムの特性の効果でもある。

土の塊を曲げるより、関節で曲げる方が楽と言う簡単な理由だ。

クリンとゴーレムの予想以上の強さに、リアは気を引き締めた。

クリンはゴーレムにあえて武器を持たせていない。

鋼鉄のゴーレムは素手でも普通に鈍器である。

しかも、ゴーレムは素手の格闘家の如く、蹴りも出してくる。

土のゴーレムでは考えられない動きだった。

(面白い！)

リアは思わず笑みを浮かべた。

クリンの斬撃、ゴーレムの腕と足の打撃をリアは双剣で巧みにかわし、隙を伺う。

以前、シーリアがまだファイレイの身体に居た頃、同じようにゴーレムを駆使したクリンと模擬戦をした事があった。

あの頃はクリンとゴーレムの動きに乱れがあり、その隙を容易に付くことが出来た。

だが、今はそれが殆ど無い。

(隙が無いなら作れば良い。)

リアはゴーレムの動きを一瞬でも遅らせれば良かった。

隙とも言えない小さな隙は、ゴーレムの方にある。

リアはその隙を突いて、ゴーレムが蹴りを放つ瞬間に軸足を蹴りつける。

ゴーレムは転倒し、クリンはゴーレムを起き上がらせる為に、注意が逸れてしまった。

その瞬間に勝敗は決した。

クリンはリアを一瞬見失い、気付いたら首に剣を突き付けられていた。

「あつ」

クリンが涙目になってリアを見詰める。

「クリン、ゴーレムに頼ってちゃ駄目よ？」

ゴーレムが倒れたら、それを無視して攻撃に転じるくらいの気合を見せなさい。

でなければ、今のようにはやられるわよ?。」

リアが不味い点を指摘した。

クリンはゴーレムを使うとゴーレムに依存心を抱いてしまう。

リアはそこを突いたのだ。

「だって〜」

「だってじゃなの!」

「あつ〜」

ダンジョンで魔族8人を倒して来たチームのメンバーとは思えないやり取りをして、見物人達を無駄に和ませる2人だった。

ゴーレムには一長一短ある。

ゴーレム魔法が耐えきれなくなる程のダメージをゴーレムに与えれば、魔法が解除されゴーレムは倒れる。

それ以外は術者を倒すか、魔法の効果の範囲外へ引き離せば良い。逆にそれが出来なければ、ゴーレムは一定時間だけ、不死身の化身と同じである。

ゴーレムを使う上での弱点と言えば、常に魔力を消費する事。

常にゴーレム操作を意識しなければならぬ為、精神的に疲労する

し、他の事に関する注意も削がれる事。

これらの弱点がある為、ダンジョンでのゴーレム使用は現実的ではなかった。

これらの弱点を克服するか、弱点にならない範囲で使用する事で、ゴーレムを有効に使うことが出来る。

また、ゴーレムの速度は術者の魔術錬度やゴーレムの素材や構造によって変わって来る。

だから、一概に遅いとも速いとも言えない。

しかし、クリンが鋼鉄のゴーレムを使った場合、かなりの速さである。

さすがに、クリン自信の全速力には付いていけないが、1ランク下の魔術戦士並の体捌きを見せる。

使いどころによつては極めて強力な武器となるが、逆に使いどころを間違えると被害が増す、難しい兵器と言える。

クリンとエンドーラの薬品研究が長引いた為、リアの説得で他の選択科目、魔術研究を選択させた。

エンドーラも学校卒業には覚沢を言っている場合では無いと思ったようで、素直にリアの助言に従った。

そして、リアの指導の下、念話魔法の開発を開始したのである。

念話とは思念通話ともいう。

これも転生魔法の応用であった。

精神の表層意識だけを相手に送る魔法であり、送る方も送られる方も危険は無い為、魔術構成も簡単である。

7枚の小冊子程度の魔道書があれば、視認出来る相手に表層意識の言葉を送る事が出来る。

もつと複雑にして魔法陣も使用する事で、電話ボックスならぬ、念話ボックスが作れるのだが、そこまですると開発に時間が掛かる。それに健介が影でサポートするのも限界があった。

そんな訳で、トランシーバーのような念話魔法を開発させる事にしたのだ。

エンドーラはそんな事は気付いていないだろう。

リアが言葉巧みに念話魔法の開発に誘い込んだのだった。

## 第20話 召喚状と武闘大会

召喚状がやって来た。

事実上、リア宛であった。

王女の誕生際に急遽、武闘大会を開く事にしたらしい。

その参加者として、ダンジョンで魔族8人を倒したチームの代表者を指定したのだ。

チームの代表者は当然シーリアである。

「うーん」

「如何したんですの、シーリア？」

乗り気の無さそうなシーリアにエンドーラが訊ねる。

エンドーラなら意気揚々と参加するだろう。

「私こういうの興味ないのよねえ。」

リアが困ったように言う。

王族からの召喚状であり、断るならそれなりの理由が必要だが、それなりの理由が思いつかない状況だった。

出来るならエンドーラに変わってやりたいのだ。

エンドーラだって参加したいだろう。

今は何も言わないが、参加できるのがシーリアだけと知って非常に残念がっていた。

「選ばれたなら仕方ありませんわ。」

潔く参加しなさい。」

エンドーラはリアに忠告した。

「私達も応援に行くからね！」

クリンはリアを励ますように両手を握った。

「私とクリンは駄目よ？」

エンドーラがクリンに水を差す。

「え〜どうして〜？」

クリンが口を尖らせる。

「私とクリンは念話魔法の研究があるでしょう？」

武闘大会を見に行く暇はありませんわ。」

最近、クリンの躰け担当はエンドーラになっていた。

担当を決めている訳ではないが。

出会った最初の頃に「腰巾着」と言ってしまったのを気に病んでいた彼女は、その後、チームメイトになってもクリンに対してはちよつと引け目を感じていたのだ。

プライドの高いエンドーラらしい一面である。

しかしその後、クリンの小動物的な態度がエンドーラを刺激し、エンドーラの突っ込みと言う形で躰するようになった。

エンドーラはちよつと厳しいのだが、今回はまだ優しい方だった。

健介から見れば、厳しいお姉さんと甘えん坊の妹がじゃれ合ってい

る様にしか見えないのだが・・・

武闘大会は予選と本選があり、予選は5日後から10日間。本選は20日後から始まる。

シーリアは本選からの参加となるが、本選は1人1日1試合と言う前提で、5日掛けて行われる。

本選参加者は16人、その1人名がシーリアに決定されている。他の参加者についての情報は無い。

武闘大会などが開かれれば、街道は混雑するだろう。

王都までの往復で8日は見て置く必要がある。

そして、本選試合が5日。

学校から観戦に行くだけでも大体13日の日程になる。

リアは少なくとも本選前日には行く必要があるし、試合終了後も場合によっては滞在する可能性もある。

例えば、上位入賞したりしたら、王族からのパーティーへの招待と言う事も考えられるのだ。

( 適当に負けちゃおうかな・・・ )

リアは不埒な事を考えていた。

本選7日前、宿舍の部屋でリアと健介が荷物を纏めていた。

フィ、クリン、エンドーラは留守番である。

フィには転生魔法から転移魔法を構築した時の知識があるため、クリンとエンドーラに助言が出来る。



その為、留守番させる事になった。

健介が留守番しても、助言するのは難しい。

クリンとエンドーラは研究中は殆ど一緒に居る為、宿舎に戻らないとそう言う話は出来ないのだ。

それに王都へフィを連れて行くのは、何となく憚られる。

それはリアも同様のようで、意見が一致した。

今、健介はエンドーラが部屋に来たので定位置であるベッド脇に立っていた。

エンドーラはドラゴンの中身が人間に入れ替わっている事を知らないし、この事を健介達は知らせるつもりはなかった。

クリンは何となく巻き込んでしまったが、良く考えれば禁書を使った犯罪者にしてしまったのだ。

なので、エンドーラを巻きこまない為、秘密を漏らさない為、話すことは無い。

それはともかく、健介は彼女らへの想い、自分の気持ち之急に判った気がした。

目の前で旅の荷物を見ながらワイワイ騒いでいる彼女達。

リアは健介がこっちの世界に来てからずっと一緒に居た。

クリンは少しだけ出会いが遅かったに過ぎない。

その後、いつも一緒に居ながら彼女達に色々と指導してきた。

言い換えれば、彼女達を育てたと言っても良い。

親と言うほどのものでは無いが、師の様なものであり、彼女達は愛弟子と言えた。

エンドーラもリアとクリンに良い影響を与えてくれる良い弟子だった。

（常に一緒に行動していた上に、肉体と精神の性別と年齢が一致しなかったから混乱したのだろう。）

健介は自分の精神状態を分析した。

肉体と精神の性別が一致しないのは今も同じだが、ドラゴンの身体では性別による精神の混乱は起きない。

平たく言えば、色恋沙汰の情動と言うものが無い為、そう言う方面では冷静な判断が出来る。

無論、精神的には男である健介は、彼女達を魅力的に感じている事を否定出来ない。

ただ、それが恋愛と言う性的な情動へと変わらないだけだ。

だから、リアとクリンがラン（健介）が男と知った後、着替えをする時に

「後ろ向いて！」

と言われるようになったのは、何気にショックで、とても悲しかった。

それ以前は一緒に裸になった仲なのに・・・  
部屋を追い出されないのがせめてもの救いだ。

（パンツと一緒に洗ってくれない父親の切なさって、こつこつものか？）

と意味不明なことを考えてしまう健介だった。

精神的ダメージが大きかったらしい。

クリン、エンドーラ、ファイに見送られて学校を船で出発し、町からは馬車で王都まで移動した。

王都までの街道は、武闘大会の為に馬車の往来が多かった。

王都に着くと道が更に混雑している為、馬車を降りて歩く事にした。

王都と言ってもそれほど道が整備されている訳ではないようだった。

途中、幾つもの傭兵団の旗を見かけた。

彼らも武闘大会に出場するのだろう。

傭兵団には腕の立つ魔術戦士が居る。

個人の傭兵では模擬戦で鍛錬が出来ない為、傭兵団の魔術戦士の方が一般的には錬度が高い。

個人で傭兵をしている魔術戦士は、実力に余程の自信があるか、バカな者だけと言われている。

その為、大抵は傭兵団に入るか、数人のチームを組むのが普通だ。

傭兵団は王国から認定されると、専用の紋章とその旗を賜る事が出来る。

無論、認定には審査があり安くは無金も掛かる。

しかし、あると無いとでは活動範囲に大きな差が出る。

このような武闘大会に出場できるのも、公認の傭兵団だからだ。そうでなければ、盗賊集団と見分けが付かない。

少なくとも、公認の傭兵団の傭兵は行儀が良い。

下手な騒ぎを起せば認定が取り消され、最悪の場合、盗賊扱いされて討伐されるのだ。

逆にそう言う立場であるから、下手な王国軍の兵士より人当たりが良く、人気があったりする。

健介が想像していた傭兵団のイメージとは大分違っていた。

周囲の状況によって、人の活動と言うのは変わっていくのだろう。

ヴァージル領での例の大盗賊団の際にも、リアの父ヘインツが近場に居る公認の傭兵団を探していたらしい。

大盗賊団もヴァージル伯が傭兵を雇った事を知れば、逃げ出しただに違いない。

傭兵団を雇う前に、当時のリア（健介）、ファイ（リア）、クリンが討伐してしまったが。

王城の門番に召喚状を見せて、城から出てきた使用人に案内されて待合室に入った。

周囲には様々な身なりの者がいて、謁見の間への入室を待っていた。

入って来た小娘と魔物らしい者を見て皆驚いていた。

待っている間も、チラチラと視線を寄越してくる。

リアと健介はもう慣れていたので、放っておいた。

呼び出されて謁見の間に入っていくと、赤の絨毯ではなく、鮮やかな青の絨毯が敷かれていた。

日本では古来、紫が高貴な色とされていた時期もある。

青が高貴な色とされていても不思議は無い。

或は、他の意味もあるかもしれない、青なら浄化とかがありうる。

召喚された当事者ではない健介は、そんな事を考えつつ、玉座に座る王とリアの会話を聞いていた。

「良くぞ参った。シーリア。」

挨拶もそこそこに、国王が話しかけてきた。意外と気さくそうだ。

「今回の武闘大会は歴戦の手練の集まる厳しい大会だ。そなたも士官学校では天才と名高いと聞く。存分に力を発揮して見せよ。」

「は！」

とそれで謁見は終了だった。

まあ、王と学生との謁見など、こんなものだろう。

リアを武闘大会の出場者にしたのも、面白半分に違いない。それも一興、と言う程度だろう。

謁見の間でも、健介は注目を集めていたが、敢えてそれを言及する者は居なかった。

王や脇に座っている宰相らしき人物なども興味深そうに見るが、それ以上の言動はなく淡々と進められたのだった。

健介としてはちょっと拍子抜けである。

謁見の間を出ると、大会出場の手続きをする為に別の部屋へと連れて行かれた。

そこで武闘大会の詳細を知ることが出来た。

賞金、1位金貨1000枚、2位金貨500枚、3位金貨100枚、4位金貨10枚。  
総額金貨1610枚。  
ヴァージル領の年間予算額は大体金貨4500枚前後。  
石炭の販売で更に上昇中である。

リアと健介はこの金の使い方には啞然とするしかない。  
ちよつと高すぎるだろう・・・  
金銭感覚、狂ってないか？

しかし、さすがにリアは伯爵令嬢。

「上位に食い込めば、お父様に資金援助出来るわね。」

思考を切り替えた。  
遅いお嬢様だ。

確かに、今のリアなら上位に食い込む事は可能だろう。  
本選の組み合わせ次第だが。

その組み合わせは初日にくじ引きが行われるのでまだ判らない。  
本選出場者の名前は判っているが実力が判らない。  
要するに、何も判らない訳だ。

判っている事と言ったら、本選出場者16名中9名は、王国軍の精鋭から選ばれた魔術戦士である事。  
6名が外部参加の予選勝ち上がり組みである事。  
そして、特別参加のシーリアである。

健介は王国軍の精鋭がどの程度のものか、興味があった。

今までリアを見て来たし、士官学校の他の天才も見てきた。その延長線上に居るであろう王国軍の精鋭。

一体どれほどのものか？

健介でなくても興味深い所だろう。

手続きを済ませると、王国によって確保された宿へと向かった。豪華とは言えないが十分に良い宿で、それなりの料理が出る食堂もあった。

貴族用の宿ではなく、上層の商人用といった感じである。

2階の廊下や室内は絨毯も敷かれており、足音に対する配慮もされている。

用意された部屋は2人部屋で結構広く、暗めで淡い色調の模様の壁紙が部屋の雰囲気を落ち着いたものになっている。

「本選初日まで、のんびりしましょう。」

リアはベッドに大の字になっていた。それを見て健介は苦笑する。

磨かれた鎧を着けた、見目麗しい伯爵令嬢なのだが・・・

鎧を着けたまま、しかも無防備に大の字になるのは如何なものかと、説教したくなる健介だった。とりあえず。

「鎧くらい脱いだらどうだ？」

と言って置く。

持ち運ぶのが面倒だから着て行くと、リアは鎧を着て馬車に乗っていた。  
学校でも1日中鎧を着ている事が多い為、脱ぐと落ち着かないのだそうだ。  
それに鎧には防音と保温の魔術付加が施されている為、鎧特有の金属音はしないし、温度も一定に保たれて快適なのだ。  
この状態を例えて言うなら、冬場のコタツから出られない状態と言えなくも無い。

リアは生返事を返して、ノロノロと起き上がって鎧を脱いだ。  
鎧の下には要所にクッションが付けられた厚手の服を着ている。  
リアは健介を見て含み笑いを浮かべつつ、何かを問うように片方の眉を上げる。  
その態度は「見たいの？」と言っている様に見えた。  
一抹の寂しさと悔しさを感じつつ、健介はリアに背を向けるのだった。

本選初日の早朝、王都にある闘技場の脇で抽選が行われた。  
遠巻きに見物人がワイワイと集まってきていた。

16人の参加者が順にくじを引き、対戦表が埋められていく。  
特別参加のシーリアは最後でくじは引かない。

どうやら初戦は傭兵と当たる事になったようだ。

「先ずは1勝とるわ。」

リアは気合が入っていた。



1回戦のリアの順番は第4試合。  
午前中の最後の試合だ。

抽選が終わると、午前組みは闘技場の控え室へ向かい、午後組みは解散した。

初日は4試合ずつ、午前と午後で分けて行う。

闘技場はほぼ円形で、直径150メートルほどの施設だ。

その中央に1辺が50メートルほどの石畳の台が設置され、その周囲には参加者が負傷で死なないよう治療の為に魔術師が待機している。

それ以外は審判役の者が1人居るだけで、闘技場の闘技場は比較的閑散としている。

これは不正防止と参加者の安全確保の為でもある。

上位入賞の賞金額があのような高額な為、不正行為を行う者はいる。特に参加者に対して危害を加えようとするのは常套手段なのだ。

控え室には警備兵が居るし、皆手錬である為、そう簡単に不正は出来ないので心配要らない。

しかし、闘技場の周囲に人が沢山居ると何か起きた時に犯人を特定し難く、対応が遅れてしまう。

その為、闘技場は最低限の人数にしているのだ。

1試合最長30分でその後休憩が30分という繰り返し。

その間、リアは控え室で待機していたので、第1〜3試合を見る事は出来ない。

試合前は参加者保護の観点から、控え室から出る事は出来ないのだ。

健介も魔物の為、監視者が付いていた。

すぐに仲良くなって、午前中の試合を闘技場の観覧席の端で眺めている。

「シリア譲は天才と言われているが、どれほどの実力の持ち主なのか？」

その監視者はまだ若い魔術戦士で、上級指揮官の大佐だという名はブロンクと言う。

上級指揮官でもこういう仕事をするのかと訊いたら、実力があるから上級指揮官なのであって、実力が無い者に頼れない仕事は当然上級指揮官自ら出向く事になると言う事だった。

なるほど、健介は納得した。

ドラゴンの監視は下手な兵士には任せられないと言う事だ。

1人しか居ないのは、意味不明だが。

「あんたも上級士官学校の卒業生だろう？」

ブロンクの探りをはぐらかすように問う。

「ああ、だが俺は天才では無い。」

天才で無い者に天才の力は判らない。

それはそうだ。

「多分、あんたとそう変わらないと思うがな。」

シリアは他の人間より、ちょっと成長が早いだだけだと思っぞ？」

他の人間にしてみれば、ちょっとどころでは無いから天才なのが。

天才が一般人と発想が違おうと言う事も、その成長速度が異なる為にもその見方が変わる為と考えれば、やはりそう変わらないと言える。まあ、アインシュタインの様な、ある種の障害を持った天才は様相が異なるのだろうか。

ブロンクは健介の意見に考え込む中、試合は進んでいった。

健介はリアに匹敵するような参加者だけをチェックしようと思っていたが、午前中の参加者にはそれらしい人物は居なかった。

確かに実力はあるようだが、意外にも注目すべき人物がいない。

(王国軍の精鋭というのも、案外大した事は無いのか?)

健介は一瞬そう判断しそうになったが、リアの天才と常日頃からドラゴンの健介との模擬戦を繰り返している事実を思い返して思い止まった。

王国軍の精鋭と言えど、人に比べて反則的強さをもつドラゴンの人型と、日々模擬戦をしているリアと比べてはいけないのかもしれない。

シーリアの天才を際立たせている一番の要因が健介自身であることに、今更気付いた健介であった。

「始まるぞ。」

ブロンクの声に健介はリアの試合が始まった事を知る。

いつの間にか考え込んでいた健介は視線を上げると、リアが舞台上がっている所だった。

相手は傭兵である。  
様々な戦いを経験しているであろう傭兵は、実力が格下でも油断は出来ない。

傭兵とリアが向き合い、試合が始まった。

リアは速攻を掛けた。

試合が始まると同時に全速で傭兵に突撃する。

相手より経験が少ないリアとしては、相手に飲まれる前に決着をつける算段だろう。

傭兵はいきなりの素早い攻撃に、全速で後退して剣を弾こうとした。

しかし、リアの速度に間に合わない。

雪崩を打つような双剣の連撃を捌き切れず、足を纏れさせて転倒した。

そこでリアは傭兵に剣を突き付けて、試合は終わった。

ほんの数秒の出来事に、一瞬闘技場は静まり返った。

次の瞬間、闘技場は声援と拍手で煩いほどになった。

リアは顔をしかめている。

リアの全速の初撃を受け止めるとは、なかなかの手錬と言える傭兵だった。

健介も何度か受けた事があるから判る。

アレをいきなりやられて剣で受けるなど、早々出来るものではない。

(傭兵も侮れないな)

健介は傭兵の質の高さに感心した。

生き残る為の戦いを極めようとする傭兵の強さを垣間見た思いである。

午後の試合前の休憩時に、食事をしながらリアと午前中の試合について話をした。

監視役のブロンクはまた明日に來ると言って帰った。リアと一緒に居る時は監視は不要と言う事らしい。

「油断しなければ、勝ちが決定的だと思うが・・・」

「そう、良かった。」

じゃあ、午後組みの人に強い人が居るかどうかね。」

リアは少しホツとした表情で笑う。

食事は参加者とその関係者用の食堂で比較的空いていた。

一般用の食堂は人が溢れており、順番待ちの行列が出来ている。

午前組みの参加者の実力が、見た通りであれば準優勝は確実だが、勝負はやってみなければ判らない。

食事を終えると、闘技場の観覧席へ向かった。

参加者と関係者用のスペースがあり、そこに腰を落ち着ける。

その場所には午前中に勝ち残った他の3人と関係者もあり、探るような視線を送ってくる。

シーリアはダークホースと言った所だろうか。

天才とは言えまだ小娘、そう言う認識をされていた事は想像できる。

リアは澄ましてお辞儀をして座り、健介は彼らを一瞥して、無表情でリアの後ろを守るように立った。

なにやらヒソヒソと話をしているようだったが、試合が始まるとそちらに集中した。

第5試合は見応えある試合だった。  
試合自体は1分もせず終わっていたが。

「彼、強いわね。」

リアが呟いた。

「ああ」

健介もリアの後ろから相槌をうつ。

第5試合の勝者は実力を出し切らずに余裕で勝っていた。  
その洗練された戦いぶりは、王国軍の精鋭の名に恥じないものだった。

要注意人物出現である。

「グレグセン」

リアは彼の名前を覚えたようだ。

第6試合と第7試合は、第1〜3試合同様、試合そのものは面白いが、要注意人物は居なかった。

本日最終試合の第8試合は、グレグセンと同等の者同士と思われる  
実力者の戦いとなった。

それも王国軍の精鋭と傭兵の対戦という非常に面白い試合となっ  
た。

闘技場は激しい戦いに飲まれ、静まりかえっており、剣戟の音が絶  
えず響いていた。

傭兵は巧みに相手の攻撃をかわしつつ、隙を突いて反撃する様に  
戦う。

王国軍の精鋭は滑らかな動作で素早い斬撃を放ち、傭兵の反撃も綺  
麗にかわしている。

戦い方は全く違うが、力量は均衡しているように見えた。

だが、時間を掛ければ魔力による差が出てくる。  
実力が拮抗していれば、魔力の消費は激しい。

余程の自信が無い限り、時間を掛ける事はしない。  
ある意味それは、チキンレースとなる。

長期戦を避けたのは精鋭の方だった。

一旦退いてフエイントを掛けて膠着状態を抜けようとした。

それを待っていたのかの様に傭兵は相手の懐に飛び込んだ。

精鋭兵士は咄嗟に後退して斬撃を放ち、何とか傭兵を突き放す事が  
出来た。

それを機に、傭兵は今までと違う戦い方に切り替えた。

「ほう」

リアが身を乗り出す。

今まで柔軟な受身で戦っていた傭兵は、鋭い突き主体の戦い方に変わった。

これまでと攻守を逆転させていた。しかし、今度は明らかに傭兵が優勢だった。

精鋭兵士は若干速度が落ちており、傭兵の突きをかわしきれず、少しずつ手傷を負っていた。その表情に焦りも見える。

傭兵は淡々と、しかし、確実に追い詰めていった。傍目にも精鋭兵士は限界に近い事が判る。

そして、精鋭兵士は降参した。

「レッソールか」

リアが傭兵の名を覚えた。

本選初日を終えて、宿へと帰った。

王女の誕生際の為の武闘大会である為、王都の中は何処もお祭り騒ぎである。

大通りには夜になっても露店が並び、良い匂いの屋台料理が並んでいた。

宿の食堂では本選初日の話題で持ちきりだった。

リアと健介が食堂に入ると、注目を集めて静まり返ったが。



2人で静かに食事をして、部屋に戻った。

良い宿なのだが、食堂は一般に開放されていた。ちよつと裕福な者なら入れるくらいの食堂であり、品が悪い訳ではないが、嗜好が集まる場所だ。

「ふう、これじゃゆっくり食事も出来やしない。」

リアが不満をこぼすしてベッドに横になった。

「後4日だ、我慢しろ。」

健介は苦笑して諭す。

リアは健介と2人きりになると愚痴をこぼす傾向にある。エンドーラとクリンが居ると、先にどちらかが愚痴をこぼすからと考える事も出来るが。

一休みしてから、大衆浴場へと向かった。

王都だけあって、一般向けの大型浴場があるのだ。しかし、健介は入れないので、外で待つ事になる。魔物だから仕方ない。

リアがさつぱりしてから宿に戻ると、さつさと寝る事にした。

怪我をしても午後には回復して翌日の試合に影響を与えない為、試合は午前中に行われる。

午前と午後の試合があるのは初日だけだ。

翌日、闘技場へ行くとリアはそのまま控え室へ、健介はブロンク

を伴って昨日と同じ場所に陣取って試合を見物する。

「グレグセンというの、強いな？」

ブロンクから情報が聞けるかどうか試してみる。

「情報は渡さないよ？」

聞けなかった。

別に期待していた訳でもないが、ちょっと悔しい。

2回戦第1試合、これは激戦ではあったが、リアの相手としては不足と言う事が判る試合内容だった。

明日の相手はこの試合の勝者だから、今日の試合に勝てば、2位は確実だろう。

決勝戦でグレグセンが来るかレッソールが来るか……

第2試合、リアの試合だ。

試合開始後、リアは相手の出方を待った。

相手はリアが速攻を掛けると思っていたようで、開始と同時に身構えていた。

観客席に失笑が響く。

相手は羞恥に赤面して打って出た。

リアは淡々と攻撃をかわし、少し隙を見せて相手が切り込んでくる瞬間に合わせて、その剣を弾き飛ばした。

剣を失った相手は、リアに剣を突き付けられて降参した。

観客席に声援と野次が半々で響いていた。

試合を終えたリアと合流して、参加者用の観覧スペースへと向かう。

「明日も似た様な相手だ、決勝でグレグセンかレツソールのどちらかが来るから、良く見て置け。」

健介が報告と注意をする。

第3試合と第4試合が、それぞれグレグセンとレツソールの試合だ。

リアもそのつもりである。

しかし、第3試合と第4試合はどちらもグレグセンとレツソールの実力を見れるような試合ではなかった。相手が弱すぎた。

「参考にならないわ。」

リアがぼやく。

相手もリアの事は良く知らないだろうから、条件は同じだ。試合を見ただけでも有利と言える。

本日の試合が終わって、昼食を取った後は、お祭りを見て回る事にした。

初日は試合を見て夕方になってしまったが、今日は午後から丸々時間がある。

露店の食べ物で食事をしながら、リアは珍しくアクセサリーなどを見て回っていた。

女の子だから当たり前なのだろうが、少し前まではアクセサリーなど見ている余裕は無かった。

あの目的の為に只管努力してきたのだから。

その目的が達成され、今は心置きなくお洒落も出来る。

健介に女の子のお洒落は判らないが。

リアはファイ、クリン、エンドーラのお土産としてアクセサリーを買ったようだった。

健介はリアの側に居て、リアに近寄って来ようとする男共を追い払っていた。

(悪い虫は近寄らせん！)

何処かの頑固親父の様な事を思いつつ、銀色の瞳で睨みを利かせる健介だった。

ちなみに、王都にドラゴンが来ている事はそれほど知れていないので、大っぴらに威圧感を解放する事が出来ない。

人工島近くの町よりも、遥かに人口密度が高い為、騒ぎになるとパニックを引き起こしそうなので、睨むだけにしておいた。

夕方に宿に戻った。

「・・・これは・・・」

健介はリアが土産に買ったアクセサリーを手にとって絶句してい

た。  
昼間は悪い虫を追い払っていたので、何を買ったのか知らなかったのだ。

それは呪われたアイテムと言うのに相応しい色と形状をしていた。確かに、アクセサリーの露店にはそんな物があった、見た記憶にあったが、まさかリアが買って来るとは。

何と言うか、芋虫と言うか蛭と言うかウミウシと言うか、そんな感じのものだ。

黒っぽい紫という色調も何と言うか・・・

「どうしたの？」

リアが絶句している健介を見て何事かと問う。

「いや、これはグ・・・」

「ぐ？」

リアは首をかしげる。

「いや、なんでもない。」

健介は敢えて指摘しない事にした。

リアが楽しそうにしているのだから、それをぶち壊してはいけない。今はまだ。

リアにこんな弱点があったとは、人間何かしら弱点はあるものだと、しみじみ思うのであった。

とりあえず、このアクセサリーを受取るフィ、クリン、エンドーラ

の反応が今から楽しみだ。

「はいこれ。」

リアが買ってきたアクセサリーの1つを健介に突き出す。

「なに？」

「これはミコトの分、大事にしてね？」

リアがニツコリ微笑む。

健介は呪われたアイテムを手に入れた。

翌日、第3回戦の日。

昨日と同じように、闘技場へと向かった。

第1試合、リアは難なく勝利した。

相手も勝負は見えているとばかり、やる気を無くしてしていた。闘技場は野次の嵐になった。

「やる気が無いなら棄権すればいいのよ。」

リアはぶつくさ言っていた。

第2試合は注目の試合だ。

観客席もそれと知っていて、静まり返っている。グレグセンとレスソールの試合である。

試合開始と同時に、両者とも突撃して剣をぶつけ合った。これまでの試合に無い気合の入れようだ。互いに正念場と思っているのだろう。

レックスは以前の試合とはまた違う剣技を披露していた。多才な男である。

恐らくこれが本来の彼の剣筋なのだろう。攻守バランスの良い剣技である。

グレッグセンは以前レックスが見せた攻撃主体の剣技に似た剣技であった。

だが、攻防一体の剣技となっていて、隙が無い様に見える。相手の攻撃に合わせて受け流しながら攻撃しているのだ。

全体としてはグレッグセンが少し押しているように見えた。そして、リアと健介は唸っていた。どちらも明らかにリアと健介よりも技量は上である。

レックスはジリジリと下がっているが、淀みなく攻撃と防御を繰り返している。

グレッグセンも淡々と攻撃している。

この試合ではレックスが戦況を変えた。グレッグセンの攻防一体の攻撃が出来ない強打を叩きつけて足止めした。

そこから、レックスは強打の斬撃を撃ちまくった。一見、見境無く暴れているように見えるが、グレッグセンは反撃出来ないで居た。

レックスはグレッグセンの剣技の弱点を見抜いたのだ。

だが、強打の斬撃は1撃1撃に時間がかかり剣を合わされてしま  
う為、有効打には至らない。  
レツソールの斬撃の軌跡は、巧みに受け流す事が出来ない場所に放  
たれているため、グレグセンも剣を合わせるしかない。  
今度はグレグセンがジリジリと後退している。

このままレツソールがグレグセンを追い込むと思われたが、一転、  
レツソールが一気に後退して棄権した。

魔力切れ寸前と言う事らしい。  
傭兵らしい引き際だった。

明日の対戦相手が決まった。  
グレグセンである。

試合が終わると、リアと健介はすぐに宿へ戻った。  
作戦会議である。

グレグセンの剣技の弱点は判ったが、リアの武器はそれを突ける  
物ではない。

そして剣技の技量は相手が上。

「どつしたものが」

健介は試合を思い返して、リアの勝算を考える。

リアもベッドに座って考えている。

「1つだけ有利な点があるとすれば、リアの速度だ。」



健介が指摘する。

グレグセンよりもリアの方が若干速い。

いつもリアを見ている健介だけが気付ける程度の速度差だが、僅かな速度差でも実力が肉薄していれば勝敗を分ける要因になる。

普段よりも魔力を使って身体強化を強めれば、短時間でも五分以上の戦いが出来ると健介は考える。

相手も同じ事をしてくればまた不利になるが、それまでの間に勝機が見出せるかもしれない。

『戦は勝機』とも言っし。

「速度かあ」

リアは目を閉じて考えてみる。

自分の最大の速度でグレグセンと戦えるかどうか。

「良くて五分かな？」

リアが自信なさげに言った。

技量の差の壁は厚い。

とりあえず、リアはイメージトレーニングをして明日に備える事にした。

下手な対策を練るより、イメージトレーニングで動きを覚えた方が  
良い。

健介もグレグセンとレツソールの剣の技量には唸るものがあつた。  
ドラゴンと言えど、人間より上回っていると断言出来るのは、身体  
能力と魔力である。

そもそもドラゴンは剣を使わないから、剣技で劣るのも仕方ない。

リアと身体を入れ替えたあの時点から、徐々にリアの剣技が健介を上回って行った。

健介は凡人である為、天才のリアに引き離されている。それどころか、クリンとエンドーラにも負い付かれている。

クリンとエンドーラに引き離されていないのは、一重に模擬戦の練習量と濃さが原因だ。

リアをはじめ、クリンとエンドーラもだが、リアに匹敵する才能を持つ先輩生徒達とも模擬戦をしているのだから、嫌でも上達する。

健介の場合は、剣の技量が多少劣っても、他の性能の差で強引に勝てるのだ。

しかし、リアは人間である。

技量の差を埋めるには、長い年月の訓練しかない。

翌日の闘技場で、決勝の試合が行われようとしていた。上級士官学校からの特別参加者シーリア対上級指揮官准将グレッグセン。

決勝であり、異例の組み合わせであり、美女とごついオッサンの戦いであり、色々な意味で注目を集めていた。

2人が舞台に上がり、試合が開始された。

リアは今回は速攻で行く事にした。

受身で勝てる相手ではない。

リアの突撃をグレッグセンは軽く受け流した。

グレッグセンのカウンター気味の反撃を双剣の片方で受け流し、もう一方で反撃する。

それは体捌きでかわされた。

リアは徐々に速度を上げた。  
身体強化の魔力を増やし、魔力制御に耐えられるギリギリまであげる。

しかし、その状態では10分と持たない。

そこまでして、ようやく五分を超える戦いに持ち込めた。  
徐々にリアが押している。

(今の内に勝機を！)

リアは今の状態が長続きしない事は承知の上だ。  
以前ドラゴンを倒した時のように、一瞬の勝機があれば良い。  
双剣を振りながら、相手の隙を見逃さないよう集中した。

グレグセンは正直驚いていた。  
目の前のシーリアと言う女性は、なかなか手強い。  
さすが上級士官学校で天才と言われているだけある。

グレグセンにしてみれば技はまだ荒削りと言えた。  
しかし、身体強化をして補うその才能。

グレグセンも今、本気で防戦をしていた。  
まだ少し余裕はあるが、反撃出来る程では無い。  
しかし、このまま待てば、相手は自然に敗北するのは見えている。  
恐らく8分前後、長くて15分は持つまい。  
これまでの戦闘経験から、そう推測する。

（それまで待てば良い。）

グレグセンは女性を叩き伏せるより、魔力切れで戦闘不能になるように仕向ける事にした。

5分が経過していた。

リアは疲労を感じつつあった。予想よりも疲労するのが早い。

グレグセンに隙は無い。

双剣をどんなに叩きつけても、付け入る隙が作り出せない。

（焦るな）

リアは自分に言い聞かせる。

相手の隙を突くのであって、相手に隙を見せてはいけない。

リアは可能な限りの最大の速度を維持して、攻撃を続けていた。

グレグセンは感心している。

これだけの長い間、シーリアは隙を見せない。

こちらの隙を作る事が出来ずに焦っているだろうに、シーリアも隙を見せない。

大した精神力だ。

（部下に見習わせたいものだ。）

グレグセンは部下を愚痴る。  
それだけ余裕がある。

シーリアは見るからに疲労している。  
魔力切れの前に疲労で倒れるかもしれない。

(もう少しだな。)

グレグセンはそのまま待つ事にした。

7分経過していた。

リアは急速に疲労が身体を支配して来るのを感じていた。  
これまで限界まで身体強化を引き上げて戦った事は無かった。  
魔族8人と戦った時でさえ、3分程度で終わっていたのだ。

(身体が重い……)

リアは歯を食いしばって、剣を振った。

だが、もはや足元もふらつき、まともに剣も振れていない。  
疲労から一瞬、集中が途切れた。  
後はもう、あつという間だった。

急速に身体から力が抜け、意識も遠のいていった。

リアが気付いた時、白い部屋の天井を見上げていた。  
匂いと雰囲気から、医療室である事が判った。

「気付いたか。」

健介がリアの顔を覗き込む。

「負けちゃった？」

「ああ。」

「いい勝負だった。」

「そっか。」

リアの初めての敗北らしい敗北であった。  
完全になを行かれた。

「気にする事は無い。」

相手はリアより20年は長く訓練しているからな。  
リアなら2・3年で勝てるさ。」

健介が予測を言う。

リアの才能と素質なら、グレグセンでもそれくらいで勝てるはずだと。

今回、それだけの片鱗を見せた。

「俺はそんなに年寄りじゃない。」

「まだ20代だ。」

健介の後ろからグレグセンが無然と言う。

「何だ、居たのか？」

健介はニヤリと笑ってグレグセンを見る。

グレグセンもニヤリと笑い返してきた。

「調子はどうかね？」

「ええ、もう大丈夫です。」

「そうか。」

あまり無茶をするものではない。

私と戦った傭兵を見ただろう？

アレを見習う事を勧めるよ。」

グレグセンは傭兵の生き残る戦い方を薦めた。  
死に急いぐ様な戦いはするなと。

「はい。」

気を付けます。」

リアは素直に頷いた。

「ではな。」

君が上級指揮官になったら、同僚だな？」

グレグセンはそう言って笑いながら立ち去った。  
それを見送ってから健介も言う。

「俺もグレグセンの意見には賛成だ。  
生き残れ。」

生きていれば俺が助けに行く。」

「うん。」

リアは嬉しそうに笑い、それから泣いた。

リアが目覚めたのは夜中だった。

リアはまだ動けなかったので、そのまま医療室に泊まった。

翌朝、疲労を回復したリアと共に3位決定戦を見に行った。

3位は案の定、レツソールに決まった。

午後に表彰式が行われた。

1位のグREGセン、2位のシーリア、3位のレツソールまでが表彰される。

4位は賞金が出るが表彰はされない。

国王がそれぞれにメダルと賞金の目録を手渡した。

グREGセン、シーリア、レツソール、それぞれの時に観客席から声援が送られてくる。

シーリアの時が一番大きい声援だった。

「シーリアちゃん！」

という野太い声援も聞こえる。

一躍アイドルである。

リアは挨拶を終えると、気恥ずかしくてそそくさと闘技場を後にした。

そして、賞金目録を持って城へと向かう。



賞金の金貨500枚を、王国の支払い証書にして貰った。

この支払い証書とは、所謂小切手の事だ。

王都でのみ換金出来ると言う不便さはあるが、盗まれても支払い対象者が支払い元にしかな金が渡らない。

リアはその証書をヴァーシル領の父ヘインツ宛にして送った。

金貨500枚の現物を送るのは危険すぎるし、この様な大金は王都で支払い証書を使って決済する事が多い。

例えば各領地間で取引する際に、多額の金が動く場合などだ。

ヴァーシル領の石炭の他領への販売も、王都で支払い証書経由で行っているかもしれない。

ヘインツならうまく使うだろう。

リアは宿に帰って荷物を纏めると、すぐに帰る事にした。

「何だ、もう帰るのか？」

「うん、もう用は済んだし。」

リアは少しそわそわしている。

変な注目を浴びてしまっているのが耐えられないらしい。

いつもの注目とは違うので、落ち着かないのだ。

そうでなくてもリアは淡泊だから、程度の差こそあれ早く帰ることだろう。

リアと健介は馬車を手配して、王都を逃げるように去った。

城からパーティーの招待状を持った使者が宿に来たのだが、既に

出発した後だった。  
使者が王に報告すると

「忙しいのう。」

と言っただけで、ほぼ無視された。

武闘大会で準優勝したとは言え、まだ学生だ。

政治に引き込む様な人物とは見做されていないのだ。

学校に戻って、夜、宿舎のリア達の部屋に集まった。

「お土産があるの。」

リアが荷物からアクセサリーを取り出す。

例のアクセサリーをフィ、クリン、エンドーラに渡した。

「ありがとう」

フィは普通に受取った。

「・・・」

クリンとエンドーラは無言で何とも言えない表情を浮かべていた。

「リア？」

私達を呪うつもりですか？」

エンドーラが訊いて見る。

「え？」

「可愛いでしょ？」

リアは訳判らないと言う風に首をかしげる。

クリンとエンドーラは顔を見合わせた。

そして、何か納得したように頷きあった。

エンドーラは徐にリアの肩に手を置いた。

「今度こういう物を買う時は、誰か他の人に選んで頂きなさい。」

エンドーラは心からの忠告をするのだった。

リアはクリンとエンドーラから、リアが選んだアクセサリが如何に悪趣味かを説明されて赤面した。

そして、部屋の隅で笑っているラン（健介）に気付いて睨むのだった。

「謀ったわね？」

「何のことやら。」

「このアクセサリは仰せの通り、大事にするよ？」

健介はアクセサリを見せる。

リアはアクセサリを取り戻そうとしたが、健介はすぐに懐に入れた。リアは恥ずかしくてアクセサリを回収したいらしいが、呪いのアイテムはそう簡単に引き剥がせないのである。

クリンとエンドーラも、リアの反応を見てアクセサリを仕舞い込

んだ。

さすがシーリアチーム、素晴らしいチームワークである。

「むう、今に見てなさい。」

リアは悔しそうに言うのだった。

ちなみにフィもこっそり隠したが、リアの命令で没収されてしまった。

やはり盟約には逆らえないらしい。

可哀相に、フィはアクセサリを気に入っていたらしいのに。

## 第21話 上級指揮官

クリンとエンドーラの魔術研究は、フィの助言を得ながら順調に進んでいた。

クリンとエンドーラの魔術構成に関する理解も深まって、既に念話魔法の魔術構成の下書きのような物は出来ていた。

健介は後2ヶ月もあれば終わると予測した。

転移魔法に比べてもずっと単純な魔法だし、クリンとエンドーラも十分に理解しているようだった。

もう健介がサポートに出ることも無いだろう。

そう思っていたら、1ヶ月を過ぎた辺りで完成させてしまった。

魔術構成をいじくるのはクリンとエンドーラの方が向いているのかもしれない。

念話魔法は慣れが無いと使いにくいものだったが、有用性が高い事は明らかである。

視認できる相手、距離は使用する術者によるが凡そ20〜200メートルの者と意思疎通が出来る。

一度相手をロックオンしておけば、間に遮蔽物があるうと電話と同じように話す事が出来る。

同時に複数の人間と話せないのが、トランシーバーと異なる。

望遠鏡と手旗信号 or 光信号の組み合わせとは、適用範囲と用途の住み分けも出来る。

この国は望遠鏡と念話魔法という情報ツールと、転移魔法と言う移動手段を手に入れたわけだ。

その全てがリアチームから出た訳で、この意味が判るものがこの国に居ればどうなる事か？

いまさらに健介は不安を感じていたが、それは杞憂に終わった。

地位、名誉、権威、金、そういったモノが判断基準の上層貴族達は、個人の資質やチームワークと言うものを軽視する傾向がある。一部の貴族には見る目のある者も居るが、目の届く範囲は限られている。

特に軍部と言うのは閉鎖的であるため、軍に介入出来る程上層にいる貴族で無ければ、リアチームの情報を詳細に知ることは出来ない。

望遠鏡、念話魔法、転移魔法は軍の機密であり、それがリアチームの作成したものだと言う情報も機密事項である。

よって、健介が心配するような貴族にもそれが知られる事は無かった。

尤も、望遠鏡の存在自体はキスリン教官が売り込んだ為に、上層貴族全体にその存在を知られる事になったが。

それもキスリン教官の復習のようなものだったのだろう。

聞く所によれば、キスリン教官は大分蔑ろにされていた様だったから。

ともあれ、クリンとエンドーラが卒業資格を得たところで、4人揃って学校を卒業する事にした。

卒業と言っても卒業式があるわけではなく、校長室で認定証書を受取っただけだ。

実にさっぱりしている。

上級士官学校に入ってからほぼ4年。  
健介がこっちの世界のリアの身体に入ってから8年弱。  
改めてリア、フィ、クリン、エンドーラを見た。

(この子達も、成長したな。)

感慨に浸る健介だった。

卒業した4人は、そのまま王国軍特務部隊へと配属された。

4人は王都の近くにある軍の施設に入った。

4人とも高級指揮官だが、階級が同じという訳では無い。

高級指揮官は3階級ある。

上から順に、將軍、准將、大佐である。

その下は、少尉、兵長、一等兵がある。

魔術戦士は基本、少尉となる。

魔術の使えない一般兵は、兵長止まりが通例である。

また、義勇兵を募る場合があり、その場合の階級は二等兵となる。

さらに、傭兵の場合には、その時々によって異なる。

傭兵団の場合はその隊長を少尉や、場合によっては大佐待遇にする場合もある。

実力や規模によるのだ。

リアを准將として、その配下にフィ、クリン、エンドーラが大佐として入る事になった。

さらに、魔術学校の卒業生が30人ほどと通常の兵士100人弱が配下に入る。

ちなみに、上級士官学校のチームが一緒の部隊になるのは、チームで卒業した場合には普通らしい。

その方がチームワークを期待出来ると言う事なのだろう。個別に卒業すると、個別に隊への配属が決まるらしい。

「チームで卒業してよかったね！」

クリンは嬉しそうだった。

とりあえず、待機期間という休みが得られた。

今は特務部隊の宿舎でリアと2人である。

「いきなりの大世帯だね。」

と健介。

リアは高級指揮官であるから、結構広い1人部屋である。

使用人用の部屋があるため、そこに健介も泊まる事になっている。

他の3人の部屋も、そこそこ広いからフィヤクリンの部屋でも良かったのだが、リアの部屋に泊まることになった。

ドラゴンを下僕にしている事は上官も配下も知っているが、リアがその筆頭と思われるし、その方が良いと判断していたからだ。実際にはドラゴンの中身は健介であり、盟約による制限は受けていないので、下僕では無いのだが。



「本当ね。」

いきなり130人以上の人の命を預かる立場になっちゃった。」

リアの階級からすると130人はまだ少ないのだが、今まで仲間しか居なかった所から130人を任されるのだ。

多少は不安になって当然である。

しかし、今後はさらに増えていくだろう。

「元々リアは伯爵令嬢だ。

上級指揮官にならなくても、多くの人の命を左右する決断を下す立場になった事は同じ。

その覚悟は有ったんだろう?」

健介はリアに窘め半分、励まし半分に言う。

「そうね。」

そう言う意味では変わらないか。

より直接的に関るようになっただけね。」

リアが微笑んで頷く。

「ああ。」

リアならどんな任務でも、立派にやり遂げるさ。

フィとクリンとエンドーラ、そして、俺も側にいるのだから。」

健介はリアの肩に手を置いて励ました。

シリアは知識と経験さえ伴えば、健介よりもずっと優秀なはずだ。

シーリアの身体の中に居た健介にはそれが判る。

気になる事があるとすれば、シーリアの性格が若干引っ込み思案気味であることだ。

それが良いか悪いか、判断はしかねるが。

「ありがとう。」

リアが嬉しそうに微笑む。

「お前達4人は色々忙しいだろうから、俺が魔術戦士達を鍛え直しておくよ。」

いざと言うときに、魔術戦士が使えないと困るからな。」

健介が提案した。

フィ、クリン、エンドーラは側近として部隊運営に関するから、一々訓練に関する暇は無いだろう。

少なくとも最初の内は。

健介はドラゴンとして飼われているだけだから、暇なのだ。

「そうね。」

お願いするわ。

一般兵の方は、どうしましょう?」

リアが思案しながら言う。

「訓練は彼らの中から何人が適当な人を見つけて、訓練を指導させるようにしよう。」

「うん。」

判ったわ。

「ミコト、あなたが居てくれると助かるわ。」

リアが少し態度を軟化させて、甘えたように言う。  
最近は2人きりになると、以前教えた偽名で呼んでくる。  
本名を名乗るタイミングを完全に逸していた。

「ああ、当然だろう?」

健介がニヤツと笑う。

「それと、俺は部隊の部外特別戦力となっているから、直接の指揮権がないんだよ。」

「だから、命令書を書いてくれ。」

「俺が魔術戦士達と兵士達に命令を出せるように。」

健介が思い出して催促する。

「ああ、そうだったわ。」

「今すぐ書くわね。」

リアが机に向かって書類を書き始めた。

人間の軍の組織内で、下僕のドラゴンが命令を下すなど、前代未聞の話だろう。

命令書なしでは従う訳がない。

脅しても良いが、いきなり問題を起こす事は無い。

「はい、命令書。」

「余り苛めちゃだめよ。」

リアがからかうように言った。

「苛めるなど人聞きの悪い。」

健介が苦笑する。

「あなたの訓練は厳しいから。」

リアは少し寂しそうだ。

まだ卒業して間もないのに、あの頃が懐かしいのだ。これからは、いつも一緒と言う訳に行かない。

「それは、実戦で命を落とさないようにする為だよ。俺達はドラゴンや魔族にだって勝つただろう？」

健介は寂しそうに顔を伏せるリアの頭を撫でた。

「ええ、そうね。」

あの頃が懐かしいわ。」

リアは笑顔を見せたが、ちよつと涙目だった。

リア達は上級指揮官として、貴族や他の上級指揮官との会合に参加していた。

新米であり女性であるリア達は、しかし、ドラゴンを使役する天才として知られており、からかう者は居なかった。

（もう少し貴族の名前を覚えておくんだった。）

リアは少し後悔していた。

上級指揮官や貴族の名前を訊いても、それがどこの貴族なのか殆ど判らなかつた。

大抵の場合、問題にはならないが、やはり貴族社会ではちょっとした事が命取りになりかねない。

救いはエンドーラだ。

彼女は一応、貴族の名前と勢力を大まかには把握していた。

クリンはリア同様に、他の貴族には疎かつた。

フィは平民出身であり、今の中身は元ドラゴンのランであるから、訊くまでもない。

リアはエンドーラに小声で貴族の説明を聞きながら、会合で話をしていた。

貴族社会でのこうした会合は、一般的にはパーティー形式で行われる。

ここは軍なので、パーティーと言うほど華やかなものではないが、堅い会議と言う感じではない。

ちょっとした立食パーティーのようなものである。

今は平時であり、話題の半分は盗賊と治安に関して、もう半分は世間話である。

盗賊団はその土地の貴族が相手をするが、以前、ヴァーシル領に出現した大きい盗賊団などの場合には、王国軍に応援要請が来る場合がある。

王国軍には上級指揮官が指揮を取らない、通常の兵団があり、大抵はその兵団が応援に駆けつける。

それでも解決しない、手に負えない相手であれば、上級指揮官が指揮を取る特務部隊が出撃する。

つまり、リアの参加している会合は、単なる定期報告会みたいなもので、必要ではあるが退屈なものだった。

ちなみに、この会合は軍人が出席する為のもので、政治を動かすパーティーとは異なる。

上層貴族が政治の為に行うパーティーに参加出来るのは、將軍のみである。

准将以下は特別な理由が無い限り参加は許可されない。

健介は命令書を持って、まずは一般兵の兵長達を集めた。

彼ら一般兵は年齢が様々だ。

志願した者と徴兵された者。

その中で兵長は、数年以上の経験があるベテランになる事が多い。

兵長は8人。

それぞれ10人前後の兵を纏めているリーダーだ。

「私はシリア准将の命を受け、兵士の訓練の指揮を取る事になった。

兵長諸君には、各々配下の兵士の訓練を指揮してもらおう。

訓練方法は私が指示した方法で行ってもらう。」

と健介は説明し、一旦言葉を止める。

兵長達の反応は様々だ。

真摯に頷いて聞いている者。

嫌そうな顔をしている者。

まともにこちらを見ていない者。

相手が下僕のドラゴンだと思って舐めているのだろう。

「定期的に兵長率いるグループ模擬戦を行う。  
模擬戦で無様な戦いをしたグループの兵長には罰則があるからそのつもりで。」

と健介が説明を追加する。

すると、まともに聞いていなかった者も、健介を見た。罰則があるとなれば訊かずには居られないだろう。

健介は兵長達を訓練場へと連れて行った。

「まず、これから兵長であるお前達に訓練を施す。  
それを持って、お前達が配下の兵に訓練を施すのだ。」

健介は兵長を見回す。

兵長の中には明らかに運動不足の者が居て、規律の乱れに繋がりがねない。

兵長も下っ端だから前線に赴くのである。

運動不足では話にならない。

しかも、健介に抗議をして逆らおうとするものが居た。

「命令違反をするのか？」

健介が問い睨みつける。

睨まれた兵長は黙り込む。

「勘違いしているようだから教えてやる。」

命令違反は例え訓練中とは言え厳罰に処する。

「ここは軍であり、子供の遊び場では無い事を思い出せ。」

健介が兵長全員を見渡して言う。

健介はここに来る前に軍内部の訓練時の罰則などを調べてみたが、特別な規定は無かった。

健介としては訓練中は鉄拳制裁で済ませるつもりでいたが、それを厳罰と評してしまえば、相手も迂闊な事は出来まい。

大人しくなった兵長達を、健介は扱いた。

準備運動から始まり、剣を持って走らせ、剣の型に沿った素振りをさせ、模擬戦を行わせる。

決して難解でなく、特別でもない訓練だ。

極普通の兵士の訓練である。

ただ1つ、模擬戦の真実度、つまり、どこまで本気でやるかと言う度合いは、普通の兵士達の訓練とは違った。

より実戦に近い、殆ど殺し合いの戦いを模擬戦で行わせる。

「死なない限り、魔法で治療してやる。

もつと本気で戦え！」

健介が怒鳴る。

ドラゴンである健介に怒鳴られて、兵士たちは怯えつつ従っていた。

彼等のような一般兵は魔法が使えない為、ここまでの訓練はしないのだ。

魔術戦士でもここまでの訓練をする者は少ない。

兵長達の配下の訓練時は、魔術戦士の中から治療の為の人員を派遣する予定である。

一通りの訓練が終了すると、兵長の半数は訓練場に倒れて荒い息



をしていた。

「これから1日おきにこの訓練を行う。

兵長から配下の兵士へ訓練をするのは、1月後からとする。

次回は明後日だ。

昼過ぎに、この訓練場に集まる事。」

と健介が訓練場を去る。

次の日、魔術戦士の者達を同じ訓練場に集めた。

この訓練場は、一応、上級指揮官シーリアの兵団専用である。

彼ら魔術戦士達は、魔術学校からの卒業生でベテランは居ない。

故に、年齢も全員15〜18歳と若い。

「私はシーリア准将の命を受け、兵士の訓練の指揮を取る事になった。

まずはグループ分けからする。

2つのグループに分かれてくれ。」

健介が軽く挨拶し、指示する。

魔術戦士の者達は、兵長よりも素直に従った。

ダンジョンに潜って魔物と戦って、一般兵よりも魔物に接しているからだろうか。

或は、リア、フィ、クリン、エンドーラが同じ魔術戦士であるから、その下僕のドラゴンであるから敬意を払っているのか。

2つのグループに別けたのは、一般兵の治療組みと訓練組みに別

ける為だ。

1日おきに治療組みと訓練組みを交代する。

これで、一般兵も模擬戦でより実戦に近い訓練が出来る。

魔術兵士の訓練内容も、基本は一般兵と同じである。

1つ違うのは剣での修行以外に、魔術だけの修行もある事だ。

魔術兵士なら魔術戦も訓練しなければならない。

少数の魔術兵士で戦う場合には、魔術による魔法の行使が行われる事は無い。

魔法を使うよりも、走りよって剣を振った方が速いのだ。

だが、多人数で戦う場合には、魔法の援護射撃を上手く出来るかどうか戦局を左右する。

以前ダンジョンでドラゴンと戦った際に使用した魔術付加した札も、魔法の援護射撃と同等のものである。

札の使用は、魔術を使うよりも若干速い。

魔法によって1〜数秒ほどの差がでる。

その差がドラゴンとの戦いでは致命的な差になるのだ。

魔術戦士同士の戦いとなれば同じ事が言えるが、クリンやエンドーラレベル以上になると札さえ使う暇が無い。

ドラゴン相手の場合、数人居るから札が使えるのだ。

ともかく、健介の指導で魔術戦士のメンバーを訓練する。

彼らは健介の見たところ、魔術学校では中の下程度の実力だった者達だ。

中の中以上の者達は他の部隊へと回されたのだろう。

(やる事が汚いな。)

健介はそう思いながらも、それ程気にした訳ではない。

魔術学校の状況は知っていた。  
中の下であっても、大半は素質がないのではない。  
やる気の無さが問題なのだ。

(ならば、やる気が出るようにしてやるまで。)

健介はにやりと笑う。

夕方、リア達幹部と健介が食事をしている時、兵士達の状況を説明した。

「一般兵はともかく、魔術戦士が中の下以下と言つのは、私達、舐められているのかしら?」

エンドーラが堅い声で言う。

「私達も新人ですからね。」

クリンは特に気にしていないようだ。

「それで、何とかなりそうなの?」

リアが健介に問う。

「問題ない。」

ざっと見たところ、素質は上の中の中の上程度はあると思つ。  
これから扱き上げる。」

健介は何でも無い様に言う。

「そう、なら私も訓練に参加して指導しようかしら。」

エンドーラが燃え始めた。

「いや、まだエンドーラの出る幕ではない。

今は彼らの実力を底上げするだけで精一杯だ。

エンドーラに限らず、主達のようなエリートとの模擬戦は、彼らに自信を失わせるだけだ。

今は、私の指導が主達の命令であると言う事にして置いてくれるだけで良い。」

健介はエンドーラが来るのを阻止する。

今はまだ健介の扱きだけで、魔術戦士達は苦しいだろうから。

「それは問題ないわ。

今日早速、問い合わせが来たわよ。

魔物が訓練指導しているのはどう言う事だ？ ってね。

私が指示したから問題ないと言っておいたわ。」

リアは笑う。

その後、リア達幹部は会合での内容を反芻し、意見交換をした。

今のところ、国内では大きな問題は無く、隣国がその向うの国と戦争状態に成りそうだと言う事だけが懸念事項だった。

「パレノルがツガノを落としたら、我が国も狙われるわね。」

エンドーラは腕組みしながら難しい顔をしている。

ツガノは隣国、パレノルはツガノを挟んで反対にある国だ。一応、ツガノとは通商同盟は結んでおり、友好関係にある。

「戦力的にはパレノルの方が大きいけど、ツガノの要塞があるからそう簡単には抜かれないでしょう。」

「いずれツガノの要塞も落ちるでしょうけど。」

問題は、我が国に援助要請が来るかどうかよね。」

リアが地図を睨みながら言う。

「援助要請が来たとして、いつ来るかも問題よ。行ってみたらツガノは陥落なんて事になっていたら洒落にならないわ。」

クリンは戦争の話に不安そうだ。

「援軍派遣でもう一つ問題は、その規模よ。」

我が国も、距離が離れているとは言えシヨミルとは15年前までは戦争していたのだし、

戦争は終わったと言っても、協定も同盟も結ばれていないのよ？  
いつ襲われるか判らないから、援軍の規模も抑える必要がある。」

とリア。

シヨミルとは少し離れた隣国。

15年前まで戦争をしていた相手国。

リア達にとっては、あまり記憶に残らないほど小さかった頃に終わった戦争の話だ。

「そうよね。」

この15年で要塞でも作って置けばよかったのに。」

エンドーラが少し憤慨したように言う。

それまでの戦争で国が疲弊していた為、そんな余裕が無かったのが実情である。

逆に言えば、シヨミルより国力の回復が遅ければ、次は陥落の危険もある。

だが、それが判っていても、貴族は腐敗するもの。  
魔術学校や上級士官学校などは存続させていたが、質は低下している。

軍の規律も乱れつつあり、軍部内でも利権争いが水面下で行われている。  
その1つの結果が、シーリア部隊への魔術兵士の割り当てに影響しているのだ。

「無い物は仕方ないわ。」

今は自分達の仕事をしっかりやりましょう。」

リアがそう締めくくって、解散とした。

リア達幹部の仕事は、国内外の情報収集と戦略立案、そして、盗賊狩りなどの応援がたまにあるくらいだ。

と言っても、独自の情報網は無いので、軍の情報部から情報を得るしかない。

それ以外の時間は、自主訓練と言う事になる。

夜、リアと健介が部屋で2人になると、健介が提案する。

「リア、今いる一般兵100人の中から、参謀を育てる必要があると思う。」

健介はこの国の軍の現状を見て、ちよつと不安になったのだ。つまり戦争でリア達を死なせたくない。

「参謀ね。」

でも、参謀は幹部がなる事になってるんだけど。」

リアが人差し指を唇に当てながら言う。

「そんな規則に足を引つ張られていたら、勝てる戦も勝てないぞ。優秀な参謀が1人いるだけで、戦の展開は大きく変わる場合もある。」

お前たちは勇将として見栄えは良いがな。

参謀が居た方が色々便利だぞ。」

健介が頭の固さを指摘し、助言する。

「そうね。」

言いたい事は判るわ。」

リアは記憶を掘り返し、シーリアの身体に健介が入っていた時の記憶を見る。

それは、用兵の模擬戦での出来事。

用兵の教官をリアだった健介が見事な戦術で打ち破ったのだ。

戦はただ真正面から戦えば良いのではない。

相手の策に乗せられれば、死ぬのは自分なのだ。

「なら、参謀の希望者を募ってみるか？

5人くらいは候補として取り立てて、最終的には2人に絞るのが良いだろう。」

無論、それ以上に優秀な者が居れば、3人でも4人でも良いがな。」

健介が考えていたの事を提案する。

「ええ、参謀の最初の選出は任せるわ。」

他に何かある？」

リアがまだ何か言いたそうな健介を見る。

「1つ。」

軍の情報部にコネを作ってくれ。

1人で良いから。」

と健介。

「情報部？」

困ったわ、難しそうね。」

とリアが困り顔だ。

情報部は色々噂されているし、ガードが固い。

「まあ頑張れ。」

これからはそうやって人材を引っ張り込んだり、コネを作ったりする必要が増えるだろうから、今の内に慣れた方が良い。

それにリアは実力、名声共にしっかりしているから、意外と簡単



に捉まるかもしれないぞ。」

と健介。

「うーん、頑張ってみる。」

リアは自信なさげに答えた。

リアの名声の大半は、健介が中にいた時の話だから自信が無いのは仕方ない。

「大丈夫だ

リアなら出来るよ。」

健介が励ました。

リアは頻繁に情報部へと顔を出し、情報部員との接触を取ろうとしたが、そう簡単にはいかなかった。

仮にも諜報部員が簡単に発見されたら、それはそれで問題がある。

リアは悩んだ。

そんな時、ふと気配を感じた。

町中では探査魔法はあまり使わないから、つけられても殺気が無いと判らない。

だが、明らかに自分を注視している人物が居る事に気付いた。

リアは気付かない振りをして町中を歩いた。

意識すると確かにその気配はついて来る事が判った。

何者か？

軍情報部の側でつけられるなど、ちょっと考えにくい事だが、敵な

ら捕まえて目的を吐かせなければ成らない。

リアは町中を散歩するように歩きながら、公園へと向かった。

昼間の公園は、町の人が散歩をしたり、子供が遊んだりしている。

リアは公園の出店で、焼き菓子を買って食べながら歩く。

公園の中を兵舎へと向かって歩き、途中の林を抜ける。

後ろの気配は・・・1つだけ。

木に隠れながらついて来ていた。

(ここで捕まえる。)

リアは気配からざっと距離を把握して、振り返って一気に距離を詰めた。

走り出した時には両手に双剣を握っている。

後ろに居た男は慌てて逃げ出した。

その男は町中では目立たないようにフード付のマントを被っていた。

魔術が使えないらしく、走る速度は普通の人よりも若干速い程度。

すぐにリアに追い抜かれて道を塞がれる。

「何者だ!?!」

リアが剣を突き付ける。

「ま、待て、味方だ!」

男が両手を目の前で振って言う。

「味方?」

まあいい、そこに伏せる。

早くしろ!」

リアが男を地面に伏せさせる。  
後ろから男の手を後ろで縛り上げた。

リアはその男を近くの情報部へ連行した。

尋問は情報部の得意分野だし、リアを尾行すると言つ事は上級指揮官を狙つたと言つ事だ。

他にも仲間がいる可能性がある。

「不審者を見つけた。

尋問を頼む。」

リアは受付の情報部の女性に言う。

「はい、あ……」

受付の女性隊員は驚いて言葉を途切らせる。

「やあ、はははは」

リアに後ろから押えられている男が情けないく笑う。

「えっと、シーリア殿、その人はうちの諜報部員です。」

驚きから立ち直った女性隊員がリアに言う。

「は？」

今度はリアが驚き顔で声を上げる。

「だから、味方だつて言つたじゃない。」

男が振り返つて言う。

「黙れ！」

リアは男を押さえつけるてに力を込めた。

男は溜まらず前のめりになる。

「こいつがここの諜報部員なのは本当なのか？」

リアは女性隊員を見て言う。

「はい、私もここに居る隊員は皆知っています。」

女性隊員が顔を引きつらせている。

仲間の隊員が捕まったのは面白いが、この状況は笑えない。

シーリアがマジ過ぎる。

そんな感じた。

「では、何故私を尾行していた？」

リアが当然の事を問質す。

「それは私が説明しよう。」

女性隊員の後ろに中年の男性が現れた。

「あなたは？」

リアはその男を観察するように見詰める。

「王国軍諜報部第1隊隊長ミュシーだ。  
君の尾行は私の指示だ。」

ミュシーが面白そうにリアに押えられている男を見ている。  
リアは上級指揮官である為、ミュシーより格上だ。

「理由をお聞かせ願えますか？」

リアが困惑顔で問う。  
尾行される言われはない。

リアは一応貴族だから、目上の者、年上の者には丁寧にした。

「なに、大した意味はない。  
訓練ついでに噂に名高いシーリア殿の実力を試そうと思ってね。  
その男はうちの古株なんだが、さすがシーリア殿。  
簡単に見つけられましたな。」

ミュシーはざっくばらんに話す。  
リアは深くため息をついた。  
はた迷惑な話である。

「ちょっと、そろそろ放してくれない？」

男が苦しそうに言う。

リアは手を放した。

男は背筋を伸ばして息を吐く。

「随分惨めな格好だな？ ゼンデイ

今日はお前の奢りだぞ。」

ミュシーがニヤニヤしながら男に言う。  
どうやら賭けをしていたらしい。

「判ってる。」

早く解いてくれ。」

ゼンデイが女性隊員に言う。

女性隊員が苦笑しつつ縄を解きに掛かる。

「ミュシー殿、二度とこの様な事の無い様をお願いします。  
場合によっては殺していたかもしれないので。  
では、失礼します。」

リアはまだニヤついているミュシーを睨んで言う。  
返事を待たずに情報部を出た。

健介の兵士達の訓練は、大体順調に進んでいる。  
ドラゴンに訓練を指導されるといふ不満は徐々に無くなって来ている。  
少しは職業軍人意識があるのだろう。

参謀に成りたい者を募集して、9人の応募者が集まった。  
健介は9人に試験をする事にした。

1人ずつ部屋に呼び、質問をする。  
インタビューという訳では無い。

戦略や戦術に関する知識から、具体的に戦場の状況を説明して、そこで何をすべきかを質問した。その問答の内容で適正を見るのだ。

それで残ったのは4人だけ。

他の者は参謀と言うものを嘗めているとしか言い様の無い答えだった。

教え込めば、多少は使えるのかもしれないが、教えなくても才能だけでそれなりの答えを返した者が4人居たのだ。その4人を慎重に育てれば良いだろう。

夕食の席で、リアが昼間の事を皆に話した。

フィとクリンは笑い、エンドーラは怒っている。

「エンドーラ、落ち着きなさい。

今回はあれで決着した事です。」

リアも苦笑しつつ、エンドーラを窘める。

「リア、あなたは甘いよ。

私達、新人だからって嘗められてますのよ?」

エンドーラの目が釣りあがっている。

「新人は嘗められるものですよ。エンドーラ」

クリンには大人らしい意見を言う。

言われたエンドーラはちょっと悔しがった。

「今後は皆気を付けた方が良いな。  
リア以外にも尾行されるかもしれない。」

健介は警告した。

「見つかったのに、また尾行するかな？」

とフィ。

「するでしょうね。」

何が目的か知らないけど、その目的が達成されるまでは。」

リアは情報部が意味も無く尾行をすることは思えなかった。

「それでは、尾行を捕まえて縛り上げて送り返して差し上げましょう。」

ふふふふ」

エンドーラが怖い顔で不敵に笑う。

リアとクリンは苦笑し、フィは面白そうにエンドーラを見ている。  
フィは意外と大物かもしれない、中身がドラゴンだけに。

健介は紙の束を出す。

「これを見てくれ、参謀候補を4人選んだ。

俺が見る限り、参謀としての素質がある者達だと思つ。」

健介は紙の束を渡して皆に回覧させる。



ハモ、ネヒル、ジューム、レグクムの4人。  
皆、一般兵からの抜擢である。

回覧し終わると

「今後はその4人に用兵を教えて、大規模な模擬戦でもして経験を  
積みませれば良いと思う。」

健介が今後の予定を提案する。

「それは私達も同じね。」

リアも同意する。

「そうですね。」

大人数を指揮した事、無いですものね。」

エンドーラも頷いて同意した。

## 第22話 外交

翌日、注意していたエンドーラが尾行を察知した。

「性懲りも無く・・・」

エンドーラが呟き、口元に小さく笑みを浮かべる。

その頃、他の場所に居たクリンとフィの方にも尾行がつき、2人も尾行に気付いていた。

「あら、クリン、フィ、あなた達も？」

エンドーラが先に来ていた2人に言う。

そこは情報部の建物の受付の横。

クリンとフィが捕まえた尾行者を引き渡していた。

エンドーラが引っ立ててきた尾行者は、ボコボコにされていた。

「エンドーラ、ちょっとやりすぎじゃ・・・」

クリンがその様子を見て言う。

「いいんですのよ。」

殺されなかっただけマシなのですから。」

エンドーラはにべも無く言う。

しかし、エンドーラの言う事も尤もである。

町中とは言え、他国の諜報員がないとは断言できない。

いや、町中だからこそ、他国の諜報員がいる可能性がある。自国の諜報員と他国の諜報員を見分ける事など出来ないのだから、下手な事をして殺されても文句は言えないのだ。

その後、出てきたミュシー隊長にエンドーラ達、と言うより、エンドーラ個人が小1時間に渡り苦情を申し立てた。

「ま、まあまあ、今後はこのような事が無い様に注意しますから。」

ミュシーがエンドーラの苦情に辟易している。

「ふん、うちの指揮官に報告して正式に抗議しますから。」

エンドーラがニヤツと笑った。

ミュシーは顔を引きつらせた。

昼過ぎからリア達と健介が、ハモ、ネヒル、ジューム、レグクムの4人の参謀候補に用兵を教えた。

健介は時々一般兵と魔術戦士の訓練を見に出向き、助言をしている。

ハモ、ネヒル、ジューム、レグクムの4人はさすがに飲み込みが早かった。

ファイはともかく、クリンやエンドーラよりも作戦立案に関する才能は高いようだ。

健介が望んで選んだとおり、発想が柔軟で、相手の心理を突いて来る。

エンドーラが悔しげな顔をしていた。

「エンドーラ、そう悔しがらなくても良いじゃない。  
適材適所よ。」

彼らがより良い作戦を立ててくれれば、兵士も無駄に死ななくて済むわ。」

リアが面白そうに微笑む。

エンドーラは傭兵でもそれなりに切れるのだが直情的な為、簡単に裏をかかれるのだ。

「判ってるわよ。」

それくらい。」

エンドーラは苦笑する。

戦略も戦術も用兵の内容であるが、固定化された知識では余り役に立たない。

勝利を掴む為には、勝機と兵の士気が重要な要素になる。

勝機は待つものではなく作るものだし、作る為には兵の士気を高めておく必要がある。

兵の士気を高めておく為に、兵糧は確実に確保しておくのは当然として、兵装を整える事や戦前までの訓練も重要である。

この様に、戦いにおける準備から実際の戦いに至るまでの全てに関して、用兵として考える。

その事をリアは説明し、具体的な方法と用例を挙げていった。

夕食時、エンドーラが情報部の尾行の件について、リアに報告した。

「リア、あなたからガツンと言った方が良いですよ。  
このまま嘗められるのは癪ですわ。」

エンドーラが不機嫌そうにフォークを肉にぶっ刺して言う。  
あれだけやっというて、まだ足りないらしい。

「そうね。」

ここまで無礼な事をされては黙ってはいられないわね。  
明日にでも、ミュシーと話してみるわ。」

リアはエンドーラの様子に苦笑する。

「ついでに、コネを作っておくことを忘れずに。」

健介が釘を刺す。

「この程度の事で借りられるかしら？」

リアが少し不安げに紅茶に口をつけた。  
彼女も上級指揮官になって色々と仕事をこなしているが、やはり慣れない内はプレッシャーを感じるのだろう。  
少し弱気になっているようだ。

「まあ、今回の事は切欠だ。」

シーリア部隊の隊員の監視を、シーリアの許可無くするのは甚だ無礼な行為だろう？

そもそも、情報部の人間が尾行しているのを見つけたのも問題

になる。

本来見つかつてはならないのに、4人とも尾行が見つかっている。これらの事を突けば、向うも話しくらい聞くだろう。」

健介はリアだけじゃなく、他の者にも聞かせるように助言をする。フィモクリンもエンドーラも、人の上に立つ人間だ。人脈を作るノウハウを自分なりに持っておくのは良いことだ。

「そうかもしれないわね。考えてみるわ。」

リアは少し元気になったようだった。

数日後、リアはミュシーとゼンディに一応の協力関係を取り付ける事に成功した。

彼らの言い分は、情報部独自に査定をしていたらしい。

尾行に気付くかどうかは評価の1つでしかなく、リア達の個人の履歴、出身地と家の状況なども調べてあるそうだ。

情報部としては当然の事で、軍内部、特に上級指揮官ともなればスパイが紛れ込むのと影響が大きい。

そう言う危険要素を持っている、或は、持ちそうな人物をチェックする為の作業をしていると言う事だ。

だから、他の上級指揮官も同様に調べられていて、今回新しく設立されたシーリア部隊のチェックが行われた。

そんな説明を受けて一応の納得をしたリアは、その後も色々話を聞いた。

他の部隊の数や編成、国内外の情勢、そして、情報部のこと。健介の助言によって、リア自身は一切偽らず、駆け引きはしない事にしていた。

相手は情報部の人間、武門のリアは下手に小細工せず、真正面から向き合えばよい。とりあえず、少し親密な関係を気付く事が出来た。

そんな事をしている内に、シーリア部隊に他の部隊からの転属して来た者がいた。

「へへへ、今日からこの隊で世話になるオルセイ・ハイテンだ。よろしくな。」

オルセイがニヤニヤしながらリア達幹部を見る。上官に対してあるまじき態度である。

こんな態度を見れば、食いつくのは当然エンドーラだった。

「オルセイと言いましたわね。」

上官に対して取る態度では無いですわ。

挨拶をやり直しなさい。」

一瞬呆気にとられていたエンドーラが睨む。

リア達はまだ開いた口が塞がっていない。

事前の配属通知によって、オルセイの素性は知れている。

オルセイは大貴族であるハイテン侯爵家の次男である。

ハイテン侯爵家は門閥貴族のワゴール公爵派で大きな地位を占めている。

派閥としては3つあり、ワゴール派は最も少数であるが、力関係で言えば2番目くらいである。  
つまり、ハイテン公爵家はそれだけでかなりの権力を持っている名家と言えた。

その大貴族の次男が、如何にも自惚れた様子で

「ここは美人揃いだと聞いてたけど、噂に違わぬ美女が揃っているな。」

などとの口走る。

オルセイはエンドーラの言う事など聞いていない。

「オルセイ。」

「ここは軍で、あなたは部下。」

命令に従いなさい。

2度は言いませんよ。」

立ち直ったリアがオルセイをじっと見て命じる。

「判ったって。」

本日よりシーリア部隊に配属されたオルセイ・ハイテンです。」

オルセイがその時だけビシッと敬礼した。  
挨拶が終わると体勢を崩し。

「君はクリンだっけ？  
今夜どう？」

オルセイはクリンに歩み寄ってナンパを始めた。



次の瞬間、ちょっと鈍い音が響く。  
クリンがオルセイの顔面を張り倒した。  
オルセイはよろけて数歩下がる。

「目が覚めたかしら？」

これからの訓練は寝ぼけて居ると危険ですよ？」

クリンが笑うが目が笑ってない。

（おお、クリンに手を上げさせるとは・・・）

健介は妙なところで感心してしまう。

「痛ったあ、噂どおり、なかなかやるじゃん。」

オルセイは顔に手を当てる。

顔にはしっかりと手の跡が付いていた。

「まだ寝ぼけているのかしら？」

エンドーラが一步オルセイに近付く。

エンドーラも笑顔だが目が笑っていない。

怖いし危険だ。

健介はリアに目配せして頷いた。

「エンドーラ、教育の方はランに任せましょう。」

私達がガキの相手をする必要はありません。」

リアが健介の意図を察して言う。

「ガキって、言ってくれるね。」

俺の方が年上だよ？」

オルセイは反省の色が無い。

「ラン、オルセイを連れて行って訓練に参加させて。後は任せたわ。」

リアが言っつてニツコリ笑う。

オルセイの事は既に無視だ。

健介はリアに頷き、オルセイの肩に手を置く。

「魔物の分際で触るな。」

オルセイは健介の腕を払う。

「ランに逆らわない方がいいわよ？」

ランの命令は私の命令だから。

訓練中の命令違反の処罰もランに任せているからね？」

リアが忠告する。

健介はもう一度、オルセイの肩に手をかける。

オルセイがまたその手を払おうとした。

健介はその手を取って捻り上げ、喚き声に耳を貸さずに、そのまま訓練場へと連れて行った。

リア達4人はその姿を見送る。

「厄介なのが来たわね。」

「フィでもそう言う事は判るらしい。」

「大丈夫よ。」

「ランに任せて置けば。」

「リアが含み笑いを浮かべる。」

「それが駄目なら、私の出番ね。」

「エンドーラがふふふと笑っている。」

「まだ怒っているようだ。」

「訓練場に連れて来られたオルセイは、懽然として訓練に加わろうとしなかった。」

「オルセイ、これは命令だ。」

「訓練に参加しろ。」

「健介が感情をまじえず真顔で言う。」

「魔物の分際で人に命令するな。」

「オルセイが嫌味たらしく言う。」

「健介はオルセイにゆっくりと近付き、クリンがやったよりも強く顔面に張り手を食らわした。」

オルセイは堪らず後退って倒れた。

魔術戦士でなければ、脳震盪を起している強さだ。  
オルセイが魔術戦士である事は、資料を読んで知っていた。

「ぐ、てめえ、調子に乗ってんじゃねえぞ！」

オルセイは立ち上がって叫ぶ。

その声に、周りの魔術戦士達が動きを止めた。

「ここが戦場でなくて良かったな？」

命令違反は死刑だぞ？

さっさと訓練に参加しろ、命令だ。」

健介はあくまで平坦な声で言う。

「うるせえ！」

オルセイは剣を抜いてランに切りかかった。

健介はそれを軽く避けた。

（意外と速いな。）

健介はオルセイの実力を評価した。

他の魔術戦士達のトップの実力よりも1ランク上の実力があるように見える。

とは言え、幹部の最も弱いクリンよりも格下も格下ではある。

オルセイが振り向こうとした所へ、健介はオルセイの脇腹に拳を叩き込む。

オルセイは地面に転がって悶絶する。

「自惚れるなよ。」

お前が何を偉そうにしているのか知らんが、お前は弱い。

その程度の実力で良く大言を吐ける物だ。恥を知れ。

挨拶も出来ず、命令も聞かず、半端な実力で、我俣しか言えない。本当にただのガキだな。」

健介が這いつくばっているオルセイに言う。

オルセイはまだ答えられる状態ではないようだ。

口をパクパクして苦しそうにしている。

「もう1度言うが、ここは軍で、俺は上官だ。

理不尽な命令ならともかく、訓練に参加しろと言う正統な命令に従わないのなら、当然罰を与える。

俺が何者かなど、何の意味もないのだ。

それとも、魔物なら戦場で手加減してくれると思っているのか？

訓練とは言え、ここも戦場と心得ろ。

甘い考えは捨てる。

お前はただの弱い兵士だ。

命令に従い、訓練に参加しろ。」

健介は柄にも無く長々と説教した。

オルセイは健介の話の最中に立ち上がり、健介を睨んでいた。

しばらく見詰め合う。

健介はオルセイが動かないのを確認して、素早く顔面に拳を叩き込む。

オルセイはまた地面に倒れて顔を押えて悶えた。

「甘い罰はここまでだぞ。オルセイ。

どうしても命令が聞けないなら、軍を辞めるんだな。」

今のお前が戦場に出れば、確実に殺されるぞ。」

健介が警告する。

こういう人間は敵だけでなく、味方にも殺される。立ち上がったオルセイは、睨んではいるが少し怯えているようだ。

「訓練に参加するか、軍を辞めるか選べ。」

健介が問う。

すると、オルセイは渋々、他の隊員の居る方へと歩いて行った。

大貴族とは言え派閥争い以外にも、派閥内での争いがあり、次期当主の長男以外はまともな役職など狙えない。

次男以降は商売を始めたり、軍に入って自力で力を付けるのが通例である。

自力と言っても、家の力を使ってではあるが。

その為、オルセイは軍を辞めても、他に仕事がない。

仕事が無くても生きてはいけるが、家族に白い目で見られるのは貴族でも平民でも同じである。

オルセイにはそれなりの実力はあるが、あの態度のせいで居場所が無いのだろう。

同じ派閥の者が居ても、家格が上のオルセイがああ態度で接触してくれば、迷惑極まりない。

それでシリア部隊に転属されてきたのだ。

シリア達にとっても迷惑なのだが、断固とした態度で臨む事で、部下達に一定の評価を得られるだろう。

オルセイの派閥は敵に回すかもしれないが、弱みさえ見せなければ、他の2つの派閥が味方に付く可能性は高い。

派閥間で叩ける弱みを探しあっているのだから。

オルセイの件が一段落して2ヶ月。

オルセイは訓練には参加するようになっていたが、他の兵士と上手く行っていないようだった。

まあ、あの性格では上手く行く訳が無いのだが。

周りの魔術戦士も大方が貴族だが、違う派閥の者も居る上、同じ派閥の貴族にも横柄な態度を取るので孤立している。

だが、戦闘訓練ではオルセイの実力が群を抜いているので、他の兵士に良い影響を与えている。

後は他の魔術戦士と仲良くなれば良いのだが。頭の痛いところである。

そんなある日、シーリア部隊は王の勅命により、外務卿の護衛の任務を受けた。

隣国ツガノとその向うのパレノルとの関係が悪化して、小競り合いが頻発しているようで、本格的な戦争に突入するのは時間の問題だった。

我が国ペステンとしても、その状況を見ているだけと言う訳にはいかない。外務卿が出向いて積極的に参戦するつもりらしい。

普通はツガノの外務卿が来るか、書簡で援軍要請が送られてくるのを待つのだが、そんな悠長な事はしてられない。

我が国ペステンにはシヨミルと言う敵対国がある。

もし、ツガノが陥落すれば、シヨミルとパレノルの2国を敵に回す事になる。

さすがにこれは不味いので、積極策に出る事になったのだ。

「部隊の全員を連れて行く訳にはいかないわね。」

外務卿と補佐官他5名の護衛として、30名と言つところかしら。

「

リアは指折り数えて考える。

「そうね。」

魔術戦士のみで丁度良いわね。」

クリンが気楽に頷く。

「バカ言わないの。」

魔術戦士を全員連れて行ったら、留守組みに任務が来た時に困るでしょ?」

リアはクリンのおでこを指で突く。

「うゝ、バカって言ったゝ」

クリンが膨れる。

エンドーラはクリンに苦笑しつつ

「外務卿に2人、他の者に1人ずつ、計8名の魔術戦士で良いのでは?」

他はサポートとして一般兵で埋めれば、十分でしょう。」

エンドーラが提案する。



リアも頷く。

「幹部は誰が行くの？」

とフィ。

「私とクリンとランで行くわ。」

フィとエンドーラは留守番宜しくね。」

リアは各々指差して言う。

「判りましたわ。」

でも、ランを連れて行くのはどうかと思いますけど。」

エンドーラはランを見て言う。

魔物を外交の席に連れて行くのは、普通なら確かに良くないだろう。

「その点は問題ないわ。」

既に外務卿が先方に連絡済らしいから。」

リアが肩をすくめる。

ドラゴンのランを外交のカードにするらしい。

一体どんな使い方をするつもりやら。

「そうです。」

それなら仕方ないですわね。」

エンドーラはため息をつく。

ランの代わりに一緒に行きたかったようだ。

「そうがっかりしないで、エンドーラ。  
留守の間はあなたが私の代理だから、しっかりやってね。」

とリア。

「ええ、判りましたわ。」

とエンドーラ。

3日後、外務卿エイガン候ロムスとその一行を護衛して王都を出発した。

隣国ツガノの王都までは馬車で4日くらい。

途中、山賊らしい人影を森の中で見たが、襲っては来なかった。

武装した兵士が30人以上で護衛している一行だ。

並みの盗賊では手が出ないだろう。

大盗賊団でも、国の重鎮が護衛されていると判れば、手を出す事は無い。

それは自殺行為だからだ。

国の重鎮の護衛には必ず魔術戦士がつく。

魔術の使い手が盗賊に入るような事は滅多に無いから、戦力差は歴然としているのだ。

しかし、外務卿の護衛として30人程度と言うのは、こっちの世界では数が少ない。

魔物や盗賊が多いこの世界では、最低50人以上を引き連れるのが普通である。

そして、それはエイガン候も思ったようだ。

「シーリア殿。

私は門外漢だから文句を言うつもりは無いが、人数が少なすぎないかね？」

エイガン候は馬車の中から、窓を開けて隣を併走しているリアに言う。

エイガン候の隣にはエイガン候に似せた影武者の人形が乗せてある。リアと健介が作った例のゴーレムを変装させてあった。なので、走行中とは言えエイガン候自ら顔を出されるのは宜しくないのだが。

「ご心配には及びません。

私の部下達は優秀ですから。

それに、大人数で攻められた場合には、ランが対処します。」

リアが何でも無いと言うように笑う。

「ラン？

あのドラゴンか？

あの姿では、そこまで強そうに見えないが。」

エイガン候は前を見詰めた。

健介は一行の先頭を進んでいて、リアとエイガン候がその後姿を見ている。

「その為の人の姿ですから。

あのままでも強いですが、ドラゴンの姿に戻れば雑兵など1撃で数十人は吹き飛びます。」

リアが説明する。

魔術で身体強化した魔術戦士でさえ、ドラゴンの1撃で瀕死へ追い込まれるのだ。

一般兵なら普通に身体が引き千切れて即死である。

「そうか、まあ君が言うなら間違いないのだろうな。」

エイガン候は頷いて馬車のシートに身体を預けた。

当然、彼はリアがドラゴンと戦って服従させた事を知っている。その内の2人が護衛についているのだから、実力的には問題ないのだろうと。

無事にツガノの王都へと着き、城へと案内された。

リアとクリンは外務卿一行と城へ入り、健介は他の兵士達を率いて割り当てられた兵舎へと入った。

健介は一応、魔術戦士8人に各々の一般兵を訓練をさせる事にした。

少なくとも4日以上はツガノに滞在するだろうから、身体を鈍らせないようにする。

護衛対象単位で、各魔術戦士に一般兵を割り当てていた。

いざと言う時には、リア、クリン、健介は遊撃する事になる。

この3人についてこられる魔術戦士は、この中には居ないから、各魔術戦士達の行動に期待する事になる。

リアとクリンは外務卿と共にツガノ王へと謁見して挨拶を交わし、その後、ツガノの外務卿と話し合いの席に同席した。

社交辞令もそこに、本題へと話題は移った。

「我が国ペステンは、ツガノへの援軍派兵の準備を進めています。戦が長引けば、ツガノの財政も厳しくなるでしょう。早い段階で敵を押し返す協力をする事が、双方の国の為です。」

エイガン候は和やかな雰囲気です。

「仰る事は判ります。」

お気遣いは感謝いたしますが、まだ本格的な戦闘には至っておりません。」

ツガノ外務卿ユーレン伯は少々堅い感じがした。

ツガノはペステンよりも小国であり、友好関係にあるがこれを気に侵略される可能性も無くはないのだ。

それは表立っての侵略ではなく、内側からの侵食によるものもある。力を貸すと言われても、はいそうですかとは言えないのだ。

「存じております。」

ですから、もし戦が本格化した場合には、我が国へ参戦を呼びかけていただければ、速やかに対処いたします。

その為に、少々見世物を用意しております。」

とエイガン候。

「見世物、例のドラゴンですか？」

噂では聞いていますが、本当にドラゴンを使役しているのですか？」

ユーレン伯は少々疑っているようだ。

「ええ、こちらのシリア准将とクリン大佐、後ここには来ていま

せんが、ファイレイ大佐の3人でドラゴンを倒し、下僕としたのです。件のドラゴンは今は人に化けて、他の兵と共に兵舎に居ます。」

エイガン候がシーリアとクリンを紹介して説明をする。

「ほう、そちらの女性方が？」

見かけによらず、凄腕なのですな。

ふむ、そのドラゴンの実力を示してもらおうと言う事ですね？」

ユーレン伯も興味があるようだ。

「ええ、もし必要ならツガノの魔術戦士、こちらでは魔騎士と言ったのでしたか、4人までなら戦わせても構いません。」

とエイガン候。

ツガノでは魔術戦士を魔騎士と呼ぶ。

「4人と言うのは意味があるのですか？」

ユーレン伯が鋭い指摘をする。

「ええ、シーリア准将の話では、4人までなら少しはドラゴンが手加減出来るらしいのです。」

それ以上になると、問答無用で殺しかねないと。

ですが、4人以下であっても、ドラゴンの一撃はまともに食らえば致命的なものですから、それは覚悟してもらわねばなりません。」

エイガン候が説明し、忠告した。

ユーレン伯は納得して、早速、兵士を選ぶ事にした。

## おまけ

私はドラゴンのランズーヴェレート、今は人間達にランと呼ばれているわ。

でも、今の肉体は主の一人フィレイの肉体を使用しているの。だから、実際にはランと呼ばれているのはドラゴンの肉体を使っている我が主の1人よ。

ドラゴンである私は、気が付いたらそこに居たの。

山々を見渡す一際高い山の頂上。

それ以前の記憶は無いし、それを気にする事は無かったわ。

ただそこに存在し、最強の魔物ドラゴンとして、威を示すこと。それが存在意義だったの。

威を示すとは、具体的には人間を殺す事だったわ。

でも、場所が場所だけに、人間には会わなかった。

時折、別のドラゴンを見かけたけど、話すことも無く接触しようとしなかった。

それから大体500年くらいかな。

何者かに呼ばれ、不意に気が付くと、ダンジョンの中に居た。

だけど、それも気にする様な事ではなかったわ。

何故かそれが当然の事のように思えたし、どこに居ようと存在意義は同じだった。

そこに、あの3人が現れた。

主達よ。

主達以前にも、見つけた人間を殺していたわ。

ただただ、何かに命じられるように、人間を殺していた。

主達が現れた時、同じように殺そうとした。ただ、予想に反して殺すどころか殺されかけた。私は驚愕の内に降伏し、盟約を交わしていたわ。

盟約・・・実の所、あの時点までは盟約の事など思い付きもなかったの。

知識としてはあったのだけど、あの時点まで一度たりとも意識に上がった事は無かった。

あの時、身体に大ダメージを負った瞬間に、盟約が意識に入ってきたの。

気が付けば、主たちと盟約を交わしていたの。それが何故かは判らない。

あの時はそれを当然のように受け入れていたけど、今思うと不思議でならない。

この不思議に思う気持ちも、人間として生きるようになってから覚えた。

自分と言う存在の不自然さを、人間達が不思議に思っている気持ちを、ようやく理解できた。

ドラゴンの身体に入った主の話の話を聞くと、私には判らないドラゴンの身体のコツがあるらしいわ。

主にも詳しい事は判らないみたいだけど、なんだか複雑な気持ち。この複雑な気持ちも、最近覚え始めた気持ちなんだけどね。

盟約を交わしてから8年ほどの歳月が経った。

今の私はそれ以前の生を遥かに上回る驚きと興奮に包まれているわ。

このフィレイと言う名の人間の女性の身体に入ってから約4年弱。人間と言う存在の意味が理解できたと思っているの。



人間は1人では人間ではなく、全く不完全な存在。  
1つの集団、村、町、国、そういったもので集まった人間全てを持つて「人間」と呼ぶものだと理解したわ。

ドラゴンは1匹で完全なドラゴン。

他のドラゴンは、同じ魔物と言うだけの存在。

仲間とも呼べない。

性行為どころか会話もしない。

それに対して人間社会の複雑な事！

私にとっては、あらゆる事が驚きに満ちているわ。

そして今、2〜3年ほど前から感じ始めていたモノの正体に気が付き始めたの。

人間の女性に入った頃は、身体は人間でも心はドラゴンだった。

それが心も人間化し始めたらしいわ。

徐々に、人間の持つ独自の感情を持つようになってるみたい。

そして、それ以上に感じた事の無いものを感じるようになったの。

それは性欲と肉体の快感。

それが何であるのかを知るまでは、その得体の知れない感覚に悩まされていたわ。

不快ではなかったけど、何か落ち着かない感じだわ。

なんとも奇妙なものよね。

でも残念な事に、知っても解決はしないの。

それを解決する為には、人間の男と交わるのが良いと知識にはあるわ。

でもどんな男でも良い訳ではないみたいなの。

それに、やたらと男と交わるのは良くないという知識もあった。

動物の様には行かないみたい。

特に、今のフィレイという人間の地位を考えると、下手な男と交わる事は出来ないの。

それはそれで面白いのだけどね。

男と交わって子を産んでみたいと思っているわ。

ドラゴンには出来ない事。

同じ種の新たな個体の母となる。

とても興味深いわ。

## 第23話 オルセイの兄ジョレ

エンドーラはフィと共に、兵士の訓練を指導していた。問題児のオルセイが残されているので、問題が起きた。

ランが居なくなつた途端に、フィをナンパし始めたのだ。フィは目を丸くしていた。

「ちよつとあなた。

この前聞いたことを覚えていませんか?」

エンドーラはフィとオルセイの間に入って注意した。

「そんな堅い事言うなよ。

何なら2人一緒にでもいいぜ?」

オルセイはエンドーラとフィを訓練から抜け出してお茶に誘つ。エンドーラはため息をついた。

(全くこの男は、懲りると言う事が無いのでしょうか?)

エンドーラはそう思いつつ、オルセイに言う。

「訓練に戻りなさい。

2度と言いませんよ。」

エンドーラは警告する。

「なあ、ファイレイはどぶお」

オルセイは途中から言葉を吐けなくなった。  
エンドーラの拳が顔面に炸裂していた。  
鉄拳制裁である。

オルセイはよろめいて倒れた。

「いつて、いきなり殴るなよ。」

オルセイは立ち上がる。

それを黙ってエンドーラは見ていた。

「なあ、いいじゃなぶあ」

オルセイはまたも言葉を続けられない。  
さつきと同様、エンドーラの拳が顔面にめり込んでいた。  
オルセイはまた倒れた。

「てめえ、何もしてないのに殴ったな。」

オルセイはエンドーラを睨む。

「どこまでバカなんですの？」

何もしないから殴ったのが判りませんか？  
既に命令は下しました。

背き続けているのはオルセイ、あなたです。  
そして、背き続ける限り、殴り続けます。」

エンドーラは腕を組んでオルセイを睨みつける。

オルセイはエンドーラの気迫に押されて後退る。

「覚えてろよ。」

オルセイは駆け出す。

だが、エンドーラは高速移動して先回りし、殴り倒した。  
オルセイには対応出来ない速度だ。

そして、黙って睨みつける。

「な、何をしろって言うんだよ？」

オルセイは観念したように言う。

「2度と言わないと言いましたわ。」

戦場でも一々命令を聞きに戻るのですか？

命令を聞く気が無いなど、殺してくれと言っているようなもの。

ここは軍で、これはゲームでは無いのです。」

エンドーラが冷たく言う。

オルセイは途方にくれたように辺りを見回し、訓練している他の兵士達を見て思い出したようだ。

そして、訓練へと参加すべく歩き出した。

「エンドーラこわーい」

フィがからかう様に言う。

「あなたもやりますのよ？」

エンドーラがちょっと怖い顔で微笑む。

「私も？」

フィはエンドーラが鉄拳制裁役だとすっかり思い込んでいた。

「当然ですわ。

今は私とフィが訓練を指導しているのですから。」

エンドーラはググツと拳を振り上げた。

それを見て、配下の魔術戦士達はせっせと訓練に勤しむのだった。

健介はツガノ軍の訓練場に連れて来られた。

ツガノに到着して2日目、見世物として訓練場で一部の軍人と王にドラゴンを披露するらしい。

「適当に頑張ってね。」

リアは御気楽にランの肩を叩く。

「相手殺しちや駄目よ。」

クリンも同様に反対側の肩を叩いた。

「ああ、行つて来る。」

健介は広い訓練場の中央へと歩いて行く。

そこで健介は立ち止まり、ドラゴンの姿へと戻る。

訓練場の外にある魔法の防壁で守られた貴賓席から驚きの声が上がった。

ついで、訓練場に4人の魔術戦士が入ってきた。見るからに手練そつだ。

（今回はちときついかも）

健介は内心冷や汗を流す。

だが、ドラゴンの身体での対人間戦闘の戦術は色々と考えてあつたし、新しい策も幾つかあつた。

訓練場の外から、開始の合図が放たれた。

同時に健介は目一杯ドラゴンの身体を強化して、超高速で突っ込みながら魔法を放つ。

以前と同じ戦法だが、速度が段違いだ。

だが、4人の魔術戦士達は驚きの表情を見せたものの、分散して回避した。

さすがに、現役で前線で戦っている魔術戦士だけはある。

（やるな）

健介は次の手を打つべく、身体をスピンさせて尻尾で攻撃し、4人を遠ざげるか跳ばせるかさせた。

直後、ブレスを空中に散布する。

空中に跳躍して尻尾を回避した2人が、ブレスの高温ガスに包まれた。

健介はそれを確認する前に、その場を素早く離れる。

それまで居た場所が、魔法の冷気が凝縮して凍て付いた。

改めてみると、プレスに包まれた2人は膝を付いて苦しそうにしている。

策は功を奏したようだ。

全身火傷をしているはずだし、吸い込めば肺を火傷し、呼吸困難になっているはずだ。

健介は残っている2人に向けて超高速でジグザクに、時間差をつけて突進する。

2人は慌てた様子で回避するがその機会を狙っていた健介が逃がす訳が無い。

回避する方向は大体予想が付くので、回避する方向へ魔法を放つ。

回避する先で爆発が起きて急停止した1人に、後ろから豪腕で弾き飛ばす。

男は咄嗟に振り返って防御姿勢をとったが、鎧がひしゃげる音と共に飛んで転がった。

豪腕の感触には鎧の感触以外に、強い魔力防壁の感触もあった。

やはりそれなりの腕を持つ者たち、良い反応をする。

最後の1人は両手を上げて降参していた。

炎のプレスを受けた者も訓練場の外に出ており、戦闘は終わったようだだった。

健介は人の姿に変化し、訓練場に転がって呻いている魔術戦士の様子を見た。

ひしゃげた鎧が身体に食い込んで、苦しげだ。

「鎧を外すぞ？」

と健介が言う。



魔術戦士の男は頷いた。

健介は鎧を止めている革のバンドをナイフで切っけいき、鎧を身体から剥した。

魔術戦士の男は呻きながらも、息を吸い込んだ。

あばらが折れたらしく、ゴリゴリと音がする。

「大丈夫か？」

ツガノ側で用意していた治療専門の魔術師が走ってきた。

健介は彼に任せて、訓練場を出た。

「お疲れ様。

「凄い戦いぶりね。」

リアは嬉しそつに微笑んでいる。

「まあな。

「ドラゴンの身体は面白いよ。」

健介も笑つ。

「最初に突進するのは、やっぱり魔法を使わせない為？」

クリンが首をかしげる。

「お？」

クリン、今日は鋭いじゃないか。

でも、あいつらに魔法を1回使わせてしまったが。」

と健介。

もう少しでも動きを止めれば、氷付けにされそうだった。

クリンはちよつとからかわれる様に言われて、口を尖らせる。

「いきなり防壁を作られて、行動範囲を狭められると不味いと。そう言つわけよね。」

とリア。

「そういうこと。」

ダンジョンでのあの時も言つただろう？

でかい相手は、動きを制限してしまえば良い。

身体を凍らせて動きを鈍くするのも有効だな。」

健介がクリンに思い出させた。

「でも、ランは人間に化けても強いから、ちよつと制限しただけじゃ意味無いよ。」

クリンがちよつといじけた様に言つ。

「まあな。」

腐つてもドラゴンだ。

それにしても、今回の相手はダンジョンで遭つたら梃子摺つたかも知れないな。」

離れた場所では、エイガン候がツガノ王や軍人と話をしていた。

このドラゴンの試合は話を進める上での一興に過ぎない。

ここで相手になったツガノの魔術戦士もそれなりの実力を持ってい

るようだったが、最精鋭という訳では無いだろう。

ツガノ側もパレノルが本気を出したら援軍が必要になる。足元は見られたくないのだろうが、ペステン側もツガノに落ちてもらっては困るから、微妙な駆け引きが行われていると考えられる。

その後、4日掛けて援軍の規模や共同戦線の方針などを協議した。当然、その援軍の中にはシーリア隊も含まれる。ドラゴンを披露しておいて派遣しないなどと言う選択肢は無い。

エンドーラは呼び出されていた。軍法会議という訳では無い。

城の豪華な応接室の1つに、エンドーラと貴族が1人。貴族の名はジオレ・ハイテン、オルセイの兄である。オルセイが兄に泣き付いたらしい。

「オルセイから事情は聞いているが、上官である君に聞いておきたい。」

ジオレがエンドーラを見詰める。当然である。

エンドーラは頷いて、これまでの経緯を説明した。ジオレは説明を聞いた後、しばらく考えて。

「ふむ、しかし、殴るのは適当な事なのだろうか？」

ジオレは顎にてを当てて言う。  
エンドーラはオルセイの兄なので、感情的になって責められると思  
っていた。

だが、予想に反してジオレは冷静な大人のようなようであった。

「ジオレ殿は軍人では無いので知らないかもしれませんが、命令違  
反は重罪ですわ。」

訓練中だから鉄拳制裁で済ませているのです。

もし、正式に処分を下したら、良くて軍からの追放。

悪くすれば死刑です。」

エンドーラは紅茶を一口飲んで、落ち着いて淡々と説明した。

「そうなのか？」

大した罪を犯した訳では無いだろうか？」

ジオレは少し驚いたような雰囲気だ。

彼は軍役をした事が無く、軍の組織に入ると言う事が如何言う事が、  
知識も無いのだろう。

「我々は軍人です。」

基本的に軍人の勤務中は戦場に居るのと同じ扱いなのです。

そして、上官の命令違反、及び、反逆はその場で死刑となります。

オルセイはその両方を既に犯しています。

もし、この事を公の場で、つまり軍事法廷にかけるなら覚悟が必  
要でしょう。」

エンドーラは紅茶のカップに、カップと同じように白い指を這わ  
せながら、軍に居る事の厳しさを簡単に説明する。

「そうか。」

訓練中は鉄拳制裁と言うのは普通の事なのか？」

ジオレはエンドーラを見詰めながら訊いた。

「ええ。」

頭に血が上って命令違反を犯してしまう事もあるでしょう。

その都度、軍事法廷を開くのはやり過ぎですし、時間の無駄です。ですから大抵の場合、訓練中は鉄拳制裁で済ませます。

そう言う習慣なのです。」

とエンドーラ。

こういう事は魔術学校を卒業していれば教えられる事だった。

場所によっては特別指定された罰則もあるようだが、基本的には鉄拳制裁となる。

無論、悪質な場合にはその限りではなく、軍事法廷に掛けられた事例もある。

「なるほど。」

オルセイは命令違反をして殴られ、それを私にどうにかしろと言つて来たのか。」

ジオレが額を手で押えている。

ようやくエンドーラの言っている事の意味が理解できたようだ。それと、どうやら彼もオルセイには手を焼いているようだ。

「ジオレ殿、近い内に私の所属するシーリア部隊は出撃すると思いませんわ。」

これは訓練ではなく、実戦。

本当の戦争の為に出击します。

このままでは、オルセイは戦場で死ぬでしょう。敵に殺されるならまだしも、命令違反による制裁で死刑になる可能性が高いですわ。」

エンドーラが真顔で警告した。敵兵に殺されれば名誉の戦死だが、命令違反で死刑になれば不名誉どころではない。

「そんなに酷いのか？ オルセイは。」

ジオレは苦い顔をしている。

「はい。」

少し目を離すと、自分勝手な事をやり始めます。意地になっているような部分もあるのでしょうが、軍ではそんな言い訳は通用しません。

戦場に出れば訓練中のような容赦はありません。」

エンドーラは首を横に振る。

命令を聞かず、反抗する者を部隊内に入れて置く事がどんなに危険な事か、理解出来ない上級指揮官は居ない。

そして、戦場でそう言う者がいる場合、取るべき手段は大抵1つだ。

「それは、君がやるのかい？」

「判りませんが、多分、シーリア准将がやるでしょう。」

シーリア准将は責任感が強いですから、そう言う嫌な仕事は自分で引き受けるはずですよ。

ですが、シーリア准将がその場に居なければ、私がやります。

他の多くの兵達の為にも。」

ジオレはエンドーラの話聞いて、少し考えて意を決した表情を浮かべた。

「良く判った。」

エンドーラ大佐、君と話せて良かったよ。

オルセイには軍を辞めさせる事にする。」

ジオレは少し表情を引き締めてから微笑んだ。

次期党首としては、弟に戦場で名誉の戦死をされるのはともかく、不名誉な制裁による死刑で死なれては堪らない。

「そうですね。」

まあ、その方が良いですわね。」

エンドーラが頷く。

「色々と弟が迷惑を掛けてしまっって申し訳ないと、シーリア殿にも伝えておいて欲しい。」

とジオレ。

「承知しましたわ。」

とエンドーラ。

「それと、その戦が終わったら、宜しければお茶でも付き合っつて貰えませんか？」

ジオレが微笑む。

徐にエンドーラを口説きに掛かった。

「ふふ、さすが兄弟ですわね。

そして、さすがお兄様といった所ですわ。

オルセイよりも女性の口説き方が上手ですわ。」

エンドーラも微笑む。

「ははは、弟と一緒にしないで欲しいな。

私はやたらと女性を口説いたりしないよ。

弟がアレだから、誤解され易いんですよ。」

ジオレが苦笑する。

「そうかもしれませんわね。

まあ、お茶くらいならお付き合いしても良いですわよ。」

エンドーラは少し頬を赤くする。

「良かった。

では、時間が出来たら連絡を下さい。

都合は極力、あなたに合わせますから。」

ジオレが嬉しそうに笑った。

数日後、リア達が外務卿を護衛して戻ってきた。全員が揃って、それまでの経緯を話し合った。

リア達が戻ってくる前にオルセイは退役していた。



「厄介払い出来たわね。」

リアはホッとしたりょうに微笑んだ。

「良かった〜」

クリンが嬉しそうに言う。

彼女はオルセイのような男は苦手そうだ。

「それより、向うの様子はどうだったの？」

エンドーラが急かす。

「私達がいた時は、まだ平常状態と余り変わらないみたいだったわ。でも、国境周辺では小競り合いは続いていたみたい。

頻繁に早馬を走らせて、前線との連絡をしていたのが判ったわ。」

とリア。

「ツガノの情報部の話では、近い内にツガノへの侵攻が始まるらしいわ。」

どの程度の規模か、どこから侵攻されるのかは判らないけど。」

とクリン。

「そう。」

今の内に、兵の実力を上げておかないといけませんわね。出来るだけ、生かして家に帰してあげたいですものね。」

とエンドーラ。

「兵士の武装強化はどうする？」

「魔術付加をした剣を持たせた方が良さだろうか？」

と健介。

シーリア部隊の兵士は魔術戦士の武装も含め、魔術付加をしている者が殆ど居ないのだ。

「ああ、忘れていたわ。

それは必要ね。」

リアが腕組みして考える。

「強化と軽量化だけの単純化した術式で、大量に作ろう。」

「一般兵用のは少し特殊になるし、130本となると、かなり大変だ。」

健介が提案する。

「一般兵は魔術が使えない為、剣に魔力の供給をする事が出来ない。」

「その為、魔術構成には魔力を貯めておく為の模様が必要となる。」

「定期的に魔術戦士達が魔力を再充填する事で、性能を保つ事が出来る。」

「期間にして1ヶ月程度、戦闘にして10〜20回程度は保つとされる。」

「そうね。」

「これから忙しくなりそうだわ。」

リアは少し困ったような顔をして溜息をついた。

それから、リアと健介が手分けして、剣に魔術付加をして兵士達に配り始めた。

リア達の持つているような業物の剣ではないが、それなりの剣を使つて魔術付加している為、評判は上々だ。

一般兵の剣は質が区々であり、統一と底上げが一緒に出来る。

強化魔法を掛けておくと、人間同士の力程度で剣を打ち合わせても、刃こぼれするような事は殆ど無い。

強い魔術戦士同士が全力で打ち合わせれば刃こぼれは免れないが、それも剣の質と魔力付加を行った際の魔力によって変わる。

所有者の魔力の強さも若干上乘せされるが、これは微々たる物だ。

リア達の持つている剣は業物であり、魔術付加された強化魔法も強力なものだ。

リア達の激しい模擬戦でも刃こぼれはしていない。

シーリア部隊は設立間もない、烏合の衆になり兼ねない部隊であった。

幸いな事に、設立間もない為に人数が少ない。

人数が少ないのは戦場では不利になることが多いが、統率と言う意味では時間の無い今は有利と言えた。

既に健介の指導で厳しい訓練を行つて、統率は十分に取れている。統率を乱す者が消えたせいもあるが。

上級指揮官、大佐の抱える配下の最大人数は1000人と決められている。

准将には最大人数と言う意味での制限は無いが、配下の大佐の数は

10人までとなっている。  
将軍には一切の制限は無い。

シリア達のような上級指揮官は現在46名。  
その半数は兵を300以上保有している。  
兵の補充は基本的に、

- ・ 毎年数人〜十数人の新人
- ・ 解散した部隊の兵の割り振り

と言う形で成される。

その様な訳で、シリア部隊の人数が増えるのは、これから先の話だ。

健介はドラゴンの身体について、徐々に調べて理解し始めていた。  
ドラゴンの身体を己が物にする事は既に出ていたが、それとは別の何かがあった。

そう思わせたのは、無理やり表現すると「精神と魂の感覚」だ。  
最初の頃は単なる違和感と勘違いしていたのだが、どうもそうでは無い様だった。

だから、ランの記憶を頼りに調査していたのだ。

ドラゴンの身体は明らかに他の生物とは違う。

それは他の魔物でもそうなのだが、ドラゴンは更に違う。  
ブレスを吐く頭の構造、簡単な魔術ならほぼ自動で発動できる能力、  
空を飛べる翼、人間への変身能力。  
最近気付き始めたものがいくつか。

健介自身の感覚は別にしても、ドラゴンの特異性を考えた場合、

このような生物がもし元の世界に居たらどう思うだろうか？  
自然と導き出される答えは・・・

（まさか生物兵器？）

健介はその可能性に思い至った。

治癒魔法やゴーレム魔法、ドラゴンの変身能力など。

これらの事を1つに繋ぎ合わせれば、生物兵器を作る魔法があってもおかしくは無いと結論が出る。

（ドラゴンは生物兵器？）

ならば、他の魔物もそうか、出来損ないと言う事なのか？

動物とは全く異なる生態を持つ魔物の不思議がそれで納得できる。

しかし、その様な知識は、誰も持っていないようだったが・・・

どう言う事だ？）

しばらくして健介は考えるのを止めた。

（今は目前の戦の事が先だ。

戦が終われば調べる事も出来るだろう。）

健介は戦に使えるかもしれないドラゴンの身体に宿る他の能力を調べる事にした。

## 第24話 ツガノとパレノルの戦

リアがツガノから戻って21日目。

ツガノから援軍要請が来た。

ついにパレノル軍が本格的に動き出したらしい。

直にシールリア部隊にも出勤命令が下り、他の部隊と共にツガノへと行軍を開始した。

ツガノに派遣される部隊は、

ウーレンド准将率いる直属約450名。(内100名が魔術戦士)

ウーレンド配下のバラミー大佐率いる約200名。(内20名が魔術戦士)

ウーレンド配下のアラシア大佐率いる約250名。(内30名が魔術戦士)

フレット准将率いる直属約300名。(内30名が魔術戦士)

フレット配下のファラン大佐率いる約200名。(内40名が魔術戦士)

フレット配下のシユカー大佐率いる約200名。(内30名が魔術戦士)

フレット配下のテイシー大佐率いる約300名。(内60名が魔術戦士)

そして

シールリア准将率いる直属約40名。(他ドラゴンが1匹)

シリア配下のフィレイ大佐率いる約30名。(内10名が魔術戦士)  
シリア配下のクリン大佐率いる約30名。(内10名が魔術戦士)  
シリア配下のエンドーラ大佐率いる約30名。(内10名が魔術戦士)

という2千人以上(補給輸送部隊を覗く)の派兵である。ウーレンドが総指揮官となるが、ツガノからは遊撃を指示されるので、各部隊毎に分散して敵を混乱させる為に動く事になる。

この場合の「遊撃」と言うのはある種の方便である。要するに、指揮系統がツガノ軍と、ペステン軍で統一できない為、勝手にやってくれと言う事なのだ。

3日でツガノ国境を越えると、ツガノの案内役が待っていた。この規模の軍としてはかなり速い行軍だった。そこからウーレンド部隊、フレット部隊、シリア部隊がそれぞれ指定された地域へと案内人に従って向かう。

パレノルの侵攻は2箇所からあり、一方にウーレンド、フレットの部隊が向かい、もう一方にシリア部隊が向かっている。ツガノの軍は既に2箇所で戦闘を繰り返している。シリア部隊の向かっている方は、比較的、敵の数が少ない様だった。

シリア部隊が到着した時、戦場は膠着していた。木の多い丘陵地帯で、戦闘は一進一退。ツガノ軍の方が数が多いが、地形的に一気に押し戻せないで居る。

「君達の部隊には、敵側面を突いて混乱させて欲しい。」

混乱に乗じて、一気に敵を押し返す。  
丘陵地帯を抜ければ、敵も引き下がるだろう。」

とツガノ軍の指揮官ローレン。

「了解しました。

お任せ下さい。」

リアが敬礼した。

「ははは、そう堅苦しくする事は無い。

共に戦う戦友だ。」

ローレンが笑った。

シリア部隊はリア、フィの部隊と、クリン、エンドーラの部隊、  
そして、健介の3つに分かれて大きく迂回して敵に迫った。

リア、フィの部隊は左、クリン、エンドーラの部隊は右、健介は後  
ろから。

少し離れた丘の上に、ハモ、ネヒル、ジューム、レグクムの4人  
を配置した。

彼から4人は参謀として戦の流れを見学させる。  
実戦に参加させる必要もあるが、死なれても困るので、見学だけさ  
せる事にした。

まず健介が敵の部隊の後ろに着くと、ドラゴンに姿を変えて後ろ  
から派手に攻撃を開始した。

命中するかどうかは関係なく、木々を薙倒してプレスと魔法で攻撃



し咆哮を上げる。

パレノル軍の者達は突然現れたドラゴンに腰を抜かすほど驚き、硬直し、そして、混乱した。

その隙に、シージャ部隊が側面から切り込んだ。

ドラゴンの襲撃に泡を食っているパレノル軍は側面攻撃に対応出来ずに、更に混乱を深めた。

パレノル軍の一般兵に至っては恐慌状態である。

シージャ部隊は反撃を受ける前に引き下がったが、今度はツガノ軍が真正面から襲い掛かる。

それを見た健介は魔法とブレスを置き土産にその場を離脱した。

その戦場でのシージャ部隊の仕事はそれで終わりだった。

元々劣勢だったパレノルの部隊は、指揮系統が瓦解して撤退のタイミングも逸し、兵を半数以上を失って丘陵地帯を抜けて撤退した。

「ドラゴンは初めて見たよ。

なかなか恐ろしいものだな。」

ローレンはそう言いつつも笑っている。

戦場で負傷兵を収容、手当てを始めている傍らでシージャと話している。

「ええ、でもランは特別な状況で無い限り、人を襲う事はありません。」

今回のように攻撃命令を出した場合などが。」

リアも微笑んで、危険は無いことを説明する。

「ふむ。」

しかし、あのドラゴンを君が倒したと言うのは本当かね？」

「正確には、私とファイレイ大佐とクリン大佐の3人です。」

それに、あの時はダンジョン内の狭い空間で戦っていたので、私達が有利だったんですよ。」

「そうか、それでもたった3人で倒したのは大したものだ。」

我が国の魔術学校は質の低下が著しくてな。」

ローレンはため息をつく。

「そんなに酷いのですか？」

「うむ、魔術学校の教師達の質が悪いと言う事なのだろうな。」

生徒の素質自体はそう低い訳ではないのだ。

卒業生の魔術の錬度は目を被いたくなるよ。

ダンジョンから生きて帰ってくる生徒も少ない。」

ローレンは首を振る。

「そうなんですか。」

それでは新兵の教育が大変ですね。」

「そうなんだよ。」

魔術学校でやるべきことを、新兵教育でやらねばならん。

おっと、今話した事は内密に、頼むよ。」

ローレンが苦笑する。

後ろで話を聞いていた健介は、内心深く頷いていた。教育機関がすっかりしないと、現場で再教育が必要になる。健介は元の世界での新人教育を思い出して、深く共感した。

シーリア部隊は殆ど被害が無かったので、翌日にはもう一方の戦場へと出発した。

ローレン率いる部隊はまだ1〜2日かかるだろう。

2日掛けて行軍して戦場へ着くと、一般兵が密集して押し合っように戦っている周りで、魔術戦士が散開して戦っていた。一見すると形勢は若干劣勢に見えた。

すぐにリアが指示を出す。

「我々は迂回して敵の後ろへ行く。」

リアは小声でフィ、クリン、エンドーラへ伝達した。

「ラン、ちょっと行って注目を集めておいて。」

リアが健介に指示を出す。

「了解。」

健介は戦場へと走っていった。

この戦での健介の役割は、殆ど敵の混乱を引き起こす牽制役といったところだった。

ドラゴンの身体では巨大すぎて、人間の味方と一緒に闘う訳に行かないのだから仕方ない。

ここでもリアが指示して、ハモ、ネヒル、ジューム、レグクムの4人を戦場から少し離れた場所に配置した。やはり、参謀となるからには、一兵士として参戦するよりも戦の流れを掴ませる方が良いだろうと言う考えだ。

戦場に立たせたら、一般兵の彼らでは死に物狂いで戦って、周りを見ている暇など無いはずである。

健介は始めの内は人間の姿のまま、パレノルの魔術戦士達と戦った。

健介が入るだけで、戦局は大きく変わっていく。人の姿でもパレノルの魔術戦士達を次々に戦闘不能へ追い込んだ為、相対的に味方の魔術戦士の数が多くなつて敵を追い込み始めたのだ。その健介の姿は、敵味方共に注目を集めていた。

健介が目の端でシーリアの部隊が後ろに現れ始めたのを見ると、戦場の真ん中でドラゴンの姿を晒した。

そして咆哮を上げる。

味方の部隊はドラゴンが見方に居るのを知っていたが、敵の部隊は知らない。

敵の部隊は呆気に取られた。

シーリアの部隊はその隙に敵陣の後ろから攻撃を開始し、他の味方の部隊も攻勢に出た。

健介はドラゴンの姿のまま、魔術戦士数人を蹴散らすと、敵の一般兵の部隊へと近寄って威嚇の咆哮を上げる。

それだけで、敵の一般兵は隊列を乱して逃げ始めた。

魔術戦士でもない彼らには、ドラゴンに対抗するすべは無い。

健介も敵兵とは言え、無駄に殺す気にはなれなかった。

少し甘かったかもしれない。

そこで勝敗は決した。  
パレノル軍の戦列は瓦解し、指揮系統も途切れて混乱し、逃げ出した。

その間もツガノ軍とペステン軍が追撃を掛け、パレノル軍の勢力を削りとった。

健介は戦場を離脱して、人型に戻った。

敵味方入り乱れているので、ドラゴンの巨体では何も出来ない。少し離れた場所で、追撃と言う名の殺戮を眺めていた。

（先に攻めて来たのだから文句は言えないだろうな・・・）

攻守逆になれば虐殺と非難されそうな光景であった。

下っ端の兵士達には災難だろうが、攻められる国にしてみれば、攻める国は盗賊と同じ。

可能な限り殲滅しておくのが上策なのだ。それは健介にも判っていた。

最終的には大勝となったが、ツガノ軍は兵の割り当てを失敗して少ない損害を出していた。

ペステンから後続の支援部隊が到着次第、ウーレンド、フレット、シーリア部隊は引き上げる事になっている。

「人の戦場は正視に耐えないわね。」

リアが呟いたが、それでも視線を逸らす事は無い。

シーリア部隊も全く損害が無い訳ではなく、数人の死者、重軽傷者20名弱が出ている。

眼前の草原には敵味方の者達、ざっと2500人の死体が転がって居る。

剣で突かれたただけの損傷が少ない死体はまだ良いが、焼け爛れたり、腕や足がなかったり、頭部が半分潰れていたり・・・  
戦と言うものが、如何に野蛮で人材を浪費する行為か、一目で理解出来る光景だ。

ペステンに戻ったシリア部隊は、王からの褒美を受けた。  
ツガノ王国への貸しも出来たし、野心的なパレノル王国と国境を接するような事態にはならず済んだ。

シリア部隊は他の部隊よりも効率的に敵の部隊を混乱させ、味方の勝利を確実にする戦功を挙げた。  
特にドラゴンの存在が大きく貢献していた。  
ドラゴンの功績はシリア部隊の功績である。

ウーレンドとフレットの部隊も戦線の崩壊しそうなツガノ軍を支えた功績がある。  
ツガノ軍はシリア部隊が最初に行った戦場の方へ軍を割き過ぎ、ウーレンドとフレットの部隊が来なければ、戦線が瓦解していた。

褒美に関して、シリア、クリン、エンドーラは2つの選択に迫られた。  
個人に男爵の爵位と領地を受けるか、実家の領地を拡大するかだ。  
これは3人とも実家の領地の拡大を選んだ。  
まあ当然の選択だろう。

フィレイは男爵の爵位と領地を賜った。  
フィレイも貴族となった訳だ。  
フィレイの性はミュールと命名された。

ミュール男爵フィレイである。

領地は小さいが無いよりはマシである。

平民出身のフィレイにとっては、管理する領地が小さい方が、逆に助かるだろう。

4人の軍の階級に関しては、今回の昇進は見送られた。だが、同じ階級での序列に関しては上位へと移されている。

「今回の戦は早く終わったわね。

これもランのお陰だわ。」

リアがホツとして嬉しそうにしている。

事実、パレノルはドラゴンが現れた為、まだ軍に余裕があるにも拘らず、矛先を収めて侵略を断念していた。

ドラゴンはトランプで言えばジョーカーだ。

余程の戦力差が無い限り、ドラゴンに良い様に混乱させられてしまう。

たった1匹でも無視出来ない脅威である。

「本当よね。

やっぱりドラゴンのインパクトは強いわ。」

クリンもニコニコ顔だ。

「でも、次はあの様に簡単にはいかないですよ。

ドラゴンが現れると判っていれば、あそこまで混乱はしないでしよう。」

エンドーラもそうは言っているが、微笑んでいる。

「そうね。」

でも、一般兵に対しては、多少言い含めたとしても、意味無いと思うわ。

どう頑張っても、一般兵はドラゴンの敵にはならないのだから、ドラゴンが迫ってきたら逃げ出すでしょう。」

とリア。

「じゃあ、魔術戦士の方を如何に抑えるかで、勝敗が決まるわけね。」

とクリン。

「それはドラゴンが居ても居なくても同じですよ。結局、相手の魔術戦士を無力化出るかどうかで戦局が変わるのですから。」

だからこそ、ドラゴンの存在が大きいのですわ。」

とエンドーラ。

「ははは、そりゃそうね。」

クリンはちょっと恥ずかしそうに笑う。

クリンは相変わらず、戦略のセンスが無かった。

一般兵と魔術戦士の割合とそれぞれの運用方法によって、戦略と戦術は複雑になる。

魔術戦士のみを兵団を作れば、確かに速くて強い兵団を作れるのだが、一般兵のサポートを受ける魔術戦士の方が当然有利である。



それに、迅速な移動をするなら補給も追いつかなくなり、活動期間と範囲が限られる。

そう言う意味では、一般兵と混合よりは若干自由度が高いと言うだけなので、一般兵との混合で運用するのが通例である。

結局は指揮官がどう運用するかによるのだが、奇抜な運用は混乱を呼ぶと言う事もあるので、大抵は混合部隊となるのだ。

それからの10日間は、シーリア部隊を含めツガノへ出撃した部隊は休暇となった。

リア、フィはヴァーゼル領へ、エンドーラはジャヴァス領へ、クリンはトモセーヤ領へ向かって旅立った。

「フィ、久しぶりに両親と会うのですから、しっかり親孝行するのですよ?」

リアがフィに忠告する。

「判ってます。

ちゃんと人間として振舞いますよ。」

フィは笑顔で応える。

「この10日のうちに、ミュール領へ引越するのだから?俺も手伝いに行くよ。」

と健介。

「そうね。

フィ、私も直に手伝いに行くわ。」

とリア。

「ミュール領の屋敷の使用人が来る予定だから、あまりやる事は無いと思うわ。」

だから2人もゆっくりして居れば？」

とフィ。

「そっか、じゃあ私も屋敷でのんびりするわ。」

ニコトはどうするの？」

とリアが健介をものほしそうに見る。

「やる事が無いなら、リアの屋敷でのんびりするかな。」

と健介は苦笑する。

フィレイは男爵の爵位と領地を得て、両親を領地の屋敷へと住まいさせる事になっている。

貴族の家族になったから、誘拐されでもしたら大変である。

既に、リアの父ヘインツに連絡してフィレイの両親には護衛をつけてあるはずであった。

町に入って途中でフィと分かれた。

リアと健介は屋敷へと向かう。

屋敷に着くとリアは両親に抱擁された。

「この子はもう、心配させて。」

母ミレーヌは泣いている。

ツガノ防衛の戦場に出たのが心配だった様だ

「ちょっと、お母様。

泣く事は無いでしょう。

ちゃんと生きて帰ったんですから。」

リアがちょっと慌てている。

(ああ、ミレーヌの抱擁が懐かしい。)

などと思いながら、健介は遠い眼をして寂寥感に耐えていた。

夕食は、豪勢なものを用意してくれた。

当然、健介も旨いものを食っている。

リアと両親の会話を、黙って食事をしながら聞いていた。

ヘインツは石炭の付いての話をした。

鉄の精練をする際の燃料にするには都合が悪かったらしく、炭を作るのと同じ処理を施した石炭にすると問題ない事を発見したと言った。

鍛冶屋と炭焼き職人の意見を聞いて試したらしい。

健介はさすがヘインツと感心していた。

石炭は鉄の精練には良くなかったのかと、記憶に残しておく事にする。

他にも小さな問題はあったようだが、ヘインツが職人達と解決して今は順調に石炭の採掘、加工、販売を行っているようだ。

財政に余裕が出来たので、他に農作物の品種改良をしようとしているらしい。

ある特徴を持つモノだけを掛け合わせて行くことで、その特徴を強化させる事が判ったとか。

その研究自体は12年以上前から細々とやっているらしく、ようやく使えそうな品種が出来そうだと言っていた。

余剰予算で、他の作物も品種改良の研究をする事を検討中なのだ。

さすがシーリアの父ヘインツと、何度も感心してしまう健介だった。

夜、リアの寝室で話をしていた。

「あれからもう8年か？」

シーリアは自分の身体を取り戻し、俺は何故かドラゴンの身体を手に入れた。

人生判らないものだ。」

健介が夜空を見上げる。

「ふふふ、ドラゴンの身体に入ったのを後悔しているの？」

リアが笑う。

「いや、後悔は無いよ。

フィの身体よりは、ドラゴンの身体の方が面白い。」

健介がリアに振り返って笑った。

「そう。」

もう人間に戻るつもりは無いの？」

リアがちよっと不満そうに健介を見詰める。

「どうかな。」

色々と問題もあるだろう。

例えば、身体を提供してくれる男がいるか？

このドラゴンの身体をどうするのか？

危険すぎて、下手な人間にこの身体は渡せない。」

健介が考えて首を振る。

「そう、そうね。」

確かに、簡単に解決できる問題では無いわね。」

リアが考え込む。

「そう悩むな。」

ドラゴンの身体でも、俺は俺だ。

お前を守ってやる。」

健介がリアの頭を撫でる。

「ふん、ドラゴンの癖に生意気よ。」

リアは健介に抱き付いて、顔を胸に付けた。

「ファイが家に帰ると、荷物は既に馬車に載せられ、出発を待つばかりとなっていた。」

「両親と再会の挨拶をして、直に馬車に乗って出発した。使用人が3人と護衛の兵士が8人が一緒だった。兵士の内、2人は魔術戦士らしい。ヘインツが派遣した護衛は既に帰っていた。」

「ファイ、あなたも立派になったわね。」

「母キュミーが嬉しそうに微笑んで、ファイを抱き締めた。」

「ま、まあ・・・シリアと一緒にだったからね。」

「ファイがちよつと照れて赤面していた。」

「ファイにドラゴンのランが入ってから、このようなスキンシップをされたのは初めてだった。」

「ランは戸惑いながらも、自然に人間の反応をしている。」

「それでも、そのシリア様に付いて行けるだけの才能があったのだから、誇って良いのだぞ。」

「父コーゼも微笑んでいる。」

「ええ、でも自惚れは死を招きます。」

「特に私の様な立場では。」

「自惚れで部下の兵を死なせる訳に行きません。」

「ファイは父に笑顔を向ける。」

「それから、ファイ、あなたはミュール領の領主となったのですから、」

軍を退いて統治に当るべきです。」

キユミーが神妙な顔をして忠告する。

「これはヴァーシル伯爵様が言っていた事だが、領主たるもの領民を守るのが最大の責務だと。

軍に居てはそれは出来ないだろう。」

とコーゼ。

ミユール領の管理は、ファイが着任するまで王国からの代理人が行う。一旦着任すれば、それ以降はファイがミユール領内の全ての管理を任されることになる。

無論、全ての管理を別の誰かに委任しても良いのだが・・・

「そうですね。」

考えてませんでした。」

ファイは額を手で押える。

主3人と友となったエンドーラ、彼女らと一緒に居られないのは寂しい事だが、領主と言う立場にも興味深いものがある。

これは主3人と話し合った方が良さだろう。

そもそも、自分は主達の下僕なのだから、こうして離れている事自体おかしいのだ。

ミユール領への旅は、計らずも初めての家族旅行となった。

屋敷に着くと、使用人が屋敷に荷物を運び込んだ。

ファイの荷物は少ない。

両親の荷物も大して多い訳ではない。

屋敷には家財道具が揃っているから、それ以外の荷物しかないが、平民の彼らの荷物などたかが知れている。

「フィレイ様、ようこそいらっしやいました。

私、この屋敷の管理を任されております、執事のメイバンと申します。

何か判らない事がございましたら、気兼ね無くお訊ね下さい。」

メイバンが恭しくお辞儀をする

「あ、ああ、そうさせて貰います。」

フィはちよつと戸惑ってしまふ。

両親とフィはそれぞれの部屋へメイドに案内された。

その部屋は、ヴァージル領にあるヴァージル伯爵邸のシリアの部屋よりも大きかった。

ミュール領の領主の部屋なのだから、当然ではあるが。

メイバンを部屋に呼んでいくつか話をした。

屋敷の事、メイバンとメイド達使用人の数、護衛の兵士やこの領地に居る兵の数、その宿舎。

他にも把握しておくべき事はあるのだろうが、思いつかなかった。何しろ、平民出である。

いきなり領地の管理などと言われても困るのだ。

翌日から、父コーゼを含めてメイバンと話をした。

領地の地図を見て何があるのか、町の様子はどうか、村々の生産している作物は何かなど。

父コーゼも色々考えてメイバンに質問してくれた。



「ところで、この領地の税はどれくらいなのかな？」

とコーゼ。

平民出の者としては、やはり気になるところだろう。

「はい、現在は5割となっています。」

メイバンは書類をパラパラ捲って現在の税についての書類を見せる。

「ヴァージル領と同じか、まあ良い方だな。」

コーゼは満足に頷いている。

「そうなの？」

とフイ。

そう言う事を気にするような年頃には、既に魔術学校に入ってしまった為、そう言う事には疎かった。

「ああ、本当は4割程度が一番良いのだと思うが、5割までなら良い方だろう。」

駄目な領主のいる領地では、6割、酷い所では7割という所もあると聞く。

7割も税を取られては、生きて行けんよ。」

コーゼが説明する。

「そうなんだ。」

フィは良く判らないながらも頷いた。

フィは知らなかった社会の仕組みのいくつかを、数日で知る事となった。

クリンはトモセーヤ領にある屋敷に戻ってすぐ、不機嫌になった。

「なあ、お前ももう年頃だ。

見合いぐらいしても良いんじゃないか？」

父アルマンがクリンをなだめる様に言う。

クリンが帰って直に、アルマンが見合いの話を持ち出してきたのだ。

それだけならともかく、既に見合いをする事自体が決定されていたのだ。

「お父様、私はまだ結婚するつもりはありません。」

クリンが何度目かの同じ発言をする。

「判ってる。

だから、会うだけで良いから。

な？」

アルマンがナンパでもしているかのように言う。

「そんな気を持たせるような事をして良いはず有りませんわ。」

クリンが突き放す。

そもそも貴族同士の見合いは、そのまま結婚の前段階である。お互いに相手の息子なり娘なりを品定めする場でしかないのだ。見合いをする前に最低限の条件はクリアされているので、特別な問題が無ければ結婚が決まってしまうのが普通だ。

だが、クリンもここに来て思う。

（確かに、そろそろ結婚する年頃ね。

）  
と言うか、もう数年で年増と言われる歳になってしまっわ。）

貴族の女である以上、自由な結婚は出来ないと覚悟は出来ているが。

「とにかく、その見合いの話は今回は断ってください。  
私も結婚の事は考えて置きますから。」

クリンはちょっとだけ譲歩した。

「そうか。」

そこまで言うなら、今回の見合いは断っておくよ。

クリン、お前の好きなようにしてやりたいが、そう出来ない場合もある。

お前が好きな男を捕まえてくれば、問題も解決すると思うのだが。

「

とアルマン。

アルマンもこの見合いでクリンの結婚を決めようとは思っていない。クリンに結婚を意識して欲しいだけだ。それでも今回の見合い相手は、アルマンのお眼鏡に合う相手であるから設定したのだが。

「そんな・・・捕まえるだなんて。それに、貴族の男性で私が好きになりそうな人なんて、今まで居ませんでしたし。」

クリンが遠い目をする。

リアが男だったら良かったのに、と思った事もあるクリンである。実際、途中まで中身は男だった訳だが・・・

「まあ、今はまだ時間があるから、改めて周りを見て見なさい。」

アルマンがクリンの頭を撫でた。

クリンは頭を撫でられながら口を尖らせた。

(何だか、いつも子供扱いなのよね。)

エンドーラはジャヴァス領の屋敷でお茶をしている。

その表情は複雑だ。

その原因は目の前の男性にあった。

ジオレ・ハイテン、問題児のオルセイの兄が先回りしてきたのだ。

「そんなに怒らないで欲しい。」

エンドーラ、君の休暇に割り込む無礼は承知だが、戦場から帰った君に早く会いたかったんだよ。」

ジオレがエンドーラを見詰める。

エンドーラは少し赤面して顔を背ける。

「あなたも弟と同じで、段取りが踏めない人ですわね。その様に強引に事が運べると思われては困りますわ。」

エンドーラがジオレを睨む。

「わ、わかったよ。」

今度から気を付ける。

約束する。

だから、私の謝罪を受け入れて欲しい。」

ジオレが多少怯みながらも言い募る。

「……まあ、今更、帰れとも言えませんし、今回だけは見逃してあげますわ。」

エンドーラは諦めたかのように溜息を吐いた。

「ありがとう、エンドーラ。」

嬉しいよ、本当に。」

ジオレが嬉しそうに笑う。

例のオルセイは傭兵になったらしく、傭兵団の団長として傭兵を探しているらしい。

あのオルセイが団長になってまともな傭兵団になるのか？  
エンドーラは苦笑するしかない。

ジオレはハイテン侯爵の次期党首である。  
相応の学習をしてきたのだろう。  
それなりに博識である。

エンドーラとは違う分野でプロと言った感じである。

良く話して見ると、オルセイと違って自己中心的な言葉を吐く事は少なかった。  
そう言う教育を受けているのかもしれないが、エンドーラは多少認識を改めた。  
だが、警戒を解いた訳ではない。

あのオルセイの兄であるし、エンドーラの実家に先回りして乗り込んでくると言う強引さである。  
エンドーラが隙を見せる事は無かった。

だがそれでも、エンドーラはジオレに口説かれまくる休暇を過ごすことになった。

休暇の最後の日、リアとラン、フィ、クリン、エンドーラが城の高級指揮官用宿舎に戻っていた。  
4人は休暇中のことを話しあった。

フィの話に、リアが父ヘインツに助力を求める手紙を出すと約束した。

クリンの話に他の3人は「確かにそんな年齢ね」と納得した。

エンドーラの話では、3人とも爆笑した。

「な、何笑ってますのよ?!」

エンドーラが赤面している。

リア、ファイ、クリンは笑い転げている。

健介も笑いを堪えるのに必死だった。

「だって、あひ、お腹痛い、ひひひ」

リアがまた笑い出す。

「本当に失礼ですわね。

少し痛い目に合います?」

エンドーラが殺気を放つ。

「ああ、ごめん、悪かったわ。

もう笑えないから。」

リアがニヤニヤしてエンドーラの肩に手を置く。

「もう笑えないって・・・あなたねえ」

エンドーラは剣を手にかけてプルプルと震えている。

「まあまあ、落ち着いて。

席に座りましょう?」

リアがエンドーラと床に転がっているファイとクリンを見た。

皆が席に戻るのを待って、

「エンドーラ、そのジオレって人は良い人なんですよ？  
じゃあ、付き合ってみれば？」

リアは何食わぬ顔で言う。

「そうよね。」

弟がちよつとアレだけど、本人が良い人なら問題ないじゃない。  
家柄も良いし。」

とクリン。

「まあ、そうなんですけど。」

エンドーラがため息をつく。

「何か問題でもあるの？」

フィはなぜか興味津々だ。

「問題と言うか、何と言うか……」

エンドーラは言葉に詰まる。

「ひょっとして、ただ自覚が無いだけじゃない？」

クリンがエンドーラの顔を覗き込むように見る。

「自覚？」



エンドーラはちょっと驚いた。

「ええ、私もそうだけど、あなたも色恋沙汰とは無縁で来たでしょう？」

だから、今そう言う色恋沙汰をしていると言う自覚が無いのよ。それで相手の態度にどう応えて良いのか判らないんじゃない？」

とクリン。

いつに無く大人の発言である。

「ああ、何となくそれ判るわ。」

リアが遠い目をする。

「確かに、それは一理あると思いますわ。」

エンドーラも納得して頷く。

「エンドーラもそのジオレって人が嫌いじゃないなら、付き合ってみなさいよ。」

彼の強引さからすれば、放って置けばそうなると思うけど。

でも、彼のペースに巻き込まれちゃ駄目よ？

エンドーラからも色々彼に質問したりカメラを掛けてみた方が良いと思うわ。」

とリア。

「そうですね。」

相手のペースに巻き込まれちゃいけませんわね。」

エンドーラは付き合つて気があるようだ。

リアが壁際に立っている健介に目を向け、無言で見詰め合つた。

「リアは見合いの話とか無いの？」

とクリン。

「ええ、無いわ。

私、結婚はしないかもしれない。」

リアが少し思い詰めたように言う。

他の3人が驚いた。

「結婚しないって、どうして？」

リアなら美人だし家柄も良いし、選り好み出来るじゃない。」

クリンはちよつと羨ましそうだ。

「伯爵家と言つても、大して力は無いわよ。

私個人の才能と地位は別としてね。」

リアが苦笑する。

「でも、結婚しないなんて、何かありましたの？」

エンドーラが心配そうな顔でリアを見る。

「そんなに心配しないで。」

結婚しないと決めた訳じゃないわ。」

リアは安心させるように微笑む。

健介はリアの言っている意味を理解していた。

健介の為に、リアは結婚を諦めた。

もし、健介が人間に戻れば、その時は結婚すると言う意味だ。

リアの態度には以前から、リアが元の身体に戻ってからそう言う態度が見受けられている。

敏感とは言えない健介でもリアの態度では気が付かない訳が無い。健介自身の気持ちは良く判らない。

以前は女性の身体だった為、恋愛感情を持つような事は無かった。今はドラゴンの身体で、恋愛感情の様なものは持ち得ない。

無論、リアの事は色々な意味で好きではある。

その色々の中に、恋愛感情があるかどうかは良く判らなかつた。

人間の男の身体に入れば、ハッキリするのだろうか？

今は知りようが無い。

1つだけ言える事は、リアにも言ったように、守ってやりたいと思っっている事だ。

## 第25話 次の戦の始まり

しばらくして、クリン達の恋愛と結婚に関する悩みは、考える余裕を無くす事になった。

シヨミル王国方面からペステンに魔物の大群が侵入したのである。その魔物の中にはドラゴンも居ると言う事で、城の中は大騒ぎであった。

無論、健介では無い事は直に釈明したが、それとは別にドラゴンにはドラゴンと言う事で出撃を命じられた。

魔物の大群がどの程度のものか、詳しい情報が入って来ない。情報部員も魔物に食われたらしい。

今は小さな村が襲われただけのようだが、早急に対処しなければならぬ。

近隣の領の兵士は自領の村や町を守るので手一杯だ。

他の部隊の出撃を待たずに、シリア部隊は先行して出撃した。

シリア部隊は人数が少なく、小回りが効くのだ。

シヨミル方面へと2日掛けて行軍し、シリア部隊は魔物の大群と戦闘状態に入った。

魔物達はシリア部隊を見つけると、ワラワラと襲い掛かってきた。数は凡そ3百弱といった所だろうが、殆どは雑魚だ。ハルカントが見えるが5匹しかない。

「一般兵は方陣隊形！」

「魔術戦士は分散遊撃！」

リアが号令を叫ぶ。

長い隊列の中で一般兵が4角の隊形をとり、剣を突き出す。

魔術戦士はその周囲に展開して、個別に魔物と戦い、一般兵の援護に魔法を放つ。

遠くの方に大きな影を見る事が出来た。

健介にはそれがドラゴンである事がわかった。

「リア！」

俺はドラゴンをやる！」

健介は叫び、ドラゴンへと姿を変えた。

押し寄せる魔物の真ん中を突っ切って魔法とブレスを撒き散らし、援護しつつ、相手のドラゴンへと近寄った。

そして、言葉を交わす事無く、ドラゴン同士の戦闘が始まった。

健介はドラゴンのブレスと魔法攻撃を半分浴びる形でかわし、その返礼としてそのドラゴンの頭部に尻尾を叩きつけた。

健介の身体半分は少し焦げているが、表面だけであり、大したダメージでは無い。

相手のドラゴンは、ドラゴンとの戦闘経験が無い事が判った。自分もドラゴンでありながら、相手に効果の薄い炎の攻撃をしている。

相手のドラゴンは後ろへと倒れて脳震盪でも起したのか、じたばたと足掻いている。

健介は少し距離を開けて、増幅魔法に続けて氷結魔法を放った。ドラゴンの身体が凍結し始めると、ドラゴンはブレスを自身へと放ち、凍結を防いだ。

（そう簡単には行かない）

健介は直に雷撃魔法に切り替え、ドラゴンに雷撃を浴びせる。

ドラゴンが怯んでいる内に接近し頭部を殴りつけ、離脱する際に尻尾を身体に叩きつけた。

尻尾についている棘が、ドラゴンの身体に突き刺さり、血が流れ出す。

相手のドラゴンは既に動きが大分鈍っていた。

健介はドラゴンの目の前で魔法の爆発を起して目眩ましにし、一気に近寄って豪腕をアッパーの要領でドラゴンの腹部へと叩き込む。

豪腕の爪が腹部を切り裂き、心臓へ突き刺さった。

ドラゴンはその衝撃で身動きが取れなくなって、そのまま絶命した。健介はドラゴンの腹から腕を引き抜いた。

（このドラゴンは俺が出会ったばかりのランと同程度の奴だな。当然か・・・）

振り返って、魔物の大群との戦いの様子を見ると、粗方片付いていた。

ハルカントもリア達が出るまでも無く、部下の魔術戦士達が仕留めていた。

（なかなか優秀だ。

鍛えた甲斐があったな。）

周囲を見回して、探査魔法を使う。

他に魔物はいないようだった。

人型へと戻って、リア達と合流せずに近くに見えた村へと向かった。

あれだけ魔物が居たのだ、生存者は居ないだろうが、可能性はゼロでは無い。

村に入って、歩きながら様子を見ていく。

村の様子は悲惨であった。

魔物に食い散らされた村人達が倒れている。

仰向けに倒れ、ポツカリ開いた腹部には内臓が無かった。

腕や足も引き千切られ、彼方此方に肉が食い千切られた腕や足が転がっている。

その中に、チラホラと焼け焦げの後があった。

放射状になっているところを見ると、ドラゴンのブレスで焼かれたようだ。

「どう？

何かあった？」

リアが健介の方へと走って来て言う。

「いや、生存者は居ないようだな。

酷い有様だ。」

と健介。

2人で歩いて行くと、健介は泣き声を聞いて立ち止まる。  
小さく弱々しい泣き声だった。

「どうしたの？」

「静かに！」

健介は耳を澄まして、泣き声の方向を探る。

その泣き声は、幼児くらいだと予想した。

「こつちだ。」

健介は声のする方へと小走りする。

たどり着いた先には、2つの焼け焦げた死体があった。

折り重なる様にして並ぶ死体の下。

そこから泣き声が聞こえていた。

健介が死体を退かすと、その下に2歳くらいの幼児がいた。

抱上げて様子を見たが、足に軽い火傷がある以外は外傷は見当たらない。

だが、衰弱しているようで、ぐったりとして弱々しく泣いている。

恐らく、両親と思われる死体が焼け焦げているせいで、幼児の臭いが誤魔化せたのだろう。

だから、魔物に食われなくて済んだのだ。

「水を、それと直に粥を作ってくれ。」

健介はリアに言いつつ、治癒魔法で火傷を癒す。

リアは頷いて補給部隊へと走り出した。

健介も幼児を抱きかかえながら、ゆっくり走って後を追う。

水袋を持って戻ってきたリアから水袋を受取り、幼児に少しずつ水



を飲ませる。

「湯も沸かしてくれ。」

村の方で水は確保出来るだろう。」

健介がリアに言う。

リアが幼児の様子を見て頷き、補給部隊に指示し、兵士達に周囲の警備を指示した。

フィとエンドーラも周囲を警戒しに走り出した。

「その子、生き残り？」

クリンが心配そうに見ている。

「ああ、大分衰弱しているが、多分大丈夫だ。

クリン、この子に粥を食わせてくれ。

冷ましてゆっくりと食わせるんだぞ。」

健介はクリンに幼児を渡す。

「う、うん。」

クリンは幼児を受取ってあやす。

健介はクリンに幼児を渡してから、クリンが医術を学んでいる事を思い出した。

（衰弱した者の看病くらい知ってるか。）

幼児には水分補給とエネルギー補給の為の糖分補給が必要だ。  
ブドウ糖の点滴など無いし、ビタミン剤も無い。

貧しい村には砂糖なんてないし、シーリア部隊は軍だからそんな贅沢品など無い。  
家畜も魔物にやられているからミルクも無いし、果物などすぐに見つからないから、選択肢は1つしかない。  
ドロドロに溶かした粥を食わせる事だ。

健介はまた村へ行つて、他の生き残りが居ないか探したが、もう居なかった。

クリンの居る補給部隊のほうへ戻ると、クリンとリアが幼児に粥を食わせていた。

幼児は先程よりも血色が良くなったように見える。  
後は身体を清潔にして、休ませれば問題なかるう。

「生存者はその子だけだ。」

健介が幼児を見ながら言う。

「それにしてもおかしいわね。」

魔物が、それも複数種類の魔物が、大挙して襲ってくるなんて。」

とリア。

魔物は通常、群れを成すにしても単種で群れる。

複数種類の魔物が群れる事などまず有り得ないのだが、今回はそれが起こっている。

群れない魔物の最たるものであるドラゴンも居たのだ。

「何かおかしいな。」

雑魚はともかく、ドラゴンまでいるとは。」

健介も腕を組んで考える。

(嫌な予感がする・・・)

ドラゴンとなった健介自身が一番この異常事態に懸念を持っていた。

翌日、幼児の容態が安定した事を確認し、城へと移動を開始した。幼児は孤児院に入れる事になるだろう。

城に帰還して魔物の事を報告すると、事態の不可解さに色々な噂が飛び交った。

しかし、その噂も1つの切欠で収まることになる。

王の勅命によって、准将以上の軍人が召集された。その場で、明らかにされた事は、召集された者達を驚愕の渦へと陥れた。

リアが戻ってきて、その内容を仲間の面々に話す。

情報源はシヨミルから亡命してきた魔術師であるという。

その魔術師はシヨミルである研究に携わっていて、その成果が今回の魔物の襲撃に繋がった事。

シヨミルのダンジョンの最深部には魔物を生成する魔法装置があり、それをシヨミルの魔術師達が修理して使い始めたと言う事だった。

魔法装置は魔物を生成し、地上へと転送出来るらしい。

そして、魔物には簡単な指令なら出来るようになっていいると言う事

だった。

恐ろしい事に、その魔法装置でドラゴンをも生成出来ると言う。だが、ドラゴン程の魔物になると、1匹生成するのに3ヶ月は掛かるらしい。

「とんでもない話ですわね。  
信じられます?」

エンドーラが難しい顔をする。  
信じて良いのか判らないという表情だ。

「恐らく、その魔術師の話は本当だろう。」

俺も魔物は生物兵器では無いかと疑っていた所だ。」

健介が皆の顔を見渡して言った。

健介の予想が当たっていたようだ。

「生物兵器?」

クリンが首をかしげる。

「簡単に言えば、兵器となる生き物を作り上げ、その生き物で相手を攻撃する。」

これが生物兵器だ。

魔物も生物だからな。」

健介が簡単に説明する。

「ダンジョン内の魔物も魔法装置によって転送されてきたのね。  
一体何処から入ってきたのかと思うような魔物も居るから、不思議に思っていたのよね。」

リアが納得する。

それはダンジョンに入った事の有る者の誰もが一度は思うことだった。

「亡命魔術師の言う事が本当なら、シヨミルは魔物を生成して我が国を攻撃し始めたと言う事ですね。」

とエンドーラ。

信じる信じないは後回しにしたようだ。

「ええ、王も軍上層部もそう判断したみたい。」

とリア。

「始まったのね、戦争が。」

クリンの言葉が重く部屋に響いた。

シヨミル王国の王の執務室で、シヨミル国王は怒りと焦燥に身を焦がしていた。

「一体何をやって居るのか!?!」

シヨミル国王が叫ぶ。

戦力として生産させた魔物が、制御しきれずに勝手に勝手にペステンの村を襲い始め、その魔物たちはペステンの軍に殲滅されたという。まだ軍備もろくに準備していない段階で、シヨミルと戦端を開く事になってしまう。

そこに、新たな伝令がやって来た。

その報告を聞いたシヨミル国王は、椅子に座ってしばし呆然としていた。

ダンジョン地下の魔物生産をする魔法装置の研究員の魔術師が逃亡、ペステンへ亡命を果たしたという。

これでは言い逃れも出来ない。外交で時間稼ぎも出来ない状況。非常に不味い事態だった。

「至急軍を動員させる！」

魔物を可能な限り生産して、ペステンから我が国の間の適当な場所に配置しろ。

「そこで時間を稼げ！」

シヨミル国王は今出来る事とにかく指示した。

シヨミル軍が完全に揃えば、ペステンを上回る戦力である事は事実だ。

問題はその時間を稼げるかどうかである。

魔物を戦力として扱う事はまだ実験段階であり、魔物がペステンの村を襲った事は事故であった。

だが、シヨミルの村が襲われないように、ペステンの国境近くに魔物を出現させた事自体、侵略行為と見なされても文句は言えない。どちらにしても、魔物の制御が確実になれば、結局はその魔物で襲わせる事になったのだから、遅いか早いかの違いでしかないのだが。

シヨミル軍の動員は、かなりの時間を要する事が予想された。

原因は内紛である。

ペステンよりも大きな国土と勢力を誇るが、その反面、前回のペステン攻略に失敗した事で内部分裂が起こったのだ。

その内部分裂も修復されたのだが、まだ一枚岩と言うには程遠い。

一致団結して事に当れるかどうかはこれから試す事になる。

そう言う状況だからこそ、魔物を戦力にしようとしたのだが、裏目に出してしまった。

魔物を戦力にする事を嫌っている派閥もあり、支援を受けられるかどうかも怪しい状況だ。

シヨミルとペステン、時間との競争が始まっていた。

リアも参加している軍事会議では、議論が紛糾していた。

シヨミル王国は攻めるには遠い国だ。

軍が行軍していけば、障害が無くても20日は掛かる。

しかも、ペステン王国よりも規模が大きく、当然戦力はあちらが上だ。

以前の戦争では、その距離が味方になってくれたが、今度は逆である。

さらに、時間も余りかけられない。

相手は魔物を生成する魔法装置を持っている。  
3ヶ月と言つ長い時間を掛ければ、ドラゴンさえ作り出せるのだ。  
これほどの脅威はない。

不利でありながらも、攻勢に出なければならぬ。  
そんな状況なのだ。

その日の軍事会議を終えて、宿舎に戻ったりアはフィ、クリン、  
エンドーラと参謀の4人を交えて会議をした。  
皆に軍事会議の内容を話した後、意見を聞く。

「どうにも戦力が足りませんね。  
人の戦力だけでも不利なのに、向うは魔物を使う事が出来る。」

クリンは困った顔で腕組みしている。

「現状では一方的にやられてしまいますわね。」

エンドーラはクリンの意見に頷き、悩んでいる。

「参謀の意見は？」

健介が参謀に意見を求める。

彼らは意見を交換して、レグクムが発言する。

「少なくとも、現状戦力で攻勢に出ても勝ち目は無いと考えます。」



ツガノに援軍を要請しても、恐らく焼け石に水でしょう。

彼の国の軍の質は余り高くはありませんから。

シヨミル軍と魔物を退ける為には、一般兵の戦力を魔術戦士程度に上げる必要があります。

相手のドラゴンはラン殿に任せるとして、他の魔物は一般兵に、シヨミル軍は魔術戦士に

それぞれ別けて戦うように仕向ける事が出来れば、勝機はあります。」

とレグクムが説明した。

「一般兵の戦力を上げる。

難しいですわね。」

エンドーラは額に手を当てる。

「確かに、一般兵の実力が底上げできれば、戦局は一気に良くなりますが、

それが出来れば既にやっていますからね。」

クリンも腕組みして考えている。

「他に策は無いの?」

とリア。

「無い事は無いですが、時間が掛かるので相手の出方が不透明になり、確実性が下がります。」

敢えて言うなら、シヨミルの全軍をペステンに引き付けておいて、別働隊をシヨミルへ向かわせませす。

そこで魔法装置を破壊し、シヨミルの王都を占拠する。

さらに、ペステンに侵攻してきた魔物とシヨミル軍を撃退する。

2 正面作戦ですが、シヨミルへ行く軍は少数で良いので、勝機はあります。

ただ、先ほども言いましたが、この作戦は時間が掛かる上、相手の動きが読みにくいので、確実性が下がります。」

とレグクム。

「全軍を引き付けると言うのは危険ですわね。

そこで負ければ、シヨミルを占拠できても帰る場所がなくなりま  
すわ。」

とエンドーラ。

「そもそも全軍を引き付ける事が出来るかどうかも怪しいわ。

シヨミルは魔物が使えるのですから、自国の守りも余裕を持って  
軍を割けるはずです。」

とクリン。

結局、戦略的な不利は免れない事は決定事項のようだった。

参謀達も経験が少なく、少ない情報と少ない戦力では有効な作戦を  
立てられそうに無い。

健介は悩んでいた。

自分の知識を何処まで彼らに教えてやって良いのか？

参謀達の出した案は、健介の知識を用いれば2案とも恐らく可能だ。

だが、その為にはこっちの世界に健介の世界の兵器を持ち込む事になる。

例えその製造に時間が掛かろうと、不利を覆せてしまう。余り良い考えとは言えない気がした。

健介が相手のドラゴンと対峙する事自体は何の問題も無かった。健介自身のドラゴンの身体の重要な秘密の1つを解き明かしていたから。

その元栓とも言えるリミッターである。

健介はその存在を発見し調べた結果、そのリミッターは健介には解けるものだったが、ランには不可能なものだった。ランはその存在自体を気付きもしなかったのである。

そして、推測を立てた。

ランは人工知能の様な存在なのだろう。

ドラゴンの身体を管理し操作する人工知能。

恐らく、本来は外からの命令か何かで、このリミッターを外すのだろうか、健介は自身で外す事が出来た。

ランにそう言う制限があったのだと推測できる。

このリミッターを外すと、今まで見つけても使えなかったドラゴンの身体に隠された兵器が使えるようになるはずだ。まだ試した事は無いが・・・

ドラゴンの体内に眠る膨大な魔力は、普通に戦ったり魔法を使ったりする分には、膨大すぎて使い切れるものではないのだ。その事自体、少しは不思議に思っていたが、その理由がこれだった。ドラゴンの身体にある兵器の為に、膨大な魔力があるのだ。

しかし、健介はこの兵器を使いたくなかった。これだけ膨大な魔力を使う兵器である。とんでもない破壊力を持っているに違いない。

敵国の兵士を殺す事に躊躇は無い。

いや、あるにはあるが仕方ないと割り切れる。

問題は兵器を使った後だ。

そんな兵器の存在が知られば、色々な意味でどうなるか判ったものではない。

危険だと言う事で殺されるか、他の国を侵略する為に使おうとするか。

厄介ごとに巻き込まれるのが目に見えている。

リミッターを外すだけでも、普通のドラゴンには楽に勝てるほど、ドラゴンの身体の性能が向上するはずだ。

しかし、外すだけ外して終わりと言うわけにはいかないだろう。

多数の魔術戦士にワラワラと攻撃されるのは、いかにドラゴンでも厄介なのだ。

その為の兵器なのだが、しかし・・・

あーでも無いこーでも無いと、悩み続ける健介だった。

夜、リアと部屋で2人になった時、健介は幾つかの事を教える事にした。

それは兵器の知識ではなく、こちらの世界ではまだ無い戦術の知識である。

「野戦築城？」

リアが首をかしげる。

こつちの世界では魔術戦士が居る為、堀やバリケードをちよつと作つたくらいでは意味が無いと思われている。だが、それもやり方次第である。

「基本的には守りの為の戦術だが、侵攻している最中にも野戦築城をしておけば、有利に事を運べる。」

健介は説明を始めた。

一通り説明を終えると、リアは納得したようだった。

そもそも、城には堀や防壁や柵があるのだから、それを野戦で応用するのだと判れば理解は早い。

例え魔術戦士であったとしても、障害物を飛び越えたり、魔法攻撃しようとしても隙がうまれるのだ。

その間に槍で突くなり弓を放つなりすれば、一般兵でも魔術戦士を殺せる可能性はある。

無論、そこで一般兵に頼る訳ではなく、魔術戦士に対応させる。

「そんな戦術があつたのね。」

あなたの世界ではそれが普通なの？」

リアがしきりに関心している。

「まあ、そうだな。」

戦術の基本とも言える知識だ。」

「他にも何かあるんじゃない？」

「あるけど教えない。」

「どうして？」

「俺の世界の知識を、無闇に持つて来てはいけない。

下手すると戦争を拡大する事に繋がる。

俺は平和な国で育ったから平和主義者なんだ。」

健介は軽く冗談めかして言った。

「そう、そんなに危ないものならいいわ。

ごめんなさい。」

リアは健介にそつと抱きついた。

「戦争は無くならないかも知れないが、せめて血を流すのは兵士だけにしておきたいものだよ。」

健介はリアを抱きとめて、頭を撫でながら考える。  
少しして、

「リア・・・粒子魔法・・・使うしかないかもしれないな。」

健介は躊躇いがちに言う。

粒子魔法、分解と結合でそれぞれ魔法がある。

分解魔法は大軍を相手には余り用を成さないが、結合魔法は威力を発揮するだろう。

「あの魔法を使うの？」

リアは少し不安そうに聞く。

粒子魔法は健介が使用を極力控えるように要請していた。

破壊力が大きい為、あまり知られたくなかった。

知られれば、それを使った他国への侵攻計画が出て来そうである。

健介の我侷とも言えるが、自分が改修した粒子魔法で戦争が拡大するのは避けたいのだ。

リアもその意見には賛成してくれていた。

「使いたくは無い。」

野戦築城だけで済めば良いのだが。」

健介は希望を述べた。

健介の中では、更に別の葛藤もある。

いざとなった時、粒子魔法を使うべきか？

それともドラゴンのリミッターを外して隠された兵器を使うべきか？  
難しい問題だ。

その後、更に一般兵の為に楯と槍を用いた戦法を教えた。

集団で楯の壁を作り、槍と楯で防御陣を作る戦法は一般兵の生存率を上げるはずだ。

一見、魔術戦士の魔法の餌食になりそうだが、それは味方の魔術戦士が牽制すれば良いだけの話。

それに防御陣の後ろは安全地帯であり、味方の魔術戦士が安全に魔法を放つ格好の場所になる。

これも兵士を使った一種の野戦築城と言える。

## 第26話 草原の戦い

翌日。

リアは早速、野戦築城とそれと組み合わせる楯と長槍と弓を使った戦術案を小冊子に纏めた。

それを、自動書記の魔法で転写していく。

余裕を持って60冊の小冊子を作って、軍事会議へと向かった。

結果から言えば、失敗に終わった。

攻めるのに守りの戦術を考えてどうする？

そんな反応で会議場が塗り潰されて、説明する暇が無かった。

しかしながら、何とか小冊子を配る事は出来、いくつかのグループでは真剣に読んでいる姿を見る事が出来た。

その中にあるのグレグセンがいた。

グレグセンは彼の部下らしい3人と小冊子の内容を話し合っているようだった。

席も遠いし、特別親しい訳でもないから、リアが声を掛ける事は無かった。

会議の結論としては、まずは攻めて見ようと言う、あやふやな決定がなされていた。

まともな戦略も無く、軍を出撃させるらしい。

リアは出撃前に幹部を集めて冊子の中身を説明した。

ラン（健介）が説明する訳に行かないのだ。



その後、大至急、楯と長槍を調達する為に町へ降りた。恐らく、他の部隊は人数が多い為、楯と長槍は使わないだろう。出撃までにどうやっても間に合わない。

また、弓と矢の製作を依頼し、出来次第、城の補給部隊にシリア部隊宛で送るように指示した。

リアの部隊はまだ少人数の為、幾つかの鍛冶屋を回って、10日で楯と長槍を用意してもらえる約束を得た。

鍛冶屋といっても、町にある個人運営のものではなく、軍に属する工場の様なものだ。

中身は鍛冶屋だが、職人が大勢居る。

さらに、町の普通の鍛冶屋でシヨベルとピックアックス（ツルハシ）を大量に購入して城に届けさせた。

シヨベルのようなものは武器では無いので軍の工場では作られていない。

他の部隊の人間も購入に出たようで、その日の内に城下町のシヨベルとピックアックスは無くなった。

他の部隊が次々に出撃していく中、シリア部隊は楯と長槍が届くのを待っていた。

シリア部隊は人数が少なすぎる上、ドラゴンの運用上、大部隊に組み込むのは不利であると判断された。

それで任務は「遊撃」である。

なので、他の部隊とは別行動が出来るのだ。

楯と長槍は剣とは扱いがまるで違うので、道々訓練をせざる得ないが、野戦築城をした上で長槍を使えば何とかなるだろう。相手もこの戦術を知らないだろうから、それが救いである。

9日で楯と長槍が揃い、シリア部隊は出撃した。職人達が頑張ってくれたようだ。

楯は主要部分は木製だが、表面を網目状の鉄柵が補強している。全体を鋼にすると重すぎて行軍など出来ないし、戦闘も出来ない。槍も先端の部分にダガー程度の鋼の切っ先があり、他は木製で同じように網目状の針金で補強している。どちらも片手で扱う為の工夫が凝らしてあった。

1日4時間は長槍と楯を構えた密集状態で行軍させる。時々、隊形を変更させ、楯と槍の移動の仕方を覚えさせる。方陣、円陣の2種だけを何度も繰り返し返させる。それ以上複雑な隊形を覚えさせるほどの時間は無い。

シリア部隊は少人数な為、そんな訓練をしながらでも他の部隊に追いついて、追い越していく。他の部隊の者達は、長い槍と大きな楯を持ったシリア部隊の一般兵を見て、嘲笑していた。少なくともこの国では始めてみる武装なのだろう。ちょっと奇異に見えるのかもしれない。

参謀達の号令に合わせて、前進、停止、右回転、左回転、構え等等の動きを一斉に行っている。まだ動きが合っていない為おかしな部分もあるが、一応統一された動きで1つの生き物のように動いている。少人数である事が結束の強さを引き立てている。

一般兵を4部隊に別けて参謀に行進訓練を任せていた。

戦場に出れば、リア達幹部も最前線で戦う為、一般兵の指揮を取れるのは参謀達だけである。

その事自体も問題なのだが・・・少人数である以上、リア達幹部が戦わないと戦力的に厳しいのだ。

それに即席の長槍兵が何処まで動けるのかを、参謀が知らなければ作戦指揮など出来ない。

12日後、6隊目の部隊に追いついた。

シリア部隊は相変わらず、長槍兵の訓練の行進を行っている。足並みも大分揃って来ており、ザツザツと威圧的な足音で他の部隊の脇を通り過ぎていた。

そんな中、今までよりも派手な罵声がその部隊から上がった。彼らも戦前の緊張で気を紛らわしたいのだろう。

シリア部隊の長槍兵達は既に慣れていたが、エンドーラが黙っている訳が無かった。

影でこそこそ言っ分にはエンドーラも耐えていたのだが。しかし、健介がエンドーラを止めた。

「何故止めますのよ？」

エンドーラは不機嫌丸出しで聞く。

「俺に良い考えがある。

見てな。」

健介は長槍兵の方へと走っていく。

それぞれ指揮をしている参謀達に話をしてから、エンドーラの元に戻った。

「それで、何が始まりますの？」

エンドーラは長槍兵を見る。

「エンドーラ、右手を上げて振ってくれ。」

健介が促す。

エンドーラは首をかしげて、言われた通りにした。

すると、ほぼ同時に長槍兵の方から号令が掛かり、他の部隊と一旦距離を取って、平行して行進した。

号令通りの綺麗な行進であったが、まだ罵声は続いている。

「これで何の意味がありますのよ。」

エンドーラは益々不満顔だ。

「いいから、これからだよ。」

健介はなだめる。

そして、また号令が掛かる。

平行に行進していたが、今度は罵声を上げている部隊へと真っ直ぐ行進し始める。

ザツザツザツと威圧的な足音を響かせて、徐々に近付いてくる長槍兵を見て、罵声は止んだ。

槍を構えていなくても楯を構えて足並み揃えて迫ってくる「壁」は、

足音も含めて強力な威圧感を与えている。罵声を上げていた部隊の者達は黙り、迫り来る長槍兵に怯んで後ずさりした。

距離が3メートルほどになると、一旦停止して、平行して行進し始めた。

もう罵声はやってこない。

「面白いだろ？」

健介がエンドーラに言う。

「ふふふ、そうね。」

あのやり方なら、兵達も満足したでしょうね。」

エンドーラも人の悪い笑顔を浮かべた。

16日後、先頭集団が戦闘を開始したと早馬が叫びながら駆け抜けていった。

先頭集団は2部隊居たはずだ。

シーリア部隊とは、あと1日ほどの距離がある計算だ。

「参謀、意見は？」

リアが参謀を集めて意見を聞く。

参謀は地図を広げ、距離と地形を観察して話し合った。

「しばらく直進してから、この森の中を抜けて敵側面を突ければ良

いでしよう。

もし敵側面を突けなくても、我々の位置を知られないようにすべきです。」

レグクムが街道脇の森を示す。

少人数のシーリア部隊は見つかって包囲されたらお終いだ。

まあ、健介が居るから包囲など簡単に崩せるが、それも場合によるだろう。

リアがその意見を検分して頷く。

「よし、それで行こう。」

半日このまま行軍し、それから森に入る。」

リアが命じた。

森の中を進軍するのは大変だった。

斥候を先に行かせ、敵の斥候や罾が無い事を確認しながら進軍する。腰まである草や倒木などが行く手を遮る。

さすがに森の中では長槍兵も密集隊形は取れず、槍もいちいち枝に引っかかって邪魔だった。

1日掛けて苦労して森を出た。

魔物の軍勢の後方300メートルくらいの場所だった。

そこは草原になっており、隠れる場所は無かった。

直に隊形を陣形へと立て直して、その魔物の軍勢に向かって行軍を開始する。

4つの方陣の長槍兵が横に並んで迫り、その周囲に魔術戦士達が

散開している。

途中で、シーリア部隊に気付いた魔物の一群が迫ってきた。数が少なかった為、周囲の魔術戦士達に蹴散らされた。

距離が50メートルほど近付くと、魔物たちの半数近くがシーリア部隊へと向かってきた。

それを見て取った参謀達が、

「円陣！」

各長槍兵の中から号令を叫ぶ。

魔物たちは雑魚ではあるが、ざっと800くらいのが襲い掛かって来ている。

取り囲まれてしまう為、即座に円陣へと切り替えたのだ。

長槍兵は速やかに陣形を円陣へと組み替えた。

そこへ大量の魔物が圧倒的な物量で迫ってきた。

長槍兵は長槍で突き刺し、楯で押し返して魔物を寄せ付けない。

槍を掻い潜って来た魔物も、楯の隙間や上から襲おうとすれば、後ろの兵士が剣を突き刺して始末している。

その周囲で魔術戦士達が魔物を次々と切り殺し、魔法で焼いている。

一般兵の楯と長槍の防御力が発揮されていた。

兵達は魔物に周囲を囲まれても、冷静に対処していた。

魔術戦士達も長槍兵が確保した陣地に入って魔法でサポートし、同時に魔物を焼き払っている。

(よし、上手くやってるな。)

健介は状況を見て、魔法を連発していた。ドラゴン化する必要は無さそうだった。

魔物が長槍兵の方へ流れ無い様に、攻撃場所を選んでいた。更に双剣で近寄る魔物を切り殺していく。

この魔物の軍勢にはドラゴンは居なかった。ハルカントすら居ない。幸いな事に、数は多いがそれだけだった。

魔物の軍勢の向うに、味方の部隊が魔物と交戦しているのを確認する。

傍目にも疲労が蓄積しているようだ。

周囲の魔物の死体の数から推測するに、数日戦い通しだったのかもしれない。

健介は魔物集団の密度の高い場所を選んで、魔法を叩き込んで援護していく。

魔物を殲滅できたのは2時間近く経つての事だった。

シーリア部隊にも怪我人は出たが、戦死者は無かった。

長槍と大きな楯を使った防御が遺憾なく発揮されたと言える。

闇雲に突っ込んでくる雑魚の魔物相手なら、なんら問題は無さそうだった。

ペステン軍の先頭集団を行軍していたパール部隊とアールイル部隊の損害は酷いものだった。

一般兵の8割を失い、魔術戦士も2割を失っていた。

それでも先陣を任される部隊であり、魔術戦士はパール部隊が1



80、アーライル部隊が150ほど残っている。一般兵の残存はそれぞれ240人と350人だ。大損害を受けてもなお、シーリア部隊よりも圧倒的に兵の数が多い。

辺りは魔物と兵士の死体が大量に散乱している。

血と臓物と汚物の匂いが入り混じり、辺りを包んでいた。

シーリア部隊はパラール、アーライルの部隊に合流した。

リアとパラールとアーライルの3人で会議を開く。

その間に、各々部隊は後始末と休息に入った。

クリンとエンドーラは斥候としてシヨミル方面へと走っていった。部下に疲労していないものが居なかったのだ。

フィは参謀と共に草原の周囲を観察してから、防衛戦術の検討を始めた。

健介はパラール、アーライルの部隊の様子を観察していた。疲れ切っていたのか、生きている者は既に殆どが眠っていた。

夕方、クリンとエンドーラが戻ってきた。

「シヨミル軍がやって来ますわ。

数は約2千、その後にも後続が居るみたいでしたが、数は判りません。」

「ここに来るのは明日の昼くらいになりますわね。」

エンドーラが無表情に報告した。

「野戦築城、やりましょう。」

リアが指示を出す。

フィと参謀が予め準備しておいたので、堀の位置は既に決めてあった。

シーリア部隊の総員で、草原を掘った。

深さは大体3メートルほどの穴の形はV字型の堀で、幅は4メートル程、長さは120メートル程だ。

堀自体は一直線に伸びている。

堀の両端は木々や岩場があつて、一気に攻め入るような事が出来ない自然のバリケードとなっている。

朝方までには掘り終り、準備は出来た。

朝方少し過ぎた頃、後方から補給部隊がやって来た。補給物資の中には、シーリア部隊用の弓と大量の矢があつた。

早速、弓を長槍兵に渡して、矢を各自に持たせる。

「弓の訓練はしていないけど、味方に当てなければ良いわ。

とにかく敵に撃ちなさい。

ただし、放つ時は全員一斉に撃つ事。」

リアが一般兵に言い渡す。

一斉掃射で敵兵を攪乱させる事が重要だ。

長槍兵を堀の後ろに配置し楯で防壁を作り、堀と合わせて4メートル以上の壁とする。

一般兵の半数を弓兵として長槍兵の後ろに配置する。

更に後ろに、魔術戦士の中から特に魔術が得意な者を10人ほど配

置き、魔法による防御を担当させた。  
当然、足元に魔法陣を敷かせている。

堀の長さに対して兵の数が少ないが、それはパラルとアーライルの部隊の為に長くして置いたのだ。  
使うかどうかは、判らないが。

「リア、俺は敵の後ろから攻める。」

「ええ、お願い。」

「気を付けてね。」

「おまえもな。」

健介はリアと短く言葉を交わして、陣地を出て草原を走っていく。敵の姿を遠くに確認した後、姿勢を低くして走り続けた。

地面に少し凹凸がある場所で身を伏せ、敵シヨミル軍が通り過ぎるのを待った。

遠くでシーリア部隊の隣にパラル、アーライルの生き残りの一般兵が堀の後ろに待機しているのが見えた。

シヨミル軍が陣形を整えようとしているところで、健介はドラゴンに戻って突っ込んでいった。

側面後方からのドラゴンの突撃で、シヨミル軍の兵士達が吹き飛んでいく。

さすがに人数が多くて軍団を突き抜ける前に勢いが衰えた。

シヨミル軍の集団の中で足を踏ん張ってスピニングして、尻尾で吹き飛ばしブレスで焼き殺す。

その直後に元居た草原へと離脱する。

その方向が空いていて、速く移動出来るからだ。  
多数の魔術戦士が居る場所に長居するのは危険だ。

健介が離脱した後に、パラルとアーライルの魔術戦士達が突撃したようだった。

よく見るとシーリア部隊の魔術戦士も居た。

リアが健介の行動を説明して、作戦に組み込ませたのだろう。

シヨミル軍の混乱に乗じた攻勢は成功しているようだ。

だが数が違う、健介はもう一度突撃を掛ける。

先ほどとは違う、ジグザグの時間差突撃だ。

何処で狙われているのか判らないから、予測できる動きは避ける。

今度は深く敵陣に入り込まず、味方に当たらないようにプレスと魔法を放ち、尻尾で吹き飛ばす。

的にならないように、素早く移動する。

健介が突撃した直後に、味方の魔術戦士達は退いた様だ。

それならばと、健介も敵兵を吹き飛ばしながら、敵陣の後方へと離脱した。

この2分にも満たない戦いで、シヨミル軍は3割の兵を失った。  
一般兵の割合はわからない。

シヨミル軍はドラゴンの不意打ちの攻撃によって混乱していた。

しかし、数の上では圧倒的に有利なのはシヨミル軍である。

既に体勢を立て直しつつ、2正面作戦に出るようだ。

健介に挑んでくる20人余りの魔術戦士達。

もし、その20人がクリン程の実力があれば勝ち目は無いが、そこまでの実力者がそうそう居るはずも無い。

健介はジグザグに突撃し、周囲に魔法で爆発を巻き起こす。

敵の魔術戦士達の半数はその健介の行動に戸惑い、動きを止めた。その一瞬に近付いて、豪腕で薙ぎ払い、そのままスピンして尻尾で吹き飛ばす。それで7人が戦闘不能になったはずだ。

スピン直後に背中へ剣が突き立てられた。いつの間にか背中に魔術戦士がいた。

健介はそれを無視して、最大加速で他の魔術戦士へと突撃して振り払う。

その魔術戦士は突撃を免れたが、魔法の餌食になった。

健介のスピードにようやく突いていける程度の魔術戦士達が残った。

(下手に時間を掛けるのはヤバイな。  
リミッターを外すか。)

健介は残りの魔術戦士達を見て思った。  
それなりの手練達である。  
負ける気はしないが、倒すのに時間が掛かりそうだ。  
その間に、部隊の本体がやられたら意味が無い。

リミッターを外すと身体が軽くなった感じがした。  
そして、鱗の色が変わる。  
黒っぽい濃い緑色のような色の鱗が淡い光を放ち、徐々に淡い銀色へと変わる。

周りの魔術戦士も驚いたが、健介も驚いた。  
健介もリミッターを外すのは初めてで、鱗の色が変わるなど思っても見なかったのだ。

一瞬の驚愕の後、健介の周囲50メートルの範囲が灼熱の大火で包まれ、魔術戦士達は逃げる事が出来ずに焼け死んだ。この灼熱の大火は兵器の1つだった。

(やべ、使ってしまった。)

意識しすぎて、兵器のスイッチが入ったらしい。

戦場を見ると、敵兵が健介を見て騒いでいる。

(見られたもんはしょうがない、使うか。)

健介は戦場へと突撃していく。

ドラゴンの巨体が信じられないほどの速度で移動する。

敵の魔術戦士が対応出来ずに体当たりを食らって潰れ、吹き飛んでいった。

敵兵集団の中に強引に突っ込むと、そこにいた兵士達は高速船の

先端が水を割って弾くように、左右に弾き飛ばされた。

そして、先ほどの灼熱の大火を発動する。

周囲50メートルほどの範囲に居る敵兵が一気に焼け死んだ。

苦しむ時間も無いはずだ。

そして、即座に離脱する。

敵兵はドラゴンの速度と炎の破壊力に恐れをなして逃走を始めた。その後をシーリア、パラル、アーライルの魔術戦士が追撃する。シヨミル軍は完全に戦意を失って、逃げるか殺されるかしていた。

それを見て健介はリミッターを戻し、そして人型になった。

いつもは感じなかった魔力が減った感触を、今は感じていた。

それでも「少し減った」と言う感じである。

堀の後ろへと戻ると、一般兵たちは一息ついていた。  
一般兵たちの被害は少ない様だった。

しばらくして、リア達に戻ってきた。

「お疲れさん。」

健介がリア達に言う。

「あの銀色は何ですか？」

エンドーラが迫ってくる。

早速食いついてきた。

「まあ、アレがドラゴン本来の力の一部だ。」

健介は苦笑して説明した。

「アレが一部？」

クリンが驚いて目を丸くする。

「他にもあるの？」

とリア。

「まあね。」

ドラゴン本来の力とは言え、魔力の消費が激しいから、必要な時

にしか使わない。」

健介は曖昧に答えた。

他にも兵器があるのは判っているが、使った事が無い為、詳細が判らない。

大雑把に「なんとなく」というレベルでは判る。

例えば、プレスを強化したような「砲撃」が出来る兵器があるらしい。

しかし、その威力や破壊の性質は使ってみないと判らない。

「そうなんだ。」

フィが、不思議そうに健介を見る。

クリンとリアが顔を合わせる。

フィの中のランは、ドラゴンの身体の中にいた時にはリミッターの事や体内にある兵器の事に気付かなかったのだ。

不思議に思うのも当然か。

「ほらほら、戦はこれで終わりじゃないのだから、休息の指示と次の算段をしないと。」

健介が注意した。

次の日、後続の味方部隊が合流した。

ハゼン部隊と補給部隊。

ハゼン部隊は総勢800人余りの部隊だ。

パラルとアール、シールとハゼンも含めた会議を開いた。



「昨日の敵は退けたが、敵も後続が来ている。」

我々にはドラゴンがいるが、頼ってばかりは居られん。」

とパラル。

「そうだが、戦力的には不利な状況は変わらない。」

ドラゴンを使わねばなるまい。」

とアーライル。

「ドラゴン単独では戦力としては厳しいです。」

我々人間がサポートしてこそ、ドラゴンの戦力は十分に発揮されます。」

シーリアが一応忠告しておく。

下手に使われて捨て駒にされては堪らない。

「つまり、ドラゴンと人間が混合で戦えと?」

とハゼン。

「いえ、混合で戦うとドラゴンは味方を気にして攻撃が消極的になります。」

我々人間がするのは、ドラゴンを狙う敵兵を攪乱する事です。」

とシーリア。

「なるほど。」

シーリア部隊の戦果を見れば、そうなのだろうな。

まあ、ドラゴンはシーリア部隊に任せるとして、このまま進軍するのは不味かろう。

やはり、ここで後続を待つてから進軍すべきだ。」

とアーライル。

敵シヨミル軍の兵力はまだまだペステンよりも大きいはずだ。

魔物相手に戦力を消耗させられたペステンに比べれば、シヨミルの戦力はまだまだ衰えていないはずだ。

そして、その魔物が使える事の利点は大きい。

それ故に、これ以上戦力を削られる事は避けなければならない。

会議の結果、後続の部隊を待つてから進軍を再開する事にした。

シヨミルの將軍の1人が焦りの表情を見せる。

進軍先の草原で味方とペステン軍が衝突し、そこにドラゴンが現れたというのだ。

しかもそれは敵のドラゴンで、我が軍を選択的に攻撃していたと言う。

現在、シヨミルが生産する魔物は敵味方を問わず攻撃してしまう。そこまでの制御は出来ていないのだ。

それなのにどう言う事か？

ふとある噂を思い出す。

ペステンの学生がドラゴンを使役していると言っ噂。

数年前からそんな噂がシヨミルにも届いていた。

「まさか、本当だったと言う事が。」

学生が使役していると言う事で、全く信じていなかった。

将軍自身、ドラゴンと戦った事があり、その強さを知っていたのだ。

ペステンがツガノとパレノルの戦いに、ツガノ側として参戦し、ドラゴンを使ったと言う噂も聞いてはいたのだ。

だが、確証は得られなかったし、軍の編成に忙しくてそれどころではなかった。

ドラゴンが敵に回れば、戦局は大きく左右されてしまう可能性がある。

しかし、敵の戦力は我が方の半数にも満たない、ならば、ドラゴンに半数を当てるぐらいの勢いで行けば良い。

(ドラゴンとて不死身ではない。)

シヨミルの将軍は、心の中で策を決定した。

将軍にとっては残念な事に、逃亡している敗残兵はドラゴンの出現に気を取られしまった。

その為、ペステン軍の戦術(野戦築城)に関する情報が上がってこなかった。

その情報があれば、少しは策を立てることが出来たのだが、何の策も無く進軍する事となった。

そして、丸2日に渡って攻勢をほぼ完全に阻まれる事となる。

次の日の昼頃、2人の兵士がペステン方面から走ってきた。その2人の兵士は、後続の部隊が敵の襲撃を受けた事を知らせに来た者達だった。

恐らく、大きく迂回してペステン方面へと進軍したのだろう。

「敵は人間の兵士か？」

とアーライル。

「はい、魔物は居ませんでした。」

と伝令の兵士。

「そうですね。」

「魔物には不意を打つような頭は無いです。」

とリア。

他の者も頷く。

「どつする？」

「ここで引き返すのか？」

とパラール。

「恐らく、引き返したら後ろから敵が襲ってくるでしょうな。」

とハゼン。

シヨミル軍はすぐそこまで迫っている。

「我々はこのまま待機すべきでしょう。後続の部隊には更に後ろに部隊が居ます。

我々が向う必要はありませんし、我々が向かえば敵の思惑に乗る事になるでしょう。」

とリア。

敵の立場になれば、長い戦列の側面を突いて混乱させ、行軍を遅らせるという事くらいは簡単に見抜ける。

敵の別の兵力が迫っているのは判っているから、下手に後退は出来ない。

シヨミルまでは後数日の距離だ。

シヨミルに入って市街戦になれば、戦力差を軽減できるだろう。

問題は見方の後続部隊がちゃんとやってくるかどうかだが、恐らく問題は無いはずだ。

大きく迂回して不意を打つとなると、大軍では出来ない。

「そう言う事だな。

ここいらで、野戦築城して留まる事にしよう。」

とハゼン。

ハゼンは野戦築城の有効性を理解している者のようだ。

パラールとアーライルもこれまでの戦いで野戦築城の有効性を見ていたので、ハゼンの言う事に従った。

シーリア部隊が作った堀を利用し、四角く堀を作る。さらに木を切り倒して柵と槍を作る。

槍の先にはナイフを結び付けて先端を補強する。

楯は無いが、戦死した兵士の鎧を木で補強して楯代わりにした。死者の冒流ではあるが、生者を守る為だ。

2日かけて準備をし、後続のシヨミル軍を迎え撃った。

シヨミル軍は4千を超える軍勢で迫ってきた。

兵力はドラゴンを除けば単純に3倍ほどの差が有る。

ペステンの後続部隊はまだ2日以上後方に居て、戦闘をしている。普通なら即時撤退をする兵力差だ。

ペステン軍は堀の内側から一步も出ずに籠城した。

健介も今回は後方からの奇襲は出来なかった。

大量の斥候が放たれていて、見つかってしまったのだ。

野戦築城をしていなければ、初日で敗退していた事だろう。

魔術戦士と言えど、堀と柵を越えて攻撃するのは難しい。

飛び越えれば、堀の内側で集団で狙い撃ちされる。

ペステン側は堀の内側から、都合の良いタイミングで堀を飛び越えて攻撃し、戻ってくれば良い。

その前後の隙は内側の安全地帯から魔法で援護し、健介がドラゴン化して攻め立てる。

敵に比して大きな損害を与えているが、元の兵力差のせいで余り効果は上がっている様に見える。

「野戦で籠城などと聞いた事が無いが、やれば出来るもんだな。」

とパラール。

そうは言っても、容易いものではない。

「しかし、このままでは負ける。」

とアーライル。

「戦力差が有りすぎるな。」

とハゼン。

「これだけ差があると、ドラゴンも効果的に動けません。時間を掛けて抗戦するしかないですね。」

とシーリア。

ドラゴンの戦力は突破力はあるが、籠城では余り役に立たない。ブレスも魔法も、それほど射程が長い訳ではないのだ。

シヨミル軍は昼夜を問わず攻撃してきた。

お陰でペステン軍は疲労が蓄積しつつある。

籠城2日目が終わる頃、健介はリアと話をした。

「リア、例の魔法を使う。」

健介が簡潔に言う。

使うのを渋って味方が殺されるのは、本末転倒と言えなくも無い。攻めて来た敵に同情するのもバカらしい。

もし何かあったら、健介だけ身を隠せば良い。

ドラゴンの兵器を使わず魔法を選択したのは、兵器はまだ得体が知れないし、ドラゴンの姿になら無いと使えない。

魔法なら人型のままで使えるからだ。  
ドラゴンの巨体は目立つ。

リアは健介の言葉には何も忖えず、ただ静かに健介を見詰め返しただけだった。

「赤と青の閃光が見えたら、10数えて伏せる様に全軍に指示を出してくれ。」

健介が魔法を使うタイミングを教える。

リアは頷いて、全軍に伝令を走らせた。

健介はタイミングを見て、陣地の外に飛び出した。

一番手薄な場所から出て、全力で敵を薙ぎ払いながら突破し、一旦戦場から離脱した。

敵が見れば、救援を求める伝令か何かと思うだろう。

シヨミル軍の布陣は野戦築城を囲う様に1800程が、少し離れた場所に残りの1200程が予備兵力として待機している。

シヨミル軍もこの様な戦いは初めてで、責めあぐねているようだ。

予備兵力の方は、明らかにドラゴン対策であろう布陣をしている。かなり広い範囲に布陣しているのだ。

ドラゴンの突撃を想定して、被害を抑え反撃し易いようにしている。

健介は闇に紛れて、その布陣に近付いた。

130メートルほど離れた場所で止まり、一番端にいる兵士の足元に狙いを定める。

距離的にはこの辺りが限界だった。



閃光魔法を2発放つ。

赤と青の閃光が夜の草原を照らし出す。敵と味方の視線がその閃光に注がれた。

健介はすぐに結合魔法の準備に入った。

以前のダンジョンで試したよりも強力な設定で使わなければならない。

今回は威力を試す時間が無い。

130メートル離れていても、自分も被害を受ける可能性が高い。

それでも、この魔法を使わない場合の被害を考えれば、遥かにマシなはずだ。

感で、結合の範囲を設定する。

魔法を放った。

時間は閃光魔法から11秒。

健介は伏せて防壁を張り巡らせようとする。

次の瞬間、標的の敵兵は光り輝いて四散した。

地表に小さな太陽が数瞬出来上がって、戦場を灼熱の閃光で照らした。

地響きを伴った大音響と共に、衝撃波が周囲を襲う。

広く布陣していた軍の端から発生した熱線と衝撃波は、その半数を焼き殺しバラバラに吹き飛ばした。

残りの半数も火傷を負って衝撃波に飛ばされた。

飛んできた死体に潰されたり、鎧の破片や骨が刺さって死んだ者も少なくない。

熱はともかく、衝撃波は野戦築城している陣地にも襲ってきた。

若干減衰しているとは言え、野戦築城を包囲している敵兵が吹き飛ばされて堀を飛び越えたり、堀に落ちたりしている。

堀の内側ではリアの通達によって兵士達は伏せていたため、吹き飛ばされる事は無かった。

堀を飛び越えて来た敵兵の死体等が降ってきて、軽傷を負ったものは居た。

数分して、野戦築城内部の兵士達は立ち上がって状況を確認した。シヨミル軍はほぼ壊滅状態であった。

生きている者はまだ1000人は下らないが、戦闘可能な兵士はその半数にも満たないだろう。

敵も味方も呆気に取られて愕然としている。

「敵、掃討に移る！」

「魔術戦士隊突撃！」

パラルがいち早く気を取り直して、指示を出した。それを聞いたアーライルとシーリアも指示を出す。

堀を飛び越えて魔術戦士達がシヨミル軍の兵士達を殺して回った。既に組織的反撃も出来ず、負傷者が大多数のシヨミル軍は、動ける者はただ逃げるしかなかった。

草原では、ほぼ一方的な殺戮が繰り返されていた。

負傷して逃げられないシヨミル軍の兵士は、容赦なく討ち取られていった。

健介は立ち上がって、自分に治癒魔法を掛けた。

衝撃波は何かかわしたが、頭部を庇った腕と後頭部から背中を、熱線に焼かれて火傷していた。

熱に強いドラゴンの身体を焼くとは、威力の調整を失敗した。

「いてて、まともな調整も無く使うもんじゃないな。」

健介は辟易していた。

これでは自爆魔法だ。

健介は小さなキノコ雲を夜目の利く目で見上げた。

その下にある、砂がガラス状に固まった小さなクレーターが、その魔法の威力を物語っていた。

## 第27話 ダンジョンでの別れ

シヨミル軍をほぼ殲滅してから2日後、後続の味方部隊が到着した。

その数凡そ4千。

ペステン軍の本陣とも言える部隊である、シバ部隊。シバ將軍率いる部隊だ。

「諸君、良く耐えてくれた。

我が隊もちよっかいを受けて進軍が遅れてしまっただけなのに、良く耐えられたものだ」

シバがアーライル達の報告を受けて感心したように言う。

「ええ、シーリア殿の推奨した野戦築城のお陰です。」

とハゼン。

「おお、あれか。

役に立ったのか？」

シバがさも意外そうに訊いた。

「野戦築城は確かに有効な戦術です。

我々全員がそれを目の当たりにしています。」

アーライルは弁護士の如くフォローを入れる。

「そうか。」

野戦築城の戦術については、この戦が終わったらゆっくりと研究する事にしよう。」

とシバ。

シバ本陣の魔術戦士達は、草原の死体を片付けて魔法陣を描いた。シリアと健介には見覚えのある魔法陣だった。

転移魔法の魔法陣。

シリアと健介が共同で転生魔法を改造して作った魔法の魔法陣だ。その魔法陣から1人の兵士がどこかに消え、その数分後、30分毎に補給物資や増援の部隊が送り込まれてきた。

「今、シヨミル王国へと進軍している部隊は、囷のようなものだ。」

ここから陣容を固めて、シヨミル王国へと進撃する。」

シバが説明を始めた。

他の部隊には知らされていないが、初めから転移魔法を使ってこの草原に部隊を集結するつもりだったようだ。

その橋頭堡ともいえる草原を確保する為の本陣がシバ部隊と言う事らしい。

パラルル、アーライル、ハゼンの部隊はその露払いをする部隊として派遣された。

結果的には任務を達成出来たが、かなり危うい状態だった。

「食えない奴が上にいるようだな」

健介が苦笑しながら言う。

パラルル、アーライル、ハゼン、そして、リア達も皆、苦笑するなり憤慨するなりしていた。

軍人であるから、この様な事は覚悟していたのだろうが、やはり当事者になると複雑な気持ちだろう。

まあ、勝機の見えない愚直な死の行進をさせられるよりはマシだが。

魔法陣から転移して来た部隊と、後続の部隊を合わせて兵数は最終的に1万を超えた。

貴族所有の兵と義勇兵も動員され、傭兵団もいる。

こんな無茶な運用が出来るのは、転移魔法のお陰だ。

補給物資も各領地から転移魔法で王都へ転移し、王都からここへと転移しているらしい。

グレグセンも転移魔法でやって来た。

だが、この拠点防衛の為に残留するらしい。

シーリアとは接触する縁の無い男であった。

グレグセンとシーリアは軽く敬礼をするだけで、通り過ぎた。

シーリア部隊は被害が少なく、少人数で機動力があるため、早速出発となったのだ。

戦列を整えて次々と部隊がシヨミルへと進軍していく。

長蛇の列を成して進軍を開始して、6日でシヨミル王国に進入した。途中通過した村や町には兵は居らず、平民が怯えてペステン軍を見ていた。

ペステン軍は怯える平民を相手している暇など無い。無視してシヨミル王国にある魔術学校管理下のダンジョンへ向かう。

第一の目標は魔術学校とダンジョンを制圧し、魔物を生成する魔法装置を破壊する事だ。

ダンジョン制圧には時間が掛かるから、その間に第二目標の王都を制圧する。

魔術学校の周囲にはシヨミル軍の迎撃部隊は居なかった。

魔術学校には生徒はもう居ないようで、既に避難していた。

その代わり、魔物の大群がいた。

ペステン軍はその魔物の大群を退治しながら、ダンジョンへと道を開く。

大物の魔物の製造を諦めて数の勝負に出たのか、小物しかない。

楯と槍で武装したシーリア部隊がここでも活躍した。

長槍兵と魔術戦士の連携が板に付いて来た。

小物の魔物相手なら、円陣を組んだ槍兵の中心地は魔術戦士が常駐してじつくりと魔法攻撃を仕掛けることも可能だ。

内と外から魔法攻撃を受けて、魔物たちが四散した。

周囲の味方の部隊は、シーリア部隊の長槍兵（一般兵）と魔術戦士の連携を興味深く見守っていた。

ダンジョンへと入ったのは5部隊。

シーリア部隊もその中に入る。

ただし、魔術戦士だけで一般兵は入らない。

広いダンジョンも、1千近い兵士が入ると狭く感じる。

他の部隊が魔物を殲滅し、シリア部隊の20数名が4グループに分かれてダンジョンの地図を描いて行く。雑用に近い作業は最少人数のシリア部隊の仕事だ。

「それにしても、ダンジョンの最深部って何処まで降りれば良いのかな？」

クリンが地図を繋ぎ合わせながら言う。

「判りませんわね。」

とにかく降りるしか無いですわ。」

とエンドーラ。

そう言えば、そう言う情報は誰も持っていなかった。亡命してきた魔術師達に聞くべき情報だろうに。

ダンジョンの攻略は基本的には単調な作業だ。地図を作り、魔物を駆逐して降りていくだけ。その作業を只管繰り返す。

魔術戦士が1千人近くもいると、ダンジョン攻略は早い。

5日で地下124階へ降りていた。

途中、尋常では無い大量の魔物に阻まれていたが、魔術戦士も多かった為、駆逐できた。

しかし、被害は少なくは無い。

兵数は700程度に減っている。

魔物の大多数は雑魚なので、前衛で塞き止めておきながら、魔法



で薙ぎ払う。

被害の大部分はこの前衛の者達である。

健介はダンジョン内では人型のままで居た。

狭いダンジョン内ではドラゴンの姿は動けない場所が多い。立场上、大抵は先頭で戦っていた。

ドラゴンと言えど疲労はするので、時々後方へ下がる。

「全く、とんでもない所だな。」

健介がワラワラと押し寄せる魔物を見て言う。

小物でもあれだけいればドラゴンが怖くないのか、健介を見ても逃げようとしらない。

或は、何か調整されているのかもしれない。

「何処まで降りれば良いのかしら。」

リアもさすがにウンザリしてきたようだ。

大人数で攻略していても、こつも戦闘が続くと気が滅入る。

「多分、もう少しだと思うよ。」

健介が魔法の準備をする。

薙ぎ払う為の強力な魔法は、多少の準備が必要だ。

「もう少しして？」

どうして判るの？」

リアも魔法の準備をする。

既に前衛の魔術戦士達が防壁を張って、魔物を押し留めている。

「ダンジョンの構造だよ。」

健介は短く説明する。

「構造？」

リアが首をかしげる。

エンドーラの合図で、健介達が一斉に魔法を放つ。

ダンジョンの通路を埋め尽くす魔物達が、炎に包まれて行く。魔法の炎は消える事無く、ダンジョンの通路を辿ってドンドン先に進んで、魔物を飲み込んだ。

「そう、例えば家を建てる時に、石組みを作るだろう？」

その石の組みは、下層に行くほど密にして頑丈にする必要がある。地図を見てみれば上層部に比べて徐々に通路や広場が少なくなっているのが判るよ。」

ダンジョンを構成している巨石は、何らかの魔法の影響を受けている事は間違いない。

健介は巨石を強化し重量を軽減しているのでは無いかと推測した。それでも考えないと、ちよっとこの深度のダンジョンを保てそうに無いと、健介でも判る。

「なるほど。」

じゃあ、そろそろダンジョンも最下層になるのね。」

リアがホツとした様子だ。

周りで話を聞いていた兵士達も、心なしかホツとした雰囲気になっ

た。

6日目、地下142階へ降りたところで、ダンジョンは最下層になっていた。

そして、その最下層からの横への通路で、広い部屋へと入った。

そこは大きな貨物倉庫のような雰囲気のある場所であった。

そして。

「退避！」

ダンジョンへ戻れ！」

リアが叫ぶ。

その広い部屋には、ドラゴンが3匹待ち構えていた。

雑魚ならともかく、ドラゴン3匹では並みの魔術戦士が数十人で向かっては犠牲が増えるだけだ。

運良くと言うのか悪くと言うのか、他の部隊よりは早く見つけてしまった。

他の部隊の実力上位者の錬度は知らないが、シリア部隊の方が安心して任せられるだろう。

味方のドラゴンが居るし。

「エンドーラ、クリンを呼んで来て。

フィ、ランも含めた5人でやるわ。」

リアが通路に隠れて指示を出す。

リア、フィ、クリン、エンドーラ、ランの5人が集まって作戦を

立てる。

リアとクリン、フィとエンドーラのペアがそれぞれドラゴンを1匹相手にして、引き付けて置く。

その間に、ランが1匹1匹始末するのが基本方針だ。

ドラゴン相手でも防戦に徹すれば、短時間なら2人で抑えられる。

「それじゃ、行くわよ!」

リアが号令をかける。

ドラゴンの居る巨大な倉庫の様な部屋へ突入すると、ブレスの集中攻撃を受けた。

5人は素早く散開して回避する。

「見え見えなのよ!」

とエンドーラ。

それを訊いて他の4人は苦笑した。

健介は他の4人と離れて、ドラゴンの姿へと戻る。

3匹のドラゴンは健介に気付き、一瞬動きを止めた。

戸惑っているような雰囲気だ。

その隙に、全員が攻撃を開始する。

健介は狙ったドラゴンへ突進して頭部を殴り倒し、倒れた所へ氷結魔法を叩き込む。

図らずも、不意打ちとなった。

凍結し始めたドラゴンは慌てて自身にブレスを掛けて凍結を阻もうとするが、それは健介の予想通りの行動だった。以前にも同じ光景を見ていたから、行動が読る。ブレスを吐くドラゴンの頭部へ、尻尾の1撃を加えてブレスを止め、更に氷結魔法を頭部へ叩き込む。そのドラゴンは頭部を凍結され、動きが止まった。それでも死んでいる訳ではない。健介はそのドラゴンの頭部と首を持って、引き千切って止めを刺した。

健介がドラゴン1匹を始末した後、他の2匹の方を見る。他の2匹はリア達と戦っていた。ドラゴン2匹は1匹が始末されたのに気が付いていたが、リア達の戦闘で身動きが取れないようだった。

「1匹片付いたぞ。」

リア、クリンはエンドーラ組みに加勢しろ。」

健介が叫び、リア組みが戦っているドラゴンへと迫る。

リアとクリンはちらりと健介を見て、クリンとエンドーラの戦っているドラゴンへと矛先を変える。リアとクリンが戦っていたドラゴンは、それを見送って迫ってくる健介を見た。

「お前は何故人間と一緒に居る？」

そのドラゴンが健介に問う。

「その質問に意味があるのか？」

健介が10メートル手前で対峙する。

「……ないな。」

そのドラゴンは健介に攻撃を開始した。

健介は防壁を張って尻尾と魔法の攻撃を防ぎ、反撃に出た。他のドラゴンと違って、健介は戦い慣れしている。

魔力の使い方も他のドラゴンよりも効率的で、身体強化の効率も良い。

瞬間的にだが移動速度はここに居たドラゴンの2倍に達するだろう。

素早くドラゴンの横に移動して、豪腕の爪でドラゴンの腹部を引き裂く。

さらに、身体を回転させて、引き裂いた部分へ向けて尻尾を突き刺した。

尻尾が貫通して、尻尾の先端がドラゴンの背中から突き出る。

ドラゴンは血を吐いて痙攣して絶命した。

ドラゴンも同じドラゴンに攻撃されれば、いとも簡単に殺される。ベテラン兵士と新米兵士が戦っているようなものだ。

もう1匹のドラゴンも、リア達に追い詰められていた。対ドラゴン用に魔術付加した剣が、ドラゴンの鱗を易々と貫いている。

ドラゴンは足を切り刻まれて、高速移動できない状態だった。

ドラゴンは防戦一方になっており、次第に弱っていった。

止めの魔法をリアが打ち込み、最後の1匹も絶命した。

健介は人型に戻って、リア達に合流する。

「向うに通路がある。」

健介が教えた。

入ってきた通路とは反対側に、通路があった。

5人でその通路を確認してから、部隊を引き連れて奥へと進む。奥に行くのと1つの部屋にたどり着いた。

その部屋には巨大な魔法装置が置いてあった。そして、その部屋には2人の魔術師が居た。

「あなた達、降伏しなさい。」

私はペステン王国軍シーリア准将、降伏すれば命までは取らないわ。」

リアが1歩前に出て、降伏勧告する。

2人の魔術師は素直に従った。

こうなる事は予想していたような雰囲気だ。

「この魔法装置を止めなさい。」

リアが命令する。

「それは出来ない。」

この魔法装置はこのダンジョンの維持装置でもある。もし止めれば、ダンジョンが崩壊する。

それに、この魔法装置にはプロテクトが掛かっている、止める事は不可能だ。」

と魔術師。

「魔物の生成だけでも止める事は出来ないの？」

とリア。

「無理だ。

魔物の生成とダンジョン維持が、この魔法装置の機能だ。

片方だけ止める事は出来ない。」

魔術師が説明する。

この場所にいたペステンへと亡命した魔術師が、この魔法装置の中心的研究者であった。

魔物の転送位置などの調整は彼で無いとうまく出来ない。

つまり、ここに居る魔術師では元の状態に戻す事も出来ず、やるには月単位の時間が必要と言う事だ。

リア達の目的は、この魔法装置の破壊だが、魔法装置が止まればダンジョンが崩壊するとなれば、止める事が出来ない。  
生理めになってしまう。

「おい、あの魔法陣は何だ？」

健介が魔術師に問う。

健介が指差した先にある魔法陣は、健介とリアが作った転移の魔法の魔法陣に似ていた。

「それは古代の魔族が使用した転送魔法の魔法陣だ。

何処に転送されるのか判らないから、使ったことは無い。」



と魔術師。

リア達が相談している間、健介はその魔法陣を検分していた。リア達の意見は分かれている。

誰かがここに残って魔法装置を破壊するか、魔法装置の改変を魔術師にさせて魔物をダンジョン内に留めるか。

しかし、魔法装置の改変には多大な時間が掛かり、その間に大量の魔物が地上へ送られてしまう。それでは犠牲者が増える。

「俺に考えがある。」

健介がリア達に言う。

「何か良い方法があるの？」

リアが期待した顔で言う。

「俺がここに残ってアレを破壊する。」

と健介。

「駄目よ。」

リアが即答する。

「まあ最後まで聞きなよ。」

俺も死ぬ気は無い。

それに、この魔法装置を破壊するには強力な魔法が必要だ。

俺にしか出来まい。

俺はこの魔法装置を破壊したら、その魔法陣で脱出する。」

健介が先ほどの魔法陣を指差す。

「それは何処に飛ばされるか判らないでしょう？  
危険だわ。」

リアはなおも反対する。

「だが、これしか方法は無い。  
あの魔法陣を調べたが、転送先はちゃんと存在している事は判った。

どこかは判らないが、直に死ぬ事は無い。」

と健介。

「でも、危険だわ。」

とリアが不安そうに健介を見詰めて繰り返す。

「大丈夫。

必ず戻るよ。」

健介がリアの肩に手を置く。

リアは涙目で見詰めて来たが、健介はそれを無視した。  
余り時間が無い。

地上の軍事行動の様子は判らないが、魔法装置が動いているなら、  
魔物の生成と転送が続いていると言っ事だ。

「ファイ、クリン、エンドーラ・・・リアを頼む。  
直に撤退して地上へ出て、入り口から離れる。  
地上まで5日あれば着くだろう。  
俺は6日待つてから魔法装置を破壊する。」

健介が4人にこれからの行動を説明した。  
ファイ、クリン、エンドーラは頷いた。

「ミコト・・・」

リアが小さく呟いて健介を見る。

「必ず戻るから、心配するな。」

健介がリアに言つて、クリンに頷いた。  
クリンはリアを引つ張つて部屋を出て行った。

健介は魔法装置の部屋で待った。  
その部屋には他にも通路があるが、崩落していて進めなかった。  
薄暗い静かな部屋の中で、ペステン軍がダンジョンから脱出するのを待つ。

魔法装置は一種のオルゴールの様な風体だった。  
開閉できる蓋を開けると、内部にはざつと数千枚の金属の板があり、  
魔法構成らしき模様が彫られていた。  
さすがにこれだけの数の魔法構成を解読するのは健介でも困難だ。

亡命した魔術師やここに居た魔術師は、多少なりとも解読したの

だろう。

興味深い内容だけに、話を聞きたいものだが・・・

6日目が終わる頃、健介は魔法装置を破壊する為に、増幅魔法で限界まで威力を増した雷撃魔法を数回魔法装置へ放った。

粒子魔法よりもこつちの方が手頃だからだ。

2回目で魔法装置の防壁が破壊され、その後3回の雷撃で魔法装置は破壊され停止した。

魔法装置内の魔力の流れが停止して、ダンジョンの崩壊が始まった。

しばらくすれば、この場所は大量の石と土砂で押し潰されるだろう。

「さて、大博打だな。」

健介はそう呟きながら、魔法陣へと入る。

一呼吸してから、転送魔法を発動させて消えた。

リア達はダンジョンから脱出して、入り口から5百メートル離れた場所様子を見ていた。

最初は小さな振動だったが、それが地響きを伴う大音響となり、ダンジョンのあるであろう地面が陥没し始めた。

そこはあり地獄のような有様で陥没していく。

地響きが止む頃には、地面の陥没は深さ約60メートルに及んでいた。

「ラン、脱出できたかしら。」

エンドーラが小声で心配そうに言う。

出会った頃の彼女からは想像できない魔物への言葉だ。

「帰ってくると言ってたもの。」

大丈夫よ。」

クリンが涙目で泣きそうになっている。

リアは不安そうな顔で黙って頷き、エンドーラも真剣な顔で頷いた。

地上の戦闘はペステンの有利に進行していた。

ペステンは大兵力を一気に投入していたし、シヨミル王国の軍は終結半ばでペステンの侵攻を許してしまった。

組織的な反抗が出来ずに相次いで降伏していた。

シヨミルの王都は既にほぼ陥落状態である。

城の一部が既にペステンの手に落ちており、城の陥落も時間の問題だった。

シヨミルの村や町の治安維持に、一般兵を割り当てていたが、魔物は小物しか出現しておらず、駆逐は容易であった。

それに降伏した兵士も治安維持に協力していた。

魔物を使用したシヨミルの王族には反感を持っていたようだ。

魔物は敵国に送り込めば戦力になるが、余りに惨いものだ。

人間の兵士でも女子供関係なく殺すものは居る。

だが、魔物はそれだけでなく、人を生きたまま食うのだ。

しかも、その魔物が自国内でも暴れまわるとなれば、もはや人として容認出来るはずがない。

数日後、城が陥落し、王族は処刑され、シヨミル王国は滅亡した。

シーリア部隊はその後すぐにペステンへと帰還した。  
ラン（健介）は行方不明のままだった。

シーリアは帰還すると、上層部からの審問を受けた。  
ドラゴンの能力についてである。

シーリアは正直に「判らない」と答えた。  
シーリアはランから詳しい事は何も聞いていなかった。

上層部は多少疑っていたが、あまり追求はしなかった。  
肝心のドラゴンは既にいないのだ。

ダンジョンの周囲にいた兵士の話で裏付けられた事に、使役されたドラゴンはダンジョンの中に生き埋めになって行方不明となった。  
シーリアが多少隠し事をしていても、ドラゴンがいないので話はならない。  
上層部はシーリアを解放した。

リアが宿舎に戻ると、クリンが待っていた。

「大丈夫だった？」

クリンが心配そうにリアに話しかける。

「うん、問題ない。」

ランの事を聞かれただけよ。

居なくなつたから興味がなくなつたみたいね。」

リアは肩をすくめ苦笑する。

軍組織に居る人間など、そんなものだろう。

ドラゴンの中に人が居るなど夢にも思わないはずだ。

シリア部隊の上級指揮官の面々は、戦闘に関する報告書を書き上げ、各地で警備が薄くなつた為に増え始めた犯罪や盗賊の対応に追われた。

出撃していた貴族の兵が戻るまでそれは続き、戦後のドタバタが沈静化するのに2ヶ月掛かった。

結局、その後もランは帰還する事は無かった。

## 第28話 影の守護者

健介の転送された先は、真の闇に支配されていた。遠くで轟音が響いているのが判る。

立っている場所が僅かに揺れている。

ダンジョンからそう遠くない場所だと言う事だ。

健介は光の魔法で明かりを得て、周りを見る。

ドラゴンの目なら一応見えなくもないのだが、明かりを点けた方がより見やすい。

そこは何処かの地下室のような部屋だった。転送魔法の魔法陣しかない。

その部屋を出ると通路があり、3つのドアと階段があるのが判る。健介はその場所を彼方此方歩いて回り、調査した。

その場所は研究施設のような場所だった。

魔族らしい者のミイラ化した死体がいくつもあり、長い間誰もここに来ていない事が判った。

魔物の標本や魔法装置がある。

「興味深い場所だが、脱出経路は無いようだな。」

脱出経路があれば、魔族のミイラは無いだろう。

健介は研究施設の魔法装置や器具を詳しく調べていく。

「あの転送魔法は使えないが、俺の転移魔法陣を改良すれば脱出の



可能性はある。」

健介の転移魔法は、基本的には魔法陣から魔法陣への物体転移だが、転移先に魔法陣が無くても使用は可能だ。

転移先に魔法陣を用意するのは3つの目的がある。

1つは目印として、もう1つはその場所に転移されると言う警告としての目的だ。

最後は転送先の空間を安定させる為だ。

1つ目は場所さえ判れば大きな問題ではない。

2つ目は周りに人が居なければ、問題にならない。

3つ目が問題としては大きい。

転移先の空間を安定させる事。

転移直後の空間は不安定になりやすく、転移した物体を破壊してしまう事がある。

それを回避する為の安定装置として魔法陣が必要なのだ。

逆に言えば、魔法陣が無いところへ転移するのは自殺行為である。

健介には改良のアイデアがあった。

転送先に魔法陣が無ければ、その魔法陣を転送すれば良い。

具体的には魔法陣を描く魔法を転送する。

物体では無いから、転送に掛かる空間の歪みは殆ど無いはずだ。

転送先で魔法陣が描かれたら、続いて物体を転送する。

これで安全に転移できるはずだ。

(ドラゴンの身体でよかった。)

健介は運が良かった。

転移魔法を改良するには時間が掛かる。

人間だったら餓死している所だ。  
ドラゴンの身体は食料を必要としない。  
身体の損傷が無ければ、食事をしなくても生きていけるのだ。  
その場合、活動に多少の制約は出るが、敵がいる訳でもないし問題は無い。

健介は転移魔法の改良しながら、合間を縫って研究施設を詳しく調査しはじめた。

シヨミルでの戦闘から4年。

リアはヴァージル伯爵家の当主として、ヴァージル領の屋敷に戻っていた。

未だにランは戻っていなかった。

リアがヴァージル領へと戻る事になったのは、父ヘインツが盗賊との戦いで負傷したのが切欠だった。

その時に、シーリアがヴァージル伯爵の爵位を受け継ぎ、当主としてヴァージル領を統治する事になった。

無論、その時に軍は退役している。

リアが軍を退役して直、エンドーラも結婚して退役した。  
例のジオレ・ハイテンのプロポーズに応じての結婚だった。

今ではフィとクリンだけが軍に残っている。

フィとクリンはシヨミルでの戦闘の功績で、准将に格上げされている。

フィも退役させるか悩んだが、シリア隊で一度に3人も退役するなどとなったら目を付けられる。

それで無くともドラゴンの件で目を付けられたのだから。

そんな訳で、フィはしばらくクリンのサポート役として軍に残らせる事になった。

シヨミル王国は現在、ペステンの属領となっておりシヨミル方面領としてペステン貴族の管理下にある。

シヨミルとペステンの間には広い街道が作られ、その間に幾つも町が出来始めている。

ペステンではダンジョン最深部にあるであろう魔法装置をどうするか検討されていたが、現状維持と言う結論が出ていた。魔法装置を破壊すれば、ダンジョンが崩壊して魔術戦士の育成に使用えなくなる。

かと言って、魔法装置を使っても魔物を上手く操作出来ないのでは、シヨミル王国の二の舞である。

さらに、シヨミル王国のダンジョンの最深部には魔族は居なかったが、ペステンのダンジョンの最深部は魔族が居そうだった。ダンジョン内での魔族の目撃報告があるからだ。

下手すると、魔族との戦争に成りかねない。

この様な次第で、現状維持になったのである。

「あいつ、いつまで待たせるのよ。」

リアが屋敷の窓から外を眺めながら呟く。

あいつ、とは無論、健介の事だ。

リアはミコトという偽名しか知らないが。

リアは待っていた。

ミコトが戻ってくるのを。

ヘインツが見合い話を持ってきても、断っていた。

どうしても乗り気になれなかったのだ。

そこで、ヘインツには養子を取るようにと言っていた。

養子に家督を継がせればよいと。

リアにとっては貴族の自分には価値は無かった。

ヴァージル伯爵という立場も虚しいものだった。

自分の居るべき場所はここでは無いと思っていた。

(早く戻ってきなさいよ。もう。)

リアは涙目で夜空を見詰めた。

実の所、健介はリアの近くにいた。

幽霊ではない。

普通の平民に紛れて、リアの屋敷の近くの宿に泊まっていた。

今の健介の人型の姿は、人そのものだった。

顔形が変わった訳ではない。

髪、瞳、肌の色を人の色に近いものに変えたのだ。

これは例の地下の研究施設で見つけた装置での調整の結果である。ドラゴンが人型になるのは、魔術による結果だ。

その魔術の構成は複雑で、顔形を変えるのは難しいが髪や瞳、肌の

色を変えるくらいなら簡単に出来たのだ。  
今は金髪碧眼、白色の肌になっている。

そして、もう一つ。  
宿にはもう1人いた。

実は人ではないのだが、どう見ても人にしか見えない。  
可愛らしい女性の外見だが、戦闘能力はハルカントより若干劣る程  
度の魔物だ。

彼女の名はリリスと名付けた。

リリスは魔物の生成装置で作られた。

元々あの研究施設で人型の魔物が研究されていた様で、ほぼ最終段  
階のものらしい。

ドラゴンと違って、戦闘能力よりも人の様な順応性を重視して作ら  
れた魔物だ。

恐らく、警備&護衛兼使用人のような使い道を考えて作ったのだら  
う。

この魔物は1体しか作れなかった。

正確には既に作られて仮死状態だったものが1体しかいなかった。  
魔法装置自体はすでに破損しており、稼動しなかった。

その最後の1体を目覚めさせ、下僕として連れて来たのだ。

宿では健介とリリスは若い夫婦と言う事になっている。

健介はミコトと名乗っている。

なぜ、健介はリアに会いに行かないのか？

それはリアの為である。

人の身ではない健介が側に居ては、リアが結婚できないと思ったの  
だ。

だが、それは逆効果だったのかもしれない。  
シーリアは結婚せず、ヘインツは養子を探していると聞く。  
健介は頭を抱えた。

「リアは頑固だな。」

健介は呟いて苦笑する。

（必ず戻ると言ったのが不味かったか。

しかし、あの時はそう言うしかなかったからな。）

健介は頭を振った。

あの地下研究施設から脱出出来たのは、ダンジョン崩壊から約8  
カ月後。

その間に脱出用の転移魔法の術式の構築と、リリスの発見と起動、  
教育など色々とやっていた。

脱出してからは、リアの近くに潜んで見守っていた。

脱出後、影からリアを支えていたのだ。  
結構忙しかった。

時には、リアに害のある人間を暗殺し、他にもエンドーラやクリン  
の手助けもしたりしていた。  
シヨミル王国との戦争の功績によって、將軍となったリアには敵が  
増えていた。

その敵はペステン国内の貴族なのだから始末に終えない。

当時はシヨミルがペステンに併合された直後であり、軍の情報部  
も半数がシヨミルへと移っていた。

その為、裏の動きが活発化したのだ。

一番の標的にされたのはリアだ。  
ヴァージル領の繁栄を妬み、ヴァージル領とその富を奪おうと画策するものが複数いたのだ。

リアを暗殺すれば、ヴァージル伯の次期当主が不在となり、養子を取る事になるだろう。

そこに付け入る為にリアを狙ったのだ。

また、エンドーラも狙われていた。

こちらはジオレとの結婚問題で、ジオレの婚約者候補だった貴族に狙われる事となった。

ジオレの妻になる事が出来れば、有力な門閥貴族であるハイテン家との太いパイプが出来るのだ。

それを横から奪われたと思われた訳だ。

実際はジオレがエンドーラに一方的に言い寄っていただけなのだが、  
・

健介が戻って来た時には、リアは対暗殺者用の傭兵を雇っており、  
エンドーラにはジオレが派遣した護衛の魔術戦士がいた。

クリンとフィもとばつちりを受けて、暗殺者に襲われていたので、  
傭兵とジオレの魔術戦士達が一緒に守っていた。

しかし、健介にはそれでは不十分である事が判った。

ただ守っているだけでは、いずれ殺される。

相手のペースで動いていては駄目なのだ。

そこで健介はリアとエンドーラに差し向けられている暗殺者を片  
っ端から殺して回った。

最初に尋問した暗殺者は何も言わなかったので、暗殺者に尋問は無  
意味と判断し、時間の節約として迅速に始末して回ったのだ。

何も考えずにただ始末していた訳では無い。

無論、狙いがあった。

暗殺者と言う裏の仕事を引き受ける傭兵は少ないのだ。

暗殺者が次々と始末されていけば、暗殺者を雇う為により大きな行動を起こさなければならぬ。

ちよつと近くの町中で傭兵を雇えば良かったのが、より遠くの町へと傭兵を探しに行かなければならぬ。

そついう動きを注意して置けば、首謀者を突き止めるのは容易だった。

健介自身が囷の暗殺者として売り込んで接触すれば尚の事容易だった。

エンドーラを暗殺しようとした貴族は、その情報を匿名の手紙でエンドーラに流した。

それをジオレが再調査して裏付けを取ってから、ジオレ（ハイテン家）がその貴族を貴族社会から抹殺した。

惚れた女を暗殺されそうになって、ジオレは荒れていたようだった。時間を掛けてようやくエンドーラの態度が軟化したと思った矢先にこの騒ぎである。

ガードの固いエンドーラがまたガードに入ってしまった、ジオレは途方に暮れたのだった。

まあ、その後も粘り強く押し続けて、エンドーラも根負けして結婚してしまつたが。

リアを暗殺しようとしていた貴族は健介が逆に暗殺した。

まともな証拠が無いし、リアでは逆に暗殺を仕掛けると言う手段には出られないと思つたからだ。

リアが雇つたのは対暗殺者用の傭兵であつて、暗殺者ではない。そこにリアの限界を感じたのだ。



暗殺者を雇い、敵の暗殺者から首謀者の情報を引き出し、その首謀者を暗殺する。

リアにはそう言う考え方が出来ない。  
良くも悪くも、性格が真っ直ぐなのだ。

今、リアは軍から退いてヴァーゼル領に引つ込んだので、敵は少なくなつた。

それにリアの地元であり、狙いにくくなつた。  
怪しい人間は目に付くから。

影ながらリアを守っていたのだが、今はまた悩んでいた。  
時々外から見かけるリアの顔を見ると、心が痛む。

(ここはクリンに頼むか。

彼女に説得させて、俺はもう戻らないと諦めさせて、結婚させる方が良いな。

俺は人に戻れないし、この世界の人間でもない。)

健介はリリスにリアを影から守るように言い聞かせて宿を出た。  
リリスは3年以上、健介と共に行動しており、人間社会の行動規範やリアの護衛については既に理解している。

リアは強いはずだが、多人数で襲撃を受けるような場合には、リリスが助けになるだろう。  
リアの敵はまだいるのだ。

数日後、健介はクリンの居る王都へと入つた。  
クリンと連絡を取る為、町の子供に駄賃をやって手紙を託す。

夜、クリンはやって来た。

指定した酒場に入ったクリンの姿は昔よりも大人になって、弱々しい感じが抜けていた。

リアやエンドーラと離れて大人になったようだ。

健介は手を振ってクリンを呼ぶ。

「クリン！」

クリンが健介を見て驚いた顔をして、足早に近付いてきた。

「ラン！」

驚いたわ。

生きてたのね。」

クリンは驚き、そして喜んでくれた。

「クリン。」

声大きい。

悪いが俺は死んだ事にしてくれ。

これからはミコトと呼んでくれ。」

健介が小声で言って周りを見回す。

クリンは不思議そうな顔をしたが頷いた。

「判ったわ。

ミコトね。

それが本来の名前だったっけ。」

クリンが思い出したように言う。

リアに呼び名として教えた偽名だ。

本名を教えても意味は無いので、放っておく。

「クリン、リアの事で頼みがあるんだ。」

健介は改めて言う。

「リアの事？」

何かあったの？」

「事情は置くとして、本題から言う。」

リアに俺はもう死んだから、結婚する様にと欲して欲しい。」

クリンは真顔で軽く頭を傾げ、健介を見詰めてくる。

「まだ会ってなかったんだ？」

クリンが意外そうに言う。

「ああ。」

あいつが結婚してから会おうと思ってたんだが……結婚しないつもりらしい。」

健介は苦笑する。

「会えば良いじゃない。」

どうして会わないの？」

「あいつが俺を諦めるようにする為だ。」

「どうして諦めないといけないの？」

「俺はもう人間じゃない。」

クリンは健介の言葉に寂しげな顔をした。  
中身は人間だが、身体はドラゴン。

また人間に入れ替わるにしても、適当な人間を見つけるのは至難だ。  
犯罪者の身体を使うのは嫌だ。

そんな事をするなら、洗濯していない他人の下着を着る方がマシだ。  
少なくとも、下着は脱ぎ捨てる事が出来るのだから。

「人間の男と結婚させようと言うのね？」

「魔物と一緒に居るよりはマシだろう？」

クリンと健介はしばし見詰め合う。

「それがリアの幸せだと思うの？」

「俺はそう思っている。」

人が人と結婚し、子供を作り育む。

それが自然で、そこに魔物が入る余地は無い。」

健介は首を振る。

「そう・・・そうね。」

「そうかもしれない。」

クリンは哀しげに健介を見る。

「リアの説得を頼む。」

あいつが結婚したら、俺も会いにいける。」

健介は少し寂しそうに微笑んだ。

リアは毎日を政務で忙しく過していた。

領地の管理で些細な事は事務官にやらせているが、大きな事はリア自身が詳細まで検討して取り組んでいる。

以前、リアがフィの身体を使っていた頃に発見した石炭の使用が進み、販売網は拡大しており、貴重な収入源となっている。

品種改良された作物が1つ生産の軌道に乗っていて、味も良く人氣になりつつある。

今後はその生産を拡大していく事になるだろう。

リアが当主になり領内の盗賊狩りに参加するようになってから、領内での盗賊の被害はほぼ無くなっていった。

ヴァージル領の軍も、リアが時々訓練指導をしている為、以前よりも質が向上している。

ヴァージル領の町や村は、4年前の戦争以前より活気がある。

そんな訳で、繁栄しているヴァージル領に対して妬みの目を向ける貴族が増えていた。

ヴァージル領に戻ってから、ちょっとしたいざこざを出されるような事態はまだ無いが、周囲の状況は余り良くない。

いずれ、以前のクリンの婚約話であったような、小競り合いが起きる可能性は大いにある。

ペステンでは貴族同士の戦争と言うのは珍しいことでは無い。

しかし、戦争と言つのは金がかかるものであるから、ちょっとした小競り合いで済ませる事が多い。

稀に本格的な戦争に発展する事もある。

大規模な内戦に発展しそうな場合には、王が王国軍を介入させて止めさせるが、それでもない限りは特に何もしないのだ。

明らかな非が認められる場合、国王の裁定によって処断される事もある。

クリンの婚約話の事件もそうだった。

貴族の中には陰謀を張り巡らし、罠をはって口実を作る者も居る。そう言う相手には国王の裁定を期待する事は出来ない。

リアとしては注意しなければならぬ相手である。

幸いにして、リアと共に来た元参謀のハモによって、周囲の状況は他の貴族よりも判っていた。

ハモは諜報員としての才能も有ったようだ。

そんな中での政務の毎日で、リアも精神的に疲れていた。

そこで油断をしてしまう事になった。

いつも護衛を付けて町の様子を見に歩くのだが、その日は一人で気楽に散歩したいと思つて護衛を置いて来てしまったのだ。

リアもまさか白昼の町中で襲われるとは思つていなかったが、考えが甘かった。

屋敷を出て25分ほど歩いて人込みを抜けた所で、襲撃を受けた。

人込みを抜けたとは言え、周囲には人が居り、白昼堂々とリアを襲う者たち。

リアも一人で出てきた為、警戒はしていたが、それでも不意を突かれた。

しかも、相手は魔術戦士が5人。

最初の1人の不意打ちを何とか剣を抜いて避けたものの、次々と襲い掛かってくる襲撃者に追い詰められていく。

相手の魔術戦士達は恐らく傭兵。

それも暗殺を生業としている者らしく、目の周囲が露出しているだけの覆面を被り、襲ってきたタイミングも絶妙だった。リアでも警戒していなければやられていただろう。

町中に剣戟の音が響き渡る。

数人の平民が啞然と見守る中、領主のシーリアが襲撃者と戦っていた。

だが、平民に助けられるような戦いではない。

(不味いな、このままでは)

リアはそう思いながらも、焦りは無かった。

襲撃者の1人1人の実力は格下である。

5人居るからその隙を狙えないだけだ。

それでも戦い様によっては勝てる、そう思える相手だった。

リアは防戦一方で追い詰められながらも、機会を伺っていた。

その時、不意に襲撃者の後方の2人が吹き飛んだ。

それに気付いて襲撃者の3人が一旦リアから離れた。

吹き飛んだ襲撃者の2人のうち1人は身体が有り得ない角度に曲がって居り、即死していた。

もう1人も地面に倒れて呻き声を上げている。

襲撃者を吹き飛ばした者と思われる人物は、無表情で立っていた。

よく見ると可愛らしい顔立ちの女性である。

残った3人の襲撃者は不利を悟って、地面に転がって居る仲間を殺して逃走した。

5人を相手に攻撃をかわしきったシーリアと新たな敵を相手に、たった3人で戦うなど自殺行為である。

リアは襲撃者を追う事が出来なかった。1人で深追いすれば、また同じ事になる。それに、目の前の女性が気になった。

「ありがとう。  
助かったわ。」

リアは剣を納めて女性に近付いた。その女性は表情を少し緩め、静かにリアを見詰め返す。

「私は知ってると思うけど、領主のシーリアよ。  
あなたは？」

リアは女性を観察する。リアよりも少し背が低く、華奢な身体に見える可愛い女性だ。だが、地面に転がって居る襲撃者の様子を見るに、見かけ通りの女性ではない。そして、女性の言葉にリアの思考は一瞬停止する。

「私はミコト様の命を受けてあなたを護衛しているリリスと申しませう。」

リリスが可愛らしい声で、静かに言う。



「・・・ミコト？」

「ミコトが居るの？」

リアがリリースに問質す。

「いいえ、ミコト様は居ません。」

「居ない？」

「居ないってどう言う事？」

リアは思わずリリースの肩を掴む。

「ミコト様はもう居ません。」

「ミコト様の命により、あなたを護衛しに来ました。」

リリースは繰り返す。

リリースは健介に支持された通りに答えていた。  
このような事態は想定済みだった。

この場合、リリースは健介の代わりに護衛として来たと言って、リアの側にいる事になる。

当然、健介が生きている事は秘密のままだ。

リアは居ないと繰り返し言われて、その意味を「死」と理解した。

「・・・そう。」

リアは目を潤ませて居た。

そこに町の衛兵が2人走ってきた。

「シーリア様！」

「ご無事でしたか。」

「ああ、問題ない。」

「それよりハモを呼んで来てくれ。」

リアは気を取り直して指示を出すと、衛兵の1人が走って行った。

「こちらの女性は？」

「ともう1人の衛兵。」

「ああ、私の護衛のリリスだ。」

とリア。

「護衛?!」

「この女性がですか？」

衛兵は驚いた。

見た目は華奢で可愛らしい女性である。

「そこに倒れている襲撃者は、リリスがやったのよ。」

「外見に惑わされないで。」

リアがにべも無く言う。

衛兵は恐ろしい物でも見るようにリリスを見た。

リアは屋敷に早く帰りたいかった。

このリリースからもっと詳しく情報を引き出したかった。

しばらく待っている、ハモと数人の護衛が走ってやってきた。

「シーリア様、護衛も付けずに外出されるなど不注意ですよ。」

ハモが小言を言う。

「済まない。」

「ここは任せて良いか？」

リアが苦笑する。

ハモはシーリアをマジマジと見る。

いつもはハモの小言を、煩そうに言い返してくるのだが、今は何か落ち込んでいるようだ。

「ここは私にお任せ下さい。」

ハモが言うとリアはリリースを連れて歩き出す。

その後ろを護衛が付いて行く。

（一体何があったのかな？）

興味深い、今は襲撃者の正体を探らなければ。（

ハモは襲撃者の死体を検分し始めた。

リアは屋敷に帰ると、早速リリースにミコトの話聞いた。

しかし、ミコトの事は殆ど判らなかつた。

リアの質問にリリスは殆ど判らないと答えていたのだ。

リアは溜息をついて、リリスを見る。

リリスは人間では無いだろう。

リアにはそれが判つた。

先ほどの戦闘能力もそうだが、リリスには人とは違う何かを感じる。そう、ドラゴンが人型になって側に居た頃のような感触だ。ほんの僅かな気配の違いで、他の者には判らないだろうが、リアには判る。

「リリス、あなたは私を護衛すると言っているけど、私の命令は聞けないの？」

護衛されるのは良いが、側においては困る事もある。命令出来ればその方が良い。

「私はミコト様の命により、あなたの命令も受けます。」

リリスが真顔で簡素に答えた。

「そう、良かったわ。」

これから宜しくね。リリス。」

リアはリリスに微笑む。

「はい。」

リリスはリアに頷いた。

夕方前、ハモが報告しに来た。

「あの襲撃者達を調べましたが、レクサスに籍を置く傭兵と言う事以外、余り情報は得られませんでした。

ですが、人相風体と人数から、町で聞き込みをしたところ、いくつか情報が得られました。

宿のメイドの話では、奴らはマノル候の命に従っているようです。

」

傭兵達はメイドの側で話をしていたのだろう。

それは偶々か、わざとか？

今回の暗殺者は二流どころだろう。

リアを明らかに嘗めていた。

襲撃のタイミングは絶妙だったがそれだけだ。

しかも、簡単に判る手掛りを残している。

「マノル候・・・マノル候の領地は隣のレクサス領の向うだわね。

レクサス伯と関係があるのかしら？」

リアは地図を思い浮かべる。

「それはまだ不明ですね。

レクサス伯の周辺に動きは無いようですが。」

「或は、マノル候は私とレクサス伯を戦わせて、疲弊した所で双方の領地に攻め込むつもりなのかも知れないわね。

どう思うっ？」

「現時点での情報では、そう考える事は来ますが、まだまだ情報が少なすぎます。」

マノルとレクサスに調査員を派遣しますので、少々お待ち下さい。

┌

ハモもまだ不十分な情報で分析出来ない。

ハモは健介が参謀として選び出した者だ。  
健介の残した遺産と言う事も出来る。

（私は今でも守られている。）

リアはそう思っていた。

ヴァージル領の繁栄、ハモ、リリス、リア自身。  
健介の影響は大きい。

## 第29話 ギルメル

健介はクリンと共にヴァーゼル領へと戻ってきた。

クリンが休暇を取り、リアの説得をしてくれる事になったのだ。

ヴァーゼル領に入ったところでクリンと別れた。

一足先に町に入り、宿に戻るとリリスが居ない事に気付いた。

その宿は引き払って、別の宿を取る。

こうなった時に決めていた行動だ。

リリスが居ない理由は予想が出来た。

今はリアの屋敷に居るのだろうと。

(リアが襲われたと言う事だな。

周囲の状況はそんなに悪化しているのか。)

健介は頭を悩ませる。

健介も一応、町の商人などから噂話を聞いた入りして、周囲の領地の貴族の話を聞いていた。

こんなに早く実力行使をして来るとは、健介も思っていなかった。

(戦争が終わったばかりだというのに、貴族と言う奴は・・・)

健介が目立たないように屋敷を見張っていると、クリンが屋敷に入るのが判った。

リアが出迎えており、その少し後ろにリリスが居た。リリスは健介に気付いて、健介を見た。健介は少し頷いて合図し、リリスも頷いた。その後、3人は屋敷に入った。

健介はひとまず宿に戻って、夜になるのを待った。

リアは茶室にクリンを通し、メイドにお茶を用意させた。

「久しぶりね。クリン。」

「元気そうで良かったわ。」

リアが微笑む。

「ええ、リアも思ったより元気そうね。」

「ところで、その女性は？」

クリンも微笑んでリリスを見る。

リリスはリアの席の後ろで立っている。

メイドとは衣装が違うし、雰囲気も異なる。

武器を持っている訳ではないが、只者でない事は判る。

「彼女はリリスというの。」

「ミコトが私の護衛として残したみたい。」

リアが寂しそうに答えた。

「ミコトが？」



クリンは驚いた顔をする。

(そんな話聞いてないわ。  
全くミコトの奴は。)

クリンは胸中で愚痴った。

「身勝手よね。」

私達を置いていくなんて。

リリスが代わりになると思っているのかしら。」

リアは半泣きになっている。

クリンは少し驚いて戸惑った。

リアのこんな弱々しい姿は初めて見た。

昔の、凛々しい感じでリーダー的存在だった彼女からは想像も付かない。

「リア、結婚しなさい。」

子供でも産んだら、悩んでいる暇はなくなるわ。」

クリンは早速健介から託された任務を遂行する。

「結婚なんて、私は・・・」

「あの人はもう居ないのよ。」

それに、あなたは領主なの。

領民の為にも、あなたはしっかりしなくちゃ駄目なのよ。  
聞いたわ。」

あなた襲撃されたのよね？

今のあなたを見たら、あの人はがっかりすると思うわよ。」

クリンはリアに言い訳をさせないように言う。

ニコトが居ないと嘘をつくのは、リアを見ると心が痛んだが、ニコトの言う事も尤もだった。

「結婚しなさい。

そして、その人とヴァーゼル領を守るの。

それがあなたの役目よ。

私もね、もう少ししたら軍を退役して結婚しようと思ってるわ。

私にもトモセーヤ領を守る義務があるもの。」

「そうね。

クリンの言う通りだわ。

私にも領地を守る義務があるわね。」

リアは諦めたように言った。

クリンは数日リアの屋敷で過して、ついでに自分の実家へと向かった。

健介はリリスとクリンから、リアが襲撃にあった事、リアの説得に一応成功したと事を聞いた。

リリスとは夜、人目が無くなってからリリスの夜の見回りの時に報告を聞くようにしている。

「こんな説得はこれっきりにしてよね。」

クリンが健介を睨みつける。

「判ってるって。」

俺も仲間を騙すのは好きじゃない。

リアが結婚するまでは、俺の事は秘密にしておいてくれよ?」

と健介。

「判ってるわ。」

それじゃ行くわね。」

クリンは立ち去った。

クリンが説得してくれた後、しばらくしてリアの見合い話が決まったと、リリスが報告してきた。偶々、相手の方から話を持ちかけられたようだ。

相手はパグルガント公爵家。

見合いの相手は次男ギルメル。

彼は26歳で商人をしているらしい。

リアは確か24歳くらいだったはずだから、まあお似合いだろう。問題は、そのギルメルと言う男がどんな奴かだ。

リアの元にはハモが居るから、ハモが調べるだろう。

しかし、この事に関しては健介自身も調べに行く事にした。

パグルガント公爵、王族に連なる血筋の貴族だけあって王都に近い領地に住んでいた。

3つある門閥貴族の1つであり、その筆頭貴族であるパグルガント公爵家。

先の戦争では取り立てて功績を残していないが、その後の治世や街道整備などのインフラで功績を挙げている。

パグルガント派は武力よりも、こついった政治や経済の力で1派閥を作っている。

かなり渋い門閥であった。

無論、その中には高い戦力を要する番犬的貴族も居る。

出なければ、他の派閥に力づくで捻じ伏せられてしまう。

健介はパグルガント公爵領の酒場で、そう言った情報を仕入れていた。

この領地は王都に近いだけあって、健介の居る町も都市に近い。

健介の見たところ治安も良く、統治が行き届いているように見えた。領主に対する評判も悪くない。

「噂では次男のギルメル様が見合いなさると言う話だが知っているか？」

酔っ払いの男に聞いてみる。

「おお、知っているとも。」

確か、ヴァージル伯の現当主らしいな。

女伊達らに戦場を戦い抜いて、ヴァージル領も繁栄させている傑物らしい。」

酔っ払い。

「そんな傑物とギルメル様は上手く行くのかね？」

軽い調子で聞いてみる。

「さあどうだかね。

ギルメル様は商人で温厚な人という話だから、尻に敷かれそうだがな。」

酔っ払いが笑う。

町の人間の評判は、大体その酔っ払いと似たり寄ったりだった。

総じて温厚な気質で、商才に長けていると言う事。

リアの相手としては、悪くない。

健介は会って確かめてみる事にした。

ギルメルは町の商館に頻繁に出入りするらしいので、その辺りで張り込む。

一応の人相風体は聞いていたが、護衛を連れて歩いている男を見つけるのは容易かった。

「ほう、なかなか良い男だな。」

健介は呟く。

人型の健介も良い男だが、どこか冷たい感じのする顔の健介に対し、ギルメルは柔和な印象を与える顔立ちをしていた。

ギルメルが商館に入ったのを確認した後、近くの店で皮紙を12

巻購入して両手に持った。

建物の陰に隠れて、ギルメルが出てくるのを待つ。  
商館の奥からギルメルの姿が見えたところで、道に出てギルメルが  
通る場所でわざと転んで、手に持った皮紙をぶちまけた。

健介は慌てた様子を装って、道に転がった皮紙を拾い集める。

健介はギルメルの方へは目を向けずに、様子を伺った。

ギルメルは目の前で皮紙を無様にぶちまけた男を見て、小さく笑  
ってから自分に近い皮紙を拾って男に渡してやる。

「ああ、ありがとうございます。」

健介が礼を言う。

「そんなに買うなら、紐で縛るとか、袋に入れるとかしないと駄目  
だよ。」

ギルメルが忠告する。

「そうですね。」

「今度からそうします。」

健介が頷いて微笑む。

ギルメルは軽く手を振って立ち去った。

健介もその場を立ち去り、宿へ戻る。

「ふう、なかなか良い奴の様だが。  
さて、裏の顔があるのか無いのか。」

ベッドに座って考える。

ギルメルは貴族特有の優越意識と言うか、平民は下僕とでもいう態度ではなかった。

(商人として平民に混ざって商売をしているせいなのか？  
いや、それは軍人でも同じ事だな。

ギルメルの人柄か。

裏の顔が無ければ、問題ないか？)

ギルメルの態度を色々分析しつつ、夜になるのを待った。  
ギルメルの屋敷に忍び込んで、様子を見ようと思っていた。  
場合によっては、その場で直接ギルメルと話す事も考えて。

ギルメルの屋敷は、ヴァーギルの屋敷に比べると警備は嚴重だった。  
た。

だが、隙が無い訳ではない。

町での調査をしていた2日の間に、ギルメルの屋敷の調査もしていたが、魔術戦士が数人と一般兵が10人程度と推測できた。  
商館への送り迎えをしている護衛も魔術戦士だ。

夜の屋敷に忍び込むには、まず一般兵の目を欺く必要がある。  
それ自体は簡単だ。

夜間に紛れて、素早く張り込めば良い。  
問題はその後だが、魔術戦士は眠ってもらうに限る。

一般兵達の隙を突いて屋敷に走り寄って、警備の為に一般兵が出

入りするドアから素早く入り込む。

すると、奥に入ったところで、魔術戦士が待ち構えていた。

「なにも」

その魔術戦士が言い終える前に、健介が殴りつけて気絶させた。

（魔術戦士としては並以下だな。

魔術学校卒業したてか？）

近くの部屋に入れて、ベッドに横たえる。

「悪いね。」

健介は言い残して、奥へと向かう。

他の魔術戦士の気配は動かない。

侵入者を倒したと思いついて入っているようだ。

探査魔法で様子を伺っているだけだと、そう言う誤解を招く。  
この魔術戦士は、その点で素人だ。

（これは好都合。

ギルメルの部屋に行けば、報告しに行っただと思うだろう。）

健介はギルメルの部屋へと向かう。

外から見た屋敷の構造や、酒場での話で大体見当がついていた。  
探査魔法でもその部屋に1人の人間が居るのが判る。

部屋の前に行くと、ノックをする。

しばらくして、ドアが開いた。



「こんな時間に、何だい？」

ギルメルが部屋から覗く。  
予想通りだ。

「こんばんわ、ギルメル様。  
夜分申し訳ございません。」

健介が頭を下げる。

「・・・君は、昼間会っているね？」

ギルメルは健介の顔を見て思い出す。

「はい。」

少々お話をさせて頂きたいのですが。

無論、あなたに危害を加える者ではありません。」

健介は笑みを浮かべながらギルメルを見詰める。

「ふむ、まあいいだろう。」

入りたまえ。」

ギルメルが部屋に健介を通した。

ギルメルの部屋は落ち着いた雰囲気だった。

調度品は高級そうだが、ぱっと見平民の部屋かと思っほど落ち着いた感じがある。

物も少ない。

ギルメルがテーブルの席を勧めてきたので、健介も座る。

「それで、どんな話かな？」

ギルメルが健介を値踏みするように見て言う。

「お訊ねしたいのは、今度の見合いの事です。」

健介は早速本題に入る。

「見合い？」

「ヴァージル伯とのか？」

ギルメルが眉をひそめる。

健介は頷く。

「その見合いについて、ギルメル様の思うところをお教え頂きたい。」

健介はギルメルを真っ直ぐに見て問う。

「何故君にそんな事を話さなければならぬ？」

ギルメルは意外な質問に戸惑いながら問い返す。

尤もな問いだ。

「私はヴァージル伯には借りがあるので。」

「悪い虫は追ひ払わなければならぬのですよ。」

健介は自嘲気味に小さく笑う。

「なるほど。」

だが、君に話す理由にはならないな。」

ギルメルは首を横に振る。

「そうですか。」

ですが、後で後悔するよりはマシでは無いですか？」

「どういう意味かな？」

「今、ここで正直に話をして頂ければ、これからどうするかを決める事が出来るでしょう。」

私が認め、シーリア様が認めれば、あなたは何の問題も無く結婚できます。」

シーリア様と結ばれれば、私があなたもお守りします。

しかし、もし、ここで話さず、結婚してしまった後、あなたが相応しい人間で無いと判った時は……」

「その時は？」

「あなたを排除させて頂きます」

健介はギルメルを睨んで、殺気を放ち脅しを掛ける。

「……それだけの力があると言う事かな？」

ギルメルは不安そうに問う。

「私がここに居る事をお忘れなく。  
あなたの魔術戦士は始末させて頂きました。」

健介は嘘を言った。

どういふ反応をするのか見る為だ。

ギルメルと言う男の人間性を出来るだけ見ておきたいのだ。

「なっ！」

ギルメルは立ち上がる。

動揺して顔が青い。

「あの程度の魔術戦士など、護衛に付けても意味はありませんよ。」

健介は追い討ちを掛けるように言う。

「お、おまえ、殺したのか?!」

ギルメルが先ほどとは打って変わって怒り出す。

「貴族とあろう者が、駒を失って己を見失うとは、ただの愚か者ですか？」

健介が冷たく言う。

「俺は貴族に生まれたかった訳じゃない。

私の護衛は私の家族の様な者だったのだぞ！」

ギルメルが健介を睨みつける。

「甘つたれないで頂きたい。

平民なら、平民に生まれたかった訳じゃないと言っても良い。だが、貴族には、その言い訳は許されない。

平民が飢えて死んでいるときでも、あなたは裕福な暮らしが出来たはずです。

平民の大部分は読書きもまともに学べないのに、あなたはそれ以上のものを学んでいるはずです。

それはあなたが貴族だから。

そのあなたが、貴族に生まれなくなかったなどと、そんな事を言うのは許されません。」

貴族は平民の犠牲の上に成り立っている事を理解しておいでか？」

健介はギルメルを睨み返す。

しばらく睨み合いが続いたが、ギルメルが目を逸らした。

「あなたはシーリア様の夫には相応しくない様だ。

こんな甘つたれの愚か者だったとは。

見合いは断って頂こう。」

健介はそういい残して、屋敷を立ち去った。

ギルメルは黙って健介を見送った。

一旦、町の外へと出て夜を明かし、朝になってから宿に戻った。

念の為、追跡の可能性を考えた行動だ。

「惜しい奴だったな。

悪い人間では無さそうだが、貴族と言うものを判っていないのは頂けない。

あれでもう少し胆力のある奴ならな……。」

健介はしばらくその町に滞在し、ギルメルの動向を見守った。

ギルメルは自室でベッドに座り、頭を抱えていた。

あの日あの後、護衛の兵士を確認したら、1人だけ気絶していた。どうやらあの男に試されたらしい。

他の者はギルメルが言うまで侵入者に気付きもしなかった。

あの男の言う通り、この護衛達では一流の魔術戦士には、余り役に立たないのかもしれない。

腕の立つ護衛は、兄の方へと割り当てられていたから、仕方ない。長男であり次期当主が優先されるのは当然である。

だが、頭を抱えている原因は他にあった。

「甘ったれの愚か者だったのか・・・」

あの男の言葉。

その言葉が深く心に突き刺さり、責め苛んでいた。

貴族としての義務は、兄が継ぐのだと思っていた。

だが違った。

自分も貴族なのだ。

その義務を放棄する事は許されない。

（何故こんな簡単な事に気付かなかった。）

ギルメルは悔し涙にくれた。

自分の愚かさが悔しかった。

例え爵位を告げなくとも、貴族の一員であることに代わりは無い。自分が如何思おうと、貴族として育てられ、貴族として見られているのだ。

数日後、ヴァージル伯へと使者を出した。

見合い中止ではなく、延期の申し出だった。

そして、その情報を町にそれとなく流すように指示した。

その後、ギルメルは夜、門のところであの男を待っていた。

さほど待たずにその男はやって来た。

「お待ちかねかな？」

健介が門の鉄柵を挟んだ反対から問いかける。

今日は気軽な口調で話している。

「ああ、待っていた。」

ギルメルが兵士を遠ざけて言う。

「なら、一応理由を聞いておこうか。」

理由とは、見合いを破棄するのではなく、延期するとした事だ。

「あの夜、お前が俺に言った事は正しい。

私にも貴族としての義務があった事を思い出した。

そして、お前がそこまで守ろうとしているシーリア殿に会いたくなかった。」

ギルメルが夜空を見上げる。

「会ってどうする？」

「判らない。」

ただ、私とは違う生き方をしてきたシーリア殿と話をして見たい。

「

ギルメルは再び健介を見る。

「そうか。」

まあ、会うだけなら構わないが、口説くなよ？」

健介はそれだけ言って、立ち去った。

健介としては悪い奴では無いと判ったので、ここは見守る事にした。ちよっと甘やかされて育った感じは否めないが、健介のように擦れなければ良いという訳では無い。

リアがギルメルと会ってどういう反応をするのかも確かめてみたかった。

ギルメルは早速、ヴァージル伯へと使者を送った。

あの男の許可が出たのなら、あつて話をするくらいなら問題は無いはずと。

見合いとは関係なく、お茶でもしながら話がしたいと申し込んだ。

数日後、ヴァージル伯から使者が戻ってきた。

返答は、喜んでお待ちします、と言う事だ。

丁寧に、都合の良い日程を幾つか知らせてくれていた。



早速、また使者を出して、その日程にあわせて4日後に行く事を伝えた。

ギルメルは年甲斐も無く、ドキドキしていた。

以前なら女性と会うと言っても何も考えずに話す事が出来たのに、今回は会う前から緊張してしまっている。

あの男のせいでヴァージル伯シーリアと言う女性に、今までに無い期待感をもっていた。

馬車に揺られて4日の間、何を話そうかとあれこれ考えていた。

ヴァージル伯邸に着いて出迎えてくれた3人の女性。

年齢から1人はヴァージル伯の母上である事がわかる。

そして、顔立ちの似ている若い女性がヴァージル伯シーリア殿。

さらに、少し小柄な可愛い女性。

この女性は身なりからして、護衛か？

シーリアの父ヘインツは、シーリアの親友のミュール領の統治を手伝いに出かけていた。

一通りの挨拶を済ませて、歩きながら話をする。

「わざわざお越し下さいまして、お疲れでしょう？」

ミレーヌは微笑みながら労う。

歳の割りに若く見えるが、落ち着いた物腰が年輪を感じさせる。

「いえ、私から言い出した事ですし、私には統治する領地はありませんので。」

ギルメルも笑顔で返すが少し緊張気味で堅い笑顔だった。

日の当る庭で、シーリアとギルメルはお茶を飲んでいた。改めて見るとギルメルが思っていたよりも、シーリアは格段に美しくかった。

軍で戦功を上げ、將軍にまで成った凄腕の魔術戦士と聞いていたので、もっと厳つい感じの女性だと思っていたのだ。

確かに真っ直ぐに見詰めてくるその表情は凜々しい感じがするが、微笑むと急に柔らかな印象になり、吸い込まれそうになる。さらに、出るところはしっかり出て自己主張しているし、鍛えられた身体で程よく細いウエストは絶妙な括れを演出している。要するに、ギルメルにとっては外見上は完璧と言って良かった。

そして、ギルメルは少年の様にシーリアをまともに見る事が出来なくなった。

見てしまうと、今度は視線を外せなくなってしまふ。自分でも拳動不審だと思うが、自分を落ち着かせる事が出来なかった。

「い、良い庭ですね。」

ギルメルが苦し紛れに言う。

「ありがとうございます。」

母が草木の世話をしているのです。

草木の世話をしているのが一番落ち着くと言って。」

リアが微笑む。

その笑みを見てギルメルがぎこちなくお茶を飲んだ。

「一つお訊ねしても宜しいですか？」

「あ、ええ、もちろん。」

ギルメルがアタフタする。

(どっちが乙女だか判らないわね。)

ギルメルの様子を見てリアが小さく笑う。

「お見合いを延期して、この様にお茶会をしに来られるのは何故ですか？」

リアは軽い雰囲気ですく。

当然の疑問であるが、問い詰めるような訊き方をしては失礼だ。

お見合いは結婚を前提とし、相手を確認する場でしかない。  
お見合いを受ければ、基本的には結婚することを受け入れると言う事だ。

延期とは言え、お見合いを破棄した訳では無いので、ギルメルがお見合い相手だから、お茶会の誘いを受けたのだ。

以前、エンドーラの屋敷にジオレが先回りして待っていたのも、一般的には反則である。

許婚や婚約者なら問題は無いのだが、未婚の男女が2人出会うのは要らぬ誤解を招く事になる。

父ヘインツはリアに対し「おまえなら貞操を守る術を、1000は

持ってそうだからな。」と言ったそうなの。  
まあ、さすがに1000は持ってないだろうが、エンドーラ同様、ガードは要塞並に固い。

「そ、そうですね。」

それは説明しないといけなかった。

失礼しました。」

ギルメルが頭を下げる。

「ある男に言われたのです。」

お前はシーリア殿に相応しく無い。

甘ったれの愚か者だと。」

ギルメルは苦笑した。

「まあ」

リアは少し大げさに驚いた。

ある男と言うからには、家族や友人や使用人では無い事が伺える。

恐らくは初対面か、顔見知り程度の関係の者と推測した。

「私も自分でそう思いました。」

次男である私は、兄が家督と共に貴族の責務を全て引き継ぐものだ  
だと誤解していたのです。

貴族と言うものを、私は見誤っていました。」

「それで、どうしてお茶会になったのですか？」

リアが少し面白そうに聞く。

「その男はシーリア殿を守っていると言っていました。  
その男が守るシーリア殿と話をしてみたいと、そう思ったのです。」

ギルメルが少し熱っぽい視線をリアに送る。

だが、シーリアはギルメルの話の後半を殆ど聞いていなかった。

（私を守る男？

まさか・・・でも、ならどうして？）

リアはギユツと手を握って考え込んでいた。

ハモやハモの手下がそんな言い方をする事は無いので、思い当たる人物は1人しかいない。

「シーリア殿？」

「す、すいません。」

ちよつと考え事をしてしまつて。」

リアは慌てて取り繕う。

（その男がミコトとは限らないわ。）

と思いつつ、ギルメルに質問をぶつける。

「ところで、その男の人はどんな人なのですか？」

「それがですね。」

お恥ずかしい話、判らないのです。」

ギルメルが申し訳無さそうに頭をかく。

「判らない？」

「ええ、何分、私の屋敷に侵入してきた男だったので。

私と屋敷の警護の者が、手玉に取られてしまいました。」

ギルメルが苦笑する。

「では、人相などは？」

リアがさらに問う。

（まさか・・・本当に？）

「ええっと、癖の無い長い金髪に、切れ長の青い目で結構良い男でしたよ。」

ああ、そう言えば、腰に短めの剣を2本ぶら下げていた。珍しいですね、双剣なんて。

あ、シーリア殿も双剣でしたっけ？」

ギルメルが思い出しながら説明する。

リアは混乱していた。

（金髪？

でも双剣って・・・）

リアの知っている健介の人型は、銀髪だった。

（駄目、落ち着いて。

そもそも、ミコトは瞳が銀色よ。

髪は染められるけど、瞳の色を変えるなど出来ない。

ミコトじゃないわ。

そうよ、双剣を使う別人よ。）

リアはそう結論付けて、ようやく落ち着く事が出来た。

「シーリア殿？」

「あ、すいません。

お茶を入れ替えてまいりますわ。」

リアはお茶のポットを持って、逃げるように屋敷に入った。

「駄目ね、私。

これではギルメル様に失礼だわ。

しっかりとしないと。」

リアはポットを持って、キッチンへと向かった。

その後1時間ほどお茶を飲みながら、会話を楽しんだ。

「シーリア殿、今日はとても楽しかった。

その、良ければまた誘っても良いだろうか？」

ギルメルが少し赤面する。

「はい、お誘い、お待ちしています。」

リアが微笑んで答えた。

ギルメルは馬車で帰路に着いた。

この2時間強の会話の為に、片道4日という遠路をやってきたのだ。そして、後悔は無かった。

シーリアは予想以上の女性だった。

彼女に惚れてしまっていた。

次はもっと時間をとってゆっくり会いに来たい。そう考えていた。

帰路1日目、町に着けず野宿する事になった。

街道から少し外れた場所で焚き火をする。

余り街道から外れると、逆に危ない。

ギルメルが他の者達と一緒に焚き火を囲んでいると、街道を歩いてくる人影が見えた。

ギルメルの護衛が立ち上がって、警戒する。

その人影は真っ直ぐギルメルの方へと歩いてきた。

ギルメルは途中でそれが誰か判って、護衛と使用人を下がらせた。

「こんばんわ。ギルメル様。」

健介がからかうように言う。

「こんな所で何をしている？」



ギルメルが嫌そうに言う。

「惚れるのは構わないが、見合いはシールリアに見合っ男になってからにするんだな。」

健介がニヤリと笑った。

ギルメルは顔を真っ赤にしてうるたえた。

「それが言いたかっただけだ。

じゃあな。」

健介は来た道を引き返して行った。

### 第30話 ギルメルの失敗

4ヶ月ほど、健介はシーリアの屋敷の近くで、あれやこれやと情報収集&分析をしていた。

定期的にリリスから報告を受け、シーリアとギルメルとの間で文通がされている事と、その内容の一部も知っていた。

リリスはいつもシーリアと一緒にいるから、リリスも手紙を目にする機会があるのだ。

ほんの一部しか判らないが、それだけで十分だった。

リアの性格は知っているから、大体予想がついている。

シーリアもギルメルを悪く思っていないようだった。

ヴァージル領の周囲の状況は、ある意味、膠着状態だった。

ギルメルとの見合いの話で、周囲の貴族は策謀を止めていた。

そして、見合いが延期と言う意味不明な状態になり、その後、シーリアとギルメルとの間が恋仲と言う噂が流れた。

ギルメルとシーリアが否定しなかった事で、周囲の貴族達は困惑していた。

ギルメルはパグルガント公爵の次男であり、その恋仲の女性がヴァージル領の領主である。

そのヴァージル領を下手に攻撃する事は、パグルガント公爵家に喧嘩を売る事につながる可能性がある。

そして、パグルガント公爵は3大門閥貴族の1つの筆頭貴族である。パグルガント公爵家を敵に回す賭けに乗るバカ貴族は居なかった。

さらに、周囲の貴族達の困惑は、恋仲と言うところにある。

見合いと言っただけなら、破棄されればそれまでである。

だが、恋仲と言う事になれば、別れても「はいそれまで」とは言い切れない。

互いに情が移ってしまうから関係が終わっても、それで全て終わりになるかどうか判らないのだ。

つまり、例えシーリアとギルメルの関係が終わっても、ヴァージル領を攻撃した際にパグルガント公爵家が介入してくる恐れがあるのだ。

過去の貴族間のゴタゴタにそういう事例もあり、迂闊に手が出せない。

ギルメルは次男だから可能性は薄いが、当主や次期党首、つまりギルメルの父と兄が黙っている保証は何処にも無い。

その様な状況の為、ヴァージル領は平和な繁栄が続いている。

ギルメルの方は貴族の義務に目覚めたらしく、商売の傍らその利益を使って孤児院を作ったりしていた。

先のシヨミルとの戦で、少ないが孤児が出ていたし、それ以前からいた孤児もいる。

周囲に居る全ての孤児を収容しているらしい。

他に多少気になった情報は、王都での宗教事情だ。

話題になっっている宗教組織テルバは、以前は他の宗教と大して代わり映えしない有象無象の宗教の1つだった。

シヨミルとの戦時中と戦後に、人々の不安に付け入って上手く勢力を伸ばしたのだ。

これまではペステンとその周辺国には国教と言うものは無く、宗教自体それほど真剣に考えるものもいな状態だった。

そう言う状況の中で、小さな宗教団体が幾つもあり、細々と活動している状態だった。

テルバの教義も、他の宗教団体とそれほど変わっては居ない。似たり寄ったりだ。

信者を集めようと思えば、人々に理解できない様な事をしても集まらない。

魔法の存在するこの世界では、変な迷信や脅迫まがいの説法など説得力が無いので使えない。

人々も才能さえあれば魔法が使えるから「神」や「聖人」の様な「特別な存在」と言うものを想像しにくいのだろう。

そんな中でテルバは急速に勢力を拡大した。

手法は良く判っては居ない。

9割方無宗教状態だったが、7割方無宗教状態にまでなったというつまり2割以上がテルバの信者と言う事だ。

これは侮れない。

特に王都では情報が流れやすい為に不安に思う人々も多かったので、信者になった者も少なくないという。

既に戦後4年以上になっているが、未だに勢力を伸ばしているらしい。

「宗教か・・・面倒な事にならなければいいが。」

健介は無宗教で理系の頭だから、宗教とは「根拠の無い他人の説法に踊らされる事」と捉えていた。

だから、俄かに勢力を伸ばしている宗教組織があると訊くと、元の世界でのカルト集団を思い出してしまう。

とりあえず、宗教に関しては王都での展開が中心らしく、緊急性は低いし関心が無かった為、ギルメルの様子を見る事にした。

ギルメルのいるパグルガント領へと向かった。

孤児院と言うのは、設立したら放っておいて良いものではない。職員もしつかり管理し、子供の教育をしなければならぬ。

それを怠れば、孤児院は子供にとってただの監獄か、それより酷い場所になってしまう恐れがある。

特にペステンは法治国家と呼ぶには、まだまだお粗末な国家であり、その中であっては自制の出来ない者が野放しになる可能性が高い。元の世界でも虐待などの事件は起きているのだから、こっちの世界ならより注意が必要なはずだ。

（あの甘ちゃん心配なんだよな。）

ギルメルの人の良さは得難いものだが、人の心の闇を知らずに育ったように感じられた。

人の上に立つ者としてのギルメルは非常に危なっかしい。

パグルガント領に入ってすぐ宿を取り、町の様子を見て回る。以前に来た時とそう変わったところは無いようだった。

孤児院へ足を向け、外から中の様子を伺った。

敷地内で遊ぶ子供達は良いとして、その施設は余り良い物とは言えなかった。

鉄格子の嵌った窓。

尖った鉄柵の付いた塀。

如何にも何かありそうな感じの作りと雰囲気だ。

（おいおい、まさか虐待なんかしてないだろうな？）

健介は子供達の様子を改めて観察する。

元気よく走り回っている子供や、地面を掘り返して土で遊んでいる子供などを見る。

遠目では異常は無さそうだ。

（日が暮れたら潜入してみるか。）

健介はその場を離れた。

昼間に孤児院の周りをうるちよろして居たら変質者と間違われてしまう。

宿に戻って部屋の仲を改めて見ると、1つ変わった所を見つけた。暖炉が石炭仕様になっていたのだ。

以前来た時は普通の薪だった。

宿屋だけで石炭の買い付けなど、輸送費が掛かる為出来ない。

どうやらパグルガント領自体でヴァーシル領の石炭を買い付けるようにしたらしい。

「ふむ、商売上も良い関係になっているようだな。」

日が暮れると宿を出て健介は孤児院へ向った。

街灯など無いので、日が沈めば大通り以外はほぼ暗闇に沈んでいる。大通りは店の窓の明かりや、店が気を利かせてランプを店の外にぶら下げている為、多少は明るい。

健介は大通りを避け、闇に紛れて孤児院へ入る。

孤児院には衛兵などいないので、見つかる危険は少ない。

孤児院の施設は窓に鉄格子、ドアは鍵が掛かっっていて建物内への進入は難しい。

建物の裏に回って、1つ1つの窓を覗き耳を済ませる。

(これが元の世界だったら、完全に変態扱いされるな・・・)

自分の姿を想像して、思わず脱力する。

暗闇の中で落ち込んでいても仕方ない。

すぐに気を取り直して作業を続行する。

窓から見た部屋はどれも殺風景で物が少ない。

探査魔法で子供達のいる場所を探し、近くの窓へと向かう。

特に問題は無いように感じられたが、全員が寝静まるまで様子を監視する事にした。

不正は夜、寝静まった頃に行われる事が多い。

そして、その判断は正しかった。

真夜中前、職員らしき者が地下から出てきたらしい。

探査魔法を地上付近だけに向けていたので地下がある事に気付けなかった。

その職員は建物から出てきた。

片手にランタンを持ち、大きな包みを肩に担いでいる。

健介はその職員の後を尾行する事にした。

職員が向かった先は、町外れの川。

その川に担いでいた包みを投げ捨てた。

職員は川に流れていく包みを見送って、孤児院に戻っていく。

健介は闇に潜んでその様子を見ていた。

職員を放っておいて、川に流された包みを追って走った。

ドラゴンの目は暗闇でも見えるし、薄っすらと星明かりもあるから周囲が良く見える。

全力で走るとすぐに包みを見つけた。

そのまま包みの横まで走り、川に飛び込んだ。

川から引き上げた包みは、シートで包まれていた。血の匂いがする。

シートの包みの下の方は、赤く染まっていた。包みを開くと、中から子供の死体が出てきた。

その子供は12歳くらい。

顔には殴られた後、顎の形がおかしいし、歯も欠けている。全身に打撲傷。

腕と足も骨が折れていた。

身体の彼方此方に火傷のような跡や、浅いが切り傷もあった。明らかな虐待の痕、いや、これは拷問の後か……

「……」

健介は言葉も無く子供の死体の状態を手で触って調査した。不用意な言葉は、この子への冒瀆のように感じたのだ。

調査を終えると、深く深呼吸して気持ちを落ち着けた。

そして、再びシートに包んだ。

それを抱上げて、町に戻る。

今すぐあの施設へ乗り込んで職員を斃殺しにしてやりたかったが、ここは我慢してギルメルにやらせるべきだった。

あの施設はギルメルが管理している場所なのだ。

町の暗闇の道进行り、ギルメルの屋敷へと向かう。



ギルメルの屋敷の門前に着くと、衛兵に緊急事態と言ってギルメルを呼びに行かせた。  
シーツに包まれた塊を衛兵は疑わしそうに見ていた。

「ああ、あなたでしたか。

緊急事態とは何ですか？」

ギルメルが緊張感の無い声で言う。

「その前に門を開ける。」

健介が指示する。

「必要ですか？」

ギルメルが戸惑う。

「緊急事態だと言つたらう。

まだ自覚が無いのか？」

健介がイライラして睨む。

ギルメルは怯んで衛兵に門を開けさせた。

健介は敷地に入り、ギルメルの前に包みをそつと置いた。

「中身を見る。」

健介は数歩下がって、ギルメルに命じる。

ギルメルは濡れたシーツの包みを開いた。

「これは！  
ぐっ」

ギルメルは子供の遺体を見て驚愕し、ついで敷地の芝生の方へ行  
って嘔吐した。

「目を背けるな！」

「どうして・・・そんな事に？」

ギルメルは青い顔をして怯え、子供を見る。  
恐らく死体すら見たことが無いのだろう。

「全身に打撲傷がある。

顔の腫れが酷い。

腕と足の骨も折れている。

他にも火傷の痕や切り傷も多数ある。

死因は頭部の傷だ。

頭を何かで殴られて殺されたんだ。」

健介は淡々と子供の状態を教える。

ギルメルは怯えた表情で呆然としている。

「この子が何処から来たのか、判らないのか？  
俺がわざわざここに運んできた理由が判らないか？」

健介が問う。

「・・・まさか孤児院で？」

ギルメルはショックを受けたように震え始めた。

「お前が管理をしつかりしていないから、あの孤児院は虐待の温床となっているんだ。」

あの孤児院に入った子供と、今いる子供の人数を把握していないだろう？」

「それは……」

「まあいい、とにかくこれで何が起きているのか判っただろう？  
どうするんだ？」

「どづつて……」

ギルメルは放心したように呆けていた。  
健介は平手で殴り倒す。

「目が覚めたか？  
覚めたのならさっさと行動しろ。  
今も殺されかけている子供がいるかもしれないんだぞ！」

ギルメルは健介の言葉にビクツと反応し、立ち上がって兵士に命令し始めた。

「軍の詰め所に連絡、至急、兵を孤児院へ派遣し、孤児院を封鎖するよう要請しろ。」

あと、治療班も派遣するように。

この子供の遺体を丁寧に保管しておいてくれ。

私も出る、最低限の兵を置いて、残りについて来い。」

ギルメルは健介を見てから、走り出した。健介はその後姿を見送って、その場を去った。

翌日から孤児院で起きた事で町は騒ぎになっていた。地下室には数人の子供が隔離されて虐待を受けていたようだ。怪我はしていたが、命に別状は無かった。

虐待をしていた職員は全員捕縛され、その職員から子供の人身売買をしていた事実が判った。

御丁寧に帳簿をつけていた様で、買い手の情報が判った。その買い手の殆どは貴族であった。

あろう事か、ギルメルは真つ正直にそれを公表し、各々の貴族に子供の返還を求めた。

これを切欠に一時は貴族の間に混乱が吹き荒れた。貴族の中にはそれなりの大貴族もあり、一触即発の事態に陥ったのだ。

批判の対象に挙げられ名誉を傷付けられた貴族達は、苦し紛れに力で押さえ込もうとした。

このまま下手に突くと内乱になりかねない状況だった。

そこに王が割って入って来た。

「子供を虐待し、売買するなど人道に反するものである。直ちに売買された子供達を返還し、これを保護する事。」

という様な布告を出した。

これによって大貴族も大義名分の標的にされ、多数から狙われる立

場になった。

危機的状况に追い詰められた大貴族が子供を返還すると、他の貴族も返還した。

そして、その貴族達は爵位を剥奪された。

王の命に背いて反逆者として処刑されるよりは、爵位の剥奪の方がマシだと思ったのだろう。

しかし、当然と言うには厳しい現実だが、売られた子供と帰ってきた子供の数は合っていない。

様々な言い訳をされているが、虐待によって殺されていると考えられた。

それでも爵位の剥奪だけで済まされてしまうのは、納得のできるものではないが、これがペステン<sup>3</sup>の貴族社会と言うものだった。

反逆などの大罪でもない限り、貴族に課せられる最大の罰は爵位の剥奪や国外追放だった。

これらの事態は事件の発覚から十数日で起こった事だった。

平民も貴族も冷や冷やしたものだ。

危うく内紛勃発と言う危機であったのだ。

だが、ギルメルにとってはまだ終わっていない。

孤児院の子供達は怖がって、孤児院を出たがっていた。

ギルメルは子供達を閉じ込める訳にもいかず、3割程度の子供は出て行ってしまった。

行く当てなど無いだろうに……

「全てお前の責任だぞ。」

健介がギルメルの後ろから声を掛ける。

ギルメルは驚いたように振り返った。

「お前は現実の厳しさを判っていない。  
人の醜さを判っていない。」

その甘さが、今回の事態を招いたのだ。」

健介が追い討ちを掛ける。

ギルメルは子供達の前でうな垂れている。

「お前の目には何が見えているのだ？」

この孤児院が子供がいるに相應しい場所に見えるのか？

この監獄みたいな場所に閉じ込めて、どうしようと言うのだ？」

更に追い討ちを掛ける。

ギルメルは健介に言われて初めて気付いたようだ。

驚いたように窓の鉄格子を見ていた。

現場を見ずに、部下にまかせっきりにしていたのだろう。

「ギルメル、こんな事でシーリアに相應しい人間と言えるのか？」

お前はシーリアを支えてやれるのか？」

ギルメルは何も言えずに涙を流した。

それを見かねたのか、子供の1人が健介に近寄ってきた。

「お兄ちゃん、ギルメル様を苛めないで上げて。

ギルメル様は悪くないの。」

健介は子供に微笑んで頭を撫でてやる。

「ギルメル、お前は子供達の信頼を裏切ったんだ。」

管理を怠るといふ事だな。

まだ後悔できる心があるのなら、これからどうしたら良いのか良く考える。」

そう言い残して健介は孤児院から立ち去った。

後ろから嗚咽が聞こえていた。

健介はギルメルを育てる役目を担うようになっていた。

少し助言でもしてやろうと思ったのが切欠だった。

無論、優しくなどしてやらないが。

甘ったれの貴族を甘やかしても、どうにも成らないだろうから。

健介はヴァージル領へと戻る事にした。

ギルメルの懊悩に付き合うつもりは無い。

立ち直ったならそれでよし、潰れたなら始末するまでだ。

健介はこの3年ほどで貴族の裏と表を知ったから、役に立たない者に情けを掛けるつもりは無いのだ。

ヴァージル領へと戻った健介は、夜にリリスからの報告を受けた。ギルメルがらみの事もあり、シリアも色々気苦労をしているようだ。

だが、別の方面から1つ吉報とでも言えるものが入った。エンドーラが懐妊したと言っ。

「あのエンドーラがお母さんか。」

健介は思わず笑ってしまっ。

「教育ママになりそうだなあ。」

クツクツと笑いながら、ベッドに横になった。

リアはギルメルの孤児院で起きた不祥事を聞いたとき、啞然とした。

まさかそんな事をさせてしまう様な環境だったのかと思ったのだ。すぐに八モに調査を命じ、事件が収束しつつある所で真相を知った。

「落ち込んでいるでしょうね。」

リアは手紙のやり取りで、ギルメルの温厚で律儀な性格を見て取った。

同時に、世間知らずと言うか、人の汚さを知らない人と言う事も察していた。

孤児院を作ると手紙をもらった時に、忠告してあげれば良かったかのだが、さすがにそこまでは気が回らなかった。

報告書にある孤児院の絵は、監獄か隔離施設かと思わせるものだ。今回の事件はリアの目から見ても、ギルメルの管理不行き届きであるように見える。

（家が家だから、そこまで大事にはされないだろうけど。

人身売買に関係した貴族を肅清した手前、ギルメルの立場は厳しくなるわね。）

リアは今後の予想を立てた。



「とりあえず、励ましの手紙だけでも出しておきましょう。」

リアは執務室の机に座った。

リアはギルメルの事は悪く思っていない。

どちらかと言えば、良く思っている。

下手な貴族と結婚するよりは、ギルメルと結婚する方が良い。

その程度には思っていた。

だが、愛しているかと問われれば、正直、否だった。

無論、そう言う質問ははぐらかして答えていないが。

リアにとってギルメルは「貴族間結婚における妥協点」であった。お人好しのギルメルなら、まあ許そうという訳だ。

家柄も申し分ないが、それはリアにとってはおまけでしかない。

ギルメルが自分に好意をもってくれているのも、悪い気はしていない。

結婚したら、ギルメルを愛せるようになれるかも知れない。

そんな風に考えていた。

だから、リアはギルメルとの関係を切るつもりはなかった。

翌日、使者に手紙を託して政務をこなす。

「あ、エンドーラにお祝い贈らないと。

直接行った方が良いわよね。

お祝いは何が良いかしら。」

リアはあれこれと考えて、スケジュールを調整する。

お祝いは母ミレーヌの助言を聞いて、当たり前障りの無い宝飾品にする事にした。

「聞いてくれて良かったわ。

あなたが自分で選んだら、剣とか槍とか物騒なものになりそうなもの。」

ミレーヌに笑われた。

リアはヴァージル領に戻っても、女性らしい暮らしをしている訳ではない。

ミレーヌはまだリアの贈り物の感覚に気付いていないらしい。敢えて説明する事もないが。

リアは服装こそドレスなど着ているが、下には細い鎖を使用した簡易鎧を身に付け、常に剣を携帯している。

襲撃の対象になる事もしばしばである為、油断は出来ないのだ。しかし、最近ではリア自身が出張る事は殆ど無くなっていた。

リアが育てた配下の魔術戦士達が実力を発揮しつつあったのだ。

先に使者をエンドーラに送って、到着予定日を知らせてから、ハモに後を任せて出発した。

護衛はリリスと魔術戦士2名だけとし、他の魔術戦士は屋敷に残した。

リリスがいれば余程の相手か、相当の人数で無い限り対処出来るから、屋敷と母ミレーヌの警護に人員を割り振った。

道中、何事も無くエンドーラの住むジオレの屋敷に到着した。出迎えはエンドーラとジオレがしてくれた。

「久しぶりね、エンドーラ。  
幸せそうで何よりだわ。」

リアは懐かしさに笑みがこぼれる。

「ええ、幸せですわよ。」

あなたはどうなんですか？  
噂の彼とは？」

エンドーラも微笑んで抱き合いながら、ギルメルの事を聞く。

「ここから、こんな所で下世話な話は止めなさい。」

シーリア殿、ようこそ我が屋敷へ。  
どうぞお入り下さい。」

ジオレがエンドーラを窘めて、案内を始める。

リアはジオレを見てオルセイとはまるで違うのを不思議に思っ  
てそう言ってみた。

エンドーラとジオレが顔を見合わせて笑う。

「それはエンドーラにも言われたよ。  
全くあいつには手を焼かされた。」

ジオレが苦笑して首を振る。

「そう言えば、オルセイはあれからどうしてるの？」

「軍を退役してからは、傭兵になって最近ではいくらかマシになっ

ているよ。

余り顔を見せないから詳しい事は知らないけどね。」

ジオレが説明してくれる。

貴族の子息が傭兵になると言う話は余り聞かないが、オルセイは性格的に軍には居られない人間だ。

他人を見下しさえしなければ、腕の立つ傭兵としてやっていけるだろう。

リアは広々とした茶室に通された。

「これお祝い。」

リアが贈り物をエンドーラに手渡す。

「ありがとう、嬉しいですわ。」

ところで、このお祝いはリアが選んだの？」

エンドーラが微笑んで意味ありげに訊ねる。

「心配しないで。」

お母様を選んでもらったわよ。」

リアはちょっと恥ずかしそうに言う。

それを聞いてエンドーラはちょっと残念そうな顔をした。

リアが選んだ贈り物で、リアを弄ろうと思っていたに違いない。

「それで、噂の彼とはどうなってますの？」

エンドーラは贈り物もそっこのけで訊いて来る。

リアとジオレは苦笑する。

「別にどうもなっていないわ。」

「今は手紙のやり取りをしているだけよ。」

「確かパグルガント公爵の次男ギルメルでしたね。」

「孤児院の虐待騒ぎのあった。」

とジオレ。

「ええ、大変な騒ぎでしたわね。」

とリア。

「その彼はその後、どうしましたの？」

とエンドーラ。

「さあ、判らないわ。」

「励ましの手紙は送ったけど、その後すぐここに来てしまったし。」

とリア。

「直接行ってあげたらいいか？」

とエンドーラ。

「駄目よ。」

「私は領主なのよ？」

「ただの貴族の娘じゃないんだから。」

私が出向いたりしたら、大事になってしまっわ。」

とリア。

お忍びと言う手もあるが、それはそれであればると変な疑いをもたらる恐れがある。

立場があると、気軽に行動が出来ない場合もあるのだ。

「そうでしたわね。

失念してましたわ。」

とエンドーラ。

話題が統治の話に移って少しした頃、廊下が騒がしくなって幾つかの足音が近付いて来た。妙に物々しい気配がしていた。

「何事だ？」

ジオレが確かめようと立ち上がる。すると、ドアが開いた。

「オルセイ」

ジオレはドアを開いた者の名を呼ぶ。リアも見覚えのある顔だった。

あの問題児、オルセイ。

「兄さん。義姉さん。

そして、ようこそシーリア殿。」

オルセイはニヤリと笑う。

リアはオルセイの目を見て、そして彼の気配から危険を察した。エンドーラも察したのだろう、ジオレの前に立ちほだかる。懐妊したと言ってもジオレよりは遙かに強いのだから、当然の立ち位置だ。

「リーリース！」

リアは良く通る大声で呼ぶ。

突然のリアの大声に、皆が驚く。

リリスは人では無いから、シーリアの声が聞こえているはずだ。

「リリス？」

なんだ？

まあいい、あんたらはここで死んでもらうよ。

シーリア殿が錯乱して、兄さんと義姉さんを殺し、俺がシーリア殿を討ち取った。

そう言う筋書きさ。」

オルセイが仲間の傭兵を部屋に入れた。

20畳以上ある広い茶室に、6人の傭兵が入ってきた。

その動きから、魔術戦士が3人いる事が判る。

オルセイを入れれば4人。

（リリスを呼んで正解だわ。

リリスは使用人の部屋にいるはずだから、ここまで1分掛からないはず。）

リアはリリスが来るまで時間を稼ぐ事にする。

「その筋書き、あんたが考えた訳じゃないでしょう?」

リアが問う。

オルセイはそう言う謀略に向くタイプでは無い。  
気が短すぎるのだ。

どちらにしても、強引なやり口だが。

「ほう、良く判ったな。

褒めてやるが、教えはしねえよ。」

オルセイが嫌味に笑いながら言う。

リア達にとってはそれだけで十分だ。

オルセイと接触した人間を調べれば、たどり着ける可能性はある。  
エンドーラかジオレなら心当たりがあるかもしれない。

「教えてくれる必要は無いわ。

でも、他の事で1つ教えてくれない?」

リアが時間稼ぎのため探りを入れる。

「なんだ?」

リアの時間稼ぎに乗ってしまったっているオルセイ。

オルセイにはこの会話が時間稼ぎだと言う事に気が付かない。

「私やエンドーラならまだ判るけど、ジオレまで殺すのはどうして  
?」

リアがオルセイにとっては一番話したがる様な事を聞く。  
実の兄を殺すのだ。



その理由を話したいはずだ。  
特に、その兄が目の前にいるのだから、殺す前に言っておきたいはず。

「邪魔なんだよ。」

いつもいっても説教ばかりして、比べられて。

俺は他の貴族の奴らとそう変わらねえ。

なのに、俺ばかり非難される。

今じゃ傭兵だぞ?」

オルセイはヒステリックに笑った。

そこでドアが開き、リリスが入って来た。

傭兵達が身構える前に、すり抜けてリアの隣に辿り着く。

「リリス、お仕事よ。」

私と後ろの2人以外は叩きのめしなさい。」

リアが命じた。

エンドーラとジオレは突然入ってきた可愛らしい女性のリリスを見て驚いている。

リリスは命令を受けると、何の躊躇いもなく即座に動き出した。

「ジオレとエンドーラはそこ動かないで。」

リアは周囲を警戒しながら言う。

エンドーラは頷いて、同じように周囲を警戒する。

リリスは傭兵達を1撃で倒していた。

それを見た傭兵は一斉にリリスに襲いかかろうとしたが、リアが割り込む。

リリースもリアも素手だが、1対1なら負けるような相手ではない。  
2対1でも何とかやれる。

リアはティースプーンを投げて、傭兵の動きを牽制して注意を逸らし、その腹部を蹴り上げる。

鎧がひしゃげて吹き飛び、壁に激突した。

時速60キロ以上で走れる「脚」での蹴りは半端ではない。

突き出された剣の平面を手で弾いてかわし、カウンターで肘を顔面に叩き込む。

エンドーラがリアの後ろからティースプーンを投げて牽制してくれている。

ティースプーンとは言え、リアやエンドーラが投げるとかなりの威力がある。

戦闘は1分と掛からずに終わった。

オルセイもリリースに殴られて、床に伸びていた。

「終わったわ。」

リアがジオレに言う。

「あ、ああ」

ジオレは我に返ったように言い、部屋を出て屋敷の兵士を呼んだ。ジオレはこういう戦闘を間近で見た事が無いのだろう。

とりあえず死者は出ていないが、ちよつとした戦闘だった。

傭兵達とオルセイは特殊な縄で縛り上げられた。

魔術付加された縄は、魔術戦士でも簡単には切れない。

兵士に連れられて、傭兵達が部屋を出て行き、ジオレは尋問する為に部屋を出て行った。

「ご苦労様、リリス。」

助かったわ。」

リアが礼を言う。

「いえ、シーリア様を守るのが私の役目ですから。」

リリスは微笑む。

リアは少し寂しそうな顔をした。

リアはミコトが寄越したリリスに親しみを感じており、もうちょっと態度を崩して欲しいと思っていた。

「リア、その子は誰ですか？

かなり強いみたいですけど。」

エンドーラがリリスに興味を持ったようだ。

「彼女はリリス、私の専属護衛よ。」

リアはリリスを紹介する。

エンドーラはドラゴンのランとフィレイの中身が入れ替わっているのを知らないし、ランの中身はミコトと言う人物がいる事も知らない。

だから、ランがいなくなった後に、リリスを寄越したのがミコトだという説明は出来ない。

当たり障りの無い説明で済ませる事にした。

「へえ、こんな可愛らしいのに。  
まあシーリアもちょっと前までは可愛らしかったけど。」

「あら？」

エンドーラ、あなただって昔は可愛かったわよ？」

2人して笑った。

その日はジオレの屋敷に泊まって、翌日帰路に着いた。  
ゆっくりエンドーラと談笑して過したが、領主と言う立場で  
はそうもいかない。  
それにギルメルの方も気掛かりだった。

### 第31話 ミレー又暗殺未遂

孤児院問題でパグルガント公爵シュレート、ギルメルの父からギルメルは謹慎を命じられていた。

ギルメルは部下に孤児院の改装を命じ、子供達の世話を任せて謹慎している。

ギルメルの尻拭いは父のシュレートと兄のファーネルがやっていた。

幸いな事にパグルガント公爵派の門閥貴族は、他の派閥よりも孤児院から孤児を買った貴族が少なく、大して力のある貴族でもなかった。

一応、それらの貴族と繋がりのある貴族に根回しをしている状況だった。

無論、王宮の方でも根回しは行われている。

ギルメルは眠る事が出来なくなっていた。

眠ると、あの子供が夢に出てくる。

濡れたシーツに包まれ、無残に殺された子供の死体。

自己嫌悪と悪夢に苛まれ、やつれていた。

唯一の救いは、シーリアからの手紙。

シーリアの励ましの手紙が無ければ、自殺していたかもしれなかった。

貴族の命令、その管理がどれほど重いものなのか。

それに人の命が関ってくる事に初めて気付いたこの事件。自分の甘さを再認識させられ、噂に聞くほかの貴族の横暴にも理解が芽生えてきた。

他の貴族の話など、ギルメルにとってはどうでも良い事で、意識した事など無かった。

趣味の様に始めた商売に夢中になっていたのだ。

しかし今、自分が大失敗した事で、他の貴族達の横暴、悪事に敏感になったのだ。

酷い話だが、他人の欠点を探して自分を慰めようとしているのだ。

(なんて無様なんだ。)

自分の思考に気付いて、さらに自己嫌悪する。

数日して、兄のファーンエルが屋敷にやって来た。

「久しいな、ギルメル。」

元気そう、とはいかないようだが」

ファーンエルがギルメルを見て苦笑する。

「何しに来たんだい？」

僕を笑いに来たの？」

ギルメルは棘のある言い方をする。

「そう邪険にするな。」

兄として、弟を励ましに来たのだから。」

「兄さんには判らないよ。

僕は何も知らなかった。

自分が何も知らされずに育てられた温室育ちの人間だって事がよ  
うやく判ったんだから。」

この悔しさが兄さんに判る訳が無い。」

フアーネルは次期当主として、父から厳しく教育されていた。

次男のギルメルは特別甘やかされたという訳では無いが、世間の厳  
しき、汚さを知らずに生きてきたのは事実である。

「確かに、俺には判らない。

お前がそうなってしまったのは、俺や父上の責任でもある。

だから、こうしてやってきたのだ。」

「今更何を言うんだい？」

「さあな。

お前はもう人の世の汚さを知った。

今更俺が説明するまでも無い。

俺に教えてやれるのは、人の管理の仕方くらいだ。

お前も人の上に立つ者になるのなら、人を管理しなければならな  
い。」

「判ってるよ。

嫌と言うほどにね。」

「ならば、学べ。

人の管理の仕方を。」

ファーンルは10日ほど滞在して、人の管理と統治について基本的なことをギルメルに話して聞かせた。

褒め、叱り、褒賞を与え、罰を与え、あらゆる手段を用いて、人を統率する。

それが基本である。

平民でも貴族でも同じ、主導権がどちらにあるかの違いだけだ。

法という規則は、器に過ぎない。

器に収まっているからと言って、それが良いものとは限らない。

逆に、器からはみ出しているからと言って、悪いものとは限らない。器はあくまで器、中身が重要であり器は目安として、対処する事が肝要である。

原則として上に立つものは規則を守らせる為にいるのであり、例外は最小限に止めなければならない。

例外が多数出るような場合は、規則自体に問題がある。

例外を作るにしても、それも規則に盛り込んで、例外自体を限定しなければならない。

また、法の枠組みの中で、更に規則を作る事も必要だ。

屋敷の中での、孤児院の中での、商館の中での、それぞれの規則が必要だ。

そして、人が関り、犯罪に繋がりそうな事なら、それを監視する手段がある。

このような事を、ファーンルは例を挙げて判りやすく話して聞かせた。

さすがに戦力ではなく、統治能力と経済力で1門閥を作り上げたパグルガント公爵の次期当主である。



話している言葉の中に、貴族的な傲慢さを感じる言葉は少ない。貴族と言う立場を、役割分担の1つと割り切っているような態度である。

一通りの説明を終えたファーンネルは帰る事になった。

「ギルメル、最後に1つ。

自分1人だけで考えるな。

部下の言葉にも耳を傾ける。」

ファーンネルは言い残して帰って行った。

ギルメルは部下と、意見を聞く為に商館の婦人方数人を集めて会議を開いた。

孤児院を管理運営して行く為に、これから何をしなければ成らないのかを相談する為だ。

「あの、あの孤児院の建物は、鉄格子を外したくらいでは駄目だと思います。」

建て直すか、他の建物に移動するかの方が良いです。」

と婦人方からの意見が出た。

以前は囚人を一時的に収容する施設だった物らしい。当然の意見である。

「職員は女性を中心にすべきでしょう。」

男性職員も必要でしょうが、子供にとってはやはり母親代わりになる女性が必要だと思います。」

とこちらはギルメルの部下達の意見だ。

ギルメルは幾つかの意見を書き留め、検討した。母親代わりの女性など、思い付きもなかった事だった。

早速、代わりの大型の建物を探し、見つける事が出来た。

今回の孤児院の事件で、爵位を剥奪された貴族が所有していた屋敷が売りに出されていたのだ。皮肉なものである。

現在の孤児院よりは小さいが、建物の質は遥かに良い。

その屋敷を購入し、内装を多数の子供を収容出来るように変えた。

新しい孤児院へ子供を移して、古い孤児院は取り壊す事にした。

そして、職員は町の住人の女性から雇い、女性中心にした。

孤児院で預かる子供のリストをつくり、その入院と退院の履歴を取るように指示する。

特に退院時は、ギルメルに知らせるように指示した。

定期的に子供の健康診断をして、病気や虐待の早期発見を目指す。

教育も受けさせるように手配した。

子供達の将来の為に、読書きくらいは出来るようにさせようと考えたのだ。

ギルメルも定期的に孤児院へ顔を出すようにした。

子供達の元気な顔を見ないと落ち着かなかったのだ。

あの子の様にしてはならない。

あの苦い経験が、ギルメルの足を孤児院へと向けていた。

2カ月半程の時間を掛けて、ようやく一通りの手配が終わり、順調に運営が出来るようになったのを確認できた。

そこでようやく、ギルメルはシーリアへと手紙を書く事が出来るようになった。

孤児院の件がギルメルの中で一段落するまでは、自分が情けなさ過ぎて、シーリアに話せることが無かったのだ。

リアはヴァージル領に戻ってから、定期的にギルメル周辺の様子の報告を受けていた。

ギルメルからの手紙が来ないのを心配して、ハモに調査を命じたのだ。

故に、ギルメルからの手紙が来た時には、大体の事は知っていた。手紙にはギルメルの後悔やら決意やら孤児院の改革やらの内容が書き記してあった。

「辛かったのね。」

「こんなに頑張ってる。」

リアは成長した子供を見る思いだった。

リアは早速手紙の返事を書いた。

この2カ月半の間に、ジオレの屋敷で起きた事件の報告が2回届いていた。

1回目はジオレの弟オルセイに接触していた者は、正体不明であること。

相手は用心深い者だと言う事は判った。

2回目は証拠は無いが、暗殺の本命がシーリアだった事。

オルセイはそれに利用され、ジオレ達が巻き添えになりそうだった

事が判った。

それと、マノル候の配下らしい者が、オルセイの周囲に居たらしい。

以前、シーリアを暗殺しに来た者達にも、マノル候の気配があった。

今回も証拠は無いがマノル候の気配がある。

だが、どちらにしても、ヴァージル領を狙う貴族達の謀略である事は間違いないだろう。

シーリアが居なくなれば、ギルメルとの接点は無くなる。

ギルメルとの結婚前にシーリアを暗殺出来れば、ヴァージル領への攻撃をしてもパグルガント公爵家の介入を抑える工作は出来る。

工作をしなくても、しばらく時間を空ければ、シーリア暗殺がヴァージル領攻撃の為だと気付かれないだろう。

いや、気付かれても証拠さえなければ問題は無いのかもしれない。

マノル候が主犯とは限らない。

他の貴族がマノル候を嵌めようとしているのかもしれないし、ただの共犯なのかもしれない。

ハモの調査でも、まだはつきりした事は判っていないかった。

ハッキリした事が判らない限り、リアから行動を起こす事は出来ない。

(相手の見えない戦いは厄介だね。)

健介は今、マノル領に来ていた。

リアがエンドーラに会いに行つて襲われた後、その調査をしていた

らマノル候の配下らしい者を見つけ、尾行して来たのだ。

マノル領に入って、件の者達が領主の居る館へと入っていく。健介はそれを影から見ていた。

領主の館は小高い丘の上にぼつんと立っており、その下に町があった。

健介はその町で宿を取り、領主の情報を集めた。酒場に通って知り合いを作り、最近のマノル領と領主の動向を探る。

ギルメルの時のように、いきなり押し入って問質すのも良いが、今回は即殺し合いに成る可能性がある。慎重にやる必要があった。

酒場や町中では、大した情報は得られなかった。

この領主、マノル侯爵は領民との接触を避けているらしい。時折、館から使用人が町にやってくる以外は、領主の館に出入りする人間は居ないらしい。

これでは八モの調査員も情報を集められないのは仕方ない。健介は打つ手が無くなった。

（さて、どうしたもののか。）

訊ねて行っても、素性の知れない平民を招き入れる可能性は低い。

（マノル侯爵の立場になって考えてみよう。）

もしマノル侯が主犯か共犯であるなら、どうか？

もしそうなら、逆に暗殺されるのを恐れて周囲に強固な警備を敷く

だろう。

だが、その様な警備は無い。

無関係でマノル侯が犯人と疑われていると知っているなら、可能な限り他の者と接触を経つ可能性は高い。  
下手に動けば、それ自体を利用されかねない。

(そう考えると、マノル侯は無関係の様に見える。  
ならば、俺が追跡して来た者達は、諜報員か?)

マノル侯爵が自分の疑いを晴らすため、諜報員を派遣して誰の仕事を調べている可能性がある。  
その結果、健介がここまで来たという事態になったのかもしれない。

健介はマノル侯爵の館に、真正面から乗り込む事にした。  
それで相手の反応を見るつもりだ。  
余り時間も掛けられない。

昼過ぎ、マノル侯爵の館へ歩いて行く。  
服装は平民と同じ、髪型は顔が少し隠れるようにした。

門番にマノル侯爵に取り次ぐように言う。  
約束の無い平民と言う事で、なかなか取り次ごうとしなかったが、押し通した。

「ヴァージル領の件で話がしたいと言え。」

門番の兵にそう言って、取り次がせる。

しばらくすると、門番が戻ってきて健介を館に案内した。

健介は館の応接室に通された。

「君は何者かね？」

ヴァージル領の件とはどう言う事かね？」

初老の男。

応接室に入るなりの質問に、健介は少し面食らった。

「あなたがマノル侯爵ですか？」

健介が確認する。

「ああ、そうだ。

君は？」

マノル侯爵が健介を値踏みするように見詰める。

「ペレスと呼んでください。」

健介は偽名を使う。

「偽名か、まあいい。

それでヴァージル領の件とはどう言う事かね？」

マノル侯爵は先ほどの質問を繰り返す。

マノル侯爵の様子は、どこか焦りを感じているようだ。

「マノル侯爵、あなたは疑われていますよ。

町には幾つかの貴族の諜報員がいるし、マノル領へ侵攻しようと準備をし始めた貴族も居ます。」

健介はかまを掛ける。

返答次第で、加害者が被害者かわかるかもしれない。

「な、何故そんな事に？

戦の準備をしている貴族とは何処だ？

私は関係ないんだ！」

マノル候が慌てて言う。

（マノル侯爵は被害者の方か？

だが、もうちょっと。）

「関係ないって、清廉潔白と言う訳でもないでしょう。

ヴァージル伯爵の女傑がそれを知ったら、どうなる事が。」

「そんな、私はただレクサス伯に・・・

おまえ、私にかまをかけたのか？」

マノル候が気付いて言う。

「少しは頭が回るようだ。

レクサス伯爵ですか、なるほど。

一つ、忠告しておきましょう。

今後、ヴァージル伯と何処かの貴族が戦を始めても、手出ししない方が良いでしょう。

もししたら、あなたとこの領地がどうなるかわかりません。」

健介がにっこり笑って脅す。



「それは、ど、どう言う事だ？」

「ご自分で考えて下さい。」

欲しい情報は手に入れました。

これで失礼します。」

健介は返答を待たずに館を出た。

十分な情報は得たから、もう用は無い。

町に戻ると、尾行され始めた事を察知した。

そのまま町を突っ切って、森に入って尾行をまいた。

森の中で方向を変えて、レクサス領へと入った。

次の目的地であるレクサス伯爵の館のある町に着く。

ヴァージル領の隣の領だが、現在のヴァージル領の繁栄と比べると寂しい感じのする場所だ。

町の市は賑わっているが小規模で、露天の数も少ない。

よく見れば浮浪者の様な者が彼方此方に見える。

健介は数日を費やして、情報収集をした。

レクサスの民は重い税に苦しんでいた。

6割の税である。

その上、領主の横暴な政策によって、実質7割以上の税になっている。

店を出す為の出店税、酒を売買する為の酒税とここまでは解らないでも無い。

しかし、町中を歩く為の通行税や町の井戸水を使ったための井戸税。

6割も税を取っておきながら、他にこれだけの税を取られては、生活もままなら無いだろう。

レクサス領の税は高いと聞いていたが、その実態までは知らなかった。

レクサス領は以前のヴァーゼル領と同じように、特別な産業は無い。他の領と同様、一般的な農産物と少々の果物程度である。だが、節制をしていれば、こんな状況にはならないはずだ。少なくともヴァーゼル領はならなかった。

（ヴァーゼル領の富が欲しいレクサス領と言う、動機は有る訳だな。）

健介は一応の目安は取れたが、これで確定したわけでは無い事は判っている。

だが、レクサス領の領主の館周辺は警備が厳重であった。周囲の住民と話して何気なく聞いてみたところ、警戒が厳重に成ったのは最近の事らしい。ますます怪しいレクサス領主である。

ここで健介は行き詰った。

あれだけ警戒が厳重だと忍び込む事はまず不可能だ。ああも警戒しているという事は、マノル候の様に会うような事はまずしないだろう。

追り返した後、追跡して暗殺、という手を打たれる可能性もある。

さすがに健介でも多数の暗殺者を相手にするのは厳しい。

最初は相手も油断するだろうが、その後からは多数で襲撃を食う可能性がある。

正体不明のまま行動できれば良いのだが、健介の隠密行動の技術は

我流であるし。

現在、リアに生きている事がばれていないのは、髪と目の色が変わったお陰である。

それがなければ、とつくにばれている筈だ。

リアの情報網はそれ程甘く無い。

(これはリアに知らせて、リアの方でアクションを起させた方が良  
いな。)

健介は1人では荷が重いので、リアに手紙を送る事にした。

無論、匿名の手紙である。

レクサス領内では手紙を検疫される恐れがあるので、ヴァージル領  
に入ってから手紙を使者に託した。

屋敷の庭でお茶を飲んで休憩していたリアは、雇われ使者の来訪  
を受け、手紙を受取った。

その匿名の手紙の内容は、マノル候とレクサス伯の暗躍についてと、  
レクサス領の状態について言及する物だった。

リアは早速、ハモに命じてその内容の裏付けを取らせる事にした。

「またしても金髪碧眼で双剣の男か」

リアは呟く。

雇われ使者の雇い主は、金髪碧眼で双剣を持つ男と言う事だった。  
名前は名乗っていないかったと言う事で判らない。

(ギルメルが言っていた男性と同一人物?)

この国では金髪碧眼の人間はそう珍しくは無い。

しかし、双剣を持っている人間の数は少ない。

その条件を満たす人物が、どちらも直接・間接に関係して来るとい  
うのは偶然だろうか？

「何者なのかしらね？」

側に控えるリリスに訊く。

「判りかねます。

情報が少なすぎます。」

リリスは首をかしげて簡潔に答える。

リアはリリスを少し見ていたが、溜息をつく。

(私は何を期待しているの?)

リアは自嘲気味に苦笑すると政務に戻った。

相変わらず、ギルメルとの文通は続いている。

商売も孤児院の運営も順調のようで、手紙の文面からも立ち直りつ  
つあるのが判る。

ギルメルは商売人の癖に判り易い。

ギルメルの商才を部下が活用しているのだろう。

見合いや結婚の話はまだ出てこない。

このままなし崩しになくなるのか？

とも思っているが、リアの方から結論を催促するつもりはなかった。

20日ほどしてハモがレクサス伯について報告しに来た。

報告の内容は、例の手紙の内容が事実である事。

さらに、レクサス伯の屋敷の使用人から話を聞くことに成功し、ヴァージル領に対する戦の準備を密かにしていたらしい事が判った。その戦の準備は、ここ最近停滞しているらしい。

「なるほど。」

レクサス伯が黒幕と見て間違い無さそうね。」

シリアが眼光鋭く微笑んだ。

「はい、他の貴族領も不穏ではありませんが、戦の準備と言うほどではありません。」

レクサス伯は本気でこのヴァージル領を手に入れるつもりだったのでしょうか。」

とハモ。

「それにしても、おかしなものですね。」

同じ王国の貴族同士が戦をして、領地を奪うなんて国が混乱するだけではないのですか？」

リリスが全く判らないという顔で言う。

シリアとハモが顔を見合わせる。

「確かにそうね。」

私もそう思うわ。

でも、それが慣習なのよ。」

シリアは苦笑して答える。  
子供が悪戯を咎められた様な気分だった。

「領地は1つ1つが小さな国の様なものです。  
それを纏め上げているのが王族で、全体を王国と言う事になって  
います。」

王族が特に干渉する事柄が無い限り、領地同士での争いは起こる  
のです。

王族が干渉するのは、貴族の誇りを傷付けるような、醜い行為を  
行っている場合ですね。

正当な理由があれば干渉はしませんし、歴史的に理由がなくても  
干渉しない場合が殆どです。」

ハモが補足する。

リリスはいまいち納得がいていないようだった。

「それで良く国が崩壊しませんね。」

リリスには理解不能だった。

シリアにもおかしい事は判っているが、王族でも大貴族でも無い  
のでどうする事も出来ない。

この制度で長い間やってきたのだ。

シリアとハモは苦笑するしかなかった。

「それはともかく、今はギルメルとの縁があるから、そう容易く侵  
攻される事は無いでしょう。」

それに、我が領は日に日に力を付けているから、レクサス伯もそ  
う簡単には手は出せないわ。

恐らく、他にも協力している貴族がいるでしょう。」

或はその貴族が黒幕なのかもしれないけど。」

とシリア。

深い陰謀は余り追っても意味が無い。

更なる罠に嵌るだけだ。

目的が一応ハッキリしているから、それに対する対処だけしておけば良い。

「では、こちらからは仕掛けないのですか？」

とリリス。

「まだね。」

確固とした証拠が無いし、やるとしたら相手と同じ暗殺という事になるわね。

でも、向うも警備を厳重にしているらしいから、そう簡単にはいかないわ。

下手に手を出すと足元を掬われかねないから、今はまだ傍観するしかないわね。」

シリアは自分に言い聞かせるように言う。

それでもヴァーゼル領の軍の増強はしている。

シリア自ら魔術戦士の訓練指導をしているし、魔術学校の生徒を卒業前に引っこ抜いたりしている。

卒業間近の生徒は競争が激しいので、避けている。

育てるのはヴァーゼル領に来てからでも出来るし、魔術学校を卒業出来なくてもシリアの元に来る生徒は意外に多い。

シリア、フィレイ、クリンの3人は魔術学校では伝説になっているので、その為だろう。

ヴァージル領の現在の財力を活かして、魔術戦士を増やしているわけだ。  
魔術戦士の数だけで言えば、100近く居る全貴族の20位以内には入るだろう。

実戦戦力で言えば、更に上になるはずだ。  
シヨミル戦で活躍した勇将シーリアの存在、参謀のハモの存在が軍としての実力を上げる。  
シーリアの戦功を正当に評価するものなら、安易にヴァージル領へと攻め込んだりはしない。

時に、欲に溺れた人間は余計な真似をするものである。  
それはどこの世界の人間にも言える事だ。

シーリアの母ミレーヌが町の集会へ出席した帰り道、暗殺者に襲われた。

ミレーヌ付きの護衛の魔術戦士の1人が救援を要請しに屋敷に来た。

「ハモ！」

町を封鎖しろ！

リリス行くぞ」

リアはそれだけ言って双剣を引っつかんで屋敷を飛び出した。  
そのすぐ後ろをリリスとミレーヌ付きの魔術戦士が続く。

「は、速い」

ミレーヌ付きの魔術戦士はリアとリリスの走る速度についていけ



ず、どンドン距離を開けられる。

現場に着いた時、護衛と暗殺者が戦いを繰り広げており、護衛と暗殺者が路地に数人倒れていた。

暗殺者集団の方が数が多く、劣勢になっている。ミレーヌも肩から血を流していた。

リアは暗殺者集団の後方に電撃魔法を放つ。

その場に居た数人の暗殺者が痺れて動きが鈍くなる。

そこへ切り込んで瞬時に切り捨てた。

その間にリアへ向かって来そうだった者達は、リリスが仕留めていた。

リアとリリスの登場で一気に形成が逆転した。

「生かして捕らえよ！」

リアが叫ぶ。

「は！」

護衛達が返答を返す。

残った2人の暗殺者を生きたまま捕らえる事が出来た。

「手の空いているものは負傷者の手当てを。」

リアは指示を出し、自らは母ミレーヌの治療をする。

「お母様、すぐに癒します。」

「ええ、ありがとう。」

ミレーヌのドレスは血で染まり、顔は血の気が無かった。

ミレーヌの治療をしている所へ、ハモが15人の魔術戦士を引き連れてやって来た。

「良かった。」

ミレーヌ様、御無事でしたか。」

ハモが安心したように言う。

「ええ、皆さんのお陰で命拾いしました。」

ミレーヌが微笑む。

「ハモ、そのこの2人から背後関係を聞き出せ。何をしても構わん。」

リアが2人の暗殺者を顎で指して指示する。

ハモは黙って頷く。

リアが何をしても構わないと言う事は、今まで無かった。

リアはミレーヌの治療を終えると、抱上げた。

ミレーヌの馬車は壊れてしまっている。

「降りなさい。」

歩けますよ。」

ミレーヌが少し赤面している。

「駄目です。」

シーリアは即答する。

周囲にミレーヌの護衛に囲まれて屋敷へと戻った。

ミレーヌ付きの護衛もリアが鍛え上げた魔術戦士達だった。それなりの実力を持ち、リアとの模擬戦で経験値は高い。暗殺者に倒された者も、命を落とす事は無かった。

同数で戦っていれば、確実に暗殺者を撃退していただろう。奇襲の上に2倍近い人数で襲われたのだ。リアの救援が間に合うまで持ち堪える事が出来るほどの実力だったと言っ事だ。

リアは屋敷に戻ると、母ミレーヌを用人人に任せて風呂に入れて寝かせるように指示した。傷は癒えても体力は戻らない。休ませる必要がある。

ミレーヌ付きの護衛たちに労いと礼を述べ、褒章を約束して休むように指示した。ハモは捕らえた暗殺者を領地の軍の駐屯地へ連れて行き、尋問をしていた。

翌日の昼前、ハモが屋敷へ戻って報告をした。

「あの暗殺者達は、レクサス伯の魔術戦士です。傭兵も混ざっていたようですが、残った2人はレクサス伯の魔術

戦士でした。」

「そう。」

ようやく尻尾を掴んだわね。」

「シリア様を殺せないと踏んで、ミレーヌ様を標的に選んだのでしょうが。」

「愚かな事です。」

ハモは頭を振る。

ミレーヌなら簡単に暗殺できると思ったのだらう。

「ハモ、戦の準備を始めて。」

レクサス領を落とします。」

「は」

シリアは事の次第を手紙に書いて、ギルメルへと送った。しばらく手紙は書けないと。

### 第32話 レクサス伯と黒幕

健介がリアの母ミレーヌが襲われた事を知ったのは、その10日後だった。

そしてリアが軍事行動を開始した事を知った。全てリリスからの報告だ。

ミレーヌが襲われた事に関しては健介としても内心穏やかではないられない。

健介もまた、リアとしてミレーヌを母と呼んでいたのだから。しかし、命がけの争い事では冷静で無ければならない。

リアのヴァージル軍がレクサス領へと進軍し始めるのにはまだ時間が掛かる。

兵士を動かすには、兵糧の準備と輸送の手配が必要である。

また、隣の領とは言え軍事拠点としての駐屯地を臨時に設ける必要があり、その場所の選定をして場所を確保しなければならない。

健介の予想では更に10日は掛かる。

大っぴらに軍の準備を進めているため、レクサス領にもその情報は流れているはずだ。奇襲は無理だろう。

この状態で健介1人に出来ることは少ない。ドラゴンの姿にでもなれば話は別だが、それは出来ない。

この戦に参加しようとしている傭兵団を探した。その傭兵団に入って、戦に参加しようと考えたのだ。

直接個人で参加しようとするれば、ハモか誰かがラン（健介）の顔を知っている者に合うかもしれない。

傭兵団に参加していれば、その手続きは団長が行うはずだ。

見つけ出した傭兵団は3つあり、最大多数の傭兵団に決めた。

その方が目立たないからだ。

木を隠すなら森の中である。

その傭兵団はムルヴァン傭兵団で、80人余りの傭兵を擁している。

入団は容易だった。

健介は腕の立つ魔術戦士であるから、傭兵団としてはぜひ欲しい手駒なのだ。

腕の立つ仲間が居れば、それだけ生還する可能性が高くなる。

団長ムルヴァンは気さくなおやじだった。

健介は簡単な鎧と、フルフェイスのヘルメットを買った。

戦場でリアと顔を合わせる可能性もあるため、顔と体形を隠すものが必要だ。

そんな事をして6日も過ぎると、ヴァージル領にギルメル率いる兵団が入って来て大騒ぎになった。

どうやら、リアがレクサス領へ戦を仕掛けると言う事を手紙で知らされ、自らの手勢と傭兵を雇って加勢しに来たらしい。

リアの方は大慌てであった様で、リリスの報告を聞いて笑ってしまった。

領地の管理を父ヘインツに任せ、シーリアは戦の準備に忙しかっ

た。  
兵糧の量と輸送経路のチェックと輸送部隊の編成、戦に参加する兵の選定と部隊の編成。  
命令系統の構築と作戦の立案などなど。

そんな折、領地の端にある村から使者が慌てた様子でやって来た。何処かの軍隊がやって来た。

リアはレクスラス軍かと一瞬考えたが、やってくる方向が違う。

リアは直属の部下20人余りを連れて、直接その村へと向かい、その軍を確認した。

「ギルメル」

進軍してくる先頭付近にギルメルの姿を見てリアが呟く。

リアはギルメルの軍の前に出て停止させた。  
すると、ギルメルがリアの前に出てきた。

「ギルメル様、一体これはどう言う事ですか？」

リアが問質す。

「ああ、シーリア殿、そう怒らないで頂きたい。」

ギルメルが少し顔を引きつらせる。

リアと会えた喜びと、リアを不快にさせた悲しさが内混ぜになっている。

「私はシーリア殿の援軍に来たのだ。」

パグルガント公爵家で援軍を出せないのは残念だが、私だけでも

「思ったのだ。」

ギルメルが説明する。

それはシーリアの予想通りだった。

ギルメルを見た瞬間からそれは判っていた。

そして、ギルメル自身の口から語られて頭を抱える。

「ギルメル様、戦場はギルメル様が考えるほど甘い所ではありません  
ん。」

どうぞ、お帰り下さい。」

「駄目だ。」

帰るつもりは無い、シーリア殿。

今回の件は私も看過できない。」

ギルメルが以外にも強い意志を露にする。

リアはギルメルを見て目を瞠る。

「・・・判りました。」

では私の指示通りに行動してください。

命令違反を犯せば、ギルメル様でも容赦は致しません。

宜しいですね?」

リアは警告する。

「うむ、承知した。」

ギルメルが嬉しそうに頷いた。

(本当に判ってるのかしら?)



リアは溜息をついた。

ギルメルが連れてきた兵団は、傭兵を入れて1000人余り。ギルメルの兵団自体を傭兵団と同列に扱うとして、現在雇っている最大のムルヴァン傭兵団と行動を共にしてもらおう事にした。両方合わせて2000人弱、十分な兵力として敵に当てる事が出来る。

ギルメルはリアの側に居たがったが。

「これは遊びではありません。  
御自分の軍をしつかり管理して下さい。」

リアが言うとギルメルは素直に従って、自ら率いて来た軍を管理（指揮）するようになった。  
孤児院の件を思い出したのだろう。

リアは補給輸送の準備も万端整えて出撃した。  
ギルメル軍約2000が左翼、八毛率いる右翼部隊が約300、主力のシーリア部隊が約500である。

リアは軍事行動を開始すると速かった。  
最初の進軍は強行軍によって2日でレクサス領へと進入した。  
この電撃作戦で、レクサス側の防衛部隊は迎撃準備が間に合わずに撤退していた。  
戦わずして、軍事拠点となる地域を制圧したのだ。

その場所に駐屯地を作るべく、野戦築城を開始した。交代で2日掛けて野戦築城を終えた後、レクサス軍が攻めて来た。

レクサス軍はあのまま追い込まれると思って逆撃体制をとって待ち受けていたのだ。

しかし、斥候はヴァージル軍が野戦築城を行っている事を知らせてきて、慌てて反撃に出たのだった。

レクサス軍の反撃は遅すぎた。

野戦築城はほぼ終了しており、複数の堀と堀の中の罠、多数の石弓の一斉掃射の前にバタバタと兵が倒れていく。これでは魔術戦士でも堪ったものではない。

レクサス側の指揮官が撤退命令を出した瞬間、それとほぼ同時にリアが追撃命令を出した。

ここでは絶妙なタイミングだった。

既にレクサス側は動ける兵が魔術戦士しか残って居らず、すぐさま撤退を開始した。

その後ろへ即座に噛み付いた体勢になったのだ。

しかし、深追いはせず3・4回の攻撃の後、敵を見送りった。

ヴァージル軍の損害は軽微。

レクサス軍は一般兵は全滅、魔術戦士も4割は削っていた。残りも負傷者が多数居るはずだ。

だが、あれはレクサスの本陣ではない。

翌朝早く、少数の警備兵を残してリアは進軍を再開した。

主力のシーリア部隊は真っ直ぐに、左翼と右翼は大きく迂回させる。

リアの主力部隊の自信の顕れだった。調査によるとリアの主力部隊よりレクサス軍の方がまだ数が多い。しかし、右翼と左翼が包囲を完成させるまで余裕で耐えられる実力がある。魔術戦士の数と質は、レクサス軍のそれを上回っている。士気も負傷者を抱えるレクサス軍より遥かに高い。何より、リアが指揮する部隊である。

このまま包囲を完成させるか、主力が反撃を受け止めて包囲を完成させるか、どちらでも耐えられる戦力だった。

ただし、右翼後方から予想外の敵軍が現れなければの話である。周囲に放っておいた哨戒部隊の報告で、敵兵200程度が後方から迫っていることが判った。

シリアは直に伝令を右翼部隊に出して、反転迎撃するように命じた。

さらにリアの本体からも50の兵を出して、新たな敵兵の側面を攻撃するように命じる。

たった50でも、敵兵は200程度だから十分な戦力だ。

これで左翼と主力だけになったが、まだ半包囲は出来る。

翌日、レクサス軍と再度見えた。

今度はレクサス軍の本陣もいた。

レクサス軍は野戦築城をしておらず、布陣してそのまま待っていた。

野戦築城している暇を与えないように追って来たのだが、その気も無かったようだ。

それならばと、距離を置いて停止して布陣し、少し時間を稼ぐ。

左翼のギルメルの部隊も現れたところで、同時に攻撃を開始した。半包围されて攻撃を受けたレクサス軍は、当然劣勢に追い込まれ兵を倒されていく。

レクサスの指揮官は戦の仕方を判っていないようだった。

（稚拙な指揮ね・・・  
でも容赦はしない。）

リアは情け容赦なく、包围陣を完成させていく。

味方の兵士達は良く戦っており、敵勢力をジワジワと侵食していた。  
った。

その中で、一際目立つ魔術戦士がいた。  
簡素な鎧とフルフェイスのヘルメットを被ったその者は、苛烈な双剣捌きで敵兵を薙ぎ払っていた。  
どこか見覚えのある双剣の剣筋だったが、指揮をしなくてはならず、その者に気を取られている暇は無かった。

戦闘開始から1時間経過したときには、レクサス軍は約7割が行動不能に陥っており、ほぼ壊滅状態だった。  
包围も既に終わっており、逃げ場は無い。

右翼後方からの敵軍も、八毛率いる部隊との交戦で打撃を受け、レクサス軍本体の劣勢を知って撤退を始めていた。  
そして、レクサス軍は援軍を得ることが出来ずに降伏した。

この事件でレクサス領の半分はヴァージル領に併合され、残りの

半分は王宮管理となった。

領地の半分は王への賄賂のようなものだ。  
レクサス伯は国外追放となっている。

ハモが占領したレクサス領での情報を収集し、その報告をしていた。

「レクサス伯以外にもこの件に関する貴族が居る事は判つてますが、巧妙に隠匿されています。」

「今後もお気を付けください。」

ハモが報告を締めくくった。

今回の戦はリアの電撃作戦のお陰で、他の貴族の介入をほぼ阻止する事が出来た。

だが、水面下で蠢いていた貴族が居た事は判っており、戦が長引けば袋叩きになっていた可能性もある。

しかし、それもここまで。

今回の戦でヴァーシル伯シーリアの力を示した事になる。

ギルメルの参戦の話も広がっている。

少しでも頭の良い貴族ならシーリアの側につくか、下手な介入は避けるだろう。

元々、ヴァーシル領の領主シーリアは女だから嘗められていたのだ。

シヨミルとの戦いで戦功があっても、それは他国に向けられた牙。その牙が自分達に向けられると判っていなければ、図に乗るのが戦を知らない大半の貴族であった。

「判っている。」

しかし、以前よりは状況は良くなる。  
積極的に関ろうと思う貴族は減るはず。

「それどころか、私に媚を売ってくる貴族が居てもおかしくは無いな。」

リアが答える。

「はい。」

既にマノル候を筆頭に4人の貴族がシーリア様に謝罪と和解を申し入れて来ています。」

「マノル候ね。」

「悪い人では無さそうだけど。」

レクサス伯に踊らされて巻き込まれた気の毒な人。

リアはそんな認識を持っていた。

その後は猫の手も借りたいくらいの忙しさだった。

戦後処理、一言で言えばそれで終わりだが、味方の兵士も死んでいるし、併合した領地の管理も考えなければならぬ。

それも時間を掛けていい問題ではない。

少なくともリアはそう思っていた。

とりあえず、ハモの部下に併合した領地の管理を任せる事にした。税率を引き下げ、余計な税を撤廃して領民の暮らしを安定させる事を指示しておく。

リア自身はまず、戦死者の葬儀を共同で盛大に催し、感謝と兵士達の勇気を称えた。

そうする事が、遺族に兵士達の死が無駄ではなかった事を教える事になる。

そう思えば、少しはマシになるはずだから。

そして、遺族には手厚く資金援助をする。

リアも偽善と判っているが、偽善でもやらないよりは遥かにマシなはずだ。

傭兵団には金を渡すだけだったが。

1つ気になる事があって、ムルヴァン傭兵団の団長に尋ねた。

「戦場で凄腕の双剣の男を見たけど、何者？」

リアは何気なく聞く。

「ああ、あいつか！

あいつは飛び入りの団員だね。

引き止めたんだがもう退団しちゃったよ。

勿体ねえよな。」

ムルヴァンが笑う。

腕の立つ団員が居れば、傭兵団の名声も上がり、団員の生存率も上がる。

リアはその男の特徴を聞くと、予想通り、金髪碧眼の男だそうだ。

（気になるわね。

八モに探させましょう）

リアはムルヴァンに礼を言った。

身寄りの無くなった子供達を孤児院に入れ、里親の斡旋も行う。

リアが、と言うよりヴァージル領で管理する孤児院は郊外にある丘の上に建てられていた。

木造2階建ての長い屋敷のような建物が4つあった。

それぞれの建物に年代順に入れており、それぞれの管理者（保母や保父）もそこに寝泊りしている。

この孤児院専門の警備兵が8名居り、内2人が魔術戦士となっている。

この様な郊外にある孤児院は、盗賊に襲われて子供が攫われる事が良くあるのだ。

それ故のこの布陣である。

孤児院と町の間、町を警備する兵の駐屯地もあり、有事の際のサポート体制も万全である。

リアは八モに例の金髪碧眼の双剣使いの搜索を命じた。

「畏まりました。」

それと新しい領地に関して提案があるのですが。」

と八モ。

「うむ。」

「領地を持たない男爵の者を、領主代理として統治を任せたらどうかと。」



と八モ。

八モの提案は、何らかの功績を挙げて男爵になりはしたが、領地を持たない貴族に領地を貸し与えると言う事だった。

他の領地でも同じ事は行われており、珍しい事ではない。

「いや、止めておこう。」

そのやり方では、新たな領地の統治がどうなるのか監視も出来ない。

また重税やら何やらで、領民に負担をかけることになるかもしれないからな。」

リアは少し考えてから却下した。

男爵の貴族に領地を貸し与えればその貴族から税金を得られるが、その反面統治の内容に関しては事実上口出しは出来ない。

良い貴族なら問題は無いが、そうでない場合には関係が拗れる事になって、厄介な問題になる。

リアは自らの信頼出来る人間にこそ、新たな領地の統治に参加してもらいたいと考えていた。

必要なら人材を発掘して育てても良い。

リアの父ヘインツが良いのだが、ヘインツは度々ミュール領に向いて、フィレイの代わりに統治を手助けしている関係上、それは無理である。

とりあえず、八モに人選をさせる事にした。

ヴァージル領の発展と繁栄は見る者が見れば、十分妬みの対象であり、そこから得られる富は非常に魅力的に映る。それ故の一連の事件と戦争だったのだが、力づくに近いやり方では不可能という結果が出た。

影の首謀者はシヨミルとの戦争時に、いつの間にか勢力を増した宗教組織テルバの主教であった。

レクサス伯はテルバの熱心な信者であり、テルバへの寄進を熱心に行っていた。

領主であるレクサス伯が熱心・・・と言うより殆ど依存していた事は、誰も知らない。

リアも首謀者は他の貴族だと思っているが、実の所は違ったのだ。

ヴァージル領は色々な点で魅力があったのだ。

採掘される石炭が主にそうだ。

ヴァージル領の隣領ビンゼンは鉄の産地であり、それが非常に都合が良い。

その販売ルートは確立され、需要も伸びているので売上はうなぎ登りである。

この状況はまだ20年くらいは続くと言われているのだ。

しかも、前ヴァージル伯領主ヘインツが推し進めていた農作物の品種改良も成果を挙げ始め、生産量を増やしつつある。

そして、ある意味これが一番重要なのだが、ヴァージル領は田舎の領地で王都からは遠い。

有力な貴族の目の届かない場所で、事態を進める事が出来るはずだった。

テルバの勢力圏外ではあるが、レクサス伯と言う駒があった。

しかし、ヴァージル伯シリアに見合いの話が上がり、その相手が有力貴族の息子であった事で計画が狂ってしまった。レクサス伯が怖気づいてしまったのだ。

見合いの話は延期と言う形になったが、手紙のやり取りをしているという事で、手を付けかねていた。そこへ、いきなりのレクサス領への攻勢である。

後で判った事だが、焦ったレクサス伯が勝手に暗殺者を雇って、ヴァージル伯の母ミレーヌを殺害しようとしたらしい。

主教は愚かなレクサス伯を殺してやりたい衝動に駆られたが、自分で動く事は主義に反する。

今回は人形（レクサス伯）の教育が行き届いていなかったのだと、自分を諫める事にした。

とは言うものの、レクサス伯という駒が無くなった事で、それまでの様々な段取りが全て無駄になってしまった。

「さて、どうしたものか・・・」

テルバの主教はまだ諦めていない。

ヴァージル領は諦めるには美味し過ぎる領地である。

まだギルメルとの結婚が決まった訳でもないし、チャンスはある。

新たな策を練り始めた。

健介は今、ツガノへ向けて旅をしていた。

観光ではないし、只管走っているのだ。

レクサス伯、いや、今は只のリムトだ。

国外追放された彼を追って、旅に出たのだ。

リアを暗殺しようとした事やミレーヌを負傷させた事に対する報復をしようなどは、少ししか思っていない。

目的は検証である。

今回の一連の事件に、健介はまだ納得出来ない一面があるような気がしてならなかった。

何がという事は具体的には言えない。

だから、それを確かめるべく、リムトを追っているのだ。

予定ではツガノの領内に入る前に追いつくはずだった。

リムトは馬車で移動しているが、こちらは人型のドラゴンがほぼ全力で走っている。

すぐに追いつくはずだ。

走り続けて1日、リムトの馬車らしき物を遠くに見つけた。

そして、その手前に3人の武装した人が馬車を目掛けて走っていくのが見える。

その動きと速度からして魔術戦士だ。

嫌な予感がして、健介は走る速度を上げる。

健介が現場に到着するまでにあと数十秒程掛かる。

健介が走りながら見ていると、その3人の魔術戦士は馬車を強引に止め、御者を殺した。

遠目に血しぶきが見えた。

そして、馬車の中からリムトらしき人を引き摺り出し、剣を突き立てた。

3人の内1人が健介に気付き、仲間に知らせた。  
リーダーらしき男は一瞬迷って逃走を選択した。

その逃走ルートは健介が走るルートより適度に離れた場所を通ってペステンへ引き返すルートだった。

もし、健介がリムトの関係者なら、真つ先にリムトの元へ向かう事になり、襲撃者3人を追う為には逆方向の馬車から追う事になる。その間に襲撃者は遠く引き離し、悠々と逃げているという狙いがあるのだろう。

しかし、健介はリムトの関係者では無いし、リムトが死んだであろう事は遠目にも判った。

死体は逃げないから、襲撃者を尋問する方が先である。

健介が走る方向を変えると、襲撃者のリーダーは舌打ちしたようだ。

リーダーの指示に従って、襲撃者達は健介に向かって走ってくる。

走りながら魔法を使うのは至難の業だが、健介はドラゴンで簡単な魔法なら自動で発動できる。

3人が間合いに近付いた瞬間に、真ん中のリーダーとの間に爆炎を放つ。

3人は咄嗟に方向転換してかわしたが、健介は1人方向を異にした男に向かって走り、男の剣を弾いて腹を引き裂いた。

深々と切られた腹から、血と内臓が飛び出してくる。

健介はそれを見ずに残った2人に向かって走る。

2人も既に健介に走って来て、剣で突いてくる。2人の連携はなかなかのものであった。

健介は双剣で受け流していたが、隙を突いてリーダーでは無い方の腕を切り落とした。

それを見て一瞬動きの止まったリーダーの腹を蹴り飛ばし、腕を失った男に止めを刺す。

振り返ると、リーダーの男は地べたに這いつくばって、立とうとしていた。

「聞きたい事があるんだが？」

健介がその男に話しかけた。感情を交えない至って平坦な声で。

男は腹を押えて荒い息をして健介を見上げた。

「誰に雇われた？」

健介は男と一定の距離を保っている。

隙を突いて魔法を使われたり、逃げ出そうとするかもしれない。どちらでも対処できるような距離だ。

「言わないなら、ここで死んでもらうよ。」

健介は双剣を軽く構える。

健介に拷問をするつもりは無い。

答えないなら殺す。

いつものやり方だ。

「俺が助かる保証は？」

男が少し怯え気味に言う。

「答えればここから自由にしてやる。

後はお前次第だ。」

健介は真つ直ぐ男を見据えて言う。

男は少し考えてから答えた。

ナイフを投げる事で。

健介は身体を半身になるだけでかわし、男が突き出した剣を双剣の片方で流し、もう片方を脇腹から胸に向かって斜めに突き刺した。男がゴボゴボ言いながら倒れて動かなくなった。

健介は馬車の方へと走った。

馬車の脇に倒れている男をリムトであると確認し荷物を漁った。変わったものは無い様に見えたが、リムトの身に付けている物に不自然なものを見つけた。

貴族が持つには安いアクセサリー、貝のネックレスだ。しかも、大事に下着の下に入れてあった。

安物の貝のネックレスなど、見せたくないなら付けないだろう。だが、隠して身に付けている。

その貝のネックレスには何か意味があるに違いない。

（あの男達はどつだ？）

ふと健介はさっきの襲撃者の事を思い出す。

襲撃する者とされる者。  
時には密接な関わりがあるものだ。

襲撃者の死体のところへ走っていき、首元を探ると思ったとおりだった。

貝のネックレスが現れた。

「何かあるな。」

何となく宗教の匂いがする……」

大の男が貝のネックレスを後生大事に付けているなど、妖しい薔薇色の会でもない限り、宗教と考えるのが妥当だ。  
少なくとも、こっちの世界では。

健介には他に思い浮かばない。

何かの秘密結社のようなものなら、同じ貝にしても銀のメダルに貝を浮き彫りにするとか、そういう物にするだろう。

健介はネックレスを持ってヴァージル領へと戻った。

ヴァージル領内に入ると、最初に見つけた町で使者を雇った。

即席の封筒に手紙とアクセサリーを入れて、使者に託す。

後は、その使者を追っていつもの宿へと戻るだけだったのだが、途中から視線を感じ、尾行されているのが判った。

（なんだろう？）

特に殺気や害意の類の気配は感じない。

ただ監視されているような感じだ。



しかし、尾行されるのは気持ち悪い。

健介は脇の小道に入ると、素早く壁を伝って屋根に上がって反対側に降り、道行く人にギョツとされながら何食わぬ顔をして歩き去った。

人の多い場所での尾行は、見失うと探査魔法では追えない。探査魔法では余程の精度が無いと他人と見分けが付かないのだ。

尾行を振り切った健介は、何とかいつもの宿へと戻る事が出来た。

深夜、いつもの様にリリースに情報を貰って苦笑した。

リアが健介を探させているのだ。

「金髪碧眼で双剣を持つ男を捜せ。」という命令らしい。だから尾行がついていたのだ。

使者はちゃんと使命を全うしたようで、手紙とアクセサリーはリアの元へ届けられた。

そして、アクセサリーについてハモが思い当たる宗教組織があると言ったらしい。

宗教組織テルバ。

今、王都では結構有名で、信者になると貝のネックレスを渡されるらしい。

(そういえばそんな宗教団体があったな。)

健介もちよつと前にその情報を持っていた。

余り気にしていなかったが・・・

とりあえず、健介の感は当った。

リアとミレー又暗殺未遂に関する事件に、何かあると言う感。

レクサス伯がヴァージル領乗っ取りに失敗した、その罰、いや、口封じとして始末された。

そう考えるのが一番判り易い。

そして、封じた者、封じられた者、どちらもテルバの信者。

これは偶然か？

そんな訳は無いだろう。

何らかの形で関係してくると思うのが筋だ。

そう考えていると、

「この町を早く出た方が良いです。」

リリスが若干の焦りを浮かべた顔で言う。

「なぜだ？」

「シーリア様がこの町で、金髪碧眼の男を包囲する為、町を封鎖するよう指示しました。」

リリスがちよっと苦笑して言う。

健介は思わず頭を抱えた。

（なんてこった。

頭を抱えている場合じゃない。）

健介はリリスに手を振ってその場を去った。

リアが本気で搜索を開始したのなら、本気で逃げないとやばい。

（さすがリア、搜索対象が町に入ったら確認したら、早速封鎖か・・・  
・なんちゅう行動の早さだ。）

逃げるだけならドラゴンに戻って飛んで逃げれば良いのだが、そんな事したら即ばれる。

宿の前まで来て、慌ててわき道に入った。

「うわ、もう宿がばれてる。」

宿の前にはハモの部下の兵士と思われる2人が、宿の主人と話している。

今は深夜、探査魔法で探されたらアウトだ。

昼間の様に人込みに紛れると言う芸は出来ない。

こうなれば手は1つしか残されていない。

リアの居る方向とは逆から、一気に強行突破することだ。

早速、探査魔法でリアらしい動きをしている者を探す。

リアの方が精度の高い探査魔法を使うから注意が必要だ。すると、1つの反応が急速に近付いてくる。

「やべー！」

健介はその反応の反対側へと全力で走り出した。

(網を張ってたか！)

その時には既に後方50メートル程の距離まで近付いていた。あの影はリアに間違いない。

健介の全力疾走にリアは徐々に引き離されていく。

この場合、深夜が健介の方に味方をしていた。ドラゴンの視力で暗闇でも目が見える健介と、ちょっと夜目が利く程度のリア。

時速60キロを超える速度での走るのに、この差は大きい。それでも、徐々にしか引き離せないのだから、リアは恐ろしい。

ほんの少しでも立ち止まったり、曲がったりしたら追いつかれてしまう。

そんな追走劇を演じている。

フード付のマントがバタバタとはためいて鬱陶しいが、取る訳にはいかない。

健介が影だけでリアと判別したように、マントを取れば後姿だけで健介とばれてしまう。

街道へ出たかったが、下手に曲がれないので、屋根にジャンプして屋根伝いに真っ直ぐ走っている。

近くの森に入ってしまった。

森の方が暗いので、丁度良いかもしれない。

闇に紛れて木の間に縫うように走る。

遅れてリアの足音が聞こえて来る。

(ぬう、リア、敵に回すと厄介だな・・・)

健介はちょっと焦っていた。

森の中では木を避けるのがリアの方が上手いらしく、徐々に差を縮められて居る。

しかし、運良く森を抜けて広々とした草原に出た。

さらに、行く手にはどうやらお仕事らしい盗賊の方々。

ここはリアに任せて、逃げの一手だ。

健介は盗賊の側を通り、近い男に裏拳を叩き込んで走り去った。裏拳を貰った男はそのまま引っくり返って失神した。

案の定、リアはお仕事中の盗賊のところに立ち止まった。

健介は探査魔法の反応だけでそれを確認して振り返りもせず逃げ去った。

### 第33話 テルバ

リアはイライラと屋敷の自室の中で歩き回っていた。あの男、金髪なのは判ったが、碧眼かどうかは判らなかった。しかし、確かに双剣を腰に下げていた。間違いない。

リアが探査魔法で探し当て、一気に近付くつもりだったのに逃げられた。もう少しだったのに・・・

「ふふふ、相当な恥ずかしがり屋なのね・・・でも、次は逃がさないわよ」

不敵な笑みを浮かべ、エンドーラ並みに燃えるリアだった。

リアの正直な所、驚きと妙な懐かしさを感じていた。

自分の実力を過信していた訳ではないが、自分を振り切った金髪の男に驚きを禁じえなかった。

人間相手に速度で負けた事など一度も無かったのに。

それに、あの金髪の男の気配に、何か懐かしさを感じていたのだ。それもあって、町の外の森の中を抜けたところまで、深追いしてしまった。

そこにいた盗賊のお陰で、それ以上追う事が出来なくなってしまうが。

例のアクセサリーの件については、ハモに調べさせていた。

テルバについて、その人脈について。

ついでに、エンドーラとクリンにもその情報を伝えるように指示した。

エンドーラと夫のジオレはオルセイを介して暗殺されそうになつたし、何かの因縁があるかもしれない。

クリンに関しては軍内部のテルバの浸透状況を情報部に調べさせる必要がある。

貴族間の戦争なら、シーリアの戦力で十分な抑止力になるし対処も可能だ。

だが、王国軍となると話は別である。

兵力がまるで違うから、王国軍を丸め込まればシーリアの軍など相手にならない。

ギルメルへの手紙の中で、テルバについて記述しておく。

ギルメルは信用できる人間だし、パグルガント公爵家は情報網もしつかりしてそうだ。

ギルメル経由で調査をお願いする。

パグルガント家にしても、妙な宗教の台等は良くは思っていないだろう。

その影響で貴族間戦争が起きたとなれば、パグルガント公爵家の門閥の方針に反する。

リアは打てる手は打って、いつもの政務に戻った。

王都にある宿に健介はいた。

リアに追われて振り切った後、そのまま王都へと向かったのだ。変装すれば何時でもヴァージル領には戻れる。

リアほど感のいい奴はそうは居ないから、簡単な変装で十分間に合う。

今は王都に居るであろう、テルバの組織に関する調査をするつもりだった。

その辺りはリアが手を回しているのは判っているが、じかに見る感触も重要だ。

人伝では読み取れない事もある。

まずは町中での噂から入る。

噂と言うのも侮れないものだ。

尾ひれが付いている場合もあるが、事実が含まれている場合も多く、十分参考になる。

その噂の裏付け調査の過程で、更に他の噂や、思わぬ情報を得たりする事もある。

思ったとおり、テルバの噂はそう悪いものではなかった。

悪い噂が流れれば、信者は増えない。

だが、チラホラと信者とその家族の間で問題が起きているという噂があった。

カルト教団の報道で良く耳にするのと同じ内容だ。

入団した家族に会わせる、金を返せ、と言っやつだ。

報道機関など無いから、そう言う噂が少しある程度で、実際はどうなのか判らない。

情報確認の為、テルバの信者が集まる家や宿を見て回る。

中に入る訳にはいかないが、外から見える雰囲気だけでも思っ



見ていた。

家や宿の周囲には見張りが居り、人の出入りを監視していた。ざっと見たところ、人の出入りは信者の幹部らしき者しか居らず、一般信者は見かけられなかった。

（信者を閉じ込めて管理するパターンの奴か？）

カルト集団では信者を外に出す事を禁じる事が多いと聞いた事がある。

カルト集団の表向き理由は様々だが、心理学者の意見では外の情報を遮断してマインドコントロールをし易くする為と言っていたはずだ。

信者を部屋に閉じ込めて教えだの、呪文だのを延々と聞かせたり唱えさせたりするのだと言う。

テルバでそう言う事が行われているかどうかは判らないが。

次は幹部らしい者を尾行し、テルバの中枢の連中を探す事にした。さすがに簡単には見つからなかったが、見つけることは出来た。

健介が尾行していた者達は幹部と言うより、各施設の管理をしている者達らしかった。

その者達は、定期的に幹部の下へ行っていたのだが、尾行対策をされていて何度かまかれてしまっていた。

だが、探査魔法を交えて注意深く尾行をしていれば、何度もまかれるような事は無い。

見つけた場所は、意外と言うか何と言うか、王都の貴族の邸宅に間借りしてる様だった。

無論、その貴族も信者であるらしい。

その邸宅の庭には、ちよっと過剰とも言える警護の兵士が見えていた。

探査魔法では中にも兵士らしい集団が居る事が判った。  
リアほど細かく判らないが、少なくとも10人以上はいる。

探査魔法でも使用人で無い事は、その動きで判る。  
一般的な貴族の使用人は謂わばプロであり、無駄な動きはしない。  
待機する時も、意味も無く彼方此方歩き回ったりしないのだ。  
それに、部屋の出入りや廊下の移動の仕方は、使用人の作法とでも  
言うものか、使用人特有のものがある。  
貴族の邸宅を幾つも出入りしていなければ、なかなか判らない違い  
だ。

健介は以前、リアへ暗殺者を放った貴族達を突き止めて、逆に暗殺  
をしていた事がある。

その際に、今回の様に探査魔法で様子を伺っていたので、使用人の  
動作パターンが大体判るのだ。

そして、使用人でもなく、兵士でもない者を特定する事も、数日  
掛ければ判る。

恐らくそれが、テルバの主教とこの屋敷の主の貴族なのだろう。

健介はとりあえず、その場を去った。  
勢いで行動しては足元を掬われる。

より詳しい情報を得る為に、良く使う情報屋を訪ねる事にした。  
定期的に主要な情報を送ってくれている。

王都の片隅にある裏通りに入り、とあるアパートの地下へと入っ  
た。

要所に見張りが居るが健介は顔パスだ。  
お得意様なのである。

「ようミコトの旦那、久しぶりじゃないか。」

地下室の1つに入ると、陽気な声が健介に掛かる。

「ああ、久しぶりだな、ギルス。」

健介は応えて、ギルスと挨拶を交わす。

ギルスは情報屋組織のボスである。  
表立って活動しないのは貴族の情報も扱う為、目を付けられているからだ。

情報料は決して安くは無いが、良い仕事をしてくれる。

「調べて欲しい事があるんだが。」

健介が切り出す。

「テルバのことか？」

ギルスがニヤツと笑った。

健介は少し驚いた。

「それを知ってると言う事は、既に情報を得ていると言う事か？」

ギルスは健介がシーリアを影から守っている事を知っている数少ない者の1人だ。

ギルスとその配下の者達はプロ意識が強く、信頼できる者達だから、健介の事が彼らから漏れる事は考えなくて良かった。

無論、健介が彼らの仲間を救い出したと言う貸しを作っている事もあるが。

「あんたはお得意様だからな。」

「いくらだ？」

ギルスが金額を提示する。

「判った。」

明日、金を持って出直そう。」

健介が部屋を出ようとすると、

「なんだ、一杯付き合ってくれないのか？」

「いい酒が入ったんだ。」

ギルスがグラスを2つと酒瓶を持って、小さなテーブルについた。

「悪いな、ギルス。」

「まだ用事があるんだ。」

健介とギルスは以前は時々一緒に飲む仲だった。

「そうか、じゃあこいつはまた今度一緒に飲もうぜ？」

「ああ、この件が終わるまで取っとしてくれ。」

健介は地下を出て、クリンとフィに会う手はずを整えた。

クリン宛に手紙を書いて、雇い使者を使って届けた。

いくらギルスでも軍内部の情報を引き出すのは難しい。

軍方面の情報は、クリンとフィに聞く事にした。

恐らく、リアからテルバについての報告は行っているはずだから、何か情報が得られているかもしれない。

翌日、朝から金をもってギルスの元へと向かった。

健介は普段金を余り持ち歩かないが、王都とヴァージル領には金を隠してあった。

金の出所は、以前暗殺した貴族である。行きがけの駄賃で貰っておいたのだ。

そのお陰で、暗殺ではなく強盗として扱われたりしていたので、一石二鳥だった。

その金を活動資金にしている。

「ほれ、金貨10枚だ。」

健介がギルスとの間にあるテーブルに、金貨の入った皮袋を置いた。

「おお、いつもながら良い払いっぷりだな。

これが報告書だ。」

ギルスが金貨の袋の隣に報告書の束を置く。

健介がギルスの情報屋を雇う理由の1つがこれだ。

情報をしっかりと報告書にまとめてくれる事だ。

元々現代人の健介には、口頭で彼は言われても腹が立つだけだった。金払ってるんだから、書面にしろと言ってやりたかった。

しかし、ギルスは言わなくても報告書を作ってくれるし、報告の中身は充実している。

中身が充実しているから、報告書を書いているのかもしれないが、

高い金を払う価値があった。

まあ、金の大半は諜報員の保険金みたいなものだろうが。

健介は報告書を手にとつて、中身を確認する。

テルバの主要幹部の一覧から、数日前までの使用施設一覧。推定的一般信者数。

テルバの噂の一覧と、その確認された内容。

信者が行っている修行の内容など、多岐に渡る。

そして、関わりのある貴族の一覧と、その会話の一部。

貴族の一覧の中に、レクサス伯リムトの名もあった。

健介が来る前から、かなり力を入れて調査していたようだ。

昨日の待ち構えていた様子から察するに、テルバがヴァージル領を狙っているのに気付いて、いずれ健介が情報を買いに来る事を見越して調べていたのだろう。

ご苦勞な事だ。

「これは・・・」

健介は報告書にあるテルバの履歴の部分を見て声を失う。

「どうした？」

ギルスが不信気に問う。

「このテルバの履歴の部分だ。」

健介が示した左記にある報告は、約13年ほど前の記述。

「ああ、それはテルバの以前の幹部に話を聞いたんだ。」

間違いないよ。

その幹部はもう暗殺されたがね。」

ギルスが事も無げに言う。

健介はその報告を何度も読んで、思考を整理した。

そこに書かれているのは、当時、フィレイを誘拐して転生魔法でフィレイに乗り移ろうとしたテルバのボスト、その顛末だった。まさか、こんなところで犯人一味を見つけるとは。

だが、当時の主犯格は既に死んでいるらしい。

他の共犯達も、この13年の間に1人また1人と死んでおり、最後の生き残りが今のテルバの主教でナナロムという事だ。

小さな宗教組織の中で、覇権争いでもあったのか？

良く判らないが、リアと健介はテルバとは因縁深い間柄らしい。

健介は気を取り直して席を立った。

「いつもながら十分な情報量だ。

助かるよ。」

「そう言ってくれるのは旦那だけだ。」

ギルスが泣き真似をする。

「嘘付け！」

健介はギルスに結構な顧客がいることは知っている。

裏社会では、そこそこの有名な情報屋だ。

「それじゃ、次は飲みに来る。」

「ああ、楽しみにしてる。」

健介は地下を出て、次の予定であるクリンとフィとの待ち合わせの店に向かった。

クリンとフィはオープンカフェのテーブルで茶を飲んでいた。軍服姿でオープンカフェに居るので、一種異様で目立っていた。

「お前らな・・・」

2人の前に立って文句を言おうとしたが諦めた。

健介の方は念の為、ギルスに会いに行く段階から変装しているので、大きな問題は無い。

端から見れば、2人の軍人が情報屋と会っている、そんな感じにしか見えないだろう。

まあ、それもあながち間違っては居ないが。

「しょうが無いでしょ。」

「こっちだって忙しいのだから。」

クリンが少し赤面して口を尖らせた。

少しは目立っているのが不味いと判っているらしい。

クリンと健介が中心に話し合い、フィはそれを聞いていた。

クリンの話では、リアからの情報で軍の情報部を動かし、軍内部に居るテルバの関係者を洗い出している最中だという。

既に入級指揮官から数人見つかっており、慌しい雰囲気になっているという。



ただ、基本的には宗教は禁止している訳ではないし、見つけただけならそう大きな問題にはならない筈だったのだ。しかし、見つかった者達は何故か暴れ出した。見つけた者を攻撃し、証拠隠滅を図り、部下に命じて反乱を起そうとした。

まるで理性的な姿ではなかった。

「そうか。」

何か薬でもやってるのか？」

「判らないわ。」

「それも調査中。」

健介は魔法の可能性も考えたが、10年以上この世界で生きてきて、精神に影響を与える魔法など転生魔法や念話魔法程度しか知らなかった。

しかし、転生魔法は影響を与えらるるといっても、移動させるだけなのだ。

念話についても同じである。

思考を変えるような細かい制御など出来るとは思えない。

いや、出来ていないから、暴れ出したのか？

「そつちの状況は判った。」

これを読んで、クリンの判断で必要な情報を情報部へ伝えてくれ。」

健介はギルスから買った報告書をクリンに渡す。

「無論、情報源は秘密だぞ？」

「ええ、判ってる。」

クリンが内容を読んで行き、途中、目を瞠る。

「面白い情報があるわね。」

クリンが控えめに言う。

「だろ？」

テルバとは妙な因縁があるようだ。

その部分に関しては、秘密で頼むよ。」

「ええ、判ってる。」

ところで、ミコト。

その件で重要な話があるの。」

クリンが改まって言う。

健介は無言で頷いて促す。

「あのね、フィレイの中の人らしい人が会いに来たの。」

クリンは健介の様子を伺うように言う。

「……本物？」

健介はしばし思考停止して問う。

悪戯でそんな事を言う奴はいないだろうが、確認はすべきだ。

「フィに確認させたんだけど、多分本物だって。」

クリンがフィを見て言う。

フィの中にはドラゴンのランが居るが、ランもフィの子供の頃の記憶はもっている。

その記憶を照らし合わせれば、本人かどうかを判定できる。

「フィ、相手に子供の時の記憶を言わせて確認したのか？」

「うん、相手に言わせて、私の記憶と相違ないことを確認したわ。」

健介はフィの答えを訊いて考える。

間違いない。

それにしても、今の今まで如何していたのか？

「今何処に居る？」

「王都の宿に泊まってもらってる。」

クリンが答える。

フィとクリンに案内してもらって、その人物に会いに行く事にした。

小さな宿に着くと、クリンが宿に入ってその人物を連れて来た。

「あ、始めまして。

エルナと言います。」

エルナと自己紹介した熟年のおばさん・・・

クリンを見ると、苦笑して頷いている。

どうやら彼女の中身がフィレイらしい。

場所を移して、エルナ（フィレイ）から事情を聞いた。あの時、転生魔法で精神と魂が移動されて目が覚めると、エルナの身体の中に居た。

エルナは小さな子供を持った母であり、父親は居らず、長旅をしてヴァージル領へと行く事は出来なかった。

仕方なくエルナの子を頑張つて育て、子供が嫁いで、ようやく旅をしてここまで来たと言う事だ。

「うむ、それは大変だったねえ。」

健介は自分は大分マシだったと思えた。

子供の精神のまま大人になって、子供を育てるとは……

「ええ、でもそれなりに幸せではありました。」

エルナは恥ずかしげに微笑んだ。

「事情は理解したけど、直に身体の交換と言う訳には行かない。判っていると思うけど、あれは禁忌の魔法だからね。」

健介が警告する。

流れ上、健介が主導で話を進めているが、エルナは健介を如何思っているのか？

フィとクリンの知り合いだから、信用しているのか。

「はい、私も無理に身体を返せとは言いません。」

ただ、私の身体がどうなっているのか、それを知りたかったんです。」

エルナは哀愁を漂わせている。

「エルナ、身体を戻せないと言ってる訳じゃない。準備に時間が掛かると言ってるんだ。」

まずはエルナ、ヴァージル領へと移動しないとイケない。」

「ヴァージル領ですか？」

「こんな場合の為に、密かに準備はしてあるんだ。」

「じゃあ、ヴァージル領に行けば元の身体に戻れるんですね？」

エルナが嬉しそうに言って、ファイを見る。

ファイは笑顔を見せるが引きつっていた。

仕方ない、ここは本来の持ち主に返すべきだろう。

「向うへ行っても直と言う訳には行かないけどね。」

とにかく、ヴァージル領へと向かおう。」

健介はエルナに荷物を取りに行かせ、クリンとファイに言う。

「なるべく早く休暇を取って、ヴァージル領へと来てくれ。」

クリン、事情はクリンからリアに手紙を出して知らせてくれ。」

健介はエルナをヴァージル領へと送って、後はクリンとファイとリアに任せるつもりだった。

転生魔法はリアだけでも出来る。

クリンがサポートすれば問題なかるう。

健介はテルバについて調べ事など色々やる事がある。

クリンとフィと別れ、エルナと合流して、ヴァージル領へと向かった。

テルバの主教ナナロムは、軍に作った人脈が断たれていく事に何の痛痒も感じていなかった。

「あつちは困だ。」

ナナロムは笑った。

ナナロムの魔手の本当の標的は軍務省にあった。

軍の元締めとも言える軍務省。

王族を直接狙うのはリスクが大きい為、軍務省の長官を狙っていたのだ。

さすがに、軍務省となると情報部も手出しが難しい。

その長官は既にナナロムの術中に嵌って、ナナロムの人形に過ぎない。

ナナロムの策を実行に移す時が来た。

軍務省長官は特務部隊に対し、ヴァージル伯シーリアの捕縛、または、止む得ない場合は討伐を命じた。

理由はドラゴンを使役し、それが魔族との繋がりを示すと言つ理由だ。

無論、その命令を納得するものなど誰も居ない。

皆おかしいとは思いつつも、命令には逆らえない。

特務部隊の管理官は、軍務省の命令に対し、グレグセン部隊を派遣する事にした。

グレグセンは先の武闘大会でシーリアと顔見知りであり、説得するのに適任である。

もしもの場合にも、シーリアに対抗しうる手練でもある。

フィレイとクリンについては、逆にシーリアの味方になる可能性もある為、今回は出撃を禁止させる事にする。

だが、管理官の通達の前日、既にクリンとフィレイは休暇を取って居なくなっていた。

グレグセン部隊は準備を整えて、静かにヴァージル領へと向かった。

同時に、ナナロムの私兵がその後ろに従った。

傭兵として、グレグセン部隊の補助と言う名目で付いて行くが、シーリアが捕縛された場合にはその暗殺が任務であった。

戦闘時、或は、逃走時には逸早くシーリアを討ち取る為に動く事になる。

ナナロム自身も私兵と一緒にヴァージル領へと向かっていた。

上手く前領主ヘインツに会う事が出来れば、ナナロムの力で取り入る事が出来る可能性がある。

それが駄目でも、既に幾つかの貴族を抱きこんでおり、養子の為の駒もある。

ヴァージル領に力を及ぼせる数少ない貴族だ。

他の養子候補はシーリアほど暗殺が困難と言う事は無いだろうから、問題にはならないはずだ。

駒の養子がヴァージル伯の爵位を継げば、ヘインツとミレー又は殺してしまえば良い。

後は如何にでも出来る。

「後は、最大の障害、シーリアを殺すだけだ。」

ナナロムはヴァージル領へ向かう馬車の中で、確認するように囁いた。

ヴァージル領ではクリンが用意した宿の大きな部屋で、儀式が終わろうとしていた。

エルナはおっかなびっくりと言う感じで、魔法陣の中で緊張して横たわっている。

その隣にフィ（ラン）が横たわっていた。

前日、クリンとフィがヴァージル領に到着し、エルナと会ってから直にリアへと引き合わせた。

その時には既にミコトの姿は無かった。

その後、クリンがヴァージル領にある一番大きな宿で部屋を取り、準備をしていたのだ。

リアが保管していた転生魔法の写しを持ってきて、儀式が始まった。

エルナはこれまで魔術の勉強をした事が無いらしく、不安げにしていた。

平凡な母親だった彼女がフィレイの身体に入ったら、一体どういう反応をするのか？

リアは意地悪く想像してしまった。

何事も無く儀式は終了した。

先に起きたのはやはりフィレイだった。

「あ、私の身体・・・」



フィレイは自分の手を見詰めて固まった。  
目が泳いで汗が流れる。

平凡な一児の母だった女性に、フィの軍人としての経験は刺激が強かったようだ。

まあ、無理も無い事だ。

誰かが自分の身体を使って戦争に行き、相手を殺している経験が、記憶があるのだ。

ビデオで見るのとは訳が違う。

健介にも経験がある。

今の身体、ドラゴンには人を食い殺した記憶があるのだから。

健介はその点、大して問題は無かった。

例えば、飢饉に遭って餓死した人間以外に食べるものが無ければ、健介は躊躇無くその死体を食べるだろう。

現実を受け入れ、自分に絶対必要な事なら躊躇はしない。

そう言うことが出来る精神力をもった人間、それが健介だった。

現実を受け入れる事については、こつちの世界に来てから、磨きが掛かったと言って良い。

フィレイが固まっている内に、エレナ（ラン）が目覚めた。

「ああ、これが母親の身体か。」

ランの第一声はこれだった。

リアとクリンは苦笑する。

ランの方は気にする必要は無さそうだった。

「フィレイ？」

大丈夫？」

クリンが声を掛ける。

「え？

ええ、なんとか。」

クリンの声にはっと顔を上げるフィレイ。

その後、リアは直に屋敷へと戻り、部屋の片付けはクリン達がやった。

フィレイはまだ混乱しているようで、その日は元の宿へ戻って休ませた。

リアが屋敷に帰ると、ハモが待ち構えていて報告してきた。

「王都から軍がこちらへやって来るようです。」

目的はシーリア様の捕縛、または、討伐と言つ事です。」

「いつここに到着する？」

「はい、恐らく後4日程と思われます。」

「そう、テルバの仕業かしら？」

随分速いわね。」

リアは身の振り方を考えねばならなかった。

「申し訳ありません。」

「こつも早く手を打って来るとは・・・」

八モは悔しそうに俯いた。

「気にしないで、相手が上手だっただけよ。

これから如何するか考えましょう。」

そうは言っても、リアの打てる手はあまり無い。

王国軍が出てきたと言う事は、戦って勝てる相手では無いと言う事だ。

もし勝てたとしても、それは反逆者として各貴族からも狙われる事になる。

つまり、ヴァーシル領の事を考えれば、素直に投降するか、逃げるしかないのだ。

「とにかく、もう少し詳しい情報が欲しいわ。」

リアは八モに情報収集を命じた。

### 第34話 逃走

健介はエルナをヴァーシル領の宿に届けた後、王都へと引き返していた。

そして、その途中、王国軍のグレグセン部隊を発見した。進路は当然ヴァーシル領だと言う事は判った。

森に入ってやり過ごし、後続に傭兵らしき集団が行軍しているのを発見した。

（おかしい。

あれはグレグセン、と言う事は王国軍の特務部隊のはずだ。

なのに何故傭兵がいる？）

特務部隊は通常傭兵と行動を共にする事は無い。

特に今は平時であり、必要なら他の部隊を連れて行けば良いはずで、傭兵を連れて行く理由が無い。

なんにしても、ヴァーシル領へと向かう軍をそのまま見過ごす訳には行かない。

十分距離を開けて付いていった。

傭兵の隊列の中に、馬車が1台ある。

行軍中の軍の中に馬車など、普通なら考えられない。物資輸送や怪我人輸送用の荷馬車なら判るが、あれは如何見ても貴族が乗る乗用馬車だ。

途中、野営をする時に、馬車から男が出てきた。

そのまま用意されたテントへと入って言ったが、男の特徴は見て取れた。

ドラゴンの目は下手な望遠鏡よりも良く見える。

（あれはテルバの主教ナナロムか？）

情報屋ギルスの報告書にあったテルバ主教の特徴に一致していた。服装や装飾品、背丈、顔の特徴、髪の色や肌の色など。

断言は出来ないが、そう考えれば辻褄が合う。

あの傭兵はナナロムの私兵であるなら、ナナロム自体は馬車で移動と言つのも頷ける。

そして、先行している王国軍は、ナナロムの謀略によって踊らされ、利用されている。

（一体どんな手を使ったのか？

それにしても、行動が早い。）

健介も唸った。

これでは打つ手が限られてしまう。

だが、ここは健介が打つ手を選択できる場ではない。

リアが如何動くかを読まなければ、リアの邪魔になってしまう。

（考える、リアの考える選択肢を、リアの選択を。）

健介は考える。

恐らく、王国軍を動かす理由はリア本人にあるはずだ。

ヘインツやミレーヌは取り立てて王国軍を動かすような理由を挙げ  
る「何か」が無い。

リアには以前ドラゴンを使役していたと言う事実があり、それを如

何にかすればリアを捕縛する理由に繋げられる可能性はある。他にも何か言いがかりを付けられそうな事は幾つかある。要するに、口実さえあれば良いのだ。

そうなるとリアが投降するか、逃亡する事で、ヴァージル領は安全を確保する事が出来る。

リアが逃亡すれば、習慣的に爵位は元の領主ヘインツへ戻る事になる。

王国軍がヴァージル領を攻撃する理由は無くなるのだ。

(と言う事は、あの傭兵達の存在理由はそこか。)

健介はテルバの私兵らしき傭兵の目的が、あくまでシーリアの殺害にあると踏んだ。

それでもなければ、居る理由が無いのだ。

健介は行動を開始した。

王国軍が町に入った時には、リアは完全武装して旅の準備をしていた。

「お母様、必ず帰りますから。

お元気で。」

「シーリア」

リアとミレーヌは抱き合って別れた。

ヘインツはここには居ない。

ミュール領へ出かけていて、恐らく、今頃急いで戻っている頃だろう。

リアの選択は逃亡である。

しかし、「逃亡したと見せかけた」などと思われないように、敵の目の前で逃亡する。

そうしないと、ヴァージル領への攻撃の口実を与える可能性があるのだ。

相手の指揮官はグREGセンだから、そんな横暴な事はしないだろうが、裏で糸を引いている者に隙を与えてはいけない。

リアは屋敷を出て、大通りへ出て王国軍が進軍してくるのを待った。

そこを通るはずだ。

隣にはリリスは居ない。

人が多ければ見つかり易い、後で合流した方が逃げ易いと判断したのだ。

それに、ミレーヌの護衛として残した方が、リアは安心できた。

しばらく待つと、グREGセンを先頭に綺麗な隊列で行軍してきたグREGセンと目が合い、互いを確認した。

リアはゆっくりと後ろを向いて、全速で逃げ出した。

後ろからグREGセンの号令が聞こえる。

「シーリア伯だ！

追え！

捕らえよ！」

そして、追跡劇が始まった。

リアがチラツと後ろを見たが、グレグセン自身は追って来ていない。

リアにとっては2重に好都合だ。

グレグセンに追われれば逃げ切れる可能性が低くなる。

グレグセンが残っているとと言う事は、ヴァージル領内で軍が無用な混乱を起す事は無いだろう。

グレグセンは軍規を守るタイプだし、略奪などをしようものなら厳罰に処すだろう。

これは戦争では無いのだから。

リアは直に町を出て森に入った。

健介は待っていた。

リアが逃走すれば、必ずあの場所を通る。

そして、追っ手が通る場所も予測できる。

健介にはリアの行動が、手に取る様に判った。

一時は健介がリアだったのだ、考えの道筋が大体判る。

（きつとリアの事だから、王国軍が町に入って自分を発見するまで待ってるんだらうな。）

そう思って苦笑した。

やれやれだ。

その後の逃走経路も判る。

そして、そう言うリアの逃走を阻み、暗殺しようとする者達の行動も読めた。



地形的にそう言う行動しか取れないと言った方が正しい。

健介はただ、その暗殺として来たナナロムの私兵達を効率良く迎撃できる場所に陣取っていた。

恐らく、王国軍は深追いしないから、放って置いて良い。リアの速度について行けないだろう。

待っていると、リアの疾走する姿が遠くに見えた。

そして、それを脇から阻もうと突進する王国軍とは違う武装のナナロムの私兵達。

距離は約1・2キロ。

(こうなつては仕方無いよな。)

健介も人型で何十人もの魔術戦士を相手に出来ない。

ドラゴン化するしかなかった。

そして、リミッターを外し、両手と両足の爪を地面に深く刺して身体を固定した。

ブレスの第2形態、砲撃の体勢だ。

口を大きくけると、その口の前に魔法陣が8枚現れる。

口の前に膨大な魔力が集中していき、私兵集団に向けて発射した。

魔法陣を通る度に魔力は収束され、どんどん細くなっていく。

それはレーザーの様に私兵集団を薙ぎ払い、超高熱の光線を受けた者は爆発四散して、焼け爛れ焦げたバラバラの死体にした。

1撃目が終わると、後続の私兵集団が現れ、その後ろに馬車が見えた。

私兵集団は仲間が殺された現場を見たものの、どこから攻撃されたのか判らないようだった。

(ナナロムか、丁度良い。)

この借りは返させてもらう！)

健介はまた口を空ける。

今度は魔法陣が3枚現れた。

馬車の周辺を目標として、発射する。

今度は魔力が球状の状態で圧縮されて射出された。

馬車の近くに着弾し、閃光と共に弾けた。

地響きを伴う轟音と共に、周囲30メートルが高温に包まれて吹き飛んだ。

健介の元にも一瞬遅れて轟音が聞こえてきた。

その場には人の破片も馬車の破片すらない。

健介は爪を地面から引き抜いた。

空に飛びあがり、リアが逃走した方へと飛ぶ。

上空からリアが逃走している姿を発見し、その後方に王国軍の兵士が数人、追いついてるのが見えた。

リアの速度についていけるとは、グレグセンの配下には良い人材が居る。

健介は急降下して追手の魔術戦士の前で魔法の爆発を起して停止させた。

魔術戦士達は空からの襲撃に驚き、散開して木の間に隠れた。

健介は魔術戦士達を無視してそのまま飛び、リアの上を速度を合わせる様に飛んだ。

「乗れ！」

健介が叫ぶ。

リアは銀色のドラゴンを見て呆気にとられて、転びそうになって、体勢を整えてから飛び乗った。

健介は翼に魔力を込めて速度を上げて上昇した。

後方の地面の上にリアを追っていた魔術戦士達が、ドラゴンとそれに乗ったリアを見上げて立ち尽くしていた。

リアは息を整えながら、混乱する頭と気持ちを整理していた。自分が座っているのは、ゴツゴツしたドラゴンの背中。

先程まで銀色だった鱗が、黒っぽい緑に戻った。

こんな事が出来るドラゴンは、リアの知る限り1匹しか居ない。今、ミコトの背中にいるのだ。

「ミコト？」

「なんだ？」

リアは暢気な返答に、思わずドラゴンの背中を素手で叩いた。

「あいた！」

リアは手をさする。

「何してんだ？」

健介は暢気に訊く。

健介は痛くも痒くもない。

「何してんだ、じゃ無いわよ！」

「何処行つてたのよ?!」

リアが喚く。

健介は笑って誤魔化する。

「何笑つてんのよお！」

リアが泣きだ出した。

堅い背中をぺちぺち叩いている。

「わ、な、泣くなよ。」

健介は戸惑いつつ、山の山腹にある開けた場所に下りた。

もう十分に距離は開けてある。

人では追跡は不可能だ。

「リア、降りて？」

健介が背中から降りようとしないうリアに、恐る恐る言つて見る。

「嫌よ！」

リアが即答した。

しばらく、腹ばいになっているドラゴンの背中で泣きじゃくる鏡を着た女性と言う、珍妙な光景が見られた。

一頻り泣いて気が済んだのか、ミコトの背中から降りたリアはまだ不機嫌だった。

健介は人型になって、リアの機嫌を取ることにした。

「リア、そんなに怒らないでくれよ。

リアを騙してた訳じゃないんだ。」

「騙してたじゃない！」

リアが即座に切り替えしてきた。

「い、いや、その、な？」

健介はリアの剣幕に、思わずシドロモドロになってしまつた。女心と言つのが判っていなかった。

「なあ、リア。

俺が近くに居ると、軍の追及が困つた事になっていただろ？ ショミルの戦いで力を見せてしまったし。」

健介の言葉に、リアが背を向けた。

「だからな、俺は影からお前を守る事にしたんだ。

判ってくれ。」

「知らせてくれたっていいじゃない。」

リアがボソツと言う。

「まあ、そう思うだろうけど、リアも知っていたら俺と会うように

なつてただらう？

そう言う所から、知られる可能性があるからな。」

健介は何とか誤魔化そうとする。

リアは健介を胡乱気に見詰め、口を尖らせる。

しばらくして、溜息をついたリアは、健介に抱きついた。

「次は許さないからね！」

健介の胸に顔を付けて抗議するように言った。

翌日、落ち着いたリアを背中に乗せて、再び空へ飛び上がる。

ペステンからかなり離れた山の中腹から、さらに山脈の奥の方へと飛んでいる。

「何処行くの？」

リアは綺麗な山々の景色に目を細める。

「さあ、どうせしばらく帰れないんだから、旅でもしよう。」

健介は暢気に答える。

今帰っても、リアは手配されているから、屋敷には戻れないだらう。

クリンとエンドーラが如何にかしてくると思うが・・・ちょっと心許ないか。

フィはどうなつたらうか・・・

ああ、エルナ（ラン）はどうなつたかな・・・

色々心配事を置き去りにしていた。

「そうね。」

「少しくらい旅をして羽を伸ばそうかしら。」

リアもその気になったようだ。

健介は山脈を縫って飛行し、獲物を見つけ捕まえて食料にした。この辺りは人影も無く、前人未踏の様な場所で動物が多いし、野生の果物や野草などがあって食料には事欠かない。ドラゴンである健介が居れば、猛獣や魔物に襲われる事もない。

「ああ、久しぶりにのんびり出来るわ。」

「でも、お父様とお母様、心配してるわよね。」

リアも少し心配そうだ。

「今は気にしても仕方ないさ。」

「どっち道戻れないのだからな。」

健介が軽く言っただけで慰める。

健介自身、戻れぬ道を進んでいるのだ。

考えても仕方ない事はある。

数日、山々を飛び回っていた。

この山脈の深い場所には人里も無く、人目を憚る事無く過せた。

ある日、山間を飛んでいると崖の下の方にある岩棚の所に人影を

発見した。

「人だ」

リアに教える。

その人もドラゴンに気付いているようだが、怯えた様子は無い。健介はゆっくりと降りていき、その岩棚の所まで降下した。岩棚の奥には洞窟の穴が空いて居り、その人はそこから出て来たのだらう。

「こんにちはわ」

リアが健介の背中から顔を出して挨拶する。

「こんにちはわ」

その人も挨拶を返してきた。  
やはりドラゴンに怯える様子は無い。

「中に寄って行きませんか？」

その人は誘ってきた。

何とも怪しい。  
だが、何か聞く前にその人は洞窟に入ってしまう。

「どうする？」

リアが訊くが、健介の答えは決まっていた。



ドラゴンの巨体を岩棚に下ろし、リアを背中から下ろして人型に戻った。

2人でさっきの人を追いかけて、洞窟へと入る。中でさっきの人が待っていた。

「ようこそ、私はソナック。」

「私はシーリアよ。」

「ミコトだ。」

互いに名乗りあつて、ソナックの案内で洞窟の奥へと向かう。健介はすぐに気付いた。

その洞窟には人の手が加わっている事が。

そして、この世界では見たことの無い、高い文明を感じさせる魔法器具があることが。

いつの間にか、洞窟の通路は四角い通路となっていた。

案内された場所は、健介には社員食堂に見えた。或は学食の食堂か。

そんな雰囲気のところだった。

そこにはソナック以外の人も居り、驚いたように健介達を見ていたが、ソナックが手を振るとそそくさと立ち去った。

「ここはなんだだ？」

「あなたは何者だ？」

健介は無遠慮に尋ねた。

「私は、私達は約1万年前の魔族の生き残りだ。」

そして、ここは我々の研究施設だ。」

ソナツクは健介の質問を待っていたかのように答えた。健介とリアは絶句した。

ソナツクは健介とリアの反応を楽しそうに見ているが、嘘をついているような感じではない。

「1万年ってどう言う事だ？」

健介が先に立ち直り、その途方も無い時間を問質す。

「言葉どおりだ。」

ここに居る研究者の大半は1万年の時を生きてきたのだ。身体は交換しているがね。」

健介とリアは再び絶句する。

身体を交換と言う事は、転生魔法で精神と魂を入れ替えていると言う事か？

それで生きながらえていると。

「私の話を聞くかね？」

ソナツクがリアと健介を見る。

長い時を生きた魔族の始祖ともいえる者かもしれないソナツク。そう問われて否は無い。

リアと健介は頷いた。

ソナックは近くのテーブルについて、リアと健介にも席に着くように促した。

リアと健介はそれに従い、テーブルについた。

給仕らしい者が、ソナックと健介とリアの前に飲み物を置いていった。

香ばしい香りが漂ってくる。

「今からほぼ1万年前の事だ。」

ソナックは目を閉じて話し始めた。

当時、人間と魔族は地上で一緒に暮らしていた。

その当時はまだ魔族という呼び名も無く、普通に人として暮らしていたのだ。

魔族とは人がより強靱な肉体と、より高い魔力と、より高い知性を求めた実験の結果だったから。

数世代が経つと実験の結果は理想に近い形へと変化していた。

病気に強く強靱な身体。

高い魔力とそれを制御できる素質。

それらを支える高い知性。

しかし、その理想的な肉体を持つ魔族が増え始めると、社会に歪みが生じた。

「まあ、要するに妬みだ。」

それ以前までは魔族は自らの身体を改造する、単なる物好きの集団と思われていただけだった。

しかし、それが成功すると周りの人間達はそれを妬み始めた。

魔族側も長い年月と多大な犠牲を払って手に入れた身体。

そう易々とその秘密を明かす事は無かった。

そして、1つの事件がきっかけになって、そこからは坂道を転がり落ちるように事態は悪化の一途を辿った。

その事件はとある町の、平凡な日常の中で起きた。

市場に買い物に来ていた魔族の夫婦が、途中で強盗に襲われた。

その強盗は普通の人間で、夫婦はそれを撃退した。

それが人間同士、或は、魔族同士の事件なら、それで終わった事だろう。

しかし、強盗に及んだ人間は、自分こそが被害者だとして周りの人間を巻き込んで夫婦を責めた。

そして、彼らは人間では無いと、大声で主張したのだ。

「私はその場にいた訳ではないが、その当時の事を考えると頷ける事態だった。」

周囲の人間達も魔族を妬みを持っていた。

確かに、魔族は高い身体性能と知性のお陰で、上層階級の者達ばかりであったから。

魔族の中には、普通の人を見下す者もいた。

そう言う魔族が1人いるだけで、魔族そのものに対する反感が膨れ上がっていた。

夫婦は人間を見下すような事をする人物ではなかったが、その場の周囲の人間にそれが判る訳も無い。その場も悪かった。

そこには魔族に反感を持つ別の犯罪組織の者達が居て、周りに居る人達を扇動して夫婦に攻撃し始めた。そして、そこに集まっていた人達は、暴徒と化した。

「その夫婦は殺されてしまったよ。」

その夫婦だけでなく、周囲にいた魔族も巻き込まれた。

その事態を重く受け止めた魔族達の管理機関ヴォルスは、事態が沈静化するまで魔族を隔離する事にした。

魔族が抜けた人間社会は優秀な人材が抜けて麻痺し始めた。重要な位置に魔族が多数いたのだから当然の結果であり、予想できたことだった。

それでも、ヴォルスは夫婦の事件以降、魔族に対する傷害事件が多発し始めた事を理由に、魔族の隔離を強行していたのだ。

それも当然と言えば当然だろう。

ヴォルスとしては魔族の人々の安全を確保する義務があるのだ。

「しかしながら、結果から言うと魔族を完全に隔離しようとしたのは軽率だったのだ。」

普通の人々の世論も様々な意見が交錯していた。

魔族を妬むものしかない訳ではないのだ。

彼らは次の世代の人類の形であるはずではなかったのか？ と。

妬む者達は、自分達だけが置いていかれる事に納得できなかった。様々な思惑が絡み合った。

しかし、そんな混沌の中で、社会の上層部に冷静な「大人」が少なくなっていたのだ。

魔族を退避して隔離した為、その穴を埋める人材が必要だったが、全体的に上層部は人材不足だった為、不適合者が相対的に増えたのだ。

民衆に煽られて、子供のように感情的な判断を下す上層部の者達。

「結局は魔族は危険だとこじつけられてな・・・戦争が始まったのだ。」

戦争の切欠になった事件、人間側のヒステリックな軍事行動。人間の軍が魔族の隔離地域の1つを急襲したのだ。

結果、そこに住んでいた魔族、約1万5千の内、約7千人が虐殺された。

何故そこまで魔族が憎まれたのか、今もって不明だった。

1つ言える事は、影に魔族への反感を煽る組織的な集団がいる事は間違いなかった。

「我々は魔族の隔離を行う少し前から、地下都市の建設を始めていたのだ。」

それが各地にあるダンジョンだ。」

「ダンジョンが地下都市・・・」

リアが啞然とした表情で、しかし納得したように頷いた。健介はただ頷いた。

魔族を人間から守る為の隔離都市として建設したが、それはシエルトーとして使われるようになった。

各地の地上の施設から、安全の為に地下へと移住する事になった。

戦争初期の頃は、人間達の熱が冷めるまで待つ事になっていたのだが、それも限界に達した。

「この頃には既に我々は魔族と呼ばれるようになっていた。魔族と言う呼び名を聞けば、我々への見方が判るだろう。

少し前までは普通に一緒に暮らしていたはずなのに、1つの事件が発端で破滅へと突き進み始めた。」

魔族は地下都市を更に地下へと掘り進み、今のダンジョンの場所とは別の場所に、更に地下都市を築き始めた。

それが今でも魔族が住んでいる地下都市だ。それと同時に生物兵器として魔物を製造し、地上へと解き放った。

当時の魔族と人間の人口比率は1対1000くらいだった。いくら魔族でも普通に戦争してはただ虐殺されるだけ。

魔物の製造行為は当然の戦略だった。逆に人間達には魔物製造の魔術の知識が無く、魔物の製造は出来なかった。

地上は魔物の群れで混乱した。

しかし、初期の魔物は知性が低く、所謂雑魚であり、所詮時間稼ぎに過ぎなかった。

それでも、魔物の物量に押されて人間の軍は一時後退した。

耐久力を追求したメタトロンや、戦闘力を追求したハルカントなど、様々な魔物を送り出した。

しかし、所詮は魔物、人間の軍のような統率された動きは出来ず、各地で劣勢を強いられるようになった。

そして、最終的に製作されたのがドラゴンだ。

「ドラゴンには様々な兵器を仕込んであった。そのお陰で、しばらくの間は魔族側に時間を稼ぐ事が出来た。」

ドラゴンはその圧倒的な火力で、地上の人間とその町を焼き払った。

ドラゴンも無事だった訳ではない。圧倒的な火力を使ったドラゴンは魔力を使い果たし、一時的に戦闘力を低下させる。

そこを狙った攻撃を受けて、次々と倒されていった。

「ドラゴンも所詮は魔物。」

連携し統率された動きが出来なければ、人間の軍には勝てなかった。」

それでも魔族は時間を稼ぐ事に成功し、ダンジョンの更に奥の地下都市の建設を完成させた。

そして、地上でも転機がやって来た。

膠着した戦況に人間達が業を煮やし、禁忌の魔法を使い始めたのだ。

その魔法は魔族の陣地である地域を焼き払っていった。

「いや、焼き払うというより、消滅と言う方が良いだろう。」

都市もそこにある大地ごと蒸発したのだから。」

魔族はダンジョン内の住人を地下都市へと避難させ、順次ダンジョンに魔物を放って防備を完成させていく。

そして、魔族も報復として人間の町や都市を、禁忌の魔法で消滅させていった。



ダンジョン自体はその地上部分と上空に強力な防御シールドを何十にも展開させてあった為、出入り口付近だけは無事だった。

「ダンジョン自体は崩壊しても、なんら問題は無かったがね。」

最初のおの夫婦の事件から10年が経った頃、地上には国と呼べるような場所は無くなった。

地上のかつて都市や町があった場所のほぼ全てに、直径2〜6キロ程度のクレーターが多数出現していた。

その周囲十数キロに渡って、草木も焼き尽くされていた。無傷で残されたのは、僻地にある小さな村々だけだった。

魔族は完全に地下へと撤退し、地上へと姿を見せる事は無かった。

「我々魔族は、人間達から離れた場所で暮らす事に決めた。

ダンジョンには魔物を配置し、ダンジョンの入り口付近にも魔物を送り出して人間を拒絶した。」

結果として、その魔物が地上の人々を襲い、衰退した文明が復活する妨げとなった。

魔族も戦争の傷を癒すのに時間が掛かった。

それでも地上の人間よりは遥かに早く回復した。

「しかし、遺憾な事にここで魔族同士の戦争が起きたのだ。」

戦争の傷を癒し、繁栄を果たした魔族の地下都市では、各々で思惑が育っていった。

1つは地上へ戻り、人間に代わって地上を支配しようと言うもの。

1つは地上の一部だけ確保して、宇宙へと出ようと言うもの。

最後に、地下にそのまま住み着こうと言うもの。

この微妙な三つ巴の状態が十数年続いた。

とにかく地上へ出ると言う強硬派が、2つの派閥を統一して行動に出た。

しかし、それを阻止しようとした地下定住派が割り込み、そこで争いが始まった。

地下定住派は実の所、人間を避けたいとか守りたいとか思っていた訳ではない。

人間に対する思いは、寧ろ他の2つの派閥よりも過激であった。

しかし、地上へ出る事は憚られたのだ。

何故なら、地下定住派は魔族の支配階層が中心だったからである。

地下と言う閉ざされた世界なら、支配もより良く行き届く。

しかし、地上や宇宙に出れば、その広い世界で支配力は希釈されてしまうのだ。

そして、地下都市世界で戦争が勃発。

地上の人間の預かり知らぬ所で、殺し合いが始まったのだ。

最初の頃こそ、地下である為に手加減をしていたが、どちらも決定打を持ちえず、次第にエスカレートしていった。

結局、その戦争で地下世界のいくつかが崩壊して滅び、その後も戦争の影響でさらにいくつかが滅んだ。

ソナックはその詳細は伏せていた。

「その戦争のせいで、今の魔族達も文明レベルは人間よりも1歩先な程度だ。

ここにいる我々は、その戦争で負けた魔族の生き残りだ。」

彼らは戦争に負けた直後、逃げるように地上へとやって来た。地上には人間はいたが、人口も激減しており、文明も衰退して脅威ではなくなっていた。

そこで人里に近い場所に拠点を構え、ある事をしていた。

「何をしていたのですか？」

リアが興味深そうに訊ねる。

「人間に魔族の遺伝子を組み込む実験だよ。

魔族は数百年の実験の結果生まれたものだが、その成果を人間に移す事は不可能では無い。

その為の実験をしていたのだ。」

彼らは魔族の最大の目標、つまり、次代の人類を作り出す事を諦めていなかった。

「そんな・・・」

リアは絶句する。

「このシーリアもその遺伝子を持っていますね？」

健介は話を聞いてピンと来た。

いくら天才とは言え、シーリアの力は人間の範疇を超えている気がしていたのだ。

恐らく、ファイ、クリン、エンドーラも魔族の因子を持つ者達だろう。

「その通り、今では世界に居る人間の半数は、魔族の因子を持って

いる。」

彼らは実験を約1000年に渡って行っていた。そして、実験が成功すると、現在まで約9000年に渡って人類に少しずつ因子を植え付け、因子も改良していった。徐々に徐々に、人間の中に魔族の因子が広まっていった。彼ら魔族の研究者も、人間の身体に乗り換えて、研究を続けていた。最近では人口も増えて人の支配領域が急速に広がっている為、人里に近い場所には研究所を作っていない。逆に幾つかの研究所は町中にあると言う。

実験に長い時間が掛かっているのは、知識不足と人手不足に悩まされたからだ。

最初に魔族から人間へ転生した際、知識が失われた。魔族の知性を人間の身体が受け止め切れなかったのだ。寿命を迎えようとしていた魔族の身体が、人間への転生を余儀なくしていた。

だがそれでも、ゆっくりと研究を続け、失われた知識を取り戻して収容できる人間の身体を作り出した。

しかし、人手不足は変わらず、人間と因子に多少の相性問題もあり、因子を人間達にばら撒く作業はなかなか進まなかった。

「それでも地下からの魔族の侵攻を、ほぼ人間だけで阻止するに至った。」

新たな人類とも言える、魔族の因子を持つ新人類。その者達が魔族の侵攻の際に力を発揮したのだ。シーリア達がダンジョンで魔族と戦った時のように。

「我々の目的は達成されようとしている。」

既に新人類は浸透しつつあり、旧人類は淘汰されつつある。誰にも知られずにな。」

1万年前の教訓。

人の妬み。そこから生まれる様々な負の感情。

このどうやっても避けられない人の心の闇を掻い潜る方法が、これだった。

新人類と旧人類の判別が出来ない方法で、入れ替える。

魔族と人間は一目でそれが判ってしまうから、過激な拒否反応が出て、悲惨な戦争へと駆り立てたのだ。

だから、それを無くせば良い。

誰が因子を持つているのか判らなければ、自分さえも因子を持っているかもしれないとなれば、あの様な悲惨な戦争は起こらない。

世界各地で満遍なく因子をばら撒いて、自然に浸透させたのだ。

「後数百年もすれば、加速度的に旧人類は淘汰されていなくなるだろう。」

そうなれば、魔族も恐れる対象ではなくなり、魔族との戦争もいずれ終わる。」

遠大な計画。

新人類の創生と魔族との戦争の完全な終結。

この2つを睨んだ計画は、歴史の影で連綿と続いていたのだ。

「もしかして、あなた方が伝説の魔女？」

リアが思い当たったように訊いた。

ソナックが笑った。

「懐かしい響きだな。」

確かに、魔女と呼ばれた事もあった。  
その時は女の身体だったからな。」

ソナツクは語った。  
人間と魔族の戦争。

人間同士の戦争。  
そのどちらでも、因子の浸透に不利に働きそうな時は介入していたのだ。

小型だが強力な兵器を用いて。

戦争は優秀な人材を大量に浪費する行為だ。

つまり、ソナツク達が苦労して育て上げた因子を持つ者がその殆どを占める。

つまらない戦争で殺されては適わぬと言う事だ。

「だが、それももう終わりだ。

もう介入しなくても、問題は無いだろう。」

ソナツクはそう言って満足そうに笑った。

今の人間間の戦争程度では大した影響は無い。  
地下の魔族も大人しくしている。

「1つ訊いて良いか？」

あんたらが地上に出た時には、地上の人類を抹殺する事は容易だったはずだ。

そして、地上に新人類たる魔族の世界を築けたはず。

何故そうしなかった？」

健介が不審に思っていた事を訊いた。

何故わざわざ人類に魔族の因子を植え付ける必要があるのか？

「答えは簡単だ。

魔族はあまりに不完全だからだ。」

魔族は数百年の実験の成果ではあるが、その間に失敗した不利な因子も蓄積していたのだ。

そういった不利な因子を排除し、有利な因子を選択的に残したものを、人類に植え付けたのだ。だからこそ、人類は人の姿を保っている。

生命力、魔力、知性を上昇させるだけなら、姿形が変わる必要は無いのだ。

それに魔族は知性は上がるが凶暴性が増す傾向があり、それが折角の知性を抑える結果になった。

人類に比べれば平均して知性は高いが、十分な成果が得られていない。

しかし、人類に植え付けた因子は、凶暴性を抑える因子が追加されているのだ。

さらに、これは魔族の体では為し得ない事だった。

実の所、魔族の身体は理想的とは程遠い。

魔族の身体は数百年に渡る実験の為、既に複雑に因子が絡み合い、下手に弄れない状態だった。

故に、人類の身体を使用するしかなかったのだ。

「つまり、今の人類の姿こそ、我々が目指した新人類の姿なのだ。

いずれ遠くない未来、魔族の因子が完全に解放される時が来るだろう。」

そうなれば、新人類による新たな時代が始まり、宇宙へと生存圏を広げるに違いない。」

ソナックは魔族の因子を持った人類の潜在能力は魔族を遙かに上回るという。

健介達はソナックと長い間話をして、その日はそこに泊まる事になった。

翌日、ソナックに施設を見学させてもらいながら、色々と話した。長い間使われていた施設は、何度も再建されたく、今でも現役で稼働してるようだ。

健介が地下で見た、魔族の研究所の遺跡のような雰囲気があり、透明なカプセルに人間が浮かんでいる物もある。

「あれは？」

リアが不快気に問う。

攫われた人が入れられていると思ったのだろう。

「あれは近くの人間から貰った細胞から作った人間だ。」

ソナックが説明する。

時々、人里に下りては針で人を引掻いて、細胞を少し貰うらしい。その細胞を培養して、所謂クローン人間を作ると。

「細胞？」

リアが話についていけずに訊く。

「我々生物の身体は魔物も人間も、細胞と言う小さな生き物で構成



「されているんだ。」

健介がリアに補足してやる。

「ほう、物知りだな。」

ソナックが健介をマジマジと見る。

健介はニヤリと笑う。

「俺はこの世界の人間じゃないからな。」

多分、1万年前のこの世界と同レベルの文明を持った世界から来た人間だ。

と言っても、俺の世界は魔法文明ではなく、技術文明だったが。」

健介が言うと、ソナックは驚いて目と口を開いた。

「そうか、しかしどうやってこの世界に来たのだ？」

「どっかのバカが、こっちの世界で転生魔法を失敗してね。」

運悪く俺は精神と魂だけ、こっちの世界に引っ張り込まれた。」

「なるほど、転生魔法か。」

あれは空間に干渉する魔法だからな。」

ソナックはしきりに頷いている。

「それにしても、技術文明か。」

どうして魔法を捨てたのだね？」

ソナックが興味深そうに訊ねる。

「さあ、俺は自分の世界で魔法など見た事無いし、そもそも魔法は御伽噺の産物と認識されていたからな。」

健介は自分の世界を思い出しながら、どこか懐かしげに言った。

「ふむ、お前の世界の人間は魔法を使える因子を殆ど持っていないかったのだな。」

だから、技術文明が発展したのだろう。

しかし、技術文明で宇宙にまで行けるのか？」

「もちろんだ。」

既に人工衛星を飛ばしたり、軌道上に実験施設を建設したりしているよ。」

「ほほう、それは凄いな。」

健介とソナックが話している隣で、リアは取り残されて口を尖らせている。

それを見て健介は苦笑し、話題を変える。

「あの人間の複製は何をする為のものだ？」

「君なら判ると思うが、因子を植えつけるには適性が必要だ。」

人間の複製を作り、適性を持った人間同士を交配させ適性を上げる。

つまり、魔族の因子と相性の良い人間を作り上げる。

そうやって最も適した人間となったら因子を植えつけ、更に交配を重ねて先天的に最も適性が高く、かつ、因子を持った人間が生まれ

てくる。

リア以上の天才と呼べる身体を持つ人間だ。

「因子をばら撒くとは、この様な者を里子に出し、その子孫を増やす事で為すのだ。」

と言う事は、リアの祖先は行き着くと、この様な人工培養された子供なのかもしれない。

いつの時代にも孤児は少なからずいるから、調べるだけ無駄だ。

「ミコトと言ったか？」

その身体、人に戻したくは無いか？」

ソナックが試すように言って、健介を見る。

「人間の身体を提供すると言う事か？」

健介は驚く事も無く、ソナックを見返す。

「そうだ。」

見ての通り、我々は人間の身体を生成している。

そこから生まれる赤子を譲る事くらい如何と言う事は無い。」

ソナックの言葉に、健介は考える。

人間の身体に戻る為の条件の1つはほぼクリアされる。

赤子なら人格形成前に身体を奪う為、大人よりはマシだろう。

生成された人間達は、生まれてから殆ど目覚めさせる事は無く、人格は形成されないと言う事だ。

人格が出来るのは、ソナック達の倫理観にとっても良くない事のようだ。

問題は、赤子ではすぐ行動出来ないと言う事か。  
少なくとも、数年の間は自力では殆ど何も出来ない。

「赤子になった俺はどうなる？」

「心配するな。」

「一人で行動出来るようになるまで、我々が面倒を見る。」

「何故そうまでする？」

「何が目的だ？」

「ああ、我々が何か企んでいると思っているのか。」

「我々の目的は昨日言ったと思うが。」

「彼らの目的、魔族の因子を人類に浸透させること。」

「俺が魔族の因子を持つ人間となって子孫を作れば、それで良いと言う事か。」

「その通り。」

「なら、リア、彼女も一緒に頼むよ。」

「リアの身体は追っ手が掛かっているからな。」

「健介の言葉にリアが驚く。」

「わ、私も？」

「そうだ、一緒に赤子からやり直す。」

いいじゃないか？」

健介が笑いながら言う。

リアはまだ納得出来ていないようだ。

まあ、仕方ない。

彼女の人生の大切な時期は、本来の身体を取り戻す為に費やされたのだから。

その身体をあつさり捨て去るのは、相当の覚悟が必要だろう。

しかし、彼女も直に気付くだろう。

健介が赤子になれば、歳の差は半端ではなくなる。

「まあ、我々としては構わないがな。」

彼らは細かい事は気にしないらしい。

健介もドラゴンの身体を捨てるのは、少し惜しい気がする。

しかし、多少の問題があるにしても、人間の身体を手に入れられるのなら、人間に戻るのも悪くは無い。

数日後、健介とリアはそれまでの肉体を捨てた。

それぞれ1歳くらいの赤子に転生していた。

転生は魔法陣ではなく、何かの装置の様なカプセルに入って簡単に10分も経たずに終了した。

健介にとってはどうでも良い事だったが、リアにとっては羞恥プレイの始まりだった。

隣のベビーベッドから、嫌々をするような赤子の泣き声が聞こえて来た。

(御愁傷様)

健介もオムツを取り替えてもらいながら、内心でリアに手を合わす。

## エピソード

10年後、ペステンの街道をヴァーシル領へと向かって2人の子供と1人の青年が歩いていった。

子供は2人とも腰には双剣をぶら下げている。

子供の癖に魔術を使い、剣の腕も立つという。

通りがかった村や町で、魔物や盗賊を退治していた。

男の子はアグノバラウ、女の子はアノリスクアートル、青年はファシスと名乗っていたと言う。

無論、男の子は健介、女の子はシーリア、青年はドラゴンの人型だ。

名付け親はソナックである。

長ったらしい名前だが、約10年その名前で呼ばれているので、健介とリアは慣れてしまった。

ファシスはソナックが臨時に手配してくれた、ドラゴン用の魂と精神を注入してある。

人型の仕様も変更してくれていた。

シーリアと同時にランも手配されているだろうから、顔を変え、髪と目の色を変えてある。

以前よりも柔和な感じの顔になり、黒髪、黒目になった。

まだ子供の身体だが、リアが両親を心配していたので、訓練もそこそこに研究所を出てヴァーシル領へと向かっているのだ。

通りがかった村や町の噂で、ヴァーシル領の現状が凡そ判った。

ヘインツとミレー又は健在でヴァーギル領をすっかり切り盛りしているらしい。

10年前のあの一件の嫌疑は晴れていた。

テルバの主教ナナロムを健介が砲撃で殺した後で、ナナロムに支配されていた者達が正気に戻ったらしい。

ナナロムにはそう言う特殊な能力があると、被害者が話していたそうだ。

そして、この10年で宗教組織テルバは解体消滅した。

しかし、シーリアの本当の肉体は、既に存在しない。

だが、これで良かったのだ。

シーリアと言う存在はちよっと目立ち過ぎた。

思えば、健介がこの世界に来た時から、リアはこの運命に翻弄されていたのだ。

健介は結構楽しんでいたが、リアはどうだろうか？

「子供の身体を手に入れたし、これからはリアに付き合つか。」

健介としては、以前からリアの為に動いていたつもりだったが、その結果目立ち過ぎてこうなったとも言える。

(これからは控えめに行動しよう。)

健介の今の姿は、結構な美少年だった。

金髪碧眼で白磁の肌、まだ子供の可愛らしい顔。

正にこれが美少年という代物だ。

その手の趣味の者なら、涎モノのだろう。



ソナツク達、1万年前の生き残りの研究員達は、能力だけでなく外見にも気を使っていた様だ。研究所からばら撒かれる子供達の親の素体は皆、美男美女が多かった。

魔物と違って人間の調整は何世代も掛かって大変で難しいらしい。それで納得した事があった。

ファイレイ、クリン、エンドーラを始め、優秀な人間はいい女、いい男揃いだっただ事だ。

健介はやり過ぎだと突っ込んでおいたが。

「ん？」

何か言った？」

リアは道端に咲いている花を摘んでいる。

今の彼女は、綺麗な黒髪で乳白の肌、クリクリの大きな目に茶色の瞳で、可愛い女の子だった。

こちらにも、これが美少女だと、美少女の見本があればこれだと言う感じである。

鎖鎧など着ていなければ、何処かの貴族の深窓の御令嬢と見られるだろう。

将来、美人になる事間違いなしだ。（親の素体も見ているし・・・）

これで魔族を超える才能と素質を持っている因子の持ち主なのだ。健介とリアで、その因子をばら撒く事を、ソナツクと約束している。それがソナツク達の唯一の望みであり、人間の身体を提供してもらう取引だった。

だが、まだまだ子供の身体、子作りには早過ぎる。

「いや、何でもない。」

リアと共に人生をやり直す。

もう少し大人になったら、子作りに励むのも良い。

（と言うか、励まなきゃならん。

リアには悪いが、妾を何人が作るか。）

リアだけに何人も産ませる訳には行かないだろう。

男はともかく、女は危険と隣り合わせだ。

ソナツクの話では安産になるような調整をしているらしいが・・・

「まずはリアの両親に会って、養子にしてもらわないとな。」

「そうね。

心苦しいけど・・・仕方ないわね。」

リアの表情は少し暗い。

両親にはシーリアは死んだと話さなければならぬ。

そして、アグノバラウ（健介）とアノリスカートラ（リア）が、

シーリアの養子の様な存在だったとするのだ。

シーリアの遺言として、ヴァーシル領のヘインツとミレーヌを頼る事にする。

ヘインツとミレーヌを騙すのは、健介も心苦しいのだが、色々な意味でこの方法が一番良いと判断した。

まだヴァーシル領を狙う者は居り、養子を押し付けようとしていと聞く。

シーリアが消えた今、跡継ぎが居ない為、養子を取るのは必須だ。

しかし、未だにヘインツは養子を取っていない。

リアの父親だから、何故かは何となく判る。

今でもシリアを待っているのだろう。

アグノバラウ（健介）とアノリスクアートラ（リア）のどちらかでも養子にしてもらえば、ヴァージル領を守る事が出来る。可能性は半々と健介は考えている。

アノリスクアートラは10年前に持っていた双剣を所持している。双剣の使い方を見れば、ヘインツとミレーヌ、或は、ハモや配下の魔術戦士ならば、シリアと関係のある者と判るだろう。

シリアに育てられ、剣と魔術を学んだと言えば十分な説得力がある。

シリアの養子と聞けば、ヘインツとミレーヌも放っては置けまい。養子は無理でも、多少の便宜を図ってくれるだろう。

「ま、悩んでも仕方ない。

俺達の人生のやり直しだ。」

「そうね。

私達の人生のやり直しね！」

リアは嬉しそうに言って笑った。

## エピソード（後書き）

ここまでお読み頂き有難う御座います。

素人ゆえ、色々苦労しましたが、何とか書き上げました。

まずは一安心です。（^^）

皆様に少しでも楽しんで頂けていれば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9434g/>

---

転生の旅

2010年10月10日10時46分発行